一 **第四十五章** ○われエホバわが受膏者クロスの右手をさりてもろ〳〵の國をそのまへに降らしめ、もろ
二 もろの王の腰をさき扉をその前にひらかせて門をさづるものなからしめん○われ汝のまへにゆきて嶮嶇をた
三 ひらかにし銅の門をこぼち、くろがれの閂木をたちきるべし○われなんぢに暗さこころの財寶とひそかな
四 るさこころに藏せるたからとを予へ、なんぢに我はエホバなんぢの名をよべるイスラエルの神なるを知しめん
五 わが僕ヤコブわが撰みたるイスラエルのために我なんぢの名をよべり汝われを知すさいへごとも我なんぢを固
六 んぢに賜ひたり、五われはエホバなり我のほかに神なし一人もなし汝われを帶らすさいへごとも我なんぢを固
七 うせんが而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかに神なしさしるべし我はエホバなり他に
八 ひさりもなし七われは光をつくり又くらきを創造す、わ
九 なり我すべてこれらの事をなすなり○八天よりうへより滴らすべし、雲よ義をふらすべし地はひらけて救を生
十 じ義をもともに萌いだすべし、われエホバこれを創造せり○九世人はすゑものゝ中のひさつの陶器なるに己を
十一 つくれる者さあらそふはわざはひなるかな、泥塊はするふものつくりにむかひて汝なにを作るかさいふべけん
十二 や、又なんぢの造りたる者なんぢを手なしさいふべけんや十父にむかひて汝なにゆゑに産のくろしみをなしまや
十三 いひ嬬にむかひて汝なにゆゑに産のくろしみをなしまやさいふ者はわざはひなるかな十一エホバイスラエル
の聖者イスラエルを造れるもの如此いひたまふ後きたらんさするこさを我にさへ、またわが子女さわが手の
工さにつきて汝等われに言せよ十二われ地をつくりてそのうへに人を創造せり、われそのすべての道をなほくせん、彼は
十三 へ、その万象をさだめおり十三われ義をもて彼のクロスを起せり、われ自らの手をもて天をのべ、その万象をさだめおり十三われ義をもて彼のクロスを起せり、われ自らの手をもて天をの
十四 わが邑をたてわが俘囚を假のためならず報のためならずして釋すべし、これ萬軍のエホバの聖言なり○
十四 エホバ如此いひたまふ、エジプトがはたらきて得しものさエテオピアがあきなひで得しものさはなんぢ
の有さならん、また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがひ縄につながれて降り、なんぢのまへに
伏し、なんぢに祈りていはん、まことに神はなんぢの中にいませり、このほかに神なし一人もなしさ十五救

十六 なほどこし給ふイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり十六偶像をつくる者はみな恥をいだ
十七 き辱かしめをうけ諸共にはぢあわてゝ退かん、十七されどイスラエルはエホバにすくはれて永遠の救をえん、
十八 なんぢらは世々かぎりなく恥をいだかず辱かしめをうけじ○十八エホバは天を創造したまへる者にしてすな
十九 はち神なり、また地をもつくり成てこれを堅くし徒然にこれを創造し給はず、これを人の住所につくりたま
へり、エホバかく宣給ふ、われはエホバなり我のほかに神あることなしと十九われは隱れたるところ地のく
らき所にてかたらず我はヤコブの裔になんぢらが我をたづねよさいはず我エホバはたゞしき事を
かたり直きことを告ぐ二十汝等もろ〳〵の國より脱れきたれる者よ、つどひあつまり共にすゝみきたれ木の
二十 像をになひ救ふことあたはざる神にいのりするものは無
二十一 智なるなり二一なんぢらその道理をもちきたりて述
よ、また共にはかれ此事をたれか上古より示したりや、誰かむかしより告たりしや、此はわれエホバならず
二二 や我のほかに神あることなし、われは義をおこなひ救をほどこす神にして我のほかに神あることなし二二地
の極なるもろ〳〵の人よ、なんぢら我をあふぎのぞめ然ばすくはれん、われは神にして他に神なければなり
二三 二三われは己をさして誓ひたり、この言はたゞしき口よりいでたれば反ることなし、すべての膝はわがまへ
二四 に屈み、すべての舌はわれに誓をたてん二四人われに就ていはん正義と力さはエホバにのみありと、人々
二五 エホバにきたらん、すべてエホバにむかひて怒るものは
て義させられ且ほこらん

第四十六章 ○ベルは伏しネボは屈む、かれらの像はけものと家畜さのうへにあり、なんぢらが擔げあるき
一 しものは荷さなりて疲れおころへたるけものゝ負さころさなりぬ二かれらは屈みかれらは共にふし、その荷
二 さなれる者をすくふこさ能はずして己さらはれゆく○三ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、
三 腹をいでしより我におはれ胎をいでしより我にもたげられしものよ皆われにきくべし四なんぢらの年老るま
四 で我はかはらず白髪さなるまで我なんぢらを負ん、我つくりたれば遠ぐべし我また負ひかつ救はん五なんぢ

六 我をたれに比べ、たれに配ひ、たれに擬らへかつ相くらぶべきか、六 人々ふくろより黄金をかたぶけいだし
七 權衡をもて白銀をはかり金工をやとひてこれを神につくらせ之にひれふして拜む、七 彼等はこれをもたげて
肩にのせ負ひゆきてその處に安置す、すなはち立てその處をはなれず、人これにむかひて呼はれども答ふる
八 こと能はず又これをすくひて苦艱のうちより出すことあたはず、八 なんぢら此事をおもひいでよ、堅くたつべし悖
九 逆者よ、このことを心にとめよ、九 汝等いにしへより以來のことをおもひいでよ、われは神なり我のほかに神
十 なし、十 われは神なり我のごとき者なし、十 われは終のことを始よりつげ、いまだ成ざることを昔よりつげ、わ
十一 が謀畧はかならず立ていひ、すべて我がよろこぶ事を成んといへり、十一 われ東より鷲をまねき遠國よ
十二 りわが定めおける人をまねかん、我このことを語りたれば必ちず來らすべし、我このことを謀りたればかな
十三 らず成すべし、十二 なんぢら心かたくなにして義にさほざかるものよ、我にきけ、十三 われわが義をちかづかし
む可ればその來ること遠からず、わが救おそからず我すくひをシオンにあたへ、わが榮光をイスラエルに
あたへん

第四十七章　バビロンの處女よ、くだりて塵のなかにすわれカルデヤ人のむすめよ座にすわらずして地に
二 すわれ汝ふたたび嫩嫩にして嬌なりと人へらるることなかるべければなり、二 磨をとりて粉をひけ面帕をとりさり
三 裙をぬぎ髀をあらはして河をわたれ、三 なんぢの肌はあらはれ、なんぢの恥はみゆべし、われ仇をむくいて人
四 をかへりみず、四 われらを贖ひたまふ者はその名を萬軍のエホバ、イスラエルの聖者といふ、五 カルデヤ人のむ
五 すめよ、なんぢ口をつぐみてすわれ、又くらき所にいりてをれ汝ふたたびもろ〳〵の國の主母と人へらるる
六 ることなからん、六 われわが民をいきどほりわが產業をけがして之をなんぢの手にあたへたり、汝これに憐憫
七 をほどこさず年老たるものの上に甚だおもき軛をおきたり、七 汝いへらく我とこしへに主母たらんと、斯て
これらのことを心にとめず亦その終をおもはざりき、八 なんぢ歡樂にふけり安らかにをり心のうちにたや我の
八 みにして我のほかに誰もなく我はやもめとなりてをらず、また子をうしなふことを知まじとおもへる者よ、
九 なんぢ今きけ、九 子をうしなひ寡婦となることこの二つのこと一日のうちに我になんぢに來らん、汝おほく巫術を
十 おこなひ、ひろく呪詛をほどこすと雖もみちく〳〵て汝にきたるべし、十 汝おのれの惡によりたのみていふ、我
をみるものなしと、なんぢの智慧となんぢの聰明とは汝をまどはせたり、なんぢ心のうちにおもへらく、たゞ
十一 我のみにして我のほかに誰もなしと、十一 この故にわざはひ汝にきたらん、なんぢ呪ひてこれを除くことをし
らず艱離なんぢに落きたらん汝これをはらふことを能はず、なんぢの思ひよらざる荒廢にはかに汝にきたる
十二 べし、十二 今なんぢわかきときより勤めおこなひたる呪詛とおほくの巫術とをもて立むかふべし、あるひは益
十三 をうることあらん、あるひは敵をおそれしむることあらん、十三 なんぢは謀畧おほきによりて倦つかれたり、
かの天をうらなふもの星をみるもの新月をうらなふ者もし能はよいざたちて汝をきたらんとする事よりまぬ
十四 かれよ、むろこれをぜよ、十四 かれらは藁のごとくなりて火にやかれん、おのれの身をほのほの勢力よりすくひ
十五 いだすこと能はず、その火は身をあたゝむべき炭火にあらず、又その前にすわろべき火にもあらず、十五 汝がつとめて行ひたる事は終にかくのごとくならん、汝のわかきときより汝とうりかひしたる者おの〳〵その所
にさすらひゆきて一人だになんぢを救ふものなかるべし

第四十八章　ヤコブの家よなんぢら之をきけ、なんぢらはイスラエルの名をもて稱へられユダの根源より
一 いでエホバの名により誓ひイスラエルの神をかたりつぐれども眞實をもてせず正義をもてせざるなり、二 か
二 れらはみづから聖京のものとなへイスラエルの神によりたのめり、その名は萬軍のエホバといふ、三 わ
三 れ今ばりさきに成しことを既にいにしへより告たり、わが口よりいだして既にのべつたへたり、我にわかに
四 この事をおこなひ而して成ぬ、四 われ汝がかたくなにして項の筋はくろがね、その額はあかがねなるを知れり
五 五 このゆゑに我はやくより汝につげ、その成ざるさきに之をなんぢに聞しめたり恐くはなんぢ
六 云ん、わが偶像これを成せり刻みたるざう像これを命じたりと、六 なんぢ既にきけり、凡てこれを視よ、
七 なんぢら之をのべつたへざるか、われ今より新たなる事なんぢが未だしらざりし秘事をなんぢに示さんと七

れらの事はいま創造せられしにて上古よりありしにあらず、この日よりさきに汝これを聞ざりき然らずば汝
八 いはん視よわれこれを知れりと八 汝これを聞こともなく知こともなくなんぢの耳はいにへより開けざりき、
九 我なんぢが欺きあざむきて生れながら悖逆者ぞと名のゆゑによりて我いかり
十 を遏くせん、わが頌美のゆゑにより我志のびてなんぢを絶滅すことをせじ十 視よわれなんぢを煉たり、さ
十一 れど白銀のごとくせずして患難の爐をもてこゝろみたり十一 われ己のため我おのれの爲にこれを成ん、われ
十二 何でわが名をけがさしむべき、我わが榮光をほかの者にあたふることをせじ〇十二 ヤコブよわが召たるイ
十三 スラエルよ、われにきけわれは是なり、われは始また終なり十三 わが手は地のもとゐを置わが右の手は天な
十四 のべたり、我よべば彼等はもろともに立なり十四 なんぢら皆あつまりてきけエホバの愛するものエホバの好
みたまふ所をバビロンに成しその臂はカルデヤ人のうへにのぞまん、彼等のうち誰かこれらの事をのべつげ
十五 しや十五 たゞ我のみ我かたれり我かれをめし我かれをきたらせたり、その道さかゆべし十六 なんぢら我にち
かよりて之をきけ我はちめより之をひそかに語りしにあらず、その成しときより我はかしこに在り、いま主
十七 エホバわらとその靈とをつかはしたまへり十七 なんぢの贖主イスラエルの聖者エホバかく言給く、わ
十八 れはなんぢの神エホバなり我なんぢに益することを教へ、なんぢの行べき道にゆかしむ十八 願くはなんぢわが命令にきゝしたがはんことを、もし然らばなんぢの平安は河のごとく、なんぢの義はうみの
十九 波のごとく十九 なんぢの裔はすなのごとく、なんぢの體よりいづる者は細沙のごとくになりてその名はわが
二十 まへより絶ることなく亡さるゝことなからん〇二十 なんぢらバビロンより出てカルデヤ人よりのがれよ、
二一 なんぢら歡の聲をもてのべきかせ地のはてにいたるまで語りつたへ、エホバはその僕ヤコブをあがなひ
二二 給へりといへ二一 エホバかれらをして沙漠をゆかしめ給へるとき彼等はかわきたることなかりき、エホバ彼
二三 等のために磐より水をながれしめ、また磐をさきたまへば水ほどばしりいでたり二三 エホバいひたまはく惡

一 もろ〳〵の島よ、われにきけ遠きところのもろ〳〵の民よ耳をかたむけよ、我うまれいづる
二 より エホバ我を召し、われ母の胎をいづるより エホバわが名をかたりつげたまへり二 エホバわが口を利劍
三 となし我をその手のかげにかくし我をときすましたる矢となして箙にをさめ給へり三 また我にいひたまはく
四 汝はわが僕なり、わが榮光のあらはるべきイスラエルなりと四 されど我いへり、われは徒然にはたらき益
なくむなしく力をつひやしぬと、然はあれど誠にわが審判はエホバにあり、わが報はわが神にあり五 ヤコブ
五 をふたゝび己にかへらしめイスラエルを己のもとにあつまらせんとて我をうまれいでしより立ておのれの僕
六 となしたまへるエホバいひたまふ（我はエホバの前にたふとくせらる又わが神はわが力となりたまへり）六
七 その聖言にいはく、なんぢわが僕となりてヤコブのもろ〳〵の支派をおこしイスラエルのうちのこりて全
うせしものを歸らしむることはいと輕し我また汝をたて〻異邦人の光となし我がすくひを地のはてにまで
七 到らしむと七 エホバイスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなどらるゝもの民にいみきらはるゝもの
長たちに役せらるゝ者にむかひて如此いひたまふ、もろ〳〵の王は見てたち、もろ〳〵の君はみて拜すべし
八 これ信實あるエホバイスラエルの聖者なんぢを選びたればなり八 エホバ如此いひたまふ、われ惡のさ
きに汝にこたへ救の日になんぢを助けたり、われ汝をまもりて民の契約となし國をおこし荒すたれたる地をま
九 た產業としてかれらにつがしめんと九 われ縛しめられたる者にいでよといひ暗にをるものに顯れよといはん、
かれら途すがら食ふことをなし、もろ〳〵の禿なる山にも牧草をうべしと かれらは飢ずかわかず又やけたる
十 砂もあつき日もうつことなし、彼等をあはれむもの之をみちびきて泉のほとりに和かにみちびき給ふべければ
十一 なり十一 我わがもろ〳〵の山を路とし、わが大路をたかくせん十二 視よ人々あろひは遠きよりきたり、あ
十二 ろひは北また西よりきたらん或はまたシニムの地よりきたるべし十三 天ようたへ地よよろこべ、もろ〳〵の
山よ聲をはなちてうたへ、エホバはその民をなぐさめその苦むものを憐みたまへばなり〇十四 然ごシオンは
十三 いへり、エホバ我をすて主われをわすれたまへりと十五 婦その乳兒をわすれて己がはらの子をあはれまざる

二六 ここあらんや、縦ひかれら忘るゝことなし 十六 われ掌になんぢらを彫刻
二七 あり、なんぢの石垣はつねにわが前にあり 十七 なんぢの子輩はいそぎ來り、なんぢを毀つもの汝をあらす者
二八 はなんぢより出去ん 十八 なんぢ目をあげて環視せよ、これらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべし、
エホバ宣給く、われは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帶のごとくに之をまとふべし
二九 十九 なんぢの荒かつ廢れたるところ毀たれたる地はこれのち住ふもの多くして狹きをおぼえん、なんぢを呑
三〇 つくしふもの遙にはなれ去るべし 二十 むかし別れたりしなんぢの子輩はのちの日なんぢの耳のあたりにて語
三一 りあはん云く、ここは我がために狹しなんぢ外にゆきて我にすむべき所をえしめよと 二一 その時なんぢ心裏
にいはん、誰かわがために此等のものを生しや、われ子をうしなひて獨居かつ孕ほれ且さすらひたり誰が
三二 これを育しや、視よわれ一人のこされたり此等はいづこに居しや〇二二 主エホバいひたまはく、視よわれ手
三三 をもろ〳〵の國にむかひてあげ族をもろ〳〵の民にむかひてたてん斯てかれらはその懷中になんぢの子輩を
たづさへ、その肩になんぢの女輩をのせきたらん 二三 もろ〳〵の王はなんぢの養父となり、その后妃
はなんぢの乳母となり、かれらはその面を地につけて汝にひれふし、なんぢの足の塵をなめん而して汝わが
三四 エホバなるをしり、われを俟望むものゝ恥をかうぶることなきを知るならん 二四 勇士がうばひたる掠物をい
三五 かでとりかへし強暴者がかすめたる虜をいかでか救いだすことを得んや 二五 されど エホバ如此いひたまふ云く、
ますらをが掠めたる虜もとりかへされ強暴者がうばひたる掠物もすくひいだされるべし、そは我なんぢを攻るも
三六 ものをせめてなんぢの子輩をすくふべければなり 二六 我なんぢを虐ぐるものにその肉をくらはせまたその血
をあたらしき酒のごとくにのませて醉しめん、而して萬民はわがエホバにして汝をすくふ者なんぢを贖
ふものヤコブの全能者なることを知るべし

第五十章 一 エホバかくいひたまふ、わがなんぢらの母をさりたる離書はいづこにありや、我いづれの債主
になんぢらを賣わたしまや、視よなんぢらはその不義のために賣れなんぢらの母はなんぢらの咎戻のために
去れたりこわがきたりし時なにゆゑ一人もたらざりしや、我よびしとき何故ひとりも答ふるものなかりしや、
二 わが手みぢかくして贖ひえざるか、われ救ふへき力なからんや、視よわれ叱咤すれば海はかれ河はあれのと
三 なり、そのなかの魚は水なきによりかわき死て臭氣をいだすなり 三 われ黑ころもを天にきせ麁布をもて蔽さ
四 なす〇四 主エホバは教をうけしものゝ舌をわれにあたへ言をもて疲れたるものを扶支ふることを知得しめ
五 たまふ、また朝ごとに醒しわが耳をさましてわれに教をうけし者のごとく聞ことを得しめたまふ 五 主エホバわが耳
六 をひらきたまへり、われは逆ふことをせず退くことをせざりき 六 われを擊つものにわが背をまかせ、わが鬚
七 をぬくものにわが頰をまかせ恥と唾とをさくるために面をおほことをせざりき 七 主エホバわれを助けたまは
八 ん、この故にわれ恥ることなかるべし我わが面を石のごとくして恥しめらるゝことなきを知る 八 われを義と
九 するもの近きにありたれか我とあらそはんや、われら相共にたつべし、わが仇はたれぞや近きたれ 九 主エ
ホバわれを助けたまはん誰かわれを罪せんや、視よかれらはみな衣のごとくふるび蠹のためにくひつくされ
一〇 ん〇一〇 汝等のうち エホバをおそれその僕の聲をきくものは誰ぞや暗をあゆみて光をえざるとも エホバの名を
一一 たのみ、おのれの神にたよれ 一一 火をおこし火把を帶るものよ汝等みなその火のほのほのなかをあゆめ又な
んぢらの燃したる火把のなかをあゆめ、なんぢら斯のごとき事をわが手よりうけて悲みのうちに臥べし

第五十一章 一 義をおひ求めエホバを尋ねもとむるものよ我にきけ、なんぢらが斫出されたる磐となんぢら
の堀出されたる穴とをおもひ見よ 二 なんぢらの父アブラハム及びなんぢらを生たるサラをおもひ見よ、われ
彼をその唯一人なりしときに召しこれを祝してその子孫をまし加へたり 三 そはエホバシオンを慰め、またそ
の凡てあれたる所をなぐさめてその荒野をエデンのごとく、その沙漠をエホバの園のごとくなしたまへり、
かくてその中によろこびと歡樂とあり感謝とうたふ聲とありてきこゆ〇四 わが民よわが言にこゝろをと
めよ、わが國人よわれに耳をかたぶけよ律法はわれより出、わが公義はたちまち定めてもろ〳〵の民の光と
なさん 五 わが義はちかづきわが救はすでに出たり、わが臂はもろ〳〵の民をさばかん、もろ〳〵の島はわれ

を俟望みわがかひなに依頼んや六なんぢら目をあげて天を觀また下なる地をみよ天は烟のごとくきえ地は衣のごとくふるびその中にすむ者これさひさしく死ん、されどわが救はとこしへにながらへ、わが義はくだるることなし七義を志るものよ心のうちにわが律法をたもつ民よ、われにきけ人の譏をおそるるなかれ又そはかれら衣のごとく蟲にはまれん、されどわが義はとこしへに存らへ、わがすくひ萬代におよぶべし○九さめよ醒よエホバの臂よ古へのごとくなれ、ラハブをきりころし鰐をさしつらぬきたるは汝にあらずや十海をかわかし大なる淵の水をかわかし、また海のふかきところを贖はれたる人のすぐべき路となしたるは汝にあらずや十一エホバに贖ひすくはれしもの歌うたひつゝ歸りてシオンにきたりその首にとこしへの歡喜をいたゞきて快樂さよろこびさをえん、而してかなしみと歎息とはにげさるべし十二我こそ我なんぢらを慰むれ、汝いかなる者なれば死べき人をおそれ草のごとくなるべき人の子をおそるるか十三いかなれば天をのべ地の基をすゑ汝をつくりたまへるエホバを忘れしや、何なれば汝をほろぼさんとて孫備する虐ぐるものゝ憤ほれるをみて常にひねもす懼るゝか虐ぐるもの、怒志はいづこにありやれて死ることなく穴にくだることなくその食はつくることなし十五われは海をふるはせ波をなりどよめかする汝の神エホバなり、その御名を萬軍のエホバといふ十六われわが言をなんぢの口におき、わが手のかげにて汝をおほへり、かくてわれ天をうゑ地の基をすゑシオンにむかひて汝はわが民なりといはん○十七エルサレムよさめよ、さめよ起よなんぢ前にエホバの手よりその怒志の盃をのみ且すひほしたり十八なんぢの生るもろ〳〵の子のなかに汝をみちびく者なく汝のそだてたるもろ〳〵の子の中にてなんぢの手をたづさふる者なし十九この二のこと汝にのぞめり、誰かなんぢのために歎んや、荒廢の饑饉ほろびの劍なんぢに及べり、我いかにして汝をなぐさめんや二十なんぢの子らは息たえ〳〵にして網にかゝれる羚羊のごとくして街衢の口にふす、エホバの忍志さなんぢの神のせめさはかれらに滿たり二一このゆゑに苦しめるもの酒にあらで醉たるものよ之をきけ二二なんぢの主エホバおのが民の訟をあげつらひ給ふ、なんぢの神かくいひたまふ我よろめかす酒杯をなんぢの手より取除きわがいきごほりの大盃をとりのぞきたり汝ふたゝびこれを飲ことあらじ二三我これを汝をなやますものゝ手にわたさん、かれらは昔になんぢの靈魂にむかひて云らく、なんぢ伏せよわれら越ゆかんと而してなんぢその背を地のごとくし衢のごとくし彼等のこえゆくに任せたり

第五十二章

一シオンよ醒よさめよ汝の力を衣よ聖都エルサレムよなんぢの美しき衣をつけよ、今より割禮をうけざる者および潔からざるものふたゝび汝にいること無るべければなり二エルサレムよ起よすわれ俘れたるシオンのむすめよ汝がうなじの繩をときすてよ三そはエホバかく言給ふ、なんぢらは假なくして賣れたり金なくして贖はるべし四主エホバ如此いひたまふ曾にわが民エジプトにくだりゆきて彼處にさゞまれり、アツスリヤ人ゆゑなくして彼等をしへたげたり五エホバ宣給くわが民はゆゑなくして俘れたり、されば我こゝに何をなさんエホバのたまはく彼等をつかさどる者さけびよばゝりわが名はつねに終日けがさるゝなり六この故にわが民はわが名をしらん、このゆゑにその日にはかれらこの言をかたるものゝ我なるをしらん我こゝに在り○七よろこびの音信をつたへ平和をつげ善おとづれをつたへ救をつげシオンに向ひてなんぢの神はすべ治めたまふといふものゝ足は山上にありていかに美しきかな八なんぢが斥候の聲きこゆ、かれらはエホバのシオンに歸りたまふを目さし目さあひあはせて視るが故にみな聲をあげてもろともにうたへり九エルサレムの荒廢れたるところよ聲をはなちて共にうたふべし、エホバその民をなぐさめエルサレムを贖ひたまひたればなり十エホバそのきよき手をもろ〳〵の國人の目のまへにあらはしたまへり、地のもろ〳〵の極までもわれらの神のすくひを見ん十一なんぢら去よされよ、彼處をいでゝ汚れたるものに觸るなかれその中をいでよ、エホバの器をになふ者よ、なんぢら潔くあれ十二なんぢら急ざいづるにあらず遁りゆくにあらず、エホバはなんぢらの前にゆきイスラエルの神はなんぢらの軍後さなり給ふ

十三 べければなり○十三 視よわが志もべ智慧をもておこなはん、上りのぼりて甚だ偉くならん 十四 誠にはおほ
一四 くの人かれを見ておどろきたり（その面貌はそこなはれて人と異なり、その形容はおどろへて人の子とこと
一五 なれり）十五 後には彼おほくの國民にそゝがん王たち彼によりて口を緘まん、そはかれら未だつたへられざ
一六 るごとを見いまだ聞ざることを悟るべければなり

第五十三章 一 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞやエホバの手はたれにあらはれしや二 かれは主のま
二 へに芽のごとく燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり、われらがしたふべき艶色なし三 かれは侮ら
三 くしき貌はなく、われらがこれを見るべきうるはしき容なく、うつ
四 また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく侮られたり、われらも彼をたふとまざりき○四 まことに彼
五 はわれらの病患をおひ我儕のかなしみを擔へり、然るにわれ
六 らは思へらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるゝなりと五 彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義
七 のために砕かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり六 われちはみな羊のごとく迷ひておの〳〵己
八 が道にむかひゆけり然るにエホバはわれら凡てのもの〳〵不義をかれのうへに置たまへり○七 彼はくるしめら
九 れごもみづから緘だりて口をひらかず屠場にひかるゝ羊羔のごとく
十 またその口をひらかざりき八 かれは虐待と審判とによりて取去れたり、その代の人のうち誰かくれが活るものゝ地より絶れしことを思ひたりしや彼はわが民のとがの爲にうたれしなり九 その墓はあしき者どもに設
十一 けられたれど死るときは富るものどもになれり、かれは暴をおこなはず、その口には虚僞なかりき十 されど エホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまへり斯てかれの霊魂とがの献物をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん、かつエホバの悦びたまふことはかれの手によりて榮ゆべし十一 かれは己がたましひの煩勞をみて心たらはん、わが義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし又かれらの不義をおはん十二 このゆゑに我かれをして大なるものどもに掠物をわかちところべし、彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものどもに數へられたればなり、彼はおほくの人の罪をおひ愆あるものゝ爲にこひなしをなせり

第五十四章 一 なんぢ孕ます子をうまざるものよ歌うたふべし、こはエホバの聖言なり二 なんぢが幕屋のうちをひろくし、なんぢが住居のまくをはりひろげて吝むなかれ、なんぢの綱をながくし、なんぢの杙をかたくせよ三 そはなんぢが右に左にひろごり、なんぢの裔はもろ〳〵の國をえ荒廃れたる邑をもすむべき所となさしむべし四 懼るゝなかれ、なんぢ恥ることなからん惶てふためくことなかれ、なんぢ恥ることなからん五 なんぢを造りたまへる者はなんぢの夫なり、その名は萬軍のエホバなんぢを贖ひたまふものはイスラエルの聖者なり全世界の神さるゝへられ
六 給ふべし六 エホバ汝をまれきたまふ、棄られて心うれふる妻また若きとき嫁てさられたる妻をまれくがごとし、此はなんぢの神のみことばなり七 我しばし汝をすてたれど大いなる憐憫をもて汝をあつめん八 わが怒
七 悪あふれて暫くわが面をなんぢに隠したれど永遠のめぐみをもて汝をあはれまんと、こはなんぢをあがなひ
八 たまふエホバの聖言なり九 このこと我にはノアの洪水のときふれ流ろゝことなからしめんと誓ひしがそのごとく我ふたゝ
九 たり十 山はうつり岡はうごくともわが仁慈はなんぢよりうつらず平安をあたふるわが契約はうごくことな
十 からんと、此はなんぢを憐みたまふエホバのみことばなり○十一 なんぢ苦しみをうけ暴風にひるがへされ安
十一 慰をえざるものよ、我うるはしき彩色をなしてなんぢの石をすゑ青き玉をもてなんぢの基をおき十二 くれな
十二 ゐの玉をもてなんぢの櫓をつくり、むらさきの玉をもてなんぢの門をつくりなんぢの境 内 はあまれく寶
十三 石にてつくるべし十三 又なんぢの子輩はみなエホバに教をうけ、なんぢの子輩のやすきは大ならん十四 なん
十四 ぢ義をもて堅くたち虐待よりとほざかりて慴ることなくまた恐懼よりとほざかるべし、そは恐懼なんぢに近

十五 くことなければなり 十五 縦ひわれら群集ふさも我によるにあらず凡てむれつどひて汝をせむる者はなんぢ
十六 の故にたふるべし 十六 みよ炭火をふきおこして用ゐべき器をいだす鐵工はわが創造するところ又あらし滅
十七 ぼす者もわが創造するところなり 十七 すべてなんぢを攻んとてつくられしうつはものは利あることなし、興
十八 起てなんぢとあらそひ訴ふる舌はなんぢに罪せらるべし、これエホバの僕等のうくる產業なり、是かれらが
十九 我よりうくる義なりとエホバのたまへり

第五十五章

一 噫なんぢら渇ける者ことごく水にきたれ、金なき者もきたるべし汝等きたりてかひ求てく
二 らへ、きたれ金なくして価なくして葡萄酒と乳をかへ、なにゆゑ糧にもあらぬ者のために金をいだし飽ことを
三 得ざるものゝために勞するや、われに聽從がへ、さらばなんぢ美物をくらふを得ん 三 耳をかたぶけ我にきたりてきけ汝等のたましひは活べし、われ亦なんぢらとふこしへの契
四 約をなしてダビデに約せし變らざる惠をあたへん 四 視よわれ彼をたてゝもろ〳〵の民の證とし又もろ〳〵の
五 民の君となし命令する者となせり 五 なんぢは知ざる國民をまねかん、汝をしらざる國民はなんぢのもとに走
六 りきたらん此はなんぢの神エホバイスラエルの聖者のゆゑによりてなり、エホバなんぢを尊くしたまへり〇
七 六 なんぢら遇ことをうる間にエホバを尋れよ近くゐたまふ間に 七 惡き者はその途をすて、よこ
八 しまなる人はその思念をすてゝエホバに反れ、さらば憐憫をほどこしたまはん我等の神にかへれ豐に赦を
九 あたへたまはん 八 エホバ宣給くわが思はなんぢらの思ことごとなり、わが道はなんぢらの道よりも高く、
十 の地よりたかきがごとく、わが道はなんぢらの道よりも高く、 九 天
十一 雨くだり雪おちて復かへらず地をうるほして物をはえしめ萌をいださしめて播ものに種をあたへ食ふものに
十二 糧をあたふ 十一 如此わが口よりいづる言もむなしくは我にかへらず、わが喜ぶところを成し、わが命じ遣り
十三 し事をはたさん 十二 なんぢらは喜びて出きたり平穩にみちびかれゆくべし山と岡とは聲をはなちて前にうた
十四 ひ野にある樹はみな手をうたん 十三 松樹はいばらにかはりてはえ岡拈樹は棘にかはりてはゆべし、此はエホ

一 バの頌美となり並ことしへの徴となりて絶ることからん

第五十六章

一 エホバ如此いひたまふ、なんぢら公平をまもりて正義をおこなふべし、わが救のきたるはちか
二 く、わが義のあらはるゝは近ければなり 二 安息日をまもりて汚さず、その手をおさへて惡きことをなさ
三 ず、斯おこなふ人かく堅くまもる人の子はさいはひなり 三 エホバにつらなれる異邦人はいふなかれ、エホ
四 バ必らず我をその民より分ちたまはんと、寺人もまたいふなかれ、エホバ如此いひたまふ、わが安息日をまもり、わが悦ぶことをえらみて、わが契約を堅くまもる寺人には 五 我わが家のうちにてわが垣のうちにて子にも女にもまさる記念のしるしと名さをあたへ並ことしへの名をたまふて絶ることなからしめん 六 またエホバにつらなり、これに事へエホバの名をすことなく凡てわが契約をかたくまもる異邦人は 七 我これを聖山にきたらせ、わが祈の家のうちにて樂ましめん、かれらの燔祭と犧牲とはわが祭壇のうへに納められるべし、わが家はすべての民のいのりの家と 八 ゝなへらるべければなり 八 イスラエルの放逐されたるものを集めたまふ主エホバのたまはく我さらに人をあつめて既にあつめられたる者にくはへん〇 九 野獸よ、みなきたりてくらへ林にをるけものよ皆きたりてくらへ 十 斥候はみな瞽者にしてしることなし、みな唖なる犬にして吠ることあたはず、みな夢みるもの臥ゐるもの眠ることをこのむ者なり 十一 この犬はむさぼることはだしくして飽ことを知らず、かれらは悟ることを得ざる牧者にして皆おのが道にむかひ各おのが利をおもふ 十二 かれら互にいふ請われ酒をたづさへきたらん、われら濃酒にのみあかん、かくて明日もなほ今日のごとく大にみち足はせんと

第五十七章

一 義者ほろぶれども心にとむる人なく愛しみ深き人々とりさらるれども義きもの〻禍害のまへより取去るゝなるを悟る人なし 二 かれは平安にいり直きをおこなふ者はその寢床にやすめり〇 三 なんぢら巫女の子淫人また妓女の裔よ近きゝたれ 四 なんぢら誰にむかひて戯れをなすや誰にむかひて口をひらき舌をのばすや、なんぢらは悖逆の子僞いつはりの裔類にあらずや 五 なんぢらは橡樹のあひだ綠りなる水々

八 のしたに心をこがし谷のなか岩の狹間に子をころせり六 なんぢは谷のなかの滑かなる石をうくべき嗣業とし、
これをなんぢが所有とす、なんぢ亦これに灌祭をなし之にそなへものを献げたり、われ之によりていかでか
七 心をなだむべしや七 なんぢは高くそびえたる山の上になんぢの床をまうけ、かつ其處にのぼりゆきて犧牲を
八 さゝげたり八 また戸および柱のうしろに汝の紀念をおけり、なんぢ我をはなれて他人に身をあらはし登り
九 ゆきてその床をひろくし、かれらと誓をなし又かれらの床を愛しこれがためにその所をえらびたり九 なんぢ
香 膏 をおほくの 薫 物 をたづさへて王にゆき又なんぢ
十 くせり十 なんぢ途のながきに疲れたれどなほ望なしといはず、なんぢ力をいきかへされしによりて衰弱さ
十一 き十一 なんぢ誰をおそれ誰のゆゑに憚きていつはりをいひ我をおもはず亦そのことを心におかざりしや、わ
十二 れ久しく默したれど汝かへりて我をおそれざりしにあらずや十二 我なんぢの義をつげしめさん、なんぢの作
十三 はなんぢに益せじ十三 なんぢ呼るときその集めおきたるもの汝をすくべ風はかれらを悉くあげさり息はか
十四 れらを吹さらん、然ど我に依頼むものは地をつぎ我聖山をうべし十四 また人いはん、土をもり土をもりて途を
十五 そなへよわが民のみちより躓 礙 をとりされと〇十五 至高く至上なる永遠にすめるもの聖者さなづくるも
の如此いひたまふ、我はたかき所きよき所にすみ亦こゝろ砕けてへりくだる者さゝもにすみ謙だるものゝ靈
十六 をいかし砕けたるものゝ心をいかす十六 われ限なくは爭はじ我たえずは怒らじ、然らずば人のこゝろ我がま
十七 へにおとろへん、わが造りたる靈はみな然らん十七 彼のむさぼりの罪により我いかりて之をうち、また面を
十八 おほひて怒りたり、然るになほ悖りて己がこゝろの途にゆけり十八 されど我その途をみたり我かれを愈すべ
十九 し、又かれを導きてふたゝび安慰をかれとその中のかなしめる者さにかへすべし十九 我くちびるの果をつく
二十 れり遠きものにも近きものにも平安あれ平安あれ我かれをいやさん、此はエホバのみことばなり二十 然はあ
二十一 れど悪者はなみだつ海のごとし靜かなることを能はずしてその水つれに濁と泥さをいだせり二一 わが神いひ
たまはく悪きものには平安あることなしと

第五十八章

一 大によばゝりて聲をしむなかれ汝のこゑをラッパのごとくあげ、わが民にその愆をつげヤ
二 コブの家にその罪をつげしめよ二 かれらは日々われを尋求めわが途をしらんことをこのむ、義をおこなひ
三 神の法をすてざる國のごとく義き法をわれにもとめ神さ相近くことをこのめり三 かれらはいふ、われら斷
食するになんぢ見たまはず、われら心をくるしむるになんぢ知たまはざるは何ぞやと、視よなんぢらの斷食
四 の日にはおのがこのむ作をなし、その工人をことごとく惱めつかふ四 視よなんぢら斷食するときは相あ
ひて相きそひ悪の拳をもて人をうつ、なんぢらの今のだんじきはその聲をうへに聞えしめんさにあらざる
五 なり五 斯のごとき斷食はわが悦ぶところのものならんや、斯のごときは人その靈魂をなやますの日ならんや、
その首を葦のごとくにふし麁服と灰とをその下にしくをもて斷食の日またエホバに納らるゝ日ごふなふべけ
六 んや六 わが悦ぶところの斷食はあくの繩をほどき軛のつなをさき虐げらるゝものを放ちさらしめ、すべての
七 軛我をるなどの事にあらずや七 また飢たる者になんぢのパンを分ちあたへ、さすらへる貧民をなんぢの
八 家にいれ、裸かなるものを見てこれに衣せ、おのが骨肉に身をかくさゞるなどの事にあらずや八 しかる時は
なんぢのひかり曉のごとくにあらはれいで汝すみやかに愈さるゝことを得なんぢの義はなんぢの前にゆき
九 エホバの榮光はなんぢの軍後となるべし九 また汝よぶときはエホバ答へたまはん、なんぢ叫ぶときは我こ
こに在りといひ給はん、もし汝のなかより軛をのぞき指點をのぞき悪きことをかたるを除き十 なんぢの靈魂
十 の欲するものをも飢たる者にほどこし苦しむものゝ心を滿足しめばなんぢの光くらきにてりいで、なんぢの
十一 闇は晝のごとくならん十一 エホバは常になんぢをみちびき乾けるところにても汝のこゝろを滿足しめ、なん
十二 ぢの骨をかたうし給はん、なんぢは潤ひたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし十二 汝よりいづる
者はひさしく荒廢れたる所をおこし、なんぢは累代やぶれたる基をたてん、人なんぢをよびて破隙をおぎな
十三 ふ者さいひ市街をつくろひてすむべき所さなす者さいふべし十三 もし安息日になんぢの歩行をさよめ、わ
が聖日になんぢの好むわざをおこなはず安息日をさなへて尊むべ

十四 き日となし、之をたふとみて己が道をおこなはず、おのが好むわざをなさず、おのが言をかたらずば、十四そ
の時なんぢエホバを樂しむべし、エホバなんぢを地
の高處にのらしめ、なんぢが先祖ヤコブの產業をも
て汝をやしなひ給はん、こはエホバ口より語りたまへるなり

第五十九章

一 エホバの手はみぢかくして救ひえざるにあらず、その耳はにぶくして聞えざるにあらず二惟
なんぢらの邪曲なる業なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり、又なんぢらの罪その面をおほひて聞え
ざらしめたり三そはなんぢらの手は血にてけがれ、なんぢらの指はよこしまにて汚れ、なんぢらのくちびる
四 は虛僞をかたり、なんぢらの舌は惡をさゝやき四そ の一人だに正義をもてうつたへ眞實をもて論らふものな
し、かれらは虛浮をたのみ虛僞をかたり惡くはだてをはらみ不義をうむ五かれらは蝮の卵をかへし蛛網を
おる、その卵をくらふものは死るなり、卵もし踐るればやぶれて毒蛇をいだす六その織るところは衣になす
あたはず、その工をもて身をおほふことを能はず、かれらの工はよこしまの工なり、かれらの手には暴虛のお
七 こなひあり七かれらの足はあくにはしり罪なき血をながすに速し、かれらの思念はよこしまの思念なり、殘
八 害と滅亡とその路徑にのこれり八かれらは平穩なる道をしらず、その過るところに公平なく又まがれる小徑
九 をつくる、凡てこれを踐るものは平穩をしらず九ここのゆゑに公平はとほくわれらをはなれ正義はわれらに追及
ず、われら光をのぞめど暗をみ光輝をのぞめど闇をゆく十われらは瞽者のごとく牆をさぐりゆき目なき者の
十一 ごとく摸りゆき正午にても日暮のごとくにつまづき強壯なる者のなかにありても死るものゝごとし十一我儕
はみな熊のごとくにほえ鴿のごとくに甚くうめき審判をのぞめども遠くわれらを離る、十二われらの愆はなんぢの前におほく、われらのつみは證としてわれらを訟へ、われらのさがはわれら
十二 とともに在り、われらの邪曲なる業はわれら自らしれり十三われら罪戻をかしてエホバを棄われらの神にば
十四 なれてしたがはず暴虛と悖逆とをかたり虛僞のことばを心にはらみて說出すなり十四公平はうしろに退けら
十五 れ正義はとほくに立り、そは眞實は衢間にたふれ正直はいることを得ざればなり十五眞實はかげてなく惡を
十六 ほなるものは掠めうばゝる、エホバこれを見てその公平のなかりしを悅びたまはざりき十六エホバは人な
十七 きを見み中保なきを奇しみたまへり、斯てその臂をもてみづから救ひ、その義をもてみづから支たまへり十七
エホバ義をまとひて鞏胸とし救をその頭にいただきて鬼さなし仇をまとひて衣さなし熱心をきて外服さなし
十八 たまへり十八かれらの作にしたがひて報をなし敵にむかひて報をなし、また島々にむく
十九 いをなし給はん十九西方にてエホバの名をおそれ日のいづる所にてその榮光をおそるべし、エホバは壓
きたる河のその氣息にふき潰えたるがごとくに來りたまふ可ればなり二十エホバのたまはく贖者シ
二十一 オンにきたりヤコブのなかの愆をはなるゝ者につかんと二一エホバいひ給く、なんぢの上にあるわが靈なん
ぢの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんぢの裔の口より汝のすゑの裔の口より
はなれざるべし、わがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホバのみことばなり

第六十章

一 起よ光ひかりを發て、なんぢのうへに照出たればなりニ視よく
らきは地をおほひ闇はもろ〳〵の民をおほはん、されどなんぢの上にはエホバ照出たまひてその榮光な
二 んぢのうへに顯はるべし三もろ〳〵の國はなんぢの光にゆき、もろ〳〵の王はでり出るなんぢが光輝にゆか
三 四なんぢの目をあげて環視せ、かれらは皆つどひて汝にきたり、なんぢの子輩はとほきより來り、なんぢ
四 の女輩はいだかれて來らん五そのときなんぢ視てよろこびの光をあらはし、なんぢの心おどろきあやしみ且
五 ひろからになるべし、そは海の富はうつりて汝につきもろ〳〵の國の貨財はなんぢに來るべければなり六お
六 ほくの駱駝ミデアンおよびエパのわかき駱駝なんぢの中にあまれくみちシバのもろ〳〵の人こがれ乳香をた
づさへきたりてエホバの譽をのべつたへんセケダルのひつじの群はみな汝にあつまりきたり、子バヨテの牡
七 羊はなんぢに事へ、わが祭壇のうへにのぼりて受納られん、斯てわれわが榮光の家をかゞやかすべし八雲
八 のごとくにさび鳩のその窠にさびかへるが如くしてきたる者はたれぞ九もろ〳〵の島はわれを俟望みタルシ
九 シのふねは首先になんぢの子輩をとほきより賫きたり並かれらの金銀をともにのせきたりてなんぢの神エホ

十　バの名にさふげオスラエルの聖者にさふげん、エホバなんぢを輝かせたまひたればなり　十一異邦人はなんぢ
の石垣をきづき、かれらの王等はなんぢに事へん、そは我いかりて汝をうちしかど、また憫をもて汝を憐
十一みたればなり　十一なんぢの門はつねに開きて夜も日もとざすことなし、こは人もろ〳〵の國の貨財をなんぢ
十二に携へきたり、その王等をひきぬ來らんがためなり　十二なんぢに事へざる國と民とさはほろび、そのくに〳〵
十三は全くあれすたるべし　十三レバノンの榮はなんぢにきたり松、杉、黄楊はみな共にきたりて我が聖所をかざ
十四やかさん、われ亦わが足をおく所をたふとくすべし　十四なんぢを苦しめたるもの〻子孫はかゞみて汝にきた
十五り汝をさげしめたる者はこぞ〳〵くなんぢの足下にふし斯てなんぢをエホバの都イスラエルの聖者のシオ
十五ンとよなへん　十五なんぢ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をこしへの譽
十六美よろこびの獸喜さなさん　十六なんぢ亦もろ〳〵の國の乳をすひ王たちの乳房をすひ而して我エホバなんぢの救
十七主なんぢの贖主ヤコブの全能者なるを知るべし　十七われ黄金をたづさへきたりて赤銅にかへ白銀をた
づさへきたりて鐵にかへ赤銅を木にかへ鐵を石にかへ、なんぢの施政者をおだやかにし、なんぢを役す
十八るものを義うせん　十八強暴のこと再びなんぢの地にきこえず殘害と敗壞さはふたゝびなんぢの境にきこえず
十九汝その石垣をすくひとゝなへ、その門を譽とゝなへん　十九晝は日ふたゝびなんぢの光とならず月もまた輝き
二十てなんぢを照さず、エホバ永遠になんぢの光となりなんぢの神はなんぢの榮となりたまはん　二十なんぢ
の日はふたゝび落ず、なんぢの月はかくることなかるべし、そはエホバ永遠になんぢの光となり汝のかな
二一しみの日畢るべければなり　二一なんぢの民はこぞ〳〵く義者となりてとこしへに地を嗣ん、かれはわが
二二植たる樹株わが手の工わが榮光をあらはす者となるべし　二二その小きものは千となり、その弱きものは強
國となるべし、われエホバその時いたらば速かにこの事をなさん

第六十一章　一主エホバの靈われに臨めり、こはエホバわれに膏をそゝぎて貧きものに福音をのべ傳ふるこ
とをゆだれ我をつかはして心の傷める者をいやし俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ

二　エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ又すべて哀むものをなぐさめ　三灰にかへ冠をた
まひてシオンの中のかなしむ者にあたへ、悲哀にかへて歡喜のあぶらを予へ、うれひの心にかへて讃美の衣
をあたへしめたまふなり、かれらは義の樹エホバの植たまふ者その榮光をあらはす者とゝなへられん　四彼
等はひさしく荒たる處をつくろひ上古より廢れたる處をおこし荒たる邑々をかさねて新にし世々すたれたる
處をふたゝび建べし　五外人はたちてなんぢらの群をかひ異邦人はなんぢらの畑をたがへす者となり葡萄
をつくろる者さならん　六然ごなんぢらはエホバの祭司とゝなへられ、われらの神の役者とよばれ、もろ〳〵
の國の富をくらひ、かれらの榮をえて自らほこるべし　七羞にうけし恥にかへ倍して賞賜をうけ、凌辱にか
へ嗣業をえて樂むべし、而してその地にありて倍したる賞賜をたもち永遠によろこびを得ん　八われエホバは
公平をこのみ邪曲なるかすめごさをにくみ眞實をもて彼等にむくいをあたへ彼等さとこしへの契約をたつべ
し　九かれらの裔はもろ〳〵の國のなかに知れ、かれらの子孫はもろ〳〵の民のなかに知れん、すべ
てこれを見るものはそのエホバの祝したまへる裔なるを辨ふべし　十われエホバを大によろこび、わが靈魂
はわが神をたのしまん、そは我にすくひの衣をきせ義の外服をまさはせて新郎が冠をいたゞき新婦が玉こ
がれの飾をつくろが如くなしたまへばなり　十一地はその芽をいだし畑はまけるものを生ずるがごとく主エホバは
義と譽とをもろ〳〵の國のまへに生ぜしめ給ふべし

第六十二章　一われシオンの義あさ日の光輝のごとくにでエルサレムの救もゆる松火のごとくになるまで
はシオンのために默さずエルサレムのために休まざるべし　二もろ〳〵の國はなんぢの義を見もろ〳〵の王は
みなゝんぢの榮をみん、斯てなんぢはエホバの口にて定めたまふ新しき名をもて稱へらるべし　三また汝はうる
ほしき冠のごとくエホバの手にあり王の冕のごとくなんぢの神のたなごゝろにあらん　四人ふたゝび汝
をすてられたる者さいはず再びなんぢの地をあれたる者さいはじ、却てなんぢをヘフジバ（わが悦ぶところ）
さゝなへ、なんぢの地をベウラ（配偶）さゝなふべし、そはエホバなんぢをよろこびたまふ、なんぢの地は

五 配偶をえん五 わかきもの〳〵處女をめさる如くなんぢの子輩はなんぢを娶らん新郎の新婦をよろこぶごとく、
六 なんぢの神なんぢを喜びたまふべし〇六 エルサレムよ我なんぢの石垣のうへに斥候をおきて終日終夜たえず默すことなからしむ、なんぢらエホバに紀念したまはんことを求るものよ、自らやすむなかれ七 エホバ
七 エルサレムをたて〻全地に譽をえしめ給ふまでは息め奉るなかれ八 エホバその右手をさし、その大能の臂をさし擧ひて宣給く、われ再びなんぢの五穀なんぢの敵にあたへて食はせず異邦人はなんぢが勞したる
八 酒をのまざるべしと誓給ひてエホバを讀たるへ葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之
九 をのむべし九 門よりすゝみゆけ進みゆけ民の途をそなへ土をもり土をもりて大路をきようけよ、石をさりのぞ
十 け、もろ〳〵の民に旗をあげて示せ十一 エホバ地の極にまで告てのたまはく汝等シオンの女にいへ視よ汝
十一 の救きたる祖よ主の手にその恩賜あり、はたらきの價はその前にあり十二 而してかれらはきよき民またエホ
十二 バにあがなはれたる者さゝなへられん、なんぢはもとめ尋らるゝもの棄られざる邑さゝなへらるべし

第六十三章

一 一このエドムよりきたり緋衣をきてボヅラよりきたる者はたれぞ、その服飾はなやかに大
二 なる能をもて嚴しく歩みきたる者はたれぞ、これは義をもてかたり大にすくひをほどこす我なり二 なんぢ
三 の服飾はなにゆゑに赤くなんぢの衣はなにゆゑに酒搾をふむ者さひとしきや三 我はひとりにて酒搾をふめり、
四 もろ〳〵の民のなかに我とゝもにする者なし、わたれば、われら怒によりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを踏にじり
五 たれば、かれらの血わが衣にそゝぎわが服飾をことごとく汚したり四 そは刑罰の日わが心の中にあり救贖の歳
六 すでにきたれり五 われ見てたすくる者なく扶る者なきを奇しめり、この故にわが臂われをすくひ我がいきど
七 ほり我をさゝへたり六 われ怒によりてもろ〳〵の民をふみおさへ忿恚によりてかれらを酔しめかれらの血
八 を地に流れしめたり〇七 われはエホバのわれらに賜たまへる各種のめぐみとその譽さをかたりつげ又その
九 憐憫にしたがひ其おほくの恩惠にしたがひてイスラエルの家にほどこし給ひたる大なる恩寵をかたり告ん
一〇 エホバいひたまへり、誠にかれらはわが民なり、虚偽をせざる子輩なりさ、斯てエホバはかれらのために
一一 救主になりたまへり九 かれらの艱難のさきはエホバもなやみ給ひてその面前の使をもて彼等をすくひ、そ
一二 の愛とその憐憫とによりて彼等をあがなひ彼等をとりあげ昔時の日つねに彼等をいだきたまへり十 然るにかれ
一三 らは悖りてその聖靈をうれへしめたる故にエホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻たまへり十一
一四 爰にその民いにしへのモーセの日をおもひいで〳〵曰けるは、かれらとその群の牧者さを海より携へあげし者
一五 はいづこにありや、彼等のなかに聖靈をおきしものは何處にありや十二 榮光のかひなをモーセの右に
一六 ゆかしめ彼等のまへに水をさきて自らさこしへの名をつくり十三 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく
一七 躓かで澌をすぎしめたりし者はいづこに在りや十四 谷にくだる家畜のごとくにエホバの靈かれらをいこはせ
一八 給へり、主よなんぢは斯おのれの民をみちびきて榮光の名をつくり給へり十五 れがはくは天より俯視なは
一九 し、その榮光あるきよき居所より見たまへ、なんぢの熱心さなんぢの大能あるみわざさは今いづこにあり
二〇 や、なんぢの切なる仁慈さ憐憫さはおさへられて我にあらはれず十六 汝はわれらの父なり、上古よりなんぢの名をわれ
二一 らを知ず、イスラエルわれらを認めず、されど エホバよ汝はわれらの父なり、上古よりなんぢの名をわれ
二二 らの贖主といへり十七 エホバよ何故にわれらをなんぢの道より離れまごはしめ我儕のこゝろを頑固にし
二三 て汝を畏れざらしめたまふや、願くはなんぢの僕等のためになんぢの產業なる支派のために歸りたまへ十八
二四 汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんぢの聖所をふみにじれり十九 我儕はなんぢに上古よ
二五 り治められざる者のごとくなりぬ

第六十四章

一 一願くはなんぢ天を裂てくだり給へ、なんぢのみまへに山々ふるひ動かんことを二 火の柴をも
二 やし火の水を沸すがごとくして降りたまへ、かくて名をなんぢの敵にあらはし、もろ〳〵の國をなんぢのみ
三 まへに顫慄かしめたまへ三 汝われらが逆料あたはざる懼るべき事をおこなひ給ひしときに降りたまへり
四 山々はその前にふるひうごけり四 上古よりこのかた汝のほかに何なる神ありて俟望みたる者にかゝる事をお
五 こなひしや、いまだ聽すいまだ耳にいらず、いまだ目にみしことなし五 汝はよろこびて義をおこなひ、なん

ちの途にありてなんぢを紀念するものを迎へたまふ、視よなんぢ怒たまへり、われらは罪戻をかせり、かゝる狀なること既にひさし我儕いかで救はるゝを得んや六 我儕はみな潔からざる物のごとくなり、われらの義はことごとく汚れたる衣のごとし、我儕はみな凋落れり、なんぢの名をよぶ者なく、みづから勵みて汝によりすがる者なし、なんぢ面をおほひてわれらを消失せしめたまへり、八されど エホバよ汝はわれらの父なり、われらは泥塊にしてなんぢは陶工なりわれらはみな汝の手のわざなり九 エホバよいたく怒たまふなかれ永くよこしまを紀念したまふなかれ願くは顧みたまへ我儕はみなな汝の民なり十 汝のきよき諸邑は野となりシオンは野となりエルサレムは荒廢れたり、十一われらの先祖がなんぢを讃たゝへたる榮光あるきよき宮は火にやかれ我儕のしたひたる處はことごとく荒はてたり十二 エホバよこれらの事あれどもなほみづから制へたまふや、なんぢなほ默してわれらに深くくるしみを受しめたまふや

第六十五章

一 我はわれを求めざりしものに問もとめられ我をたづねざりしものに見出され、わが名をよばざりし國にわれ曰らくわれは此にあり我はこゝに在と二 善らぬ途をあゆみおのが思念にしたがふ悖れる民をひれもす手をのべて招けり三 この民はまのあたり恒にわが怒をひき園のうちにて犧牲をさゝげ瓦の壇にて香をたき四 墓のあひだにすわり隱密なる處にやどり猪の肉をくらひ憎むべきもの〳〵羹をその器皿にもりて五人にいふ、なんぢ其處にたちて我にちかづくなかれ、そは我なんぢよりも聖しと、かれらはわが鼻のけぶり終日もゆる火なり六 視よこの事わが前にしるされたり、われ默さずして報いかへすべし必ずかれらの懷中に報いかへすべしセ エホバいひ給く、なんぢらの邪曲となんぢらが列祖のよこしまさはともに報いかへすべし、かれらは山上にて香をたき岡のうへにて我を汚しくがゆゑに我まづその作をはかりてその懷中にかへすべし〇八 エホバ如此いひたまふ人ぶだうのなかに汁あるを見ばいはん、これを壞るなかれ福祉その中にあればなりと、我わが僕等のために如此おこなひてことごとくは壞らじ九 ヤコブより一 裔をいだし ユダよりわれ山々をうけつぐべき者をいださん、わが撰みたる者はこれをうけつぎ我がしもべらは彼處にすむべし十 シヤロンは羊のむれの牧場となり、アコルの谷はうしの群のふす所となりて我をたづねもとめたるわが民の有さならん十一 然どなんぢらエホバを棄わが聖山をわすれ机をガド（福福の神）にそなへ雜合せたる酒をもりてメニ（運命の神）にさゝぐる者よ十二 我なんぢらを劍にわたすべく定めたり、なんぢらは皆かゞみて屠らるべし、汝等はわが呼しとき答へず、わが語りしとききかず、わが目にあしき事をおこなひ、わが好まざりし事をえらみたればなり十三 このゆゑに主エホバかく言給ふ、わが僕等はくらへども汝等はうゑ、わが僕等はのめども汝等はかわき、我しもべらは喜べども汝等は恥ん十四 わが僕等はこゝろ樂しきによりて歌うたへども汝等はこゝろ哀きによりて叫び、また靈魂うれふるによりて泣號ぶべし十五 なんぢらが遺名はわが撰みたるものゝ呪詛の料とならん、主エホバなんぢらを殺したまはん、然どおのれの僕等をはかの名をもて呼たまふべし十六 斯ろがゆゑに地にありて己のために福祉をねがふものは眞實の神にむかひて福祉をもとめ地にありて誓ふものは眞實の神をさして誓ふべし、さきの困難は忘れられてわが目よりかくれ失たるに因ると十七 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す、人さきのものを紀念することなく之をその心におもひ出ることなし十八 然どなんぢらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ、視よわれはエルサレムを造りてよろこびとし、その民を快樂とすレムを造りてよろこびとし、その民を快樂とすべし、二十 日數わづかにして死る嬰兒さいのちの日をみたさぶる老人とはその中にまたあることなかるべし、百歳にて死るものも尚わかしとせられ、百歳にて死るものを詛れたる罪人とすべし二一 かれら家をたてゝ之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらふべし二二 かれらが建ろところにほかの人すまず、かれらが造るところの果はほかの人くらはず、そはわが民のいのちは樹の命のごとく我がえらみたる者はその手の工ふるびうするさも存ふべければなり二三 かれらの勤勞はむなしからす、その生ところの者はわざはひにかゝらず、彼等はエホバの福祉をたまひしものゝ裔にしてその子孫もあ

二二 ひ共にをる可ればなり 二四 かれらが呼ざるさきにわれこたへ、かれらが語りをへざるに我きゝん 二五 豺狼さ
二三 こひつじと食物をともにし獅は牛のごとく藁をくらひ蛇はちりを糧とすべし、斯てわが聖山のいづこにても
二四 も害ふことなく傷ることなからん、これエホバの聖言なり

第六十六章 一 エホバ如此いひたまふ、天はわが位地はわが足凳なり、なんぢら我がために如何なる家をたて
二 んとするか又いかなる處かわが休憩の場さならん 二 エホバ宣給くわが手はあらゆる此等のものを造りてこ
三 れらの物ことごく成れり我はたゞ苦しみまた心ひいため我がことばを畏れをのゝくものを顧みるなり 三
四 牛をほふるものは人をころす者のごとく羔を犧牲とするものは狗をくびりころす者のごとく祭物をさゝ
五 ぐるものは豕の血をさゝぐる者のごとし彼等はおのが途をえらみ、その心よにくむべき者をたのしみとせり 四 我もまた災禍をえらびて彼等にあたへ、その懼るゝところの事を
六 かれらに臨ましめん、そは我よびしとき應ふるものなく我かたりしとき聽ことをせざりき、わが目にあしき
七 事をおこなひ、わが好まざる事をえらみたればなり ○五 なんぢらエホバの言をおそれをのゝく者よ、エホバ
八 の言をきけ、なんぢらの兄弟なんぢらを憎みなんぢらをわが名のために逐出していふ願くはエホバその榮
九 光をあらはして我儕になんぢらの歡喜を見せしめよと、然ごかれらは恥をうけん 六 騷亂ること邑よりき
十 こえ聲ありて宮よりきこゆ此はエホバその仇にむくいをなしたまふ聲なり 七 シオンは產のなやみを知ざるさ
十一 きに生その劬勞きたらざるさきに男子をうみいだせり 八 誰がかゝる事をきゝしや、誰がかゝる類をみしや一
十二 の國はたゞ一日のくるしみにて成べけんや、一つの國民は一時にうまるべけんや、然ごシオンはそのしむ間
十三 もなく直にその子輩をうめり 九 エホバ言給く、われ產にのぞましめしに何でうまざらしめんや、なんぢの
十四 神いひたまはく、我はうましむる者なるにいかで胎をさざるんや ○十 エルサレムを愛するものよ皆かれさよ
十五 もに喜べ、かれの故をもてたのしめ、彼のために悲めるものよ皆かれさゝもに喜びたのしめ 十一 そはなんぢ
十六 ら乳をすふごさくエルサレムの安慰をうけて飽ことを得ん、また乳をしぼるごさくその豐なる榮をうけてお
十七 のづから心さわやかならん 十二 エホバ如此いひたまふ視よわれ河のごとく、かれに平康をあたへ溢ざる流のご
十八 さく彼にもろ〳〵の國の榮をあたへん、而して汝等これをすひ背におはれ膝におかれて樂しむべし 十三 母の
十九 その子をなぐさむる如く我もなんぢらを慰めん、なんぢらはエルサレムにて安慰をうべし 十四 なんぢら見て
二十 心よろこばん、なんぢらの骨は若草のさかゆるごさくなるべしエホバの手はその僕等にあらはれ又その仇を
二一 はげしく怒たまはん 十五 視よエホバは火中にあらはれて來りたまふ、その車輦はやちのごさし烈しき威勢
二二 をもてその怒をもらし火のほのほをもてその譴をほごこし給はん 十六 エホバは火をもて劒をもてよろづの人
二三 を刑ひたまはん、エホバに刺殺さるゝもの多かるべし 十七 エホバ宣給く、みづからを潔くし、みづからを別
二四 ちて園にゆき、その中にある木の像にしたがひ豕の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせ
二五 ん 十八 我かれらの作爲かれらの思念さをしれり、時きたらばもろ〳〵の國民ともろ〳〵の族さをあつめん、
二六 彼等きたりてわが榮光をみるべし 十九 我かれらのなかに一つの休徵をたて〳〵逃れたる者をもろ〳〵の國す
二七 なはちタルシ、よく弓をひくプル、ルデ、およびトバル、ヤワン又わが聲名をきゝ、わが榮光をみざる遙
二八 かなる諸島につかはさん、彼等はわが榮光をもろ〳〵の國にのべつたふべし 二十 エホバいひたまふ、かれら
二九 はイスラエルの子輩がきよき器にそなへものをもて、馬、車、轎、騾、駱駝にのらしめ、わが聖山エルサレムにきたらせ
三十 弟をもろ〳〵の國の中よりたづさへて馬、車、轎、騾、駱駝にのらしめ、わが聖山エルサレムにきたらせ
三一 てエホバの祭物とすべし 二一 エホバいひたまふ、我また彼等のうちより人をえらびて祭司としレビ人とせ
三二 んと 二二 エホバ宣給くわが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとゞまる如くなんぢの裔
三三 となんぢの名はながくとゞまらん 二三 エホバいひたまふ新月ごとに安息日ごとによろづの人わが前にきたり
三四 て崇拜をなさん 二四 かれら出てわれに逆きたる人の屍をみん、その虱しなず、その火きえず、よろづの人
にいみきらはるべし

以賽亞書終

耶利米亞記　第一章

一 こはヒニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子エレミヤの言なり
二 アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなはちその治世の十三年にエホバの言エレミヤに臨めり
三 その言またヨシヤの子ユダの王エホヤキムの時にものぞみてヨシヤの子ユダの王ゼデキヤの十一年のをはり即ちその年の五月エルサレムの民の移されたる時までにいたれり
四 エホバの言我にのぞみて云ふ
五 われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり汝が胎をいでざりし先に汝を聖め汝をたてて萬國の預言者となせりと
六 我こたへけるは噫主エホバよ視よわれは幼少により語ることを知らずと
七 エホバわれにいひたまひけるは汝われは幼少といふ勿れすべて我が汝を遣すところにゆき我汝に命ずるすべてのことを語るべし
八 なんぢ彼等の面を畏るゝ勿れ蓋われ汝とともにありて汝をすくふべければなりとエホバいひたまへり
九 エホバわれにいひたまひけるは視よわれ我言を汝の口にいれたり
十 みよ我けふ汝を萬民のうへと萬國のうへにたて汝をして或は抜き或は毀ち或は滅し或は覆し或は建て或は植しめん
十一 エホバの言また我に臨みていふエレミヤよ汝何をみるやと我こたへけるは巴旦杏の枝をみるなりと
十二 エホバ我にいひたまひけるは汝善く見たりそはわれ速に我言をなさんとすればなり
十三 エホバの言ふたゝび我に臨みていふ汝何をみるやと我こたへけるは沸騰たる鍋をみるその面は北より此方に向ふ
十四 エホバ我にいひたまひけるは災北よりおこりてこの地に住るすべての者にきたらん
十五 エホバいひたまひけるはわれ北の國々のすべての族をよばんエルサレムの門の入口とその周圍のすべての石垣およびユダのすべての邑々に向ひておのゝ〳〵その座を設けん
十六 われかれらの凡の惡事のために我判をかれらにつげん是はかれら我をすて〻別の神に香をたきおのれの手にて作りし物を拜するによる
十七 汝腰に帶して起ちわが汝に命ずるすべての事を彼等につげよその面を畏るゝ勿れ否らされば我かれらの前に汝を辱しめん
十八 視よわれ今日この全國とユダの王とその牧伯とその祭司とその地の民の前に汝を堅き城鉄の柱銅の牆となせり
十九 彼等なんぢと戰はん

さするも汝に勝ざるべしそはわれ汝さしもにありてで汝をすくふべければなりさエホバいひたまへり

第二章

二 エホバの言我にのぞみていふ二ゆきてエルサレムに住る者の耳につげよエホバ斯くいふ我汝
につきて汝の若き時の慇切なんぢが契をなせしさきの愛曠野なる種播ぬ地にて我に從ひしことを憶ゆさ三イ
スラエルはエホバの聖物にしてその初に結べる實なりすべて之を食ふものは罰せられ災にあふべしさエ
ホバ云ひたまへり四ヤコブの家さイスラエルの家の族よエホバの言をきけ五エホバかくいひたまふ汝
等の先祖は我に何の惡事ありしを見て我に遠がり虛き物にしたがひて虛しくなりしやかれらは我儕をエ
ジプトの地より導きいだし曠野なる岩穴ある荒たる地旱きたる死の陰の地人の過ぎざる地人の住ばざる地を
通らしめしエホバはいづこにあるさいはざりきセわれ汝等を導きて園のごさき地にいれ其實さ佳物をくらは
しめたり然ど汝等此處にいりわが地を汚しわが產業を憎むべきものさなせりハ祭司はエホバは何處にいますさ
いはず律法をあつかふ者は我を知らず牧者は我に背き預言者はバアルによりて預言し益なきものに從へりル
故にわれ尙汝等さあらそはんさエホバいひたまふ且なんぢの子孫さあらそふべしさエホバいひたまふ十汝等キッテムの諸島に
わたりて觀よまた使者をケダルにつかはし斯のごさき事あるや否を詳細に察せしめよ十一その神を神にあ
らざる者に易たる國ありや然ろに我民はその榮を益なき物にかへたり十二天よこの事を驚け慄けいたく怖
れよとエホバいひたまふ十三蓋わが民はふたつの惡事をなせり即ち活る水の源なる我をすて自己水溜
を堀れりすなはち壞れたる水溜にして水を有ださる者なり〇十四イスラエルはしもべなるか家にうまれし僕
なるがいかにして擄掠さなれるや十五わかき獅子がれにむかひて哮えその聲をあげてその地を荒せりそ
の諸邑は焚れて住む人なし十六ノフさタパチスの諸子も汝の頭首の髮をくらはん十七汝の神エホバの汝を途
にみちびきたまへる時に汝これを棄たるによりて此事汝におよぶにあらずや十八汝ナイルの水を飲んさ
てエジプトの路にあるは何ゆゑそまた河の水を飲んさてアッスリヤの路にあるは何故ぞ十九汝の惡は汝を
こらしめ汝の背は汝をせめん斯く汝が汝の神エホバをすてたるさ我を畏るゝことの汝の衷にあらざるさ
は惡く且つ苦きことなるを汝見てしるべしさ主なる萬軍のエホバいひ給ふ二十汝昔より汝の軛破をり汝
の繩を截ちていひけるは我つかふごさなせじさ即ち汝すべての高山のうへさ諸の青木の下に娼女のごさ
く身をかゞめたり二一われ汝を植て佳き葡萄の樹の種さなせしにいかなれば汝われに向ひて
異なる葡萄の樹の惡き枝にかはりしや二二たさひ鹼そを用ひて汝自ら濯ぎまたおほくの灰汁を加ふそも汝の惡ばわが前に汚れなりさ主エホバいひ給ふ二三汝いかで我は汚れずバアルに從はざりしさいふことを得んや汝谷
の中のおこなひを觀よ汝のなせしことを知れ汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよへり二四汝は
曠野になれたる野の牝驢馬なり其欲のために風にあへぐその欲のうごくさきは誰かこれをとゞめえん凡てこ
れを尋る者は自ら勞するにおよばずその月の中にこれを獲ん二五汝足をつゝしみて渴かぬやうにせよしかるに汝いふ是は徒然なり然りわれ異なる國の者を愛してこれに從
にし喉をつゝしみて渴かぬやうにせよしかるに汝いふ是は徒然なり然りわれ異なる國の者を愛してこれに從
ふなりさ二六盜人の執へられて恥辱をうくるがごさくイスラエルの家恥辱をうく彼等その王その牧伯そ
の祭司その預言者みな然り二七彼等木にむかひて汝は我父なりさいひまた石にむかひて汝は我を生たりさい
ふ彼等は背を我にむけて其面をわれに向けずされど彼等災にあふさきは起てわれらを救ひ給へさいふ二八
汝がおのれの爲に造りし神はいづこにあるやもし汝が災にあふさきかれら汝を救ふを得ば起べきなりそは
ユダよ汝の神は汝の邑の數に同じければなり二九汝等なんぞ我さあらそふやなんぢらは皆我に背けりさエホ
バいひ給ふ三十我がなんぢらの衆子を打しは益なかりき彼等は懲治をうけず汝等の劍は猛き獅子のごさく汝
等の預言者を滅せり三一なんぢらこの世の人よエホバの言をきけ我はイスラエルのために曠野さなりしや暗
き地さなりしや何故にわが民はわれら徘徊りて復汝に來らじさいふや三二それ處女はその飾物を忘れん
や新婦はその帶をわすれんや然ど我民の我を忘れ日は數へがたし三三汝愛を得んさて如何に汝の途を
美くするぞよされればなんぢの行はあしき事を爲すに慣たり三四また汝の裾に辜なき貧者の生命の血あり
われ盜人の穿たる所にて之を見ず三五されど汝いふわれは辜なし故にそ

の怒はかならず我に臨まじとみよ汝われ罪を犯さぶりしといふにより我汝とわらそふべし三六 なんぢ何故にその途を易んとて迅くはしるや 汝アッスリヤにも亦恥辱をうけしごとくエジプトにも恥辱をうけん三七 汝兩手を頭に置てかしこよりも出去らんそはエホバ 汝のたのむところの者を棄れば 汝彼等によりて望を遂ること無るべければなり

第三章 一世にいへるあり人もしその妻をいださんに去りゆきてほかの人の妻とならば其夫ふたゝび彼に歸るべけんやさすれば其地はおほいに汚れざらんや 汝はおほくの者と姦淫を行へりされど汝われに皈れよとエホバいひ給ふ二 汝目をあげてもろ〳〵の童山をみよ姦淫をなせしにより我かれを出して離縁状をあたへたれどもその悖れる姉妹なるユダは懼れずして往て姦淫を行ふ我これを見るに三 また其姦淫の噪をもてこの地を汚し且つ石と木とに姦淫を行へり 十 此 諸の事あるも仍其悖れる姉妹なるユダは眞心をもて我にかへらず僞はれるのみとエホバいひたまふ十一 エホバまた我にいひたまひけるは背けるイスラエルは悖れるユダよりも自己を義とす 十二 汝ゆきて北にむかひ此言を宣ていふべしエホバいひたまふ背けるイスラエルよ歸れわれ怒の面を汝らにむけじわれは給恤ある者なり怒を限なく含みをるごとあらじとエホバいひたまふ十三 汝たゞ汝の罪を認はせそは汝の神エホバにそむき經めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき汝等わが聲をきかざればなりとエホバいひ給ふ 十四 エホバいひたまふ背ける衆子よ我に歸れそはわれ汝等を娶ればなりわれ邑より一人支派より二人を取りて汝等をシオンにつれゆかん十五 われ我心に合ふ牧者を汝等にあたへん彼等は知識と明哲をもて汝等を養ふべし 十六 エホバいひたまふ汝等地に增して多くならんときは人々復エホバの契約の櫃さいはすことを想いでず之を憶えずこれを尋ねずこれを作らざるべし 十七 その時エルサレムはエホバの座位と稱へられ萬國の民ここに集りエホバの名によりてエルサレムに集りまた重て其惡き心の剛愎なるにしたがひて行まざるべし 十八 その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいでて我なんぢらの先祖たちに與へて嗣しめし地に偕にきたるべし 十九 我いへり嗚呼われいかにしてなんぢを諸子の中に置き萬國の中にて最も美き産業なるこの美地を汝にあたへんと我またいへり汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと 二十 然にイスラエルの家よ妻の誓に違てその夫を棄るがごとく汝等われに違てそのごとくせり 二一 聲山のうへに聞ゆ是はイスラエルの民の悲み祈るなり盖彼等まがれる途にあゆみ其神エホバを忘ればなり 二二 背ける諸子よ我に歸れわれ汝の退逆をいやさん視よ我儕なんぢに到る汝はわれらの神エホバなればなり 二三 信に諸の岡さおほくの山に救を望はいたづらなり誠にイスラエルの救はわれらの神エホバにあり 二四 羞恥はわれらの勞めしものすべてわれらの先祖の産業すなはち其多の羊とその牛およびその子その女を呑尽せり 二五 われらは羞恥に臥しわれらは恥辱に被ほるべしそは我儕とわれらの神エホバに犯し我儕とわれらの列祖は我らの幼時より今日にいたるまで即をわれらの神エホバの聲に遵はざればなり

第四章 一 エホバいひたまふイスラエルよ汝もし歸らば我に歸れ汝もし憎むべき者を我前より除かば流蕩はせじ 二 かつ汝は眞實と正直と公義とをもてエホバは活くごとく誓はんさらば萬國の民は彼によりて福祉をうけ彼によりて誇るべし 三 エホバユダとエルサレムの人々にかくいひたまふ汝等の新田を耕せ荊棘の中に種くなかれ 四 ユダの人々とエルサレムに住める者よ汝等みづから割禮をおこなひてエホバに屬きおのれの心の前の皮を去れ然らざれば汝等の悪行のためわが怒火の如くに發して燃んこれを滅すものなかるべし 五 汝等ユダ

に告げエルサレムに示していへ笳を國の中に吹けときまた大聲に呼はりていへ汝等あつまれ我儕堅き邑にゆくべしとシオンに指示す合圖の旗をたてよ逃よ留る勿れそは我北より災とおほいなる敗壞をきたらすればなり七獅子は其森よりいで上り國々を滅すものは進みきたり汝の諸邑は滅されて住む者なきに至らんハこの故に汝等麻の衣を身にまとひて悲み哭けそはエホバの烈き怒いまだ我儕を離れざればなり九エホバいひたまひけるはその日王と牧伯等はその心をうしなひ祭司は驚き預言者は異むべし十我いひけるは嗚呼主エホバよ汝はまことに此民とエルサレムを大いにあざむきたまふずなはち汝はなんぢら安かるべしと云給ひしに劍命にまでおよべり十一その時この民とエルサレムにいふものあらん熱き風曠野の童山よりわが民の女にふきくたるとき此は簸るためにあらず潔むる爲にもあらざるなり十二これよりも猶はげしき風われより來らん今我かれらに罰を示さん十三みよ彼は雲のごとく上りきたらん其車は颶風のごとくにしてその馬は鷲よりも疾し嗚呼われらは禍なるかな我儕滅さるべしエルサレムよ汝の心の惡をあらひ潔めよ然ばすくはれん汝の惡き念いつまで汝のうちにあるや十五ダンより告ぐる聲ありエフライムの山より災を知するなり十六なんぢら國々の民に告げまたエルサレムに知らせよ攻めかこむ者遠き國より來りユダの諸邑にむかひて其聲を揚ぐと十七彼らは田圃をまもる者のごとくにこれを圍むこは我に從はざりしに由るとエホバいひ給ふ十八汝の途と汝の行これを汝に招けりこれは汝の惡なり誠に苦くして汝の心におよぶ〇十九嗚呼わが腸よ腸よ我腸よ痛苦心の底におよびわが心胸さごろくわれ默しがたし我靈魂よ汝笳の聲と平の関をきくなり二十敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒されわが幕屋は頃刻にやぶられ我幕は忽ち破られたり二一我が旌をみ笳の聲をきくは何時までぞや二二それ我民は愚にして我を識らず拙き子等にして曉ることなし彼らは惡を行ふに智けれども善を行ふを知らず二三われ地を見るに形なくして空くあり天を仰ぐに其處に光なし二四我山を見るに皆震へまた諸の丘も動けり二五我みるに人あることなし天空の鳥も皆飛されり二六我みるに肥美なる地は沙漠となり且その諸の邑はエホバの前にその烈き怒の前に毀たれたり二七そはエホバかくいひたまへりすべて此地は荒地さならんされど我ことごくは之を滅さじ二八故に地は皆哀しみ上なる天は暗くならん我すでに之をいひ且これを定めて悔いずまた之をなす事を止ざればなり二九邑の人みな騎兵と射者の咄喊のために逃て叢林にいり又岩の上に升れり邑はみな棄られて其處に住む人なし三十滅されたる者よ汝何をなさんとするや緋合汝くれなぬの衣をき金の飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大くするとも汝が身を粧ふはいたづらなり汝の戀人らは汝を棄へしまた汝のいのちを索るなり三一われ子をうむ婦のごとき聲首子をうむ者の苦むがごとき聲を聞くは是シオンの婦の喘なりかれ自ら歎き手をのべていふ嗚呼われは靈魂殺す者のために疲れはてぬ

第五章

一汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察りその街を尋よ汝等もし一人の公義を行ひ眞理を求る者に逢はぶわれ之（エルサレム）を赦すべし二彼らエホバは活くといふとも實は僞りて誓ふなり三エホバよ汝の目は誠實を顧みるにあらずや汝彼らを撻ごもかれら痛苦をおぼえず彼等を滅せごもかれら懲治をうけず其面を磐よりも硬くして歸ることを拒めり四故に我いひけるは此輩は惟いやしき愚なる者なればエホバの途とその神の斷を知ざるなり五われ貴人にゆきて之に語らんかれらはエホバの途とその神の斷を知ざるなり然に彼らも皆軛を折り縛を斷り六故に林よりいづる獅子は彼らを殺しアラバの狼はかれらを滅し豹はその邑をねらふ此處よりいづる者は皆裂るべしそは其罪おほくその背違はなはだしければなり七我なに赦にかなんぢ汝をゆるすべきや汝の諸子われを棄て神にあらざる神を指して誓ふ我すでに彼らを養ふに皆姦淫しかれら娼妓の家に群集る八彼らは肥たる牡馬のごさくに行めぐりおの〳〵鄰の妻を嘶ふ九エホバいひたまへり我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくの如き民に仇を復さざらんや十汝等その石垣にのぼりて滅せされど悉くはこれを滅す勿れその枝を截除けエホバのものに有さればなり十一イスラエルの家とユダの家は大に我に悖なりとエホバいひたまふ十二彼等はエホバを認すしていふエホバはある者にあらず災われらに來らし我儕劍と飢饉をも見ざるべし十三預言者は風となり言はかれらの衷にあらず斯彼

14 ちになるべしと 十四 故に萬軍の神エホバかくいひたまふ汝等この言を語により視よわれ汝の口にある我言
15 を火となし此民を薪となさんその火彼らを焚盡すべし 十五 エホバいひ給ふイスラエルの家よみよ我遠き國人
16 をなんぢらに來らしめん其國は強くまた古き國なり汝等その言をまらず其語ることをも曉らざるなり 十六 そ
17 の箙は啓きたる墓のごとし彼らはみな勇士なり 十七 彼らは汝の植れたる物と汝の糧食を食ひ汝の子女
18 を食ひ汝の羊と牛を食ひ汝の葡萄の樹と無花果の樹を食ひまた劍をもて汝の頼むところの堅き邑を滅さん
19 されど其時われらこれ〳〵のことは汝をして滅さしことエホバいひたまふ〇 十九 汝等何ゆゑにわれらの神エホバ此
20 等の諸のことを我儕になしたまふやといはゞ汝かれらに答ふべし汝ら我をすてなんぢらの地に於て異なる神
21 に奉へしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかふべしと 二十 汝これをヤコブの家にのべまた
22 これをユダに示していへ 二一 愚にして了知なく目あれども見えず耳あれども聞えざる民よこれをきけ 二二 エ
23 ホバいひたまふ汝等われを畏れざるか我前に戰慄かざるか我は沙を置て海の界となしこれを永遠の限界さ
24 なし踰ることをえざらしむ其浪さかまきいたるも勝ことあたはず澎湃もこれを踰ることあたはざるなり 二三 然
25 るにこの民は背き且悖れる心あり既に背きて去れり 二四 彼らはまた我儕に雨をあたへて秋の雨と春の雨を時
26 にふたがひて下し我儕のために收穫の時節を定めたまへる我神エホバを畏るべしと其心にいはざるなり〇
27 二五 汝等の愆はこれらの事を退け汝等の罪は嘉物を汝らに來らしめざりき 二六 我民のうちに惡者あり網
28 を張る者のごとくに身をかがめてうかゞひ罟を置て人をさらふ 二七 檻籠に鳥の盈るがごとく不義の財彼ら
29 の家に充つこの故に彼らは大なる者となり富る者となる 二八 彼らは肥て光澤あり其惡き行は甚し彼らは
30 訟をたゞさず孤の訟を糺さずして利達をえ亦貧者の訟を鞫かず 二九 エホバいひ給ふわれかゝるのことを
31 ことを罰せざらんや我心は是のごとき民に仇を復さざらんや〇 三十 この地に驚くべき事と憎むべき
32 ことを行はるゝ 三一 預言者は僞りて預言をなし祭司は彼らの手によりて治め我民は斯る事を愛すされど汝等その
33 終に何をなさんとするや

第六章

1 ベニヤミンの子等よエルサレムの中より逃れテコアに鹽をふきべテハケレムに合圖の火をあげまし
2 そは北より災と大なる敗壞のぞめばなり 二 われ美き窈窕なるシオンの女を滅さん 三 牧者は其群を率て
3 此處にきたりその周圍に天幕をはらん群はおの〳〵その處にて草を食はん 四 汝ら戰端を開きて之を攻べし起
4 よわれら日午にのぼらん嗚呼惜かな日はや昃き夕日の影長くなれり 五 起よわれら夜の間にのぼりてその諸
5 の殿舍を毀たん六 萬軍のエホバかくいひたまへり汝ら樹をきりエルサレムに向ひて壘を築けこれは罰すべき
6 邑なりその中には唯暴逆のみなり 七 源の水をいだすがごとく彼その惡を流すその中に暴逆と虐殺きこ
7 ゆ我前に憂と傷たえず 八 エルサレムよ汝訓戒をうけよ然らざれば我心汝をはなれ汝を荒蕪となし住む
8 人なき地となさん〇九 萬軍のエホバかくいひたまふ彼らは葡萄の遺餘を摘ごとくイスラエルの遺れる
9 者を摘ごとらん汝葡萄を摘取者のごとく匿手を筐に入るべし 十 我たれに語り誰を警めてきかしめんや視
10 よその耳は割禮をうけざるによりて聽えず彼らはエホバの言を嘲けりこれを悦ばず 十一 エホバの怒わが身に
11 充つわれ忍ふに倦むこれを衢街にある童子と集れる年少者とに泄すべし夫も婦も老たる者も年邁し者も執
12 へらるゝにいたらん 十二 その家と田地と妻はともに他人にわたらん其はわれ手を舒てこの地に住る者を擊ば
13 なりとエホバいひたまふ 十三 夫彼らは少さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり又預言者なり祭司
14 もまた皆詭詐をなす者なればなり 十四 かれら漫く我民の女の傷を醫し平康からざる時に平康平康
15 といへり 十五 彼らは憎むべき事を爲て恥辱をうくれども毫も恥ずまた愧を知らずこの故に彼らは倒仆るゝ
16 者と偕にたふれん我來るとき彼らを蹴かんとエホバいひたまふ〇 十六 エホバかくいひたまふ汝ら途に立て見古
17 き徑に就て何か善道なるを尋ねて其途に行めさらば汝らの靈魂安を得ん然ど彼らこたへて我儕はそれに行
18 まじといふ 十七 我また汝らの上に守望者をたて笛の聲をきけといへり然ど彼等こたへて我等は聞じといふ
19 故に萬國の民よきけ會衆よかれらの遇ところを知れ 十九 地よきけわれ災をこの民にくだすこは彼
20 らの思の結ぶ果なりかれら我言をまもらずまた我律法をきかずして之を棄るによる 二十 シバより我許に乳香きたり遠

二二 き國より菖蒲きたるは何のためぞやわれは汝らの燔祭をよろこばず汝らの犧牲を甘しとせず 二三 故にエホバ
二三 かくいひたまふみよ我この民の前に躓き 隣人とその友偕に滅ぶべし 二四 エ
二三 ホバかくいひたまふみよ民北の國よりきたる 大なる民地の極より起る 二三 彼らは弓と槍をさる殘忍にして
二四 憫なしその聲は海の如く鳴ろシオンの女よわれらは馬に乗り軍人のごとく身をよろひて汝を攻めん 二四
二五 我儕その風聲をきくたれば我儕の手弱り子をうむ婦のごとき苦痛と劬勞われらに迫る 二五 なんぢら田地に出
二六 る勿れまた路に行むなかれ敵の劍と畏怖四方にあればなり 二六 我民の女よ麻衣を身にまとひ灰のうちに
二七 まろび獨子を喪ひしごとくに哀みていたく哭けそは毀滅者突然に我らに來るべければなり〇 二七 われ汝を
二八 民のうちに立て金を驗ろ者のごとくなし又城のごとくなすこれに汝をしてその途を知しめまた試みさせん
二九 めなり 二八 彼らは皆いたく悖れる者なり歩行て人を謗る者なり彼らは銅のごとく鐵のごとし 皆邪な
三〇 る者なり 二九 嘯は火に焚け鉛はつき 鎔匠はいたづらに鎔す惡者いまだ除かれざればなり 三〇 エホバ彼ら

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言云ふ 二 汝エホバの室の門にたち其處にてこの言を宣て言へエ
二 ホバを拜まんとてこの門にいりしユダのすべての人よエホバの言をきけ 三 萬軍のエホバイスラエルの神かく
三 いひたまふ汝らの途と汝らの行を改めよさらばわれ汝等をこの地に住しめん 四 汝らはエホバの殿なり
四 エホバの殿なりエホバの殿なりと云ふ僞の言をたのむ勿れ 五 汝らもし全くその途と行を改め人と人との
五 間を正く鞫き六 異邦人と孤兒と寡婦を虐げず無辜者の血をこの處に流さず他の神に從ひて害をされざ
六 ずまた我なんぢらを我 汝等の先祖にあたへしこの地に永遠より永遠にいたるまで住しむべし〇 七 みよ汝ら
七 は益なき僞の言を頼む 八 汝等は盜み殺し姦淫し妄りて誓ひバアルに香を焚き汝らがしらざる他の神にしたが
八 ふなれど 九 我名をもて稱へらるるこの室にきたりて我前にたち我らはこれらの憎むべきことを行ふさも歟
九 はろ〳〵なりさいふは何にぞや 十 わが名をもて稱へらるるこの室は汝らの目には盜賊の巢と見ゆるや我もこれ

十 汝等わが初めシロに於て我名を置し處にゆき我がイスラエルの民の惡のために其處になせしところのことをみよ 十一 エホバいひたまふ今 汝ら此等のすべての事をなす又われ汝らに語
十一 り頻にかたりたれども聽ず汝らを呼びたれども答へざりき 十四 この故に我シロになせしごとく我名をもて稱
十二 へらるるこの室になさんすなはち汝等が賴むところ我なんぢらと汝らの先祖にあたへしこの地處になすべし 十五
十三 またわれ汝等のすべての兄弟すなはちエフライムのすべての裔を棄しごとく我前より汝らをも棄つべし 十六
十四 故に汝この民のために祈る勿れ彼らの爲に歎くなかれ求むるなかれ又我にさりなしをなす勿 われ汝に
十五 きかじ〇 十七 汝かれらがユダの邑とエルサレムの街になすところを見ざるか 十八 諸子は薪を拾め父は火を燃
十六 き婦は麵を搏れパンをつくりて之を天后にそなふ又かれら他の神の前に酒をそゝぎて我を怒らす 十九 エホバ
十七 いひたまふ彼ら我を怒らするか是れおのが面を辱むるにあらずや 二十 是故に主エホバかくいひたまふ視よ
十八 わが震怒とわが憤怒はこの處と人と獸と野の樹および地の果にそゝがん且燃て滅ざるべし〇 二一 萬軍のエ
十九 ホバイスラエルの神かくいひたまふ汝らの犧牲に燔祭の物をあはせて肉をくらへ 二二 そはわれ汝等の先祖を
二十 エジプトより導きいだせし日に燔祭と犧牲とに就てかたりしことなく又命ぜしことなし 二三 惟われこの事を
二一 彼等に命じ汝ら我聲を聽ばわれ汝らの神となり汝ら我民とならん且我 汝らに命ぜしすべての道を行みて福
二二 祉をうべしといへり 二四 されど彼らはきかず其耳を傾けずおのれの惡き心の謀と剛愎なるさにしたが
二三 ひて行みまた後を我にむけて其面を向けざりき 二五 汝らの先祖がエジプトの地をいでし日より今日にいたる
二四 までわれ我僕なる預言者を汝らにつかはし日々晨より之をつかはせり 二六 されど彼らは我にきかず耳を傾
二五 けずして其項を強くしその列祖よりも愈りて惡をなすなり 二七 汝 彼らに此等のすべてのことばを語るとき
二六 も汝にきかずかれらを呼ぶとも汝にこたへざるべし 二八 汝かく彼らに語れこれは其神エホバの聲を聽ずその
二七 訓を受ざる民なり眞實はうせてその口に絶たり〇 二九 （シオンの女よ）汝の髮を剃りてこれを棄て山のう
二八 へに哀哭の聲をあげよエホバその怒るところの世の人をすてゝこれを離れたまへばなり 三〇 エホバいひたま

ふユダの民は我前に惡を行へり即ちその憎むべき者を我名をもて稱へらるゝ室に置てこれを汚せり三一又ベ
ンヒンノムの谷に於てトペテの崇邱を築きてその子　女を火に焚んさせり我これを命ずまた斯るこ
とを思はざりし三二エホバいひたまふ然ば視よ此處をトペテまたはベンヒンノムの谷と稱ふる日きたらん其は葬るべき地所なきまでにトペテに葬るべければなり三三この民の屍は天空の鳥と
地の獣の食物とならんにこれを逐ふものなかるべし三四その時われユダの邑とエルサレムの街に欣喜の聲
樂の聲新婿の聲新婦の聲なからしむべしこの地荒蕪れば

第八章

一エホバいひたまふその時人ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨と僞言者の骨とエルサレ
ムの民の骨をその墓よりほりいだし二彼等の愛し奉へ從ひ求め且祭れるところの日と月と天の衆群の前にこ
れを曝すべし其骨はあつむる者なく葬る者なくして地の面にあらん三この惡き民の中に殘るのこ
れる餘遺の者すべてわが逐やりしところに餘れる者皆生るよりも死ぬるを願んと萬軍のエホバ云たまふ
〇四汝また彼らにエホバかくいふと語るべし人もし仆れば起きかへるにあらずやもし離るれば歸り來るに
あらずや五何故にエルサレムにをる此民は恒にわれを離れて歸へらざるや彼らは詐僞をかたく執て歸ろこと
を否めり六われ耳を側てゝ聽に彼らは善とをいはず一人もその惡を悔いてわがなせし事は何ぞやといふ者な
し彼らは皆戰場に馳入る馬のごとくにその途に歸へるなり七天空の鸛はその定期を知り斑鳩と燕と雁はそ
のきたる時を守るされど我民はエホバの法律をしらざるなり八汝いかで我ら智慧ありわれらにはエホバの律
法ありさいふことをえんや視よまことに書記の僞の筆之を僞てゝ執へらる視よ彼等エホバの言を棄たり彼ら何の智慧あらんや九故にわれその妻を他人にあたへ其田圃を
他人に嗣しめん彼らは小さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者また預言者より祭司にいたるまで皆詭
詐をなす者なればなり十一彼ら我民の女の傷を淺く醫し平康からざる時に平康平康といへり十二彼ら憎むべ
き事をなして恥辱らる然れど毫も恥ずまた恥を知らずこの故に彼らは仆るゝ者と偕に仆れんわが彼らを罰

するとき彼ら躓くべしとエホバいひたまふ十三エホバいひたまふ我彼らをことごとく滅さん葡萄の樹に
葡萄なく無花果の樹に無花果なしその葉も槁れたり故にわれ彼らにあたへし者ら彼らを踰越ん十四我ら何ぞ此にさ
ごまるやあつまれよ我ら堅き城邑にゆきて其處に滅んわが儕エホバに罪を犯せしによりて我らの神エホバ我ら
を滅し毒なる水を飲せたまへばなり十五われら平康を望めども善こと來らず愈めらるゝ時を望むにかへつて
恐懼きたる十六その馬の嘶はダンよりきこえこの地みなその強き馬の聲によりて震ふ彼らきたりて此地と
その上にある者および邑とその中に住る者を食ふ十七視よわれ呪詛のきざる蛇蝮を汝らのうちに遣さん
是汝らを噛べしとエホバいひたまふ〇十八嗚呼われ憂ふいかにしてか慰藉をえんや我衷の心惱む十九みよ
遠き國より我民の女の聲ありていふエホバはシオンに在さゞるか其王はその中に在さるかと（エホバいひた
まふ）彼らは何故にその偶像と異邦の虛き物をもて我を怒らせしやと二十收穫の時は過ぎ夏もはや畢りぬ
されど我らはいまだ救はれず二一我民の女の傷により我も傷み且悲しむ恐懼我に迫れり二二ギレアデに
乳香あるにあらずや彼處に醫者あるにあらずやいにしへ我民の女はいやされざるや
一あゝ我わが首を水となし我目を淚の泉となすことをえんものを我民の女の殺されたる者の爲に
晝夜哭かん二嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものなどかあらん我民を離れてさりゆかん彼らはみな姦淫するも
の悖れる者の族なればなり三彼らは弓を援くがごとく其舌をもて僞をいだす彼らは此地において眞實の
ために強からず惡より惡にすゝみまた我を知ざるなりこエホバいひたまふ四汝らおの〳〵其隣に心せよ何
の兄弟をも信ずる勿れ兄弟はみな欺きをなし隣はみな讒りまはればなり五彼らはおの〳〵其隣を欺
きつゝ眞實をいはず其舌に誕をかたることを教へ惡をなすために勞る六汝の住居は詭譎の中にあり彼らは詭譎
のために我を識ことをいなめりこエホバいひたまふ七故に萬軍のエホバかくいひたまへり視よ我かれらを鎔
し試むべしわれ我民の女の事を如何になすべきやハ彼らの舌は殺す矢のごとしかれら詐をいふまた其口
をもて隣におだやかにかたれども其心の中には害をはかるなりカエホバいひたまふ我これらの事のために

彼らを罰せざらんや　我心はかくのごとき民に仇を
めに憩むこれらは焚れて過る人なしまたこゝに牛羊
ルサレムを邱墟とし山犬の巣となさんまたユダ
の事を曉る人は誰ぞやエホバの口の言を受てこれを
る者なきにいたりしは何故ぞ　十三エホバいひたまふ是彼ら我その前に立しところの律法をすて我聲をきかず
之に從はざるによりてなり　十四彼らはその心の剛愎なるとその列祖たちがおのれに教へしバアルさに從へり
十五この故に萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれ彼等すなはち斯民に苦艾を食せ毒なる
水を飲せ　十六彼らもその先祖たちもしらざりし國人のうちに彼らを散しまた彼らを滅し尽すまで其後に劍
をつかはさん○十七萬軍のエホバかくいひたまふ汝らよく考へ哭婦をよびきたれ又人を遣して智き婦
をまねけよ　十八彼らは速にきたりて我儕のために哭哀しみ我儕の目に涙をこぼさせ我儕の目蓋より水を溢
れしめん　十九シオンより哀の聲きこゆ云く嗚呼われら滅され我ら痛く辱めらる我らは其地を去り彼らは
わが住家を毀ちたり二十婦たちよエホバの言をきけ汝らの耳に其口の言をいれよ汝らの女に哭ことを教へお
のく〳〵その隣に哀の歌を教ふべし　二一そは死のぼりてわれらの窓よりいり我らの殿舍に入り外にある諸子
を絶し街にある壯年を殺さんとすればなり　二二エホバかくいへりと汝云ふべし人の屍は糞土のごとく田
野に堕ちんまた収穫者のうしろに殘りて斂めずにある把のごとくならんさ○二三エホバかくいひたまふ智
慧ある者はその智慧に誇る勿れ力ある者は其力に誇る勿れ富者はその富に誇ることを勿れ　二四誇る者は
これをもて誇るべし即ち明哲して我を識る事さわがエホバにして地に仁惠さ公道さ公義さを行ふ者なるを知
る事是なり我これらを悦ぶなりさエホバいひたまふ　二五エホバいひたまひけるは視よわれすべて前の皮に割
禮をうけたる者すなはちエジプトさユダさエドムさアンモンの子孫さモアブさ野にをりてその鬢を剃る者ざ
を罰する日きたらんそはすべて異邦人は割禮をうけずまたイスラエルの家も心に割禮をうけざればなり

第十章　一イスラエルの家よエホバの汝らに語たまふ言をきけ　二エホバかくいひたまふ汝ら異邦人の途に
效ふ勿れ異邦人は天にあらはるゝ徴を懼るゝ勿れ三異邦人の風俗はむなしその
崇むる者は林より斫だる木にして木匠の手に斧をもて作りし者なり　四彼らは銀と金をもてこれを飾り釘と鎚
をもて之を堅めて搖動ざらしむ　五こは圓き柱のごとくにして言はずまた歩むこと能ざるによりて人にた
つさべらる是は災害をくだし亦は福祉をくだすの權なきによりて汝らこれを畏るゝ勿れ○六エホバよ汝に比
ふべき者なし汝は大なり汝の名はその權威のために大なり　七汝萬國の王たる者よ誰か汝を畏れざるべき
や汝を畏るゝは當然なりそは萬國のすべての博士たちのうちにもその諸國のうちにも汝に比ふべき者なけれ
ばなり　八彼らはみな獣のごとくまた痴愚なり虚き者の教は惟木のみ　九タルシ、より携へ來し銀箔ウパズよ
り携へ來し金は鍛冶さ鑄匠の作りし物なり青さ紫をその衣となす是はすべて巧なる細工人の工作なり　十エ
ホバは眞の神なり彼は活る神なり永遠の王なり其怒によりて地は震ふ萬國はその憤怒にあたるこさ能は
ず　十一汝等かく彼らにいふべし天地を造らざりし諸神は地の上よりこの天の下より失さらんさ　十二エホバは
その能をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒べたまへり　十三かれ聲をいだせば天
に衆の水ありかれ雲を地の極よりいだし電さ雨をおこし風をその府庫よりいだす　十四すべての人は獣の
如くにして智なしすべての鑄匠はその作りし像のために辱をとる其鑄るところの像は偽物にしてその中
に靈魂なければなり　十五是らは虚き者にして迷妄の工作なりその罰せらるゝときに滅ぶべし　十六ヤコブの分
は是のごとくならず彼は萬物の造化主なりイスラエルはその産業の杖なりその名は萬軍のエホバさいふなり
○十七圍の中に坐する者よ汝の包を地より取りあげよ　十八エホバかくいひたまふみよ我この地にすめる者
を此度擲たん且かれらをせめなやましてゞ攜へられしむべし　十九われ毀傷をうく嗚呼われは禍なるかな我
傷は重し我いふこれまことにわが患難なりわれ之を忍べし　二十わが蓆屋はやぶれわが繩索は悉く斷れ我衆
子は我をすてゆきて居ずなりぬ蓆屋を張る者なくわが幃をかくる者なし　二一牧者は愚にしてエホバを求めず

故に利達すその群はみな散り　三三きけよ風聲あり北の國より大なる騒きたる是ユダの諸邑を荒して山犬の巢
二二 となさん○ 三三 エホバよわれ知る人の途は自己によらず且歩行む人は自らその歩履を定むること能はざるな
二四 り 二四 エホバよ我を懲したまへ但道にしたがひ怒らずして懲したまへおそらくは我無に歸せん 二五 汝を知
二五 ざる國人と汝の名を顧ざる族に　汝の怒を斟ざたまへ彼らはヤコブを噬ひ之をくらふて滅しその牧場を荒し
たればなり

第十一章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 二 汝らこの契約の言をきゝユダの人とエルサレムにすめ
三 ろ者に告よ 三 汝かれらに謂れイスラエルの神エホバかくいひたまふこの契約の言に遵はざる人は詛はる 四
四 この契約はわが汝らの先祖をエジプトの地鐵の爐の中より導き出せし日にかれらに命ぜしものなり即ち我い
五 ひけらくなんぢら我聲をきゝ我汝らに命ぜし諸の事に從ひて行はよ汝らは我民となり我は汝らの神となら
六 んと　われ汝らの先祖に乳と蜜の流るゝ地を與へんと誓ひしことを成就んと即ち今日のごとしその時我こたへ
七 てアメン エホバよいへりたまへりまたエホバ我にいひたまひけるは汝すべて此等の言をユダの諸邑とエルサレム
八 の衢にしめし汝ら此契約の言をきゝてこれを行へといふべしと　われ汝らの列祖をエジプトの地より導出
九 せし日より今日にいたるまで切に彼らを戒め頻に戒めて汝ら我聲に遵へといへり　然ど彼らは遵はずその
十 耳を傾けずおの〳〵其惡き心の剛愎なるにしたがひて歩めり故にわれ此契約の言を彼等にきたらす是はわ
十一 れこれを行へと命じしかどもかれらがおこなはざりし者なりき　また エホバ我にいひたまひけるはユダの
十二 人やとエルサレムに住る者の中に叛逆の事あり　彼らはわが言をきくことを好まざりしところのその先祖
十三 の罪にかへり亦他の神に從ひて之に奉へたり イスラエルの家とユダの家はわがその列祖たちと締たる契約を
十四 やぶれり　十三 この故にエホバかくいひたまふみよわれ災禍をかれらにくださん彼らこれを免かるゝことをえ
十五 ざるべし彼らわれをよぶとも我聽じ　十二 ユダの邑とエルサレムに住る者はゆきてその香を焚し神を顧んされど
十六 是等はその災禍の時に絕てかれらを救ふことさあらじ　十三 ユダよ汝の神の數は汝の邑の數のごとし且汝らエ
十七 ルサレムの衢の數にしたがひて恥べき者に壇をたてたり即ちバアルに香を焚んとて壇をたつ　十四 故に汝この
十八 民の爲に祈る勿れ又その爲に泣きあるひは求る勿れ彼らがその災禍のために我を呼ときわれ彼らに聽ざるべ
十九 し　十五 わが愛する者は我室にて何をなすや惡き謀をなすや願と聖き肉汝に災を脫れしむるやもし然
二十 らば汝よろこぶべし　十六 エホバ汝の名を嘉果ある美しき青橄欖の樹と稱たまひしがおほいなる喧噪の聲
二一 をもて之に火をかけ且その枝を折りたまふ　十七 汝を植しエホバ萬軍のエホバ汝の災をさだめたまへりこれイス
二二 ラエルの家とユダの家みづから害ふの惡をなしたるによるなり即ちバアルに香を焚きてわれを怒らせたり
二三 十八 エホバ我に知せたまひければ我これを知るその時なんぢ彼らの作爲を我に示めしたまへり　十九 我は牽れ
二四 て宰られにゆく羔のごとく彼らが我をそこなはんとて謀をなすを知ず彼らいふいざ我ら樹とその果とを
二五 共に滅さんかれを生る者の地より絕てその名を人に忘れしむべしと　二十 義き鞫をなし人の心腸を察り
二六 たまふ萬軍のエホバよ我わが訴を汝にのべたればわれをもてエホバアナトテの人々につきてかくいひたまふ彼
二七 もて預言する勿れ恐らくは汝我らの手に死んと　二二 故に萬軍のエホバかくいひたまふみよ我かれらを罰す
二八 べし壯丁は劍に死にその子女は飢饉にて死なん　二三 餘る者なかるべし我災をアナトテの人にきた
二九 らしめわが彼らを罰するの年をきたらしめん

第十二章

一 エホバよわが汝と爭ふ時に汝は義し惟わ
二 者のみな福なるは何故ぞや　二 汝かれらを植たり彼らは根づき成長て實を結べりその口は汝に近けどもそ
三 の心は汝に遠ざかる　三 エホバ汝われを知り我を見また わが心の汝にむかひて何なるかを試みたまふ羊
四 を宰りに牽いだすがごとく彼らを殺す日の爲にかれらをそなへたまへ　四 いつまでこの地は哭きすべ
ての畑の蔬菜は枯をるべけんやこの地に住る者の惡によりて畜獸と鳥は滅さる彼らいふ彼は我らの終をみざ
五 るべしと　五 汝もし歩行者とゝもに趨てつかれなばいかで騎馬者と競はんや汝平安なる地を恃まばいか

六 でヨルダンの傍の叢に居ることをえんや六汝の兄弟さなんぢの父の家も汝を欺きまた大聲をあげて汝
七 を追ふかれらを信じ汝に語ることもこれを信ずる勿れ〇七われ我家を離れわが産業をすて我靈魂の愛する
八 所の者をその敵の手にわたせり八わが産業は林の獅子のごとし我にむかひて其聲を揚ぐ故にわれ之を惡めり
九 我産業は我におけること班駁ある鳥のごとくならずや鳥之を圍むにあらずや野のすべての獸きたりあつ
十 まれ來てこれを食へ十衆の牧者わが葡萄園をほろぼしわが地を踐踏しわがうるはしき地を荒野となせり
十一 彼らこれを荒地となせりその荒地我にむかひて哭くなり一人もかへりみる者なければこの全地は荒たり
十二 毀滅者は野のすべての童山のうへに來れりエホバの劍地のこの極よりその極までを滅ぼすすべて血氣
十三 あるものは安をえず十三彼らは麥を播て荊棘をかる勞れども得るところなし汝らはその作物のために恥るに
十四 いたらん是エホバの烈き怒によりてなり〇十四わがイスラエルの民に鬪しむる產業をせむるところのすべ
ての我惡き隣にむかひてエホバかくいふみよわれ彼等をその地より拔出しまたユダの家を彼らの中より拔出
十五 すべし十五われ彼らを拔出せしのちまた彼らを憐みておのく〳〵其產業にまたその地に歸らしめ
十六 ん十六彼等もし我民の道をまなび我名をさして「エホバは活くと誓ふごと誓て我民を教へてバアルを指て誓はば
十七 ためし如くせば彼らはわが民の中に建らるべし十七されど彼らもし聽かざればわれかならずかゝる民を全く拔
出して滅すべしとエホバいひたまふ

第十三章

一 エホバかくいひたまへり汝ゆきて麻の帶をかひ汝の腰にむすべ水に入る勿れ二われすなはちエ
二 ホバの言に遵ひ帶をかひてわが腰にむすべり三エホバの言ふたゝび我にのぞみて云ふ四汝が買て腰にむす
三 べる帶を取り起てユフラテにゆき彼處にてこれを磐の穴にかくせと五こゝに於てわれエホバの命じたまひし
四 如く往てこれをユフラテの涯にかくせり六おほくの日を經しのちエホバ我にいひたまひけるは起てユフラテ
五 にゆきわが汝に命じて彼處にかくさしめし帶を取れと七われすなはちユフラテにゆき帶を我隱せしところよ
六 り掘取しにその帶は朽て用ふるにたへずゐまたエホバの言われにのぞみて云ふ九エホバかくいふ我かくの如
七 くユダの驕傲とエルサレムの大なる驕傲をやぶらん十この惡き民はわが言を聽ことをこばみ己の心の剛愎
八 なるにしたがひて行み且他の神に從ひてこれにつかへ之を拜す彼等は此帶の用ふるにたへざるが如くなるべ
九 し十一エホバいふ帶の人の腰に附がごとくわれイスラエルのすべての家とユダのすべての家を我に附しめ之
十 を我民となし名となし譽となし榮となさんとせり然るに彼等はきかざりき〇十二
十一 べしイスラエルの神エホバかくいふ酒壺には皆酒盈つと彼汝にこたへていはん我儕豈酒壺に酒の盈ること
十二 を知ざらんやと十三其時汝かれらにいふべしエホバかくいふみよわれ此地に住るすべての者とダビデの
十三 位に坐する王等と祭司と預言者およびエルサレムに住るすべての者に醉を盈せ十四彼らを此と彼と打あはせ
十四 て碎かん父と子をも然すべしわれ彼らを憫まず惜まずして滅さん十五汝らきけ耳を傾けよ驕る勿れエ
十五 ホバかたりたまふなり十六汝らの神エホバに其いまだ暗を起したまはざる先汝らの足のくらき山に躓かざ
十六 る先に榮光を畀すべし汝ら光明を望まんにエホバ之を死の陰に變へ之を昏黑となしたまふにいたらん十七汝
十七 ら若これを聽ずば我靈魂は汝らの驕傲を隱なるところに悲まん又エホバの群の掠められたるによりて我目い
たく泣て淚をながすべし〇十八なんぢ王と太后につげよ汝ら自ら謙りて坐せそは汝らの美き冕なん
十八 ぢらの首より落べければなり十九南の諸邑は閉てこれを啓く人なしユダは皆捉移され盡くさらへ移さる
十九 二十汝ら目を擧て北より來る者をみよ汝らが賜はりし群汝のうるはしき群はいづこにあるや二十かれ汝の
二十 親み馴たる者を汝の上にたてゝ首領となさんときは汝何のいふべきことあらんや汝の痛は子をうむ婦のご
二十一 さくならざらんや二一汝心のうちに何故にこの事我にきたるやといふか汝の罪の重によりて汝の裾は揭
二二 げられなんぢの踵はあらはさるゝなり二二エテオピア人その膚をかへうるか豹その斑駁をかへうるか若これ
二三 を爲しえば惡に慣たる汝らも善をなし得べし二四故にわれ彼らを散して野の風に吹散さるゝ皮莞のごとくせ
二四 ん二五エホバいひたまふこは汝の得べき分わが量て汝にあたふる產業なり其我をわすれて虛假を依賴ば
二五 なり二六故にわれ汝の前の裳を剝きて汝の羞恥をあらはさん二七われ汝の姦淫と汝の嘶と汝が岡のうへ

の野になせし汝の亂淫の罪と汝の憎むべき行をみたりエルサレムよ汝は禍なるかな汝の潔くせらるゝには尚いくばくの時を經べきや

二 第十四章 一乾旱の事につきてエレミヤにのぞみしエホバの言は左のごとし二ユダは悲むその門は傾むき地にたふれて哭くエルサレムの哭は上る三その侯伯等は僕をつかはして水を汲しむ彼ら井にいたれども水を見ず空き器をもちて歸り恥かつ憂へてその首をおほふ四地に雨ふらずして土燥裂たるにより農夫は恥て首をおほふ五また野にある麋は子をうみて之を棄つ草なければなり六野の驢馬は童山のうへにたちて山犬のごとくに喘ぎ草なきによりて目眩む〇七エホバよ我等の罪われらを訟へて証をなすとも願くは汝の名の爲に事をなし給へ我儕の違背はおほいなり我等汝に罪を犯したり八イスラエルの企望なる者その艱るときに救ひたまふ者よ汝いかなれば此地に於て他邦人のごとくし一夜寄宿の旅客のごとくしたまふや九汝いかなれば呆てたる人のごとくし救をなすこと能はざる勇士のごとくしたまふやエホバよ汝は我らの間にいます我儕は汝の名をもて稱へらるゝ者なり我らを棄たまふ勿れ〇十エホバこの民にかくいひたまへり彼らかく好んでさまよひ其足を禁めざればエホバ彼らを悦ばずいまその愆をおぼえ其罪を罰すべし十一エホバまた我にいひたまひけるは汝この民のために恩をいのる勿れ十二彼ら斷食するとも我その呼願をきかず燔祭と素祭を献るとも我これをうけず却てわれ劍と饑饉と疫病をもて彼らを滅すべし十三われいひけるは嗚呼主エホバよみよ預言者たちはこの民にむかひ汝ら劍を見ざるべし饑饉は汝らにきたらじわれ此處に鞏固なる平安を汝らにあたへんこれを給へり十四エホバ我にいひたまひけるは預言者等は我名をもて詭を預言せりわれ之を遣さず之に命ぜず又已の心の詐を汝らに預言せり十五この故にかの預言者等は劍と饑饉に滅さるべし十六また彼等の預言をうけし民は饑饉と劍によりてエルサレムの街に擲棄られんこれを葬る者なかるべし彼等とその妻およびその子その女みな然りそはわれ彼らの惡をその上にそゝぎ

十七 第十四章 汝この言を彼らに語るべしわが目は夜も晝もたえず涙を流さんそは我民の童女大なる滅と重き傷によりて亡されればなり十八われ出て畑にゆくに劍に死る者あり我邑にいるに饑饉に艱むものあり預言者も祭司もみなその地にさまよひて知ところなし〇十九汝はユダを悉くすてたまふや汝の心はシオンをきらふや汝いかなれば我儕を擊て愈しめざるか我ら平安を望めども善ことあらず又醫さるゝ時を望むに却て驚懼あり二十エホバよ我らはおのれの惡と先祖の愆を知るわれら汝に罪を犯したり二一汝の名のために我らを棄たまふ勿れ汝の榮の位を辱めたまふ勿れ汝のわれらに立し契約をおぼへて毀りたまふなかれ二二異邦の虚き物の中に雨を降せらるものあるや天みづから白雨をくだすをえんや我らの神エホバ汝これを爲したまふにあらずや我ら汝を望むそは汝すべて此等を悉く作りたまひたればなり

一 第十五章 一エホバ我にいひたまひけるはたとひモーセとサムエルわが前にたつとも我こゝろは斯民を顧ざるべしかれらを我前より逐ひいでさらしめよ二彼らもし汝にわれら何處にいでさらんやといはゞ汝彼らにエホバかくいへり死に定められたる者は死にいたり劍に定められたる者は劍にいたり饑饉に定められたる者は饑饉にいたり擄に定められたる者は擄にいたるべしと三エホバいひたまひけるはわれ四の物をもて彼らを罰せんすなはち劍をもて戮し犬をもて噬せ天空の鳥および地の獸をもて食ひ滅さしめん四またユダの王ヒゼキヤの子マナセがエルサレムになせし事によりわれ彼らをして地のすべての國に艱難をうけしめん〇五エルサレムよ誰かなんぢを憐まんたれか汝のために歎かん誰かすこしく轉ぢて汝の安否を問はんや六エホバいひたまふ汝われをすてたり汝退けり故にわれ手を汝のうへに伸て汝を滅さんわれ憫に倦りセわれ風をもて我民をこの地の門に煽がんかれらは其途を離れざるによりて我その子を絕ち彼らを滅すべし八彼らの寡婦はわが前に海濱の沙よりも多し壯者の母さをせめ驚駭と恐懼を突然にかれの上におこさん九七人の子をうみし婦は衰へて氣たえ尚晝なるにその日は早く沒る彼は辱められて面をあからめん其餘れる者はわれ之をその敵の劍に付さんとエホバいひたまふ〇十嗚呼われは禍

十一 なるかな我母よ汝なに故に我を生しや全國の人我と爭ひ我を攻むわれ人に貸さず人また我に貸さず皆我を詛
ふなり 十一 エホバいひたまひけるは我寛に汝に益をえせしめんために汝を惱す我まことに敵をしてその
十二 艱のときと災の時に汝に求むることをなさしめん 十二 鐵いかで北の鐵と銅を碎かんや 十三 われ汝の
十三 資産と汝の資財を携掠物とならしめ假をうることなからしめん是汝のすべての罪によるなりすべて汝の
十四 境のうちにかくなさん 十四 われ汝の敵をして汝を汝の識ざる地にさらへ移さしめん夫我怒により火燃
十五 えなんちを焚んとするなり 十五 エホバよ汝これを知りたまへ我を憶え我をかへりみたまへ我を迫害るものに
十六 仇を復したまへ汝の容忍によりて我をさらへられしむる勿れわが汝の爲に辱
十七 れ汝の言を得て之を食へり汝の言はわが心の欣喜快樂なり萬軍の神エホバよわれは汝の名をもて稱へ
十八 らるゝなり 十七 われ嬉笑者の會に坐せずまた嬉ばずわれ汝の手によりて獨り坐す汝憤怒をもて我に充
十九 したまへり 十八 何故にわが痛は息ずわが傷は重くして愈ざるか汝はわれにおけること水をたもたずして人を
二十 欺く溪河のごとくなるや ⊙ 十九 是をもてエホバかくいひたまへり汝もし歸らば我また汝をかへらしめて我前
二十一 に立しめん汝もし賤をすてゝ貴をいださば我口のごとくならん彼らは汝に歸らんされど汝は彼らにかへ
二十二 る勿れ 二十 われ汝をこの民の前に堅き銅の牆となさんかれら汝を攻ることも汝にかたざるべしそはわれ汝と
二十三 偕にありて汝をたすけ汝を救へばなりとエホバいひたまへり 六 大なる者も小さき者もこの地に死べし彼らは
き者の手より放つべし

第十六章

一 エホバの言また我にのぞみていふ 二 汝この處にて妻を娶るなかれ 三 此處
に生るゝ子女とこの地に之を生む母と之を生む父とに就て 四 エホバかくいひたまふ 彼らは慘しき病に死
し哀まれず葬られずして糞土のごとくに田地の面にあらんまた劍と饑饉に滅されて其屍は天空の鳥と地
の獸の食物とならん 五 エホバかくいひたまへり喪ある家にいる勿れまた往て之を哀み嗟く勿れそはわれ我平
安と恩寵と矜恤をこの民より取ばなりとエホバいひたまへり 六 我汝を惡人の手より救ひ出し汝を怖るべ
七 葬られずまた彼らのために哀む者なく自ら傷くる者なく髮をそる者なかるべし 七 またその哀むときパンを
きて其死者のために之を慰むるものなく又父あるひは母のために慰藉の杯を彼らに飲しむる者なかる
八 べし 八 汝また筵宴の家にいりて偕に坐して食飲する勿れ 九 萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よ
九 汝の目の前汝の世にあるときにわれ欣喜の聲と歡樂の聲と新娶者の聲と新婦の聲とを此處に絶しめん 十
十 汝このすべての言を斯民に告るとき彼ら汝に問ふてエホバわれらを責てこの大なる災を示したまふは何故
ぞやまたわれらに何の惡事あるやわが神エホバに背きてわれらのなせし罪は何ぞやといはゞ 十一 汝かれら
十一 に答ふべしエホバいひたまふ是汝らの先祖われを棄てまた我をすてわが律法を守らざりしによる 十二 汝らは汝らの先祖よりも
十二 剛愎なるに汝たがひて我にきかず 十三 故にわれ汝らをこの地より逐ひて汝らと汝らの先祖の識ざる地にいた
十三 らしめん汝らかしこにて晝夜ほかの神に奉へん是わが汝らを憫まざるによるなりと 十四 エホバいひたまふ然
十四 ばみよ此後イスラエルの民をエジプトの地より導きいだせしエホバは活くといふ日きたらん 十五 イスラエ
十五 ルの民を北の地とそのすべて逐やられし地より導き出せしエホバは活くといふ日きたらん我かれらを我そ
十六 の先祖に與へしかれらの地に導きかへるべし ○ 十六 エホバいひたまふみよ我おほくの漁者をよび來りて
彼らを漁せまたその後おほくの獵者を呼來りて彼らを諸の山もろ〳〵の岡および岩の穴より獵いださし
十七 めん 十七 我目はかれらの諸の途を鑒る皆我にかくるゝところなし又その惡は我目に匿れざるなり 十八 われま
ず倍して其惡とその罪に報いんそは彼らその汚れたる者の屍をもて我地を汚しその惡むべきものをもて我
十九 産業に充せばなり ○ 十九 エホバ我の力我の城雖の時の避所よ萬國の民は地の極より汝にきたりわれらの
二十 先祖の嗣るところの者は惟謊と虛浮事と益なき物のみなりさいはん 二十 人豈神にあらざる者をおのれ
二一 の神となすべけんや 二一 故にみよわれ此度かれらに知らしめんむるところあらん即ち我手と我能をかれらに知
らしめん彼らは我名のエホバなるを知るべし

第十七章

一 ユダの罪は鐵の筆金剛石の尖をもて
ふでこんがうせきとがり
二 彼らはその子女をおもふが如くに青木の下と高岡のうへなるその祭壇とアシラをおもふ
三 われ野に在るわが山と汝の資産と汝のもろ〳〵の財産および汝の四方の境の内なる汝の罪を犯せる崇邑を擄掠物とならしめん
四 わが汝にあたへし產業より汝手をはなさん又われ汝をして汝の識ざる地に於て汝の敵につかへしめんそは汝ら我をいからせて限なく燃る火を發したればなり
五 エホバかくいひたまふおほよそ人を恃みて肉をその膂とし心にエホバを離る人は詛るべし
六 彼は荒野の灌木のごとくなりて福の來るを見ず乾たる處鹽地のごとき所に住ん
七 おほよそエホバを恃みエホバをその恃とする人は福なり
八 彼は水の旁に植たる樹のごとくにして溪流のほとりに根をはり熱の來るを見ず葉は青く亢旱の年にも憂へずして絕ず果を結ぶべし
九 心は萬物よりも僞る者にして甚だ惡し誰かこれを知るをえんや
十 われエホバは心腹を察り腎腸を試みおのれ〳〵に其途に順ひその行爲の果によりて報ゆべし
十一 鷓鴣のおのれの生ざる卵をいだくが如く不義をもて財を獲る者あり其人は命の半にてこれに離れその終に愚なる者とならん
十二 榮の位よ原始より高き者わが聖所たる者
十三 イスラエルの望なるエホバよすべて汝を離る〻者は辱められん我を棄る者は土に錄されん此はいける水の源なるエホバを離るればなり
十四 エホバよ我を醫たまへ然らばわれ愈んわれを救ひたまへさらば我救はれん汝はわが頌るものなり
十五 彼ら我にいふエホバの言は何にあるやいま之をのぞまよと
十六 われ牧者の職を退かずまた災の日を願はざりき汝これを知りたまふ我唇はよりいづる者は汝の面の前にあり
十七 我を懼れしむる者となりたまふ勿れ禍の時に汝はわが避塲なり
十八 我を攻る者を辱めたまへ我を辱しむるなかれ彼らを怖れしめよ我を怖れしめたまふなかれ禍の日を彼らに來らしめ滅亡を倍してこれを滅したまへ
十九 エホバ我にかくいひたまへり汝ゆきてユダの王等の出入する民の門およびエルサレムに住るすべての門に立て
二十 彼らにいへ此門より入るところのユダの王等とユダのすべての民とエルサレムに住るすべての者よ汝らエホバの言をきけ
二一 エホバかくいひたまふ汝ら自ら愼め安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいる勿れ
二二 また安息日に汝らの家より荷を出す勿れ諸の工作をなす勿れ我汝らの先祖に命ぜしごとく安息日を聖くせよ
二三 されど彼らは遵ばず耳を傾けずまたその項を強くして聽ず訓をうけざるなり
二四 エホバいひたまふ汝らもし謹愼て我にきく〻安息日に荷をたづさへてこの邑の門にいらず安息日を聖くなして諸の工作をなさずば
二五 ダビデの位に坐する王等牧伯たちユダの民エルサレムに住る者車と馬に乘てこの邑の門よりいることをえんまた此邑には限なく人すまはん
二六 また人々ユダの邑とエルサレムの四周およびベニヤミンの地と平地と山と南の方よりきたり燔祭、犧牲、素祭、薰香、謝祭、を擕へてエホバの室にいらん
二七 されど汝らもし我に聽ずして安息日を聖くせず安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいらばわれ火をその門の內に燃してエルサレムの殿舍を燬んその火は滅ざるべし

第十八章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ
二 汝起て陶人の屋にくだれ我かしこに於てわが言を汝に聞しめんと
三 われすなはち陶人の屋にくだりて視るに轆轤をもて物をつくりをりしが
四 その泥をもて造れるところの器陶人の手のうちに傷れたれば彼その心のまゝに之をもて別の器をつくれり
五 時にエホバの言我にのぞみていふ
六 エホバいふイスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすことをえざるかイスラエルの家よ陶人の手に泥のあるごとく汝ら我手にあり
七 われ忽に民あるひは國を拔べし敗るべし滅すべしといふことあらんに
八 もし我いひしところの惡を離れなばわれ之に災を降さんとおもひしことを悔ん
九 我また忽に民あるひは國を立べし植べしといふことあらんに
十 もし其國わが目に惡く見ゆるところの事を行ひわが聲に遵はずば我これに福祉を錫へんとおもひしことを悔ん
十一 汝いまユダの人々とエルサレムに住る者にいへエホバかくいへり視よわれ汝らに災をくださんと思ひめぐらし汝らをはかる計策を設く故に汝らおの〳〵其惡き途を離れその途と行ひをあらためよと
十二 されど彼らいふ是は徒然なりわれらは自己の圖維ところにしたがひ各自その惡き心の剛愎なるを行はんと
十三 この故にエホバかくいひたまふ汝ら

十四 ふ汝ら異國のうちに問へ斯の如きことを聞し者ありやイ
十五 スラエルの處女はいと驚くべきことをなせり十四レ
バノンの雪豈野の磐を離れんや遠方より流れくろ冷なる水豈涸かんや十五然るに我民は我をわすれて
十六 虚き物に香を焚り是等の物彼らをその途すなはち古き途に躓かせまた徑すなはち備なき道に行しめ十六その
十七 地を荒して恒に人の笑ごとならしめん凡て其處を過る者は驚てその首を搖らん十七われ東風のごとくに彼
十八 らをその敵の前に散さん其滅亡の日にはわれ背を彼らに向て面をむけじ〇十八
設けてエレミヤをはからんそれ祭司には律法あり智慧ある者には謀畧あり預言者には言ありて失ざるべし
十九 去來われら舌をもて彼を擊ちその諸の言を聽ことをせざらんと十九エホバよ我にきゝたまへ又我と爭ふ者
二十 の聲をきゝたまへ二十惡をもて善に報ゆべきものならんや彼らはわが生命をとらん爲に坑を掘れりわが汝の
二一 前に立て彼らを善く言ひ汝の憤怒を止めんことせしを憶えたまへ二一されば子らを餓て刃にわたしたまへ其妻は子を失ひ且寡となり
二二 殺されよかし二二汝突然に敵をかれらに臨ませたもふ時號呼をその家の内より聞えしめよそは彼ら坑を掘て
二三 我を執へんとしまた機檻を置てわが足を執へんとすればなり二三エホバよ汝はかれらが我を殺さんとするす
べての謀畧を知りたまふ其惡を赦すことなく其罪を汝の前より抹去りたまふなかれ彼らを汝の前に仆れし
めよ汝の怒たまふ時にかく彼らになしたまへ

第十九章

一 エホバかくいひたまふ往て陶人の瓦罐をかひ民の長老と祭司の長老の中より數人をともなひ
二 て二陶人の門の前にあるベンヒンノムの谷に出ゆき彼處に於てわが汝に告んところの言を宣よ三云くユダの
三 王等とエルサレムに住る者よエホバの言をきけ萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれ災を
此處にくだすべし凡そ之をきく者の耳はかならず鳴らん四こは彼ら我を棄てこの處を瀆し此にて自己とその
四 の先祖およびユダの王等の知ざる他の神に香を焚き且辜なきものゝ血をこの處に盈せばなり五又彼らはバア
五 ルのために崇邱を築き火をもて己の兒子を焚き燔祭となしてバアルにさゝげたり此わが命ぜしことにあら
六 ず我いひしことにあらず又我心に意はざりし事なり〇六エホバいひたまふされればみよ此處をトペテまたは
七 ベンヒンノムの谷と稱すして屠戮の谷と稱ふる日きたらんと七また我この處に於てユダとエルサレムの謀
をもむなふたし劍をもて彼らを其敵の前とその生命を索る者の手に仆しまたその屍を天空の鳥と地の獸の食
八 物となしかつ此邑を荒して人の嘲となさゝめん凡そこゝを過る者はその諸の災に驚きて笑ふべし
九 また彼らがその敵とその生命を索る者に圍みくるしめらろゝ時我彼らをして己の子の肉女の肉を食
はせん又彼らは互にその友の肉を食ふべし〇十汝さもに
十一 萬軍のエホバかくいひたまふ一回毀てば復全うすること能ざる陶人の器を毀が如くわれ此民さ
十二 この邑を毀たんまた彼らは葬るべき地なきによりてトペテに葬られん十二エホバいひたまふ我この處とここの
十三 中に住る者とに斯なし此邑をトペテの如くなすべし十三且エルサレムの室とユダの王等の室はトペテの處の
ごとく汚れん其は彼らすべての室の屋蓋のうへにて天の衆群に香をたき他の神に酒をそゝげばなり〇十四エ
十四 レミヤエホバの己を遣して預言せしめたまひしトペテより歸りきたりエホバの室の庭に立ちすべての民に語
十五 りていひけるは十五萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれ我言を此邑とその
の諸の村郷にくださん彼らその項を強くして我言を聽ざればなり

第二十章

一 祭司インメルの子エホバの室の宰の長なるパシユルエレミヤがこの言を預言するをきけり二是
二 に於てパシユル預言者エレミヤを打ちエホバの室にある上のベニヤミンの門の桎梏に繋げり三翌日パシユル
エレミヤを桎梏より釋はなちしにエレミヤ彼にいひけるはエホバ汝の名をパシユルと稱ずしてマゴルミッ
三 サビブ（驚懼周圍にあり）と稱び給ふ四即ちエホバかくいひたまふ視よわれ汝をして汝とすべての友
に恐怖をおこさしむる者となさん彼らはその敵の劍に仆れん汝の目はこれを見べし我またユダのすべての民
四 をバビロン王の手に付さん彼は彼らをバビロンに移し劍をもて殺すべし五我またこの邑のすべての貨財とそ
五 の得たる諸の物とその諸の珍寶とユダの王等のすべての儲蓄を其敵の手に付さん彼らはこれを掠めきた

六 民を擄へてバビロンに移すべし六 パシユルよ汝と汝の家にすめる者は悉く擄へ移されん汝はバビロンにい
七 たりて彼處に死にかしこに葬られん汝も汝が偽 いつにより預言せし言を聽し友もみな然らん〇七 エホバよ汝われ
を勸めたまひてわれ其勸に從へり汝我をさらへて我に勝給へりわれ日々に人の笑となり人皆我を嘲り
九八 ぬ八 われ語り呼はるごとに暴逆殘虐の事をいふエホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となるなり九
是をもて我かされてエホバの事を宣ず又その名をもてかたらじさいへり然ごエホバのことば我心にありて
十 火のわが骨の中に閉こもりて燃るがごとくなれば忍耐につかれて堪難し十 そは我おほくの人の讒をきく驚懼
まはりにあり訴へよ彼を訴へん我親しき者はみな我蹶くことあらんかと窺ひて互にいふ彼誘はるふことを
十一 あらん然からば我儕彼に勝て仇を報ゆることをえんと 十一 然ごエホバは強き勇士のごとくにして我と偕にい
ます故に我を攻る者は蹶て勝ことをえずそのなし遂ざるがために大なる恥辱を取んその羞恥は何時までも忘
十二 れざるべし 十二 義人を試み人の心腸を見たまふ萬軍のエホバよ我汝に訴を申たれば我をして汝が
十三 彼らに仇を報ずを見せしめよ 十三 エホバに歌を誦へよエホバを頌めよそは貧者の生命を惡者の手より救ひ
十四 たまへばなり〇十四 あゝ我生れし日は詛はれよ我母のわれを生し日は祝せられざれ 十五 わが父に男子汝に
十五 生れしと告て父を大いに喜ばせし人は詛はれよ 十六 其人はエホバの憫ますして滅したまひし邑のごとくなれ
十六 よ彼をして朝に號呼をきかしめ午間に閧聲をきかしめよ 十七 彼我を胎のうちに殺さず我母を我の墓となさ
十七 ず常にその胎を大ならしめざりしが故なり 十八 我何なれば胎をいでて艱難と憂患を蒙り恥辱をもて日を送る

耶利米亞記　第廿一章

一 ゼデキヤ王マルキヤの子パシユルとマアセヤの子ゼパニヤを祭司エレミヤに遣はしニ パビロ
二 ンの王ネブカデ子ザル我らを攻むれば汝われらの爲にエホバに求よエホバ恒のごとくそのもろ〳〵の奇なる
三 跡をもて我らを助けバビロンの王を我らより退かしめたまふことあらんと曰しむ其時エホバの言エレミヤ
四 に臨めり三 エレミヤ彼らにこたへけるは汝らゼデキヤにかく語ふべし四 イスラエルの神エホバかくいひたま
五 ふ視よわれ汝らがこの邑の外にありて汝らを攻め圍むところのバビロン王およびカルデヤ人さた〳〵かひて手
六 に持ところのその武器をかへし之を邑のうちに聚めん五 われ手を伸べ臂をつよくし震怒と憤恨と烈き怒
七 をもて汝らをせむべし六 我また此邑にすめる人と畜を擊ん皆重き疫病によりて死べし七 エホバいひたまふ
此後われユダの王ゼデキヤとその諸臣および民此邑に疫病と劍と饑饉をまぬかれて遺れる者をバビロン
八 の王子ブカデ子ザルの手と其敵の手および凡そその生命を索る者の手に付さんバビロンの王は劍の刃をもて
九 彼らを擊ちかれらを惜まず願みず恤れまざるべし〇八 汝また此民にエホバかくいふと語るべし視よわれ生命
十 の道と死の道を汝らの前に置くべし九 この邑にとゞまる者は劍と饑饉と疫病に死べしされど汝らを攻め圍むと
ころのカルデア人に出降る者はいきん其命はおのれの掠取物となるべし十 エホバいひたまふ我この邑に
十一 面を向しは福をあたふる爲にあらず禍をあたへんが爲なりこの邑はバビロンの王の手に付されん彼火を
もて之を焚くべし〇十一 またユダの王の家に告べし汝らエホバの言をきけ十二 ダビデの家よエホバかくいふ
十二 汝朝ごとに義く鞫をなし物を奪はるゝ人をその暴逆者の手より救へ否ざれば汝らの行の惡によりて我
十三 怒火のごとくに發で燃て滅ざるべし十三 エホバいひたまふ谷と平原の磐とにすめる者よみよ我汝に敵す汝
十四 らは誰か降て我儕を攻んや誰かわれらの居處にいらんやといふ十四 我汝らをその行の果によりて罰せ
ん又其林に火を起し其四周をことごとく焚つくすべしとエホバいひたまふ

耶利米亞記　第廿二章

一 エホバかくいひたまへりユダの王の宮にくだり彼處にこの言をのべていへ二 ダビデの位
二 に坐するユダの王よ汝と汝の臣および此門よりいる汝の民エホバの言をきけ三 エホバかくいふ汝ら公道と
三 公義を行ひ物を奪はるゝ人をその暴虐者の手より救ひ異邦人と孤子と寡婦をなやまし虐ぐる勿れまた
此處に無辜の血を流す勿れ四 汝らもし此言を眞に行はヨダビデの位に坐する王とその臣および其
民は車と馬に乘てこの室の門にいるべし五 然ど汝らもし此言を聽ずばわれ自己を指して誓ふ此室は
荒地となるべしとエホバいひたまふ六 エホバユダの王の家につきてかく曰たまふ汝は我におけるギレア

七 デのごとくレバノンの嶺のごとし然ごわれかならず汝を荒野となし人の住はざる邑となさんセ われ破壊者
八 をまうけて汝を攻めしめん彼ら各人その武器を執り汝の美しき檜を斫てこれを火に投いれんハ 多の國の人
九 此邑をすぎ互に語てエホバ何なれば此大なる邑にかく爲せしやさいはんに九 人こたへて是は彼等其神
十 エホバの契約をすて〻他の神を拝し之に奉へしに由なりさいはん〇十 死者の爲に泣くことなくまた之が爲
十一 に嘆くこと勿れ寧擄へ移されし者の爲にいたく嘆くべし 十一 ユダの王ヨシヤの子シヤルム即ちその父に繼で王さなりて遂に此處をいでたる者につきてエホバか
十二 くいひたまへり彼は再び此處に歸らじ十二 彼はその移されし處に死んふたゝび此地を見ざるべし〇十三 不義
十三 をもて其室をつくり不法をもて其樓を造り其隣人を傭て何をも與へずその假を拂はざる者は禍なる
十四 かな十四 彼いふ我已のために廣厦と涼しき樓をつくり又已の爲に窓を造り香柏をもて之を飾ひ赤く
十五 之を塗んと十五 汝香柏を爭そひもちふるによりて王たるを得るか汝の父は食飲せざりしや公義と公道を行
十六 ひて福を得ざりしや十六 彼は貧者と患難者の訟を理して祥をえたりかく爲すは我を識ことに非
十七 やとエホバいひたまふ十七 然ど汝の目と心は惟貪をなさんとし無辜の血を流さんとし虐遇と暴逆
十八 をなさんとするのみ十八 故にエホバユダの王ヨシヤの子
十九 兄、かなしいかな我姉さいひて嗟かず又哀かな主よ、哀かな其榮さいひて嗟かじ十九 彼は驢馬を埋
二十 るがごとく埋られん即ち曳れてエルサレムの門の外に投棄らるべし〇二十 汝レバノンに登りて呼ばゝりバ
二一 シヤンに汝の聲を揚げアバリムより呼はれ其は汝の愛する者悉く滅されたればなり二一 汝の平康なる時
二二 我なんぢに語しかど汝は我にきかじといへり汝いさけなき時よりわが聲を聽ずこれ汝の故習なり二二 汝の
二三 牧者はみな風に呑つくされ汝の愛する者はとらへ移されん其時汝はおのれの諸の惡のために痛く恥べし
二三 汝レバノンにすみ巢を香柏につくる者よ汝の劬勞子を産む婦の痛苦のごとくにきたらんとき汝の衰憊は
二四 いかにぞや〇二四 エホバいひたまふ我は活くユダの王エホヤキムの子エコニヤは我右の手の指環なれども我
二五 これを拔ん二五 われ汝の生命を索る者の手および汝が其面を畏るゝ者の手すなはちバビロンの王ブカデ子
二六 ザルの手とカルデヤ人の手に汝を付さん二六 われ汝と汝を生し母を汝等がうまれざりし他の地に逐やらん
二七 汝ら彼處に死べし二七 彼らの懷魂のいたく歸らんことを
二八 人エコニヤは賤むべき毀れたる器ならんや好ましからざる器具ならんや如何なれば彼と其子孫は逐出されて
二九 その識ざる地に投やらるゝや二九 地よ地よ地よエホバの言をきけ三十 エホバかくいひたまふこの人を子なく
三十 して其生命の中に榮えざる人と錄せそはその子孫のうちに榮てダビデの位に坐しユダを治る人がされてなか
ろべければなり

第廿三章

一 エホバいひたまひけるは嗚呼わが養ふ群を滅し散す牧者は禍なるかな二 故にイスラエルの
神エホバ我民を養ふ牧者につきて斯いふ汝らはわが群を散しこれを逐はなちて顧ざりき視よわれ汝らの
三 惡き行により汝等に報ゆべしとエホバいふ三 われ我群の遺餘たる者をその逐はなちたる諸の地より集め
四 再びこれを其牢に歸さん彼らは子を產て多くなるべし四 我これを養ふ牧者をその上に立ん彼等はふたゝび懼
五 かず憚ずまた失じとエホバいひたまふ五 エホバいひたまふ日來らん我ダビデに一の義き枝を起す日來
六 らん彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし六 其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん其名
七 はエホバ我儕の義と稱らるべしセ この故にエホバいひたまふ視よイスラエルの家の裔を北の地と其諸て逐やりし地より導出せ
八 せしエホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地に居るべしエホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地より導出
九 しエホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地に居るべし〇九 預言者輩のために我心はわが衷に寢れわ
十 が骨は皆震ふ且エホバとその聖言のためにわれは醉る人のごとく酒に勝る人のごとし十 この地は姦淫
十一 をなすもの盈ち地は咒詛によりて憂へ曠野の艸は枯る彼らの途はあしく其力は正しからず十一 預言者と祭
十二 司は偕に邪惡なりわれ我家においてすら彼等の惡を見たりとエホバいひたまふ十二 故にかれらの途は暗に在る
滑なる途のごとくならん彼等推れて其途に仆るべし 我災をその上にのぞましめん是彼らが刑罰らる〻

十三 年なりとエホバいひたまふ 十三 われサマリヤの預言者の中に愚昧なる事あるをみたり彼等はバアルに託りて
十四 預言し我民イスラエルを惑はせり 十四 我エルサレムの預言者の中にも憎むべき事あるを見たり彼等は姦淫を
なし詐僞をおこなひ惡人の手を堅くして人をその惡に離れざらしむ彼等みな我にはソドムのごとく其民はゴ
十五 モラのごとし 十五 この故に萬軍のエホバ預言者について
れに飲せんそは邪惡エルサレムの預言者よりいでて汝等に預言する預言者の言を聽く勿れ彼等はなんぢらを欺き
十六 エホバの口よりいでざるおのが心の默示を語るなり 十七 常に彼らは我を藐忽する者にむかひて汝等平安をえんとエホバいひたまへりといひ又己が心の剛愎
十七 なるに循ひて行むところのすべての者に向ひて災 汝らに來らじといへり 十八 誰かエホバの議會に立てそ
十八 の言を見聞せし者あらんや誰か其耳を傾て我言を聽し者あらんや 十九 みよエホバの暴風あり怒と旋轉風
十九 いで惡人の首をうたん 二十 エホバの怒はかれの心の思を行ひてこれを遂げたまふまでは息じ末
二十 の日に汝ら明にこれを曉らん 二一 預言者等はわが遣さざるに趨り我告ざるに預言せり 二二 彼らもし我議會
二一 に立ちしならば我民にわが言をきかしめて之をその惡き途とその惡き行に離れしめしならん 二三 エホバ
二二 いひたまふ我はたゞ近くにおいてのみ神たらんや遠くに於ても神たるにあらずや 二四 エホバいひたまふ人我
二三 に見られざる樣に密なる處に身を匿し得るかエホバいひたまふ我は天地に充るにあらずや 二五 われ我名をも
二四 て謊を預言する預言者等がわれ夢を見たりと曰ふをきけり 二六 謊を預言する預言者等はいつまで此心をいだくや彼らは其心の詐僞を預言するなり 二七 彼らは其先祖がバアルによりて我名を忘
二五 れしごとく互に夢をかたりて我民にわが名を忘れしめんと思ふや 二八 夢をみし預言者は夢を語るべし我言
二六 を受し者は誠實をもて我言を語るべし糠いかで麥に比擬ことをえんやとエホバいひたまふ 二九 エホバ言たまはく我言は火のごとくならずや又磐を打碎く鎚の如くならずや 三十 故に視よわれ我言を相互に竊める
二七 預言者の敵となるとエホバいひたまへりと舌をもて語るところの預言者の敵と
二八
二九
三十
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四十
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五十
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六十
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七十
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八十
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九十
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
百
百一
百二
百三
百四
百五
百六
百七
百八
百九
百十
百十一
百十二
百十三
百十四
百十五
百十六
百十七
百十八
百十九
百二十
百二十一
百二十二
百二十三
百二十四
百二十五
百二十六
百二十七
百二十八
百二十九
百三十
百三十一
百三十二
百三十三
百三十四
百三十五
百三十六
百三十七
百三十八
百三十九
百四十
百四十一
百四十二
百四十三
百四十四
百四十五
百四十六
百四十七
百四十八
百四十九
百五十
百五十一
百五十二
百五十三
百五十四
百五十五
百五十六
百五十七
百五十八
百五十九
百六十
百六十一
百六十二
百六十三
百六十四
百六十五
百六十六
百六十七
百六十八
百六十九
百七十
百七十一
百七十二
百七十三
百七十四
百七十五
百七十六
百七十七
百七十八
百七十九
百八十
百八十一
百八十二
百八十三
百八十四
百八十五
百八十六
百八十七
百八十八
百八十九
百九十
百九十一
百九十二
百九十三
百九十四
百九十五
百九十六
百九十七
百九十八
百九十九
二百
二百一
二百二
二百三
二百四
二百五
二百六
二百七
二百八
二百九
二百十
二百十一
二百十二
二百十三
二百十四
二百十五
二百十六
二百十七
二百十八
二百十九
二百二十
二百二十一
二百二十二
二百二十三
二百二十四
二百二十五
二百二十六
二百二十七
二百二十八
二百二十九
二百三十
二百三十一
二百三十二
二百三十三
二百三十四
二百三十五
二百三十六
二百三十七
二百三十八
二百三十九
二百四十
二百四十一
二百四十二
二百四十三
二百四十四
二百四十五
二百四十六
二百四十七
二百四十八
二百四十九
二百五十
二百五十一
二百五十二
二百五十三
二百五十四
二百五十五
二百五十六
二百五十七
二百五十八
二百五十九
二百六十
二百六十一
二百六十二
二百六十三
二百六十四
二百六十五
二百六十六
二百六十七
二百六十八
二百六十九
二百七十
二百七十一
二百七十二
二百七十三
二百七十四
二百七十五
二百七十六
二百七十七
二百七十八
二百七十九
二百八十
二百八十一
二百八十二
二百八十三
二百八十四
二百八十五
二百八十六
二百八十七
二百八十八
二百八十九
二百九十
二百九十一
二百九十二
二百九十三
二百九十四
二百九十五
二百九十六
二百九十七
二百九十八
二百九十九
三百
三百一
三百二
三百三
三百四
三百五
三百六
三百七
三百八
三百九
三百十
三百十一
三百十二
三百十三
三百十四
三百十五
三百十六
三百十七
三百十八
三百十九
三百二十
三百二十一
三百二十二
三百二十三
三百二十四
三百二十五
三百二十六
三百二十七
三百二十八
三百二十九
三百三十
三百三十一
三百三十二
三百三十三
三百三十四
三百三十五
三百三十六
三百三十七
三百三十八
三百三十九
三百四十
三百四十一
三百四十二
三百四十三
三百四十四
三百四十五
三百四十六
三百四十七
三百四十八
三百四十九
三百五十
三百五十一
三百五十二
三百五十三
三百五十四
三百五十五
三百五十六
三百五十七
三百五十八
三百五十九
三百六十
三百六十一
三百六十二
三百六十三
三百六十四
三百六十五
三百六十六
三百六十七
三百六十八
三百六十九
三百七十
三百七十一
三百七十二
三百七十三
三百七十四
三百七十五
三百七十六
三百七十七
三百七十八
三百七十九
三百八十
三百八十一
三百八十二
三百八十三
三百八十四
三百八十五
三百八十六
三百八十七
三百八十八
三百八十九
三百九十
三百九十一
三百九十二
三百九十三
三百九十四
三百九十五
三百九十六
三百九十七
三百九十八
三百九十九
四百
四百一
四百二
四百三
四百四
四百五
四百六
四百七
四百八
四百九
四百十
四百十一
四百十二
四百十三
四百十四
四百十五
四百十六
四百十七
四百十八
四百十九
四百二十
四百二十一
四百二十二
四百二十三
四百二十四
四百二十五
四百二十六
四百二十七
四百二十八
四百二十九
四百三十
四百三十一
四百三十二
四百三十三
四百三十四
四百三十五
四百三十六
四百三十七
四百三十八
四百三十九
四百四十
四百四十一
四百四十二
四百四十三
四百四十四
四百四十五
四百四十六
四百四十七
四百四十八
四百四十九
四百五十
四百五十一
四百五十二
四百五十三
四百五十四
四百五十五
四百五十六
四百五十七
四百五十八
四百五十九
四百六十
四百六十一
四百六十二
四百六十三
四百六十四
四百六十五
四百六十六
四百六十七
四百六十八
四百六十九
四百七十
四百七十一
四百七十二
四百七十三
四百七十四
四百七十五
四百七十六
四百七十七
四百七十八
四百七十九
四百八十
四百八十一
四百八十二
四百八十三
四百八十四
四百八十五
四百八十六
四百八十七
四百八十八
四百八十九
四百九十
四百九十一
四百九十二
四百九十三
四百九十四
四百九十五
四百九十六
四百九十七
四百九十八
四百九十九
五百
五百一
五百二
五百三
五百四
五百五
五百六
五百七
五百八
五百九
五百十
五百十一
五百十二
五百十三
五百十四
五百十五
五百十六
五百十七
五百十八
五百十九
五百二十
五百二十一
五百二十二
五百二十三
五百二十四
五百二十五
五百二十六
五百二十七
五百二十八
五百二十九
五百三十
五百三十一
五百三十二
五百三十三
五百三十四
五百三十五
五百三十六
五百三十七
五百三十八
五百三十九
五百四十
五百四十一
五百四十二
五百四十三
五百四十四
五百四十五
五百四十六
五百四十七
五百四十八
五百四十九
五百五十
五百五十一
五百五十二
五百五十三
五百五十四
五百五十五
五百五十六
五百五十七
五百五十八
五百五十九
五百六十
五百六十一
五百六十二
五百六十三
五百六十四
五百六十五
五百六十六
五百六十七
五百六十八
五百六十九
五百七十
五百七十一
五百七十二
五百七十三
五百七十四
五百七十五
五百七十六
五百七十七
五百七十八
五百七十九
五百八十
五百八十一
五百八十二
五百八十三
五百八十四
五百八十五
五百八十六
五百八十七
五百八十八
五百八十九
五百九十
五百九十一
五百九十二
五百九十三
五百九十四
五百九十五
五百九十六
五百九十七
五百九十八
五百九十九
六百
六百一
六百二
六百三
六百四
六百五
六百六
六百七
六百八
六百九
六百十
六百十一
六百十二
六百十三
六百十四
六百十五
六百十六
六百十七
六百十八
六百十九
六百二十
六百二十一
六百二十二
六百二十三
六百二十四
六百二十五
六百二十六
六百二十七
六百二十八
六百二十九
六百三十
六百三十一
六百三十二
六百三十三
六百三十四
六百三十五
六百三十六
六百三十七
六百三十八
六百三十九
六百四十
六百四十一
六百四十二
六百四十三
六百四十四
六百四十五
六百四十六
六百四十七
六百四十八
六百四十九
六百五十
六百五十一
六百五十二
六百五十三
六百五十四
六百五十五
六百五十六
六百五十七
六百五十八
六百五十九
六百六十
六百六十一
六百六十二
六百六十三
六百六十四
六百六十五
六百六十六
六百六十七
六百六十八
六百六十九
六百七十
六百七十一
六百七十二
六百七十三
六百七十四
六百七十五
六百七十六
六百七十七
六百七十八
六百七十九
六百八十
六百八十一
六百八十二
六百八十三
六百八十四
六百八十五
六百八十六
六百八十七
六百八十八
六百八十九
六百九十
六百九十一
六百九十二
六百九十三
六百九十四
六百九十五
六百九十六
六百九十七
六百九十八
六百九十九
七百
七百一
七百二
七百三
七百四
七百五
七百六
七百七
七百八
七百九
七百十
七百十一
七百十二
七百十三
七百十四
七百十五
七百十六
七百十七
七百十八
七百十九
七百二十
七百二十一
七百二十二
七百二十三
七百二十四
七百二十五
七百二十六
七百二十七
七百二十八
七百二十九
七百三十
七百三十一
七百三十二
七百三十三
七百三十四
七百三十五
七百三十六
七百三十七
七百三十八
七百三十九
七百四十
七百四十一
七百四十二
七百四十三
七百四十四
七百四十五
七百四十六
七百四十七
七百四十八
七百四十九
七百五十
七百五十一
七百五十二
七百五十三
七百五十四
七百五十五
七百五十六
七百五十七
七百五十八
七百五十九
七百六十
七百六十一
七百六十二
七百六十三
七百六十四
七百六十五
七百六十六
七百六十七
七百六十八
七百六十九
七百七十
七百七十一
七百七十二
七百七十三
七百七十四
七百七十五
七百七十六
七百七十七
七百七十八
七百七十九
七百八十
七百八十一
七百八十二
七百八十三
七百八十四
七百八十五
七百八十六
七百八十七
七百八十八
七百八十九
七百九十
七百九十一
七百九十二
七百九十三
七百九十四
七百九十五
七百九十六
七百九十七
七百九十八
七百九十九
八百
八百一
八百二
八百三
八百四
八百五
八百六
八百七
八百八
八百九
八百十
八百十一
八百十二
八百十三
八百十四
八百十五
八百十六
八百十七
八百十八
八百十九
八百二十
八百二十一
八百二十二
八百二十三
八百二十四
八百二十五
八百二十六
八百二十七
八百二十八
八百二十九
八百三十
八百三十一
八百三十二
八百三十三
八百三十四
八百三十五
八百三十六
八百三十七
八百三十八
八百三十九
八百四十
八百四十一
八百四十二
八百四十三
八百四十四
八百四十五
八百四十六
八百四十七
八百四十八
八百四十九
八百五十
八百五十一
八百五十二
八百五十三
八百五十四
八百五十五
八百五十六
八百五十七
八百五十八
八百五十九
八百六十
八百六十一
八百六十二
八百六十三
八百六十四
八百六十五
八百六十六
八百六十七
八百六十八
八百六十九
八百七十
八百七十一
八百七十二
八百七十三
八百七十四
八百七十五
八百七十六
八百七十七
八百七十八
八百七十九
八百八十
八百八十一
八百八十二
八百八十三
八百八十四
八百八十五
八百八十六
八百八十七
八百八十八
八百八十九
八百九十
八百九十一
八百九十二
八百九十三
八百九十四
八百九十五
八百九十六
八百九十七
八百九十八
八百九十九
九百
九百一
九百二
九百三
九百四
九百五
九百六
九百七
九百八
九百九
九百十
九百十一
九百十二
九百十三
九百十四
九百十五
九百十六
九百十七
九百十八
九百十九
九百二十
九百二十一
九百二十二
九百二十三
九百二十四
九百二十五
九百二十六
九百二十七
九百二十八
九百二十九
九百三十
九百三十一
九百三十二
九百三十三
九百三十四
九百三十五
九百三十六
九百三十七
九百三十八
九百三十九
九百四十
九百四十一
九百四十二
九百四十三
九百四十四
九百四十五
九百四十六
九百四十七
九百四十八
九百四十九
九百五十
九百五十一
九百五十二
九百五十三
九百五十四
九百五十五
九百五十六
九百五十七
九百五十八
九百五十九
九百六十
九百六十一
九百六十二
九百六十三
九百六十四
九百六十五
九百六十六
九百六十七
九百六十八
九百六十九
九百七十
九百七十一
九百七十二
九百七十三
九百七十四
九百七十五
九百七十六
九百七十七
九百七十八
九百七十九
九百八十
九百八十一
九百八十二
九百八十三
九百八十四
九百八十五
九百八十六
九百八十七
九百八十八
九百八十九
九百九十
九百九十一
九百九十二
九百九十三
九百九十四
九百九十五
九百九十六
九百九十七
九百九十八
九百九十九
千
千一
千二
千三
千四
千五
千六
千七
千八
千九
千十
千十一
千十二
千十三
千十四
千十五
千十六
千十七
千十八
千十九
千二十
千二十一
千二十二
千二十三
千二十四
千二十五
千二十六
千二十七
千二十八
千二十九
千三十
千三十一
千三十二
千三十三
千三十四
千三十五
千三十六
千三十七
千三十八
千三十九
千四十
千四十一
千四十二
千四十三
千四十四
千四十五
千四十六
千四十七
千四十八
千四十九
千五十
千五十一
千五十二
千五十三
千五十四
千五十五
千五十六
千五十七
千五十八
千五十九
千六十
千六十一
千六十二
千六十三
千六十四
千六十五
千六十六
千六十七
千六十八
千六十九
千七十
千七十一
千七十二
千七十三
千七十四
千七十五
千七十六
千七十七
千七十八
千七十九
千八十
千八十一
千八十二
千八十三
千八十四
千八十五
千八十六
千八十七
千八十八
千八十九
千九十
千九十一
千九十二
千九十三
千九十四
千九十五
千九十六
千九十七
千九十八
千九十九
千百
千百一
千百二
千百三
千百四
千百五
千百六
千百七
千百八
千百九
千百十
千百十一
千百十二
千百十三
千百十四
千百十五
千百十六
千百十七
千百十八
千百十九
千百二十
千百二十一
千百二十二
千百二十三
千百二十四
千百二十五
千百二十六
千百二十七
千百二十八
千百二十九
千百三十
千百三十一
千百三十二
千百三十三
千百三十四
千百三十五
千百三十六
千百三十七
千百三十八
千百三十九
千百四十
千百四十一
千百四十二
千百四十三
千百四十四
千百四十五
千百四十六
千百四十七
千百四十八
千百四十九
千百五十
千百五十一
千百五十二
千百五十三
千百五十四
千百五十五
千百五十六
千百五十七
千百五十八
千百五十九
千百六十
千百六十一
千百六十二
千百六十三
千百六十四
千百六十五
千百六十六
千百六十七
千百六十八
千百六十九
千百七十
千百七十一
千百七十二
千百七十三
千百七十四
千百七十五
千百七十六
千百七十七
千百七十八
千百七十九
千百八十
千百八十一
千百八十二
千百八十三
千百八十四
千百八十五
千百八十六
千百八十七
千百八十八
千百八十九
千百九十
千百九十一
千百九十二
千百九十三
千百九十四
千百九十五
千百九十六
千百九十七
千百九十八
千百九十九
二千
二千一
二千二
二千三
二千四
二千五
二千六
二千七
二千八
二千九
二千十
二千十一
二千十二
二千十三
二千十四
二千十五
二千十六
二千十七
二千十八
二千十九
二千二十
二千二十一
二千二十二
二千二十三
二千二十四
二千二十五
二千二十六
二千二十七
二千二十八
二千二十九
二千三十
二千三十一
二千三十二
二千三十三
二千三十四
二千三十五
二千三十六
二千三十七
二千三十八
二千三十九
二千四十
二千四十一
二千四十二
二千四十三
二千四十四
二千四十五
二千四十六
二千四十七
二千四十八
二千四十九
二千五十
二千五十一
二千五十二
二千五十三
二千五十四
二千五十五
二千五十六
二千五十七
二千五十八
二千五十九
二千六十
二千六十一
二千六十二
二千六十三
二千六十四
二千六十五
二千六十六
二千六十七
二千六十八
二千六十九
二千七十
二千七十一
二千七十二
二千七十三
二千七十四
二千七十五
二千七十六
二千七十七
二千七十八
二千七十九
二千八十
二千八十一
二千八十二
二千八十三
二千八十四
二千八十五
二千八十六
二千八十七
二千八十八
二千八十九
二千九十
二千九十一
二千九十二
二千九十三
二千九十四
二千九十五
二千九十六
二千九十七
二千九十八
二千九十九
三千
三千一
三千二
三千三
三千四
三千五
三千六
三千七
三千八
三千九
三千十
三千十一
三千十二
三千十三
三千十四
三千十五
三千十六
三千十七
三千十八
三千十九
三千二十
三千二十一
三千二十二
三千二十三
三千二十四
三千二十五
三千二十六
三千二十七
三千二十八
三千二十九
三千三十
三千三十一
三千三十二
三千三十三
三千三十四
三千三十五
三千三十六
三千三十七
三千三十八
三千三十九
三千四十
三千四十一
三千四十二
三千四十三
三千四十四
三千四十五
三千四十六
三千四十七
三千四十八
三千四十九
三千五十
三千五十一
三千五十二
三千五十三
三千五十四
三千五十五
三千五十六
三千五十七
三千五十八
三千五十九
三千六十
三千六十一
三千六十二
三千六十三
三千六十四
三千六十五
三千六十六
三千六十七
三千六十八
三千六十九
三千七十
三千七十一
三千七十二
三千七十三
三千七十四
三千七十五
三千七十六
三千七十七
三千七十八
三千七十九
三千八十
三千八十一
三千八十二
三千八十三
三千八十四
三千八十五
三千八十六
三千八十七
三千八十八
三千八十九
三千九十
三千九十一
三千九十二
三千九十三
三千九十四
三千九十五
三千九十六
三千九十七
三千九十八
三千九十九
四千
四千一
四千二
四千三
四千四
四千五
四千六
四千七
四千八
四千九
四千十
四千十一
四千十二
四千十三
四千十四
四千十五
四千十六
四千十七
四千十八
四千十九
四千二十
四千二十一
四千二十二
四千二十三
四千二十四
四千二十五
四千二十六
四千二十七
四千二十八
四千二十九
四千三十
四千三十一
四千三十二
四千三十三
四千三十四
四千三十五
四千三十六
四千三十七
四千三十八
四千三十九
四千四十
四千四十一
四千四十二
四千四十三
四千四十四
四千四十五
四千四十六
四千四十七
四千四十八
四千四十九
四千五十
四千五十一
四千五十二
四千五十三
四千五十四
四千五十五
四千五十六
四千五十七
四千五十八
四千五十九
四千六十
四千六十一
四千六十二
四千六十三
四千六十四
四千六十五
四千六十六
四千六十七
四千六十八
四千六十九
四千七十
四千七十一
四千七十二
四千七十三
四千七十四
四千七十五
四千七十六
四千七十七
四千七十八
四千七十九
四千八十
四千八十一
四千八十二
四千八十三
四千八十四
四千八十五
四千八十六
四千八十七
四千八十八
四千八十九
四千九十
四千九十一
四千九十二
四千九十三
四千九十四
四千九十五
四千九十六
四千九十七
四千九十八
四千九十九
五千
五千一
五千二
五千三
五千四
五千五
五千六
五千七
五千八
五千九
五千十
五千十一
五千十二
五千十三
五千十四
五千十五
五千十六
五千十七
五千十八
五千十九
五千二十
五千二十一
五千二十二
五千二十三
五千二十四
五千二十五
五千二十六
五千二十七
五千二十八
五千二十九
五千三十
五千三十一
五千三十二
五千三十三
五千三十四
五千三十五
五千三十六
五千三十七
五千三十八
五千三十九
五千四十
五千四十一
五千四十二
五千四十三
五千四十四
五千四十五
五千四十六
五千四十七
五千四十八
五千四十九
五千五十
五千五十一
五千五十二
五千五十三
五千五十四
五千五十五
五千五十六
五千五十七
五千五十八
五千五十九
五千六十
五千六十一
五千六十二
五千六十三
五千六十四
五千六十五
五千六十六
五千六十七
五千六十八
五千六十九
五千七十
五千七十一
五千七十二
五千七十三
五千七十四
五千七十五
五千七十六
五千七十七
五千七十八
五千七十九
五千八十
五千八十一
五千八十二
五千八十三
五千八十四
五千八十五
五千八十六
五千八十七
五千八十八
五千八十九
五千九十
五千九十一
五千九十二
五千九十三
五千九十四
五千九十五
五千九十六
五千九十七
五千九十八
五千九十九
六千
六千一
六千二
六千三
六千四
六千五
六千六
六千七
六千八
六千九
六千十
六千十一
六千十二
六千十三
六千十四
六千十五
六千十六
六千十七
六千十八
六千十九
六千二十
六千二十一
六千二十二
六千二十三
六千二十四
六千二十五
六千二十六
六千二十七
六千二十八
六千二十九
六千三十
六千三十一
六千三十二
六千三十三
六千三十四
六千三十五
六千三十六
六千三十七
六千三十八
六千三十九
六千四十
六千四十一
六千四十二
六千四十三
六千四十四
六千四十五
六千四十六
六千四十七
六千四十八
六千四十九
六千五十
六千五十一
六千五十二
六千五十三
六千五十四
六千五十五
六千五十六
六千五十七
六千五十八
六千五十九
六千六十
六千六十一
六千六十二
六千六十三
六千六十四
六千六十五
六千六十六
六千六十七
六千六十八
六千六十九
六千七十
六千七十一
六千七十二
六千七十三
六千七十四
六千七十五
六千七十六
六千七十七
六千七十八
六千七十九
六千八十
六千八十一
六千八十二
六千八十三
六千八十四
六千八十五
六千八十六
六千八十七
六千八十八
六千八十九
六千九十
六千九十一
六千九十二
六千九十三
六千九十四
六千九十五
六千九十六
六千九十七
六千九十八
六千九十九
七千
七千一
七千二
七千三
七千四
七千五
七千六
七千七
七千八
七千九
七千十
七千十一
七千十二
七千十三
七千十四
七千十五
七千十六
七千十七
七千十八
七千十九
七千二十
七千二十一
七千二十二
七千二十三
七千二十四
七千二十五
七千二十六
七千二十七
七千二十八
七千二十九
七千三十
七千三十一
七千三十二
七千三十三
七千三十四
七千三十五
七千三十六
七千三十七
七千三十八
七千三十九
七千四十
七千四十一
七千四十二
七千四十三
七千四十四
七千四十五
七千四十六
七千四十七
七千四十八
七千四十九
七千五十
七千五十一
七千五十二
七千五十三
七千五十四
七千五十五
七千五十六
七千五十七
七千五十八
七千五十九
七千六十
七千六十一
七千六十二
七千六十三
七千六十四
七千六十五
七千六十六
七千六十七
七千六十八
七千六十九
七千七十
七千七十一
七千七十二
七千七十三
七千七十四
七千七十五
七千七十六
七千七十七
七千七十八
七千七十九
七千八十
七千八十一
七千八十二
七千八十三
七千八十四
七千八十五
七千八十六
七千八十七
七千八十八
七千八十九
七千九十
七千九十一
七千九十二
七千九十三
七千九十四
七千九十五
七千九十六
七千九十七
七千九十八
七千九十九
八千
八千一
八千二
八千三
八千四
八千五
八千六
八千七
八千八
八千九
八千十
八千十一
八千十二
八千十三
八千十四
八千十五
八千十六
八千十七
八千十八
八千十九
八千二十
八千二十一
八千二十二
八千二十三
八千二十四
八千二十五
八千二十六
八千二十七
八千二十八
八千二十九
八千三十
八千三十一
八千三十二
八千三十三
八千三十四
八千三十五
八千三十六
八千三十七
八千三十八
八千三十九
八千四十
八千四十一
八千四十二
八千四十三
八千四十四
八千四十五
八千四十六
八千四十七
八千四十八
八千四十九
八千五十
八千五十一
八千五十二
八千五十三
八千五十四
八千五十五
八千五十六
八千五十七
八千五十八
八千五十九
八千六十
八千六十一
八千六十二
八千六十三
八千六十四
八千六十五
八千六十六
八千六十七
八千六十八
八千六十九
八千七十
八千七十一
八千七十二
八千七十三
八千七十四
八千七十五
八千七十六
八千七十七
八千七十八
八千七十九
八千八十
八千八十一
八千八十二
八千八十三
八千八十四
八千八十五
八千八十六
八千八十七
八千八十八
八千八十九
八千九十
八千九十一
八千九十二
八千九十三
八千九十四
八千九十五
八千九十六
八千九十七
八千九十八
八千九十九
九千
九千一
九千二
九千三
九千四
九千五
九千六
九千七
九千八
九千九
九千十
九千十一
九千十二
九千十三
九千十四
九千十五
九千十六
九千十七
九千十八
九千十九
九千二十
九千二十一
九千二十二
九千二十三
九千二十四
九千二十五
九千二十六
九千二十七
九千二十八
九千二十九
九千三十
九千三十一
九千三十二
九千三十三
九千三十四
九千三十五
九千三十六
九千三十七
九千三十八
九千三十九
九千四十
九千四十一
九千四十二
九千四十三
九千四十四
九千四十五
九千四十六
九千四十七
九千四十八
九千四十九
九千五十
九千五十一
九千五十二
九千五十三
九千五十四
九千五十五
九千五十六
九千五十七
九千五十八
九千五十九
九千六十
九千六十一
九千六十二
九千六十三
九千六十四
九千六十五
九千六十六
九千六十七
九千六十八
九千六十九
九千七十
九千七十一
九千七十二
九千七十三
九千七十四
九千七十五
九千七十六
九千七十七
九千七十八
九千七十九
九千八十
九千八十一
九千八十二
九千八十三
九千八十四
九千八十五
九千八十六
九千八十七
九千八十八
九千八十九
九千九十
九千九十一
九千九十二
九千九十三
九千九十四
九千九十五
九千九十六
九千九十七
九千九十八
九千九十九
一万
一万一
一万二
一万三
一万四
一万五
一万六
一万七
一万八
一万九
一万十
一万十一
一万十二
一万十三
一万十四
一万十五
一万十六
一万十七
一万十八
一万十九
一万二十
一万二十一
一万二十二
一万二十三
一万二十四
一万二十五
一万二十六
一万二十七
一万二十八
一万二十九
一万三十
一万三十一
一万三十二
一万三十三
一万三十四
一万三十五
一万三十六
一万三十七
一万三十八
一万三十九
一万四十
一万四十一
一万四十二
一万四十三
一万四十四
一万四十五
一万四十六
一万四十七
一万四十八
一万四十九
一万五十
一万五十一
一万五十二
一万五十三
一万五十四
一万五十五
一万五十六
一万五十七
一万五十八
一万五十九
一万六十
一万六十一
一万六十二
一万六十三
一万六十四
一万六十五
一万六十六
一万六十七
一万六十八
一万六十九
一万七十
一万七十一
一万七十二
一万七十三
一万七十四
一万七十五
一万七十六
一万七十七
一万七十八
一万七十九
一万八十
一万八十一
一万八十二
一万八十三
一万八十四
一万八十五
一万八十六
一万八十七
一万八十八
一万八十九
一万九十
一万九十一
一万九十二
一万九十三
一万九十四
一万九十五
一万九十六
一万九十七
一万九十八
一万九十九
二万
二万一
二万二
二万三
二万四
二万五
二万六
二万七
二万八
二万九
二万十
二万十一
二万十二
二万十三
二万十四
二万十五
二万十六
二万十七
二万十八
二万十九
二万二十
二万二十一
二万二十二
二万二十三
二万二十四
二万二十五
二万二十六
二万二十七
二万二十八
二万二十九
二万三十
二万三十一
二万三十二
二万三十三
二万三十四
二万三十五
二万三十六
二万三十七
二万三十八
二万三十九
二万四十
二万四十一
二万四十二
二万四十三
二万四十四
二万四十五
二万四十六
二万四十七
二万四十八
二万四十九
二万五十
二万五十一
二万五十二
二万五十三
二万五十四
二万五十五
二万五十六
二万五十七
二万五十八
二万五十九
二万六十
二万六十一
二万六十二
二万六十三
二万六十四
二万六十五
二万六十六
二万六十七
二万六十八
二万六十九
二万七十
二万七十一
二万七十二
二万七十三
二万七十四
二万七十五
二万七十六
二万七十七
二万七十八
二万七十九
二万八十
二万八十一
二万八十二
二万八十三
二万八十四
二万八十五
二万八十六
二万八十七
二万八十八
二万八十九
二万九十
二万九十一
二万九十二
二万九十三
二万九十四
二万九十五
二万九十六
二万九十七
二万九十八
二万九十九
三万
三万一
三万二
三万三
三万四
三万五
三万六
三万七
三万八
三万九
三万十
三万十一
三万十二
三万十三
三万十四
三万十五
三万十六
三万十七
三万十八
三万十九
三万二十
三万二十一
三万二十二
三万二十三
三万二十四
三万二十五
三万二十六
三万二十七
三万二十八
三万二十九
三万三十
三万三十一
三万三十二
三万三十三
三万三十四
三万三十五
三万三十六
三万三十七
三万三十八
三万三十九
三万四十
三万四十一
三万四十二
三万四十三
三万四十四
三万四十五
三万四十六
三万四十七
三万四十八
三万四十九
三万五十
三万五十一
三万五十二
三万五十三
三万五十四
三万五十五
三万五十六
三万五十七
三万五十八
三万五十九
三万六十
三万六十一
三万六十二
三万六十三
三万六十四
三万六十五
三万六十六
三万六十七
三万六十八
三万六十九
三万七十
三万七十一
三万七十二
三万七十三
三万七十四
三万七十五
三万七十六
三万七十七
三万七十八
三万七十九
三万八十
三万八十一
三万八十二
三万八十三
三万八十四
三万八十五
三万八十六
三万八十七
三万八十八
三万八十九
三万九十
三万九十一
三万九十二
三万九十三
三万九十四
三万九十五
三万九十六
三万九十七
三万九十八
三万九十九
四万
四万一
四万二
四万三
四万四
四万五
四万六
四万七
四万八
四万九
四万十
四万十一
四万十二
四万十三
四万十四
四万十五
四万十六
四万十七
四万十八
四万十九
四万二十
四万二十一
四万二十二
四万二十三
四万二十四
四万二十五
四万二十六
四万二十七
四万二十八
四万二十九
四万三十
四万三十一
四万三十二
四万三十三
四万三十四
四万三十五
四万三十六
四万三十七
四万三十八
四万三十九
四万四十
四万四十一
四万四十二
四万四十三
四万四十四
四万四十五
四万四十六
四万四十七
四万四十八
四万四十九
四万五十
四万五十一
四万五十二
四万五十三
四万五十四
四万五十五
四万五十六
四万五十七
四万五十八
四万五十九
四万六十
四万六十一
四万六十二
四万六十三
四万六十四
四万六十五
四万六十六
四万六十七
四万六十八
四万六十九
四万七十
四万七十一
四万七十二
四万七十三
四万七十四
四万七十五
四万七十六
四万七十七
四万七十八
四万七十九
四万八十
四万八十一
四万八十二
四万八十三
四万八十四
四万八十五
四万八十六
四万八十七
四万八十八
四万八十九
四万九十
四万九十一
四万九十二
四万九十三
四万九十四
四万九十五
四万九十六
四万九十七
四万九十八
四万九十九
五万
五万一
五万二
五万三
五万四
五万五
五万六
五万七
五万八
五万九
五万十
五万十一
五万十二
五万十三
五万十四
五万十五
五万十六
五万十七
五万十八
五万十九
五万二十
五万二十一
五万二十二
五万二十三
五万二十四
五万二十五
五万二十六
五万二十七
五万二十八
五万二十九
五万三十
五万三十一
五万三十二
五万三十三
五万三十四
五万三十五
五万三十六
五万三十七
五万三十八
五万三十九
五万四十
五万四十一
五万四十二
五万四十三
五万四十四
五万四十五
五万四十六
五万四十七
五万四十八
五万四十九
五万五十
五万五十一
五万五十二
五万五十三
五万五十四
五万五十五
五万五十六
五万五十七
五万五十八
五万五十九
五万六十
五万六十一
五万六十二
五万六十三
五万六十四
五万六十五
五万六十六
五万六十七
五万六十八
五万六十九
五万七十
五万七十一
五万七十二
五万七十三
五万七十四
五万七十五
五万七十六
五万七十七
五万七十八
五万七十九
五万八十
五万八十一
五万八十二
五万八十三
五万八十四
五万八十五
五万八十六
五万八十七
五万八十八
五万八十九
五万九十
五万九十一
五万九十二
五万九十三
五万九十四
五万九十五
五万九十六
五万九十七
五万九十八
五万九十九
六万
六万一
六万二
六万三
六万四
六万五
六万六
六万七
六万八
六万九
六万十
六万十一
六万十二
六万十三
六万十四
六万十五
六万十六
六万十七
六万十八
六万十九
六万二十
六万二十一
六万二十二
六万二十三
六万二十四
六万二十五
六万二十六
六万二十七
六万二十八
六万二十九
六万三十
六万三十一
六万三十二
六万三十三
六万三十四
六万三十五
六万三十六
六万三十七
六万三十八
六万三十九
六万四十
六万四十一
六万四十二
六万四十三
六万四十四
六万四十五
六万四十六
六万四十七
六万四十八
六万四十九
六万五十
六万五十一
六万五十二
六万五十三
六万五十四
六万五十五
六万五十六
六万五十七
六万五十八
六万五十九
六万六十
六万六十一
六万六十二
六万六十三
六万六十四
六万六十五
六万六十六
六万六十七
六万六十八
六万六十九
六万七十
六万七十一
六万七十二
六万七十三
六万七十四
六万七十五
六万七十六
六万七十七
六万七十八
六万七十九
六万八十
六万八十一
六万八十二
六万八十三
六万八十四
六万八十五
六万八十六
六万八十七
六万八十八
六万八十九
六万九十
六万九十一
六万九十二
六万九十三
六万九十四
六万九十五
六万九十六
六万九十七
六万九十八
六万九十九
七万
七万一
七万二
七万三
七万四
七万五
七万六
七万七
七万八
七万九
七万十
七万十一
七万十二
七万十三
七万十四
七万十五
七万十六
七万十七
七万十八
七万十九
七万二十
七万二十一
七万二十二
七万二十三
七万二十四
七万二十五
七万二十六
七万二十七
七万二十八
七万二十九
七万三十
七万三十一
七万三十二
七万三十三
七万三十四
七万三十五
七万三十六
七万三十七
七万三十八
七万三十九
七万四十
七万四十一
七万四十二
七万四十三
七万四十四
七万四十五
七万四十六
七万四十七
七万四十八
七万四十九
七万五十
七万五十一
七万五十二
七万五十三
七万五十四
七万五十五
七万五十六
七万五十七
七万五十八
七万五十九
七万六十
七万六十一
七万六十二
七万六十三
七万六十四
七万六十五
七万六十六
七万六十七
七万六十八
七万六十九
七万七十
七万七十一
七万七十二
七万七十三
七万七十四
七万七十五
七万七十六
七万七十七
七万七十八
七万七十九
七万八十
七万八十一
七万八十二
七万八十三
七万八十四
七万八十五
七万八十六
七万八十七
七万八十八
七万八十九
七万九十
七万九十一
七万九十二
七万九十三
七万九十四
七万九十五
七万九十六
七万九十七
七万九十八
七万九十九
八万
八万一
八万二
八万三
八万四
八万五
八万六
八万七
八万八
八万九
八万十
八万十一
八万十二
八万十三
八万十四
八万十五
八万十六
八万十七
八万十八
八万十九
八万二十
八万二十一
八万二十二
八万二十三
八万二十四
八万二十五
八万二十六
八万二十七
八万二十八
八万二十九
八万三十
八万三十一
八万三十二
八万三十三
八万三十四
八万三十五
八万三十六
八万三十七
八万三十八
八万三十九
八万四十
八万四十一
八万四十二
八万四十三
八万四十四
八万四十五
八万四十六
八万四十七
八万四十八
八万四十九
八万五十
八万五十一
八万五十二
八万五十三
八万五十四
八万五十五
八万五十六
八万五十七
八万五十八
八万五十九

八 歸るべし〇エホバかくいひたまへり我ユダの王ゼデキヤとその牧伯等およびエルサレムの人の遺りて此地に
九 なる者ならびにエジプトの地に住る者とを此惡くして食ほれ去る事き無花果のこはくして食ほれ去る事き無花果のごとくになさん九我かれらを
一〇 して地のもろ〳〵の國にて虐遇と災害にあはしめん又彼らをしてわが逐やらん諸の處にて辱にあはせ
一一 誹とこれざ となり嘲と詛に遭しめん十一われ劍と饑饉と疫病をかれらの間におくりて彼らをしてわが彼らとそ
一二 の先祖にあたへし地に絕るにいたらしめん
一三 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年バビロンの王子ブカデ子ザルの元年にユダのすべて
一四 の民にかゝはる言エレミヤにのべり預言者エレミヤこの言をユダのすべての民とエルサレムにすめる
一五 すべての者に告ていひけるは萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝らと我僕なるバビロンの王子ブカデ子ザルを招きよせ此地とその民と其四圍の諸國を攻滅さしめて之を詛
一六 異物となし人の嗤笑となし永遠の荒地となさんと
一七 の聲新婚の聲磨の音および燈の光を彼らの中にたえしめん十一この地はみな空曠となり詛異物
一八 さならん又その諸國は七十年の間バビロンの王
一九 しの後我バビロンの王と其民とカルデヤの地をその罪のために罰し永遠の空曠となさん十三我かの地につきて
二〇 我かたりし諸の言をその上に臨しめん是エレミヤが萬國の事につきて預言したる者にて皆この書に錄さる
二一 るなり十四多の國々と大なる王等は彼らをして己につかへしめん我かれらの行爲とその手の所作に循てこ
二二 れに報いん〇十五イスラエルの神エホバかく我に云たまへり我手より此怒の杯をうけて我汝を遣す
二三 こころの國々の民に飲しめよ十六彼らは飲てよろめき狂はんこは我かれらの中に劍をつかはすによりてなり
二四 十七是に於てわれエホバの手より杯をうけエホバのわれを遣したまふところの國々の民に飲しめたり十八
二五 即ちエルサレムとユダの諸の邑とその王等およびその牧伯等に飲せてこれをほろぼし詛異物となし人の
二六 嗤笑となし詛る〳〵者となせり今日のごとし十九またエジプトの王パロとその臣僕その牧伯等その諸の民と
二七 二十諸の雜種の民およびウヅの諸の王等およびペリシテ人の地の諸の王等アシケロンガザエクロンア
二八 シドの遺餘の者二一エドムモアブ・アンモンの子孫二二ツロのすべての王等シドンのすべての王等海の
二九 かなたの島々の王等二三デダンテマブスおよびすべて鬢をそる者二四アラビヤのすべての王等曠野の雜
三〇 種の民の諸の王等二五ジムリの諸の王等エラムの諸の王等メデアのすべての王等二六北のすべての王等そ
三一 の彼と此とにおいて或は遠き者或は近きもの凡地の面にある世の國々の王等はこの杯を飲んセシヤク王
三二 はこれらの後に飲べし二七故に汝かれらに語ていへ萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ我汝等の
三三 中に劍を遣すによりて汝らは飲みまた醉ひまた吐き又仆て再び起されこ二八彼等もし汝の手より此杯
三四 を受て飲ずば汝かれらにいへ萬軍のエホバかくいひたまふ汝ら必ず飲べし二九視よわれ我名をもて稱へら
三五 るゝこの邑にすら災を降すなり汝らいかで罰を免かるゝことをえんや汝らは罰を免れじ蓋われ劍をよびて
三六 地に住るすべての者を攻べければなりこ萬軍のエホバいひたまふ〇三十汝彼等にこの諸の言を預言して
三七 いふべしエホバ高き所より呼號り其聖宮より聲を出し己の住家に向てよばはり地に住る諸の者にむひ
三八 て葡萄を踐む者のごとく吶たまはん三一號吶地の極まで聞ゆ蓋エホバ列國と爭ひ萬民を審き惡人を劍に
三九 付せば也とエホバ曰たまへり三二萬軍のエホバかく曰たまふ視よ災いで〳〵國より國にいたらん大なる暴風
四〇 地の極よりおこるべし三三其日エホバの戮したまふ者は地の此極より地の彼の極に及ばん彼等は哀まれず殮

四四 められず葬られずして地の面に糞土とならん 三四 牧者よ哭き叫べ群の長等よ灰の中に轉ぶべし蓋汝らの屠らるゝ日滿れば也我汝らを散すべければ汝らは貴き器の如く墮べし 三五 牧者は避る處なし三六 牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭きこゆ蓋エホバ其牧場を滅したまへば也 三七 エホバの烈き怒によりて平安なる牧場は滅さる 三八 彼は獅子の如く其巢を出たり滅す者の怒と其烈き忿によりて彼らの地は荒されたり

第二十五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言いでゝ ニ エホバかくいふ汝エホバの室の庭に立我汝に命じていはしむる諸の言をユダの邑々より來りてエホバの室に拜むる諸の人々に告よ一言をも減す勿れ 三 彼等聞ておのゝ其惡き途を離るゝことあらん然ば我かれらの行の惡がために災を彼らに降さんとせしことを悔べし 四 汝彼等にエホバかくいふさいへ汝等もし我に聽ずわが汝らの前に置し律法を行はず五 我汝らに遣し切に遣せし我僕なる預言者の言を聽ずば（汝らは之をきかざりき）六 我この室をシロの如くになし又この邑を地の萬國に詛はるゝ者となすべし七 祭司と預言者および諸の民彼エレミヤがエホバの室にて此言をいふをきけり 八 エレミヤエホバに命ぜられし諸の言を民に告畢りしとき祭司と預言者および諸の民彼を執へいひけるは汝は必ず死べし九 汝何故にエホバの名をもて預言し此室はシロの如くになりこの邑は荒蕪さなりて住む者なきにいたらんと云しやと民みなエホバの室にあつまりてエレミヤを攻むト ユダの牧伯等この事をきゝて王の家をいでエホバの室にのぼりてエホバの新き門の入口に坐せり十一 祭司と預言者等牧伯等とすべての民に訴ていふ此人は死にあたる者なり是は汝らが耳に聽しごとくこの邑にむかひて惡き預言をなしたるなり十二 是に於てエレミヤ牧伯等とすべての民にいひけるはエホバ我を遣してこの諸の言を汝らの耳につげしめたまひしなればなり十六 牧伯等とすべての民すなはち祭司と預言者にいひけるは此人は死にあたる者にあらず是は我らの神エホバの名によりて我儕に語りしなりと十七 時にこの地の長老數人立て民のすべての集れる者につげていひけるは十八 ユダの王ヒゼキヤの代にモレシテ人ミカユダの民に預言して云けらく萬軍のエホバかくいひたまふシオンは田地のごとく耕されエホサレムは邱墟となり此室の山は樹深き崇邱さならんと十九 ユダの王ヒゼキヤとすべてのユダ人は彼を殺さんとせしことありしやヒゼキヤエホバを畏れエホバに求ければエホバ彼らに降さんと告給ひし災を悔給ひしにあらずや我儕かく爲すは自己の靈魂をそこなふ大なる惡をなすなり二十 又前にエホバの名をもて預言せし人ありキリヤテヤリムのシマヤの子ウリヤなり彼エレミヤの凡ていへるごとくこの邑とこの地にむかひて預言せりニ一 エホヤキム王と其すべての勇士とすべての牧伯等その言を聽り是において王彼を殺さんと欲ひしがウリヤこれをきゝ懼てエジプトに逃ゆきしかば ニ二 エホヤキム王人をエジプトに遣はせり即ちアクボルの子エルナタンに數人をそへてエジプトより引出しエホヤキム王の許に携きたりしに ニ三 王剣をもて之を殺し屍骸を賤者の墓に棄させたり

ニ四 時にシヤパンの子アヒカムエレミヤをたすけこれを民の手にわたして殺さゝらしむ

第二十七章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言エレミヤに臨みていふ ニ すなはちエホバかく我に云たまへり汝索と軛をつくりて汝の項に置き三 之をエルサレムにきたりてゼデキヤ王にいたるところの使臣等の手によりてエドムの王ろべし四 汝彼らに命じて其主にいはしめよ萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝ら其主にかく告べし五 われ我大なる能力と伸たる臂をもて地と地の上になる人と獸さをつくり我心のまゝに地を人にあたへり六 いま我この諸の地を我僕なるバビロンの王ネブカデネザルの手にあたへ又野の獸を彼にあたへ

七 てかれにつかへしむ七かれの地の時期いたるまで萬國民は彼と其子とその孫につかへん其時いたらばおほ
八 くの國と大なる王は彼を己に事へしむべし八バビロンの王ネブカデ子ザルに事へずバビロンの王の軛をその
九 項に負ざる國と民は我彼の手をもて悉くこれを滅すまで劍と饑饉と疫病をもてこれを罰せんとエホバい
ひたまふ九故に汝らの預言者なんぢらの占筮師汝らの夢みる者汝らの法術士汝らの魔法士汝らに告
十 て汝らはバビロンの王に事ふることあらじといふことも聽なかれ十彼らは誕を汝らに預言して汝らをその
十一 國より遠く離れしめ且我をして汝らを逐しめ汝らを滅さしむるなり十一然ど バビロンの王の軛をその項に負
十二 ふて彼に事ふる國々の人は我これをその故土に存し其處に耕し住しむべしとエホバいひたまふ〇十二我この
諸の言のごとくユダの王ゼデキヤに告ていひけるは汝らバビロンの王の軛を汝らの項に負ふて彼と其民
十三 につかへよ然ば生べし十三汝と汝の民なんぞエホバがバビロンの王につかへざる國につきていひたまひし
十四 如く劍と饑饉と疫病に死ぬべけんや十四故に汝らはバビロンの王に事ふることあらじと汝等に告る預言者
十五 の言を聽なかれ彼らは誕を汝らに預言するなり十五エホバいひたまひけるは我彼らを遣さざるに彼らは我
十六 名をもて誕を預言す是をもて我汝らを逐はなち汝らと汝らに預言する預言者等を滅すにいたらん十六
我また祭司とこのすべての民に語ていひけるはエホバかくいひたまふ視よエホバの室の器皿いま速にバ
十七 ビロンより持歸さるべしと汝らに預言する預言者の言をきく勿れそは彼ら誕を汝らに預言すればなり
十八 汝ら彼らに聽なかれバビロンの王に事へよ然ば生べしこの邑を何ぞ荒蕪となすべけんや十八もし彼ら預
言者にしてエホバの言かれらの裏にあらばエホバの室とユダの王の家とエルサレムとに餘れるところの器皿
十九 のバビロンに移されざることを萬軍のエホバに求むべきなり〇十九萬軍のエホバ柱と海と臺およびこの邑
二十 に餘れる器皿につきてかくいひたまふ二十是はバビロンの王ネブカデ子ザルがユダの王エホヤキムの子エコ
二一 ニヤおよびユダとエルサレムのすべての牧伯等をエルサレムよりバビロンにとらへ移せしときに掠ざりし器
皿なり二一すなはち萬軍のエホバイスラエルの神エホバの室とユダの王の室とエルサレムとに餘れる器皿に

二二 つきてかくいひたまふ二二これらはバビロンに
第二十八章
一 この處にたづさへ歸らしめんとエホバいひたまふ
二 この年すなはちユダの王ゼデキヤが位に即し初その四年の五月ギベオンのアズルの子なる預
三 言者ハナニヤ エホバの室にて祭司と凡の民の前にて我に語りいひけるは二萬軍のエホバイスラエルの神かく
四 いひたまふ我バビロンの王の軛を摧けり三二年の内にバビロンの王ネブカデ子ザルがこの處より取てバビロ
五 ンに携へゆきしエホバの室の器皿を再び悉くこの處に歸らしめん四我またユダの王エホヤキムの子エコニ
六 ヤおよびバビロンに往しユダのすべての擄人をこの處に歸らしめんそは我バビロンの王の軛を摧くべけ
七 ればなりと エホバいひたまふ〇五是に於て預言者エレミヤすなはち
八 預言者ハナニヤと語ふ六預言者エレミヤ願はエホバかくなし給へ願くばバビロ
九 ンに携へゆかれしエホバの室の器皿およびすべて虜へうつされし者をエホババビロンより復びこの處に歸ら
十 しめたまはんと汝の預言せし言の成んことを
十一 言をきけ八我と汝の先にいでし預言者は古昔より多の地と大なる國につきて戰闘と災難と疫病の事を預言
十二 せり九泰平を預言する所の預言者は若しその預言の成にエホバの遣したまへる者なるこ
と知るべし〇十こゝに於て預言者エレミヤの項より軛を取てこれを摧けり十一ハナニヤ
諸の民の前にて語りエホバかくいひたまふわれ二年のうちに是の如く萬國民の項よりバビロン王ネブカ
十三 デ子ザルの軛を摧きはなさんといふ預言者エレミヤ遂に去りぬ十二預言者ハナニヤ預言者エレミヤの項よ
十四 り軛を摧きはなせし後エホバの言エレミヤに臨みていふ十三汝ゆきてハナニヤにエホバかくいふと告よ汝
木の軛を摧きたれども之に代て鐵の軛を作れりと十四萬軍のエホバイスラエルの神かくいふ我鐵の軛をこの萬
十五 國民の項に置きてバビロンの王ネブカデ子ザルに事へしむ彼ら之につかへんわれ野の獸をもこれに與へたり
十六 〇十五また預言者エレミヤ預言者ハナニヤに謂ふ聽けエホバ汝を遣はしたまはず

十六 汝はこの民に眺を信ぜしむるなり 十六 是故にエホバ
十七 叛くことなく教ふるによりて今年死べしと 十七 預言者
ハナニヤは此の年の七月死り

第二十九章

一 預言者エレミヤエルサレムより書を
二 言者ならびに子プカデ子ザルがエルサレムよりバビ
三 王と王后と寺人およびユダとエルサレムの牧伯等およ
四 びに木匠と鐵匠はエルサレムをされり三 エレミヤその書
五 をシャパンの子エラサおよびヒルキヤの子ゲマリヤ
六 即ちユダの王ゼデキヤがバビロンに移さしめし者にいくい
七 ンの王子プカデ子ザルにいたらしむる者の手によりて
八 べて擄うつされし者即ち我エルサレムよりバビロ
九 圍をつくりてその果をくらへ六 妻を娶て子女をう
十 子女を生しめよ此は汝等がここに減ずして増ん
十一 を求めこれが爲にエホバにいのれその邑の安によりて
十二 ルの神かくいひたまふ汝らの中の預言者ト筮士に惑はざる
十三 たがふ勿れ又そは彼ら我名をもて譃を汝らに預言
十四 バかくいひたまふバビロンに於て七十年滿なばわれ
十五 歸らしめん 十一 エホバいひたまふ我ひ汝らにむかひて
十六 んことにあらず平安を與へんとおもひ又汝らに後と望をあたへ
十七 にいのらん我汝らに聽べし 十三 汝らもし一心をもて
十八 汝らの遇ところとならんわれ汝らの俘擄を解き 汝
十九 汝らをして擄らはれて離れ去めしその處に汝らをひき歸らん
二十 よりバビロンにおくりし諸の俘擄人よ汝らエホバ
二一 ヤの子アハブとマアシヤの子ゼデキヤにつきて萬軍
二二 ンの王子ブカデ子ザルの手に付さん彼これを汝らの
二三 皆かれらをもて詛となし 願はエホバ 汝をバビロ
たゝはん事をさいふ 二三 こは彼らイスラエルの中に
をわが名をもて語りしによる我これを知りまた証す
二四 語りいふべし二五 萬軍のエホバイスラエルの神かく
二五 祭司シマヤの子ゼパニヤおよび諸の祭司に送りてい
二六 をエホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且
二七 ためなり 二七 然るに汝いま何故に 汝らにむかひて
二八 を斥責めざるや 二八 そは彼バビロンにをる我儕に書
二九 てその實をくらへといへり 二九 祭司ゼパニヤこの書
三十 エレミヤにのぞみていふ 三一 諸の俘擄人に書をおく
三一 いふ我シマヤを遣さよるに彼汝らに預言し汝らに
三二 へラミ人シマヤと其子孫を罰すべし彼エホバに逆
三三 らさ偕にこゝへ移されざりし兄弟につきてエホバかくいふ視よわれ劍と饑饉と疫
三四 饑饉と疫病を彼らにおくり彼らを惡くして食はれ
三五 病をもて彼らを逐ひまた彼らを地の萬國にわたして
三六 異こなり人の嗤笑こなり恥辱こならしめん 十九 是
三七 を我僕なる預言者によりて遣り頻におくれども汝
三八 よりバビロンにおくりし諸の俘擄人よ汝らエホバ
三九 ヤの子アハブとマアシヤの子ゼデキヤにつきて萬軍
四十 ンの王子ブカデ子ザルの手に付さん彼これを汝らの
四一 皆かれらをもて詛となし願はエホバ汝をバビロ
四二 たゝはん事をさいふ 二三 こは彼らイスラエルの中に
四三 をわが名をもて語りしによる我これを知りまた証す
四四 語りいふべし二五 萬軍のエホバイスラエルの神かく
四五 祭司シマヤの子ゼパニヤおよび諸の祭司に送りてい
四六 をエホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且
四七 ためなり 二七 然るに汝いま何故に 汝らにむかひて
四八 を斥責めざるや 二八 そは彼バビロンにをる我儕に書
四九 てその實をくらへといへり 二九 祭司ゼパニヤこの書
五十 エレミヤにのぞみていふ 三一 諸の俘擄人に書をおく
五一 いふ我シマヤを遣さよるに彼汝らに預言し汝らに
五二 へラミ人シマヤと其子孫を罰すべし彼エホバに逆

も住ふとなからん且我民に吾がなさんとする善事をみざるべしとエホバいひたまふ

第三十章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふニイスラエルの神エホバかく告ていふ我汝に言し言を
二 ことごとく書に錄せ三 エホバいふわれ我民イスラエルとユダの俘囚人を返す日きたらんエホバこれをいふ
三 我彼らをその先祖にあたへし地にかへらしめん彼らは之をたもたん○四 エホバのイスラエルとユダにつきて
四 いひたまひし言は是なり五 エホバかくいふ我ら戰慄の聲をきく、驚懼あり平安あらず六 汝ら子を產む男あるや
五 尋ね觀よ我男が皆子を產む婦のごとく手をその腰におき且その面色皆青く變るをみるこは何故ぞや
六 哀かなその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤコブの患難の時なり然ど彼はこれより救出されん
七 萬軍のエホバいふ其日我なんぢの項よりその軛をくだきはなし汝の繩目をさかん異邦人は復彼を使役は
八 ざるべし九 彼らは其神エホバと我彼らの爲に立んところのその王ダビデにつかふべしと エホバいふ我僕ヤコ
九 ブよ懼るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ我汝を遠方より救ひ汝の子孫を其ところへ移されし地より救ひ
十 かへさんヤコブは歸りて平穩と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし十一 エホバいふ我汝と偕にありて
十一 汝を救はん設令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすとも汝をば滅しつくさじされど我道をもて汝を懲さ
十二 ん汝を全たく罰せずにはおかざるべし○十二 エホバかくいふ汝の創は愈ず汝の傷は重し十三 汝の訟を理
十三 す者なく汝の創を裹む膏藥あらず十四 汝の愛する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の怨の多きさ罰の數
十四 多なるによりて我仇敵の擊がごとく汝を擊ち嚴く汝を懲せばなり十五 何ぞ汝の創のために叫ぶや汝の患
十五 は愈ざることなし汝の怨の多きさ罪の數多なるによりて我これを汝になすなり十六 然ど凡て汝を食ふ者は食
十六 ブよ懼るゝ勿れ汝を虐ぐる者は皆虜へられん凡て汝の物を奪ふ者は我これを奪はるべし十七 エホバいふ我汝の傷を醫さんそは人汝を棄られし者とよび尋ることなき シオンさいへばなり○十八 エホバかくいふ視よわれかの擄移されたるヤコブの天幕をかへし其住居をあはれまん斯邑はその故の丘堘に建られん城には宜き樣に人住はん十九 感謝と歡樂者の聲とその中より

いで ん我かれらを增ん彼ら少からじ我彼らを崇せん彼
二十 は我前に固く立ん凡かれを虐ぐる者は我これを罰せん二
二十一 其子は嚆昔のごとくあらん其集會
二十二 我彼をかづけ彼に近かん誰かその生命を繫て我に近くものあらんや
二十三 は汝らの神とならん二三 みよエホバの暴風あり怒こ旋轉風いでゝ惡人の首をうたん二四 エホバの烈き怒
二十四 はかれがその心の思を行ひてこれを遂るまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん

第三十一章

一 エホバいひたまふ其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん二 エホバ
二 かくいひたまふ劍をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たりわれ往て彼イスラエルに安息をあたへん三 遠
三 方よりエホバ我に顯れていひたまふ我窮なき愛をもて汝を愛せり故にわれたえず汝をめぐむなり四 イス
四 ラエルの童女よわれ復び汝を建ん汝は建らるべし汝ふたゝび鼓たもて身を飾り歡樂者の舞にいでん五 汝
五 また葡萄の樹をサマリヤの山に植ん植る者は植てその果を食ふことをえん六 エフライムの山の上に守望者の
六 立て呼ばる日きたらん、いはく汝ら起よ我らシオンにのぼりて我儕の神エホバにまうでんと七 エホバかくい
七 ひたまふ汝らヤコブの爲に歡て呼はり萬國の首なる者のために叫べ汝ら示し且歌ひて言へエホバよ願くは
八 イスラエルの遺れる者汝の民を救ひたまへと八 みよ我彼らを北の地より引きかへり彼らを地の極より集め
九 ん彼らの中には瞽者跛者孕める婦子を產し婦ともに居る彼らは大なる群をなして此處にかへらん九 彼ら悲
十 泣來らん我かれらをして祈禱をもて來らしめ直くして蹶かざる途より水の流に步みいたらしめん我はイスラ
十一 エルの父にしてエフライムは我長子なればなり○十 萬國の民よ汝らエホバの言をきゝ之を遠き諸島に示し
十二 ていへイスラエルを散せしものこれを聚め牧者のその群を守るが如く之を守らん十一 すなはちエホバヤコブ
十三 を贖ひ彼等よりも強き者の手よりかれを救出したまへり十二 彼らは來てシオンの頂によばゝりエホバの
十四 賜ひし福なる麥と酒と油および若き羊と牛の爲に寄集はんその靈魂は潤ふ園のごとくならん彼らは重て愁
十五 ふることを無るべし十三 その時童女は舞てたのしみ壯者と老者もろともに樂しまん我かれらの悲みか

十四 へて喜ざなしかれらの愁をさりてこれを慰さめん 十四わ
十五 満しめんさエホバ言たまふ○十五 エホバかくいひたまふ歎き悲みいたく亜ふる聲ラマに聞ゆラケルその兒子
十六 のために歎きその兒子のあらずなりしによりて慰をえず 十六エホバ
十七 かくいひたまふ汝の聲を禁て涙を流すこと勿れ汝の工に報あるべし彼らは其敵の地より歸らんと
十八 エホバいひたまふ○十七 われ固にエフライムのみづから歎くを
十九 きけり云く汝は我を懲しめたまふ我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受たり エホバよ汝はわが神なれば我を
二十 牽轉したまへ然ば我轉るべし 十九われ轉りし後に悔い教を承しのちに我髀を撃つ我幼時の羞を身にもてば
二一 恥ちかつ辱しめらるふなりさ 二十エホバいひたまふエフライムは我愛するさこころの子悦ぶさこころの子ならず
二二 や我彼にむかひてかたるごとに彼を念はざるを得ず是をもて我腸かれの爲に痛む我必ず彼を恤むべし
二三 二 汝のために指路號を置き汝のために柱をたてよ汝のゆけろ道なる大路に心をとめよイスラエルの童女よ
二四 歸れこの汝の邑々にかへれよ 二三遠ける女よ汝いつまで流遊ふやエホバ新き事を地に創造らん女は男
二五 を抱くべし○二三萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ我かの俘囚し者を返さん時人々復ユダの地
二六 とその邑々に於て此言をいはん義き居所よ聖き山よ願くはエホバ汝を祝みたまへと 二四ユダとその諸の
二七 邑々に農夫と群を牧ふもの偕に住はん 二五われ疲れたる靈魂を飫しめすべての憂ふる靈魂をなぐさむるなり
二八 茲にわれ目を醒しみるに我眠は甘かりし○二七エホバ
二九 エルの家とユダの家とに播く日いたらん 二八我彼らを抜き毀ち覆し滅し難さんとうかようふべしとエホバいひたまふ 二九その時彼ら
三十 な建植んとうかようふべしとエホバいひたまふ 三十人はおの〳〵自己の悪によりて死なん凡そ酸き葡萄をくらふ人はその齒讒く○三一
三一 と再びいはざるべし 三十人はおの〳〵自己の悪によりて死なん凡そ酸き葡萄をくらふ人はその齒讒く○三一
三二 エホバいひたまふみよ我イスラエルの家とユダの家とに新き契約はわが彼
三三 らの先祖の手をとりてエジプトの地より導きいだせし日に立し所の如きにあらず我かれらを娶りたれ
三四 ども彼らはその我契約を破れりとエホバいひたまふ 三三然ど此なり即ちわれ我律法をかれらの裏におきその心の上に錄さん我は彼らの神となり彼らは我民となるべしとエホバいひたまふ 三四人おの〳〵其隣とその兄弟に教へて汝エホバを識と復いはじそは少より大にいたるまで悉く我をしるべければなりとエホバ
三五 いひたまふ我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし 三五エホバかく言すなはち是日をあたへて晝の光となし月と星をまだめて夜の光となし海を激してその濤を鳴しむる者その名は萬軍のエホバと言なり 三六エホバいひたまふもし此等の規律我前に廢らばイスラエルの子孫も我前に廢りて永遠も民たることを得ざるべし
三六 三七エホバかくいひたまふ若し上の天量ることを得下の地の基探ることをえば我またイスラエルのすべての子孫を其もろ〳〵の行のために棄べしエホバこれをいふ 三八エホバいひたまふ視よ此邑ハナ子ルの塔より隅の門までエホバの爲に建つ日きたらん 三九量繩ふたゝび直ちにガレブの岡をこえゴアテの方に轉るまでこ東の方の馬の門の隅にいたるまでの諸の田地皆エホバの聖き邑となり永遠におよぶまで再び抜れまた覆さるゝ事なかるべし

第三十一章

一 ユダの王ゼデキヤの十年即ち子ブカデ子ザルの十八年の頃エホバの言エレミヤにのぞ
二 めりニその時バビロンの軍勢エルサレムを攻環み居て預言者エレミヤはユダの王の室にある獄の庭の内に禁
三 錮られたり三 ユダの王ゼデキヤ彼を禁錮ていひけるは汝何故に預言してエホバかく云たまふといふや云く
四 視よ我この邑をバビロン王の手に付さん彼之を取るべし四 またユダの王ゼデキヤはカルデヤ人の手より脱れ
五 す必ずバビロン王の手に付され口と口さあひ語り目と目あひ覩るべし五彼ゼデキヤをバビロンに携きゆかん
六 ゼデキヤはわが彼を願る時まで彼處に居んとエホバいひたまふ汝らカルデヤ人と戦ふとも勝ことを得じと
七 ○六エレミヤいふエホバの言我に臨みていはく七みよ汝の叔父シヤルムの子ハナメル汝にきたりていはん汝アナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ふ事は汝の分なればなりさ八かくてエホバの言のごとく我

叔父の子ハナメル獄の庭にて我に來り云けるは願くは汝ベニヤミンの地のアナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ふことは汝の分なれば汝みづから之を買ひこれを贖ふことに於てわれ此はエホバの言なりと知りたればル我叔父の子ハナメルがアナトテにもてる田地をかひて彼に銀十七シケルを稱てあたふ十なはち我その契券を書てこれに封印し証人たてすなはち我その契券を書てこれに封印し証人たて權衡をもて銀を稱て與ふ十一而してわれその約定をのするところの封印せし買券とその開きたるものを取り十二わが叔父の子ハナメルと買券に印せし証人の前およびル獄の庭に坐するユダ人の前にてその買契の前にてわれバルクに命じていひけるは十四萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝これらの契券なはち此買券の封印せし者と開きたるものを取り之を瓦器の中に貯へて多の日の間保たしめよ十五萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふそは此地に於て人復屋と田地と葡萄園を買ふにいたらんと〇十六われ買契をハルクに付せしのちエホバに祈りて云けるは十七嗚呼主エホバよ汝はその大なる能力と伸たる腕をもて天と地を造りたまへり汝には爲すに能はざることなし十八汝は恩寵を千萬人に施し又父の罪をその後の子孫の懷に報いたまふ汝は大なる全能の神にいまして其名は萬軍のエホバと稱うすなり十九汝の謀略は大なり汝は事をなすに能あり汝の目は人のこどもらの諸の途を鑒はしおの〳〵の行に循ひその行爲の果によりて之に報いたまふ二十汝休徴と奇跡をエジプトの地に行ひたまひて今日にまでいたるまたイスラエルと他の民の中にも然りかくして今日のごとくに汝の名を揚たまへり二一汝はイスラエルをエジプトの地より導きいだしを奇跡と強き手と伸たる腕と大なる怖しき事をもて汝の民イスラエルの先祖等に與へんと誓ひたまひし乳と蜜の流るる地なり二二この地を彼らにたまへり是即ち汝がかれらの祖等に與へんと誓ひたまひし乳と蜜の流るる地なり二三彼等すなはち入てこれを獲たりしかども汝の聲に遵はず汝の例典を行はず凡て汝がなせと命じたまひしことを爲ざりしによりて汝ここの災を其上にくだらしむ二四みよ壘成り是この邑を取んとて來れるなり劍と饑饉と疫病のためにこの邑は之を攻るカルデヤ人の手に付さる汝のいひたまひしことば既に成れり汝之を見たまふなり二五主エホバよ汝われに銀をもて田地を買へ証人を立よといひたまへり然るにこの邑はカルデヤ人の手に付さる〇二六時にエホバの言エレミヤに臨みていふ二七みよ我はエホバなりすべて血氣ある者の神なり我に爲す能はざることあらんや二八故にエホバかくいふ視よわれ此邑をカルデヤ人の手とバビロンの王ネブカデネザルの手に付さん彼これを取るべし二九この邑に攻るところのカルデヤ人きたり火をこの邑に放て之を焚ん屋蓋のうへにて人がバアルに香を焚き他の神に酒をそゝぎて我を怒らせしその屋をも彼ら亦焚ん三十そはイスラエルの子孫とユダの子孫とはその幼少時よりわが前に惡き事のみをなしまたイスラエルの民はその手の作爲をもて我をいからすることのみをなしたればなりエホバ之をいふ三一此邑はその建し日より今日にいたるまで我震怒を憑き我憤恨をおこすところの者なれば我前よりわれ之を除かんとするなり三二これはイスラエルの民とユダの民諸〻の惡を行て我を怒らせしによりてなり彼らその王等その牧伯等その祭司その預言者およびユダの人々とエルサレムに住る者皆然なせり三三彼らは背を我にむけて面を我にむけずわれ彼らを教へ頻に教ふれどもかれらは數をきかずしてうけざるなり三四彼らはその憎むべき物をわが名をもて稱へられる〻室にたてゝこれを汚し三五又ベンヒンノムの谷にあるバアルの崇邱を築きその子女をモロクに獻げたりわれは彼らにこの憎むべきことを命ぜず斯る事は我心におこらざりしなり〇三六いまイスラエルの神エホバこの邑すなはち汝らが劍と饑饉と疫病のためにバビロン王の手に付されんといひし所の邑につきて斯いひたまふ三七みよわれ我震怒と憤恨と大なる怒をもて彼らを逐やりし諸の國より彼らを集め此處に導きかへりて安然に居らしめん三八彼らは我民となり我は彼らの神とならん三九われ彼らに一の心と一の途をあたへて常に我を畏しめんこは彼らと其子孫とに福をえせしめん爲なり四十われ彼らを棄ずして恩を施すべしといふ永遠の契約をかれらにたて我を畏るるの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん四一われ悦びて彼らに恩を施し心を盡し精神をつくしてまことに彼らを此地に植べし四二エホバかくいひたまふわれ此諸の大なる災をこの民に降せしごとくわが

われらに言し詰の禍をかれらに降さん 四三 人衆この地に田畝を買はん是汝等が荒て人も畜もなきにいたりカルデヤ人の手に付されしといへる地なり 四四 人衆ベニヤミンの地とエルサレムの四周とユダの邑々さま〴〵山の邑々と平地の邑々と南の方の邑々において銀をもて田野をかひ契券を書きてこれに封印む又証人をおでんそは我かの俘囚者を歸らしむればなり エホバいひたまふ

第三十三章 一 エレミヤ尚獄の庭に禁錮られてをる時エホバの言ふたゞび彼に臨みていふ 二 事をおこなふエホバ事をなしてこれを成就るエホバその名をエホバと名る者かく言ふ 三 汝われに籲求めよわれ汝に應へん又汝が知ざる大なる事と秘密たることさゝを汝に示さん 四 イスラエルの神エホバ邑と劍によりて毀たれたるこの邑の室とユダの王の室につきてかくいひたまふ五 彼らカルデヤ人と戰はんとて來るは是には我震怒と憤恨をもて殺すところの人々の屍体充ろにいたらん我かれらの諸の惡のために面をこの邑に蔽ひかくせり六 視よわれ卷布と良藥をこれに持きたりて人々を醫し平康と眞實の豐厚なるをこれに示さんと 七 われユダの俘囚人とイスラエルの俘囚人を歸らしめ彼らを建て從前のごとくになすべし 八 われ彼らが我にむかひて犯せし一切の罪を潔め彼らが我にむかひて犯む且行ひし一切の罪を赦さん 九 此邑は地のもろ〴〵の民の中において我がために欣喜の名となり頌美となり榮耀となるべし彼等はわが此民にほどこすところの諸の恩惠を聞ん而してわがこの邑にほどこすところの諸の恩惠と諸の福祿のために發振へ且身を動搖さん 十 エホバかくいひたまへり汝らが荒て人もなく畜もなしといふこの處即ちエルサレムの街に十一 再び欣喜の聲歡樂の聲新婦の聲新婦の聲および萬軍のエホバをあがめよエホバは善にしてその矜恤は窮なしといひて感謝の祭物をエホバの室に携ふる者の聲聞ゆべし蓋われこの地の俘囚人を返らしめて初のごとくになすべければなりエホバ之をいひたまふ 十二 萬軍のエホバかくいひたまふ荒て人もなく畜もなきこの處と其すべての邑々に再び牧者のその群を伏て憩ふ牧場あるにいたらん 十三 山の邑と平地の邑と南の方の邑とベニヤミンの地とエルサレムの四周とユダの邑々において羊群ふたゝびその之を校ふる者の手の下を過らんとエホバいひたまふ 十四 エホバ言たまはく視よわれイスラエルの家とユダの家に語りし善言を成就る日きたらん 十五 その日その時にいたらばわれダビデのために一の義き枝を生ぜしめん彼は公道と公義を地に行ふべし 十六 その日ユダは救をえエルサレムは安らかに居らんその名はエホバ我儕の義と稱へらるべし 十七 エホバかくいひたまふイスラエルの家の位に坐する人ダビデに缺ることなかるべし 十八 また我前に燔祭をさゝげ素祭を燃し恒に犧牲を獻る人レビ人なる祭司に絕ざるべし 十九 エホバのことばエレミヤに臨みていふ 二十 エホバかくいふ汝らもし我晝につきての契約と我夜につきての契約を破りてその時々に晝も夜もなからしむることをえば 二一 僕ダビデに吾が立し契約もまた破れその子はかれの位に坐して王さなることさをえざらんまたわが我に事ふるレビ人なる祭司に立し契約も破れん 二二 天の星は數へられず濱の沙は量られずわれその如く我僕ダビデの裔と我に事ふるレビ人を增ん 二三 エホバの言またエレミヤに臨みていふ 二四 汝この民の語りてエホバはその選し二の族を棄たりさいふを聞ざるか彼らはかく我民を藐じてその眼にこれを國と見なさゞるなり 二五 エホバかくいひたまふもしわれ晝と夜とについての契約を立ずまた天地の律法を定めずば 二六 われヤコブと我僕ダビデとの裔をすてゝ再びかれの裔の中よりアブラハム イサク ヤコブの裔を治むる者を取ざるべし我その俘囚し者を返らしめこれを恤れむべし

第三十四章 一 バビロンの王子ブカデ子ザルその全軍および己の手の下に屬するところの地の列國の人およびその民を率てエルサレムとその諸邑を攻めて戰ふ時エホバの言エレミヤに臨みていふ 二 イスラエルの神エホバかくいふ汝ゆきてユダの王ゼデキヤに告ていふエホバかくいふ視よわれ此邑をバビロン王の手に付さん彼火をもて之を焚べし 三 汝はその手を脫れず必ず擒へられてこれが手に付されん汝の目はバビロン王の目をみ又かれの口は汝の口と語ふべし 四 然ごユダの王ゼデキヤよエホバの言をきけエホバ汝の事につきてかくいひたまふ汝は劍に死じ 五 汝は安らかに死なん民は汝の先

祖たる汝の先の王等の爲に香を焚しごとく汝のために
六 もも香を焚き且汝 のために嘆て嗚呼主よ
七 の言をいふとエホバいひたまふ預言者エレミヤすなはち此言 をことごとくエルサレムにてユダの王ゼデ
八 キヤにつげたり七時にバビロン王の軍勢はエルサレムおよび存れるユダの諸邑を攻ラキシとアゼカを攻
九 て戰ひたゝ其はユダの諸邑のうちに是等の城の邑倘存りゐたればなり〇八ゼデキヤ王エルサレムに居る
十 すべての民と契約を立て彼らに釋放 の事を宣示せし後エホバの言エレミヤに臨めり九その契約はすなはち人
十一 なしでおの〳〵其僕 婢なるヘブルの男 女を釋たしめその兄弟なるユダヤ人を奴隷となさゝらしむ
十二 る者なりき十この契約をなせし牧伯等とすべての民は人おの〳〵その僕 婢 を釋ちて再び之を奴隷となす
十三 べからずといふをきゝてゆるにそれに聽ゐたがひてこれを釋ちしが十一後に心をひるがへしてその釋ちし僕
十四 婢をひきかへりて再び之を伏從はしめて僕 婢となせり十二是故にエホバの言エレミヤにのぞみて云十三
十五 イスラエルの神エホバかくいふ我汝らの先祖をエジプトの地その奴隷たりし宅より導きいだ
十六 せし時彼らと契約を立ていひけらく十四汝らの兄弟なるヘブル人の身を汝らに賣たる者をば七年の終に汝
十七 らおの〳〵これを釋つべし彼六年汝につかへたらば之を釋つべしと然るに汝らの先祖等は我に聽ず亦その
十八 耳を傾けざりし十五然ど汝らは今日 心をあらためておの〳〵其 鄰 人に釋 放の事を示してわが目に正き
十九 みゆる事を行ひ且我名をもて稱へらるゝ室に於て我前に契約を立たり十六然るに汝ら再び心をひるがへし
二十 て我名を汚し各自釋ちて其心に任せしめたる僕 婢をひき歸り再び之を伏從しめて汝らの僕 婢と
二十一 なせり十七この故にエホバかくいひたまふ汝ら我に聽ておの〳〵其兄弟とその鄰に釋 放の事を示さゞりし
二十二 によりて視よわれ汝らの爲に釋 放を示して汝らを劍と饑饉と疫病にわたさん我 汝らをして地の諸
二十三 の國にて艱難をうけしむべし十八エホバこれを云ふ犢を二 兩にさきて其二個の間を過りし我前に契約をたてゝ
二十四 却つて其言に從はずわが契約をやぶる人々十九即ち兩 に分ちし犢の間を過りてユダの牧伯等エルサレ
二十五 ムの牧伯等と寺人と祭司とこの地のすべての民を二十わ れ其敵の手とその生命を索る者の手に付さんその屍

体は天空の鳥と野の獸の食物となるべし二一且われユダの王ゼデキヤとその牧伯等をその敵の手其生命を索
二二 むる者の手汝らを離れて去しバビロン王の軍勢の手に付さん二二 エホバいひたまふ視よ我彼らに命じて此邑
二三 に歸らしめん彼らこの邑を攻て戰ひ之を取り火をもて焚くべしわれユダの諸邑を住人なき荒地となさん

第三十五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時エレミヤにのぞみしエホバの言いふ二 汝レカブ人の家
二 に往て彼らとかたり彼らをエホバの室の一房に携きたりて酒をのませよと三 是に於てわれハバジニヤの子な
三 るエレミヤの子ヤザニヤとその兄弟とその諸子およびレカブ人の全家を取り四 これをエホバの室にあるハ
四 ナンの諸子の房につれきたれりハナンはイグダリヤの子にして神の人なりその房は牧伯等の房の次にして門
五 を守るシヤレムの子マアシヤの房のうへに在り五 われすなはちレカブ人の家の諸子の前に酒を滿したる盞さ
六 杯 を置き彼らに告て汝ら酒を飲めといひければ六 彼らこたへけるは我儕は酒をのまず盞レカブの子なるわ
七 れらの先祖ヨナダブ我らに命じて汝等と汝らの子孫はいつまでも酒をのむべからずまた汝ら屋を建ず種を
八 まかず葡萄園を植ず亦これを有べからず汝らの生涯は寄寓ところの地
九 に於て汝らの生命長からんと云たればなり八斯我らはレカブの子なるわれらの先祖ヨナダブの凡て命じし言
十 に遵ひて我儕われらの妻と子 女は生 存ふるあひだ酒を飲ずまた我らは住べき屋を建す葡萄園も田野
十一 も種も有ずして幕屋にをりすべて我儕の先祖ヨナダブが我らに命ぜしごとく行へり十一然どバビロンの王
十二 ネブカデネザルがこの地に上り來りしとき我ら云けるは我らカルデヤ人の軍勢とスリア人の軍勢を畏るればと
十三 去來エルサレムにゆかんとすなはち我らはエルサレムに住へり〇十二時にエホバの言エレミヤにのぞみて
十四 いふ十三萬軍のエホバイスラエルの神かくいふ汝ゆきてユダの人々とエルサレムに住る者とに告よエホバい
十五 ひたまふ汝らは我言を聽て教を受ざるか十四レカブの子ヨナダブがその子孫に酒な飲むべからずと命ぜし
十六 言は行はれ彼らは今日に至まで酒をのまず其先祖の命令に遵なり然ろに汝らは吾 汝らに頻り頻に語れ
ども我にきかざるなり十五我また我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣していはせけるは汝ら

いまおの〳〵其悪き道を離れて歸り汝らの行ひをあらためよ他の神に從ひて之に奉ふる勿れ然ば汝らはわが
十六 汝らと汝らの先祖に與へたるこの地に住ことをえんと然ど汝らは耳を傾ず我にきかざりき十六 レカブの子
十七 ヨナダブの子孫はその先祖が彼らに命ぜしところの命令に遵ふなり然ど此民は我に聽ず十七 この故に萬軍
の神エホバイスラエルの神かくいふ視よわれユダとエルサレムに住る者とに我彼らにつきていひし所の災
十八 を降さん我かれらに語れども聽ずかれらを召ども應へざればなり十八 茲にエレミヤレオブ人の家にいひける
十九 は萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝らはその先祖ヨナダブの命に遵ひその凡の誡を守り彼
が汝らに命ぜしことを行ふ十九 是によりて萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふレカブの子ヨナダブ
には我前に立つ人いつまでも缺ることあらじ

第二十七章

二十七章一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にこの言エホバよりエレミヤに臨みていふ二 汝巻物
をとり我汝に語りし日即ちヨシヤの日より今日に至るまでイスラエルとユダと萬國とにつきてわが汝に語
三 りしすべての言を之に錄せ三 ユダの家わが降さんと擬るところの災をきゝて各自その惡き途をはなれて轉
四 ることもあらん然ばわれ其愆とその罪を赦すべし四 是に於てエレミヤ子リヤの子パルクを召べりパルクすな
五 はちエレミヤの口にしたがひエホバの彼に告たまひし言を巻物に錄せり五 エレミヤパルクに云けら
六 るはわれは禁錮られたればエホバの室に往くことを得ず六 故に汝ゆきて汝が我の口に告たまひて巻物に錄し
たるエホバの言をよみ斷食の日にエホバの室にて民の耳にこれを聽しめよまた之を讀みてユダの人々のそ
七 の邑々より來れる者の耳に聽しむべし七 彼らエホバの前にその祈禱を獻り各自その惡き途をはなれて轉
こともあらんエホバの此民につきてのべたまひし憤は大なり八 斯て子リヤの子パルクは凡て預言者
八 エレミヤが己に命ぜしごとくエホバの室にてその巻物よりエホバの言を讀り〇九 ユダの王ヨシヤの子エホヤ
九 キムの五年九月エルサレムの諸の民およびユダの諸邑よりエルサレムに來れる諸の民にエホバの前に斷食
を行ふべきこと宣示さる十 パルクエホバの室の上庭に於てエホバの室の新しき門の入口の旁にあるシヤパ
十 ンの子なる書記ゲマリヤの房にてその書よりエレミヤの言を民に讀きかせたり十一 シヤパンの子なるゲマリ
十一 ヤの子ミカヤその書のエホバの言を盡くきゝて十二 王の宮にある書記の房にくだりいたるに諸の牧伯等即
十二 ち書記エリシヤマシマヤの子デラヤアカボルの子エルナタンシヤパンの子ゲマリヤハナニヤの子ゼデキヤ
十三 および諸の牧伯等そこに坐せり十三 ミカヤパルクが書を讀て民の耳に聽せしときに己が聽し所のすべての言
十四 を彼らに告ければ十四 牧伯等クシの子シレミヤの子ネタニヤの子エホデをパルクに遣していはせけるは
汝が民に讀きかせしその巻物を手に取て來れさればパルク子リヤの子パルクすなはち手に巻物を取りて彼らの許にきた
十五 りたれば十五 彼らパルクにいひけるは請ふ坐して之を我らに讀きかせよとパルクすなはち彼らに讀聞せたり
十六 彼らその諸の言をきゝて倶に懼れパルクにいひけるは我ら必ずこの諸の言を王に告んと十七 またパ
十七 ルクに問ていひけるは請ふ汝いかにこの諸の言を我に述べたればわれ墨をもて之を書に錄せしや我らに告よ十八 パルク答
十八 へけるは彼その口をもてこの諸の言を我に述べたればわれ墨をもて之を書に錄せり十九 牧伯等パルクにい
十九 ひけるは汝ゆきてエレミヤとゝもに身を匿し在所を人に知しむべからずと二十 すなはち巻物を書記エリシ
二十 ヤマの房に置きて庭にいり王に詣てこの諸の言を王につげゝれば二一 王その巻物を持來らせんとてエホデ
二一 を遣はせりエホデすなはち書記エリシヤマの房より巻物を取來りて之を王と王の側に立るすべての牧伯等
に讀きかせたり二一 時は九月にして王冬の室に坐せり其前に火の燃る爐あり二三 エホデ三枚か四枚を讀け
二三 る時王小刀をもてその巻物を切割き爐の火に投いれて之を盡く爐の火に焚り二四 王とその臣僕等はこの
二四 諸の言をきけども懼れず亦その衣を裂ざりき二五 エルナタンデラヤゲマリヤ等王にその巻物を焚たま
二五 ふ勿れと求めたれども聽ざりき二六 王ハンメレタの子エラメルとアズリエルの子セラヤとアブデルの子セレ
二六 メヤに書記バルクと預言者エレミヤを執へよと命ぜしがエホバかれらを匿したまへり〇二七 王巻物およびバ
二七 ルクがエレミヤの口にしたがひて記せし言を焚しのちエホバの言エレミヤに臨ていふ二八 汝また他の巻
二八 物をとりユダの王エホヤキムが焚しところの前の巻物の中の言をことゞく其に錄せ二九 汝またユダの王エ

ホヤキムに告よエホバかくいふ汝かの巻物を焚ていへり汝何なれば此巻物に録してバビロンの王必ず
三十 來てこの地を滅し此に人と畜を絶さんと云しや 三十一 この故にエホバ ユダの王エホヤキムにつきてかく
三一 いひたまふ彼には ダビデの 位に坐する者無にいたらん且かれの 屍は棄られて 霜は熱氣にあひ夜は寒
三二 氣にあはん 三二 我また彼とその子孫とその臣僕等をその悪のために罰せんまた彼らとエルサレムの民とユダ
三三 の人々には我わがかれらにつきて語りしかごも彼らが聽ことをせざりし所の禍を降すべし〇 三三 是に於て
エレミヤ他の巻物を取て子リヤの子書記バルクにあたふバルクすなはちユダの王エホヤキムが火に焚たる
ころの書の諸の言をエレミヤの口にしたがひて之に録し外にまた斯ろ言を多く之に加へたり

第三十七章 一 ヨシヤの子ゼデキヤエホヤキムの子コニヤに代りて王となる、バビロンの王子ブカデヅザル
二 彼をユダの地に王となせしなり 二 彼も其臣僕等もその地の人々もエホバが預言者エレミヤによりて示したま
ひし言を聽ざりき 三 ゼデキヤ王シレミヤの子ユカルとマアセヤの子祭司ゼパニヤを預言者エレミヤに遣して
請ふ汝我らの爲に我らの神エホバに祈れといはしむ 四 エレミヤは民の中に出入せりそはいまだ獄に入られ
ざればなり 五 パロの軍勢のエジプトより來りしかばエルサレムを攻圍みたるカルデヤ人は其音信をきゝて
エルサレムを退けり〇六 時にエホバの言預言者エレミヤにのぞみていふ七 イスラエルの神エホバかくいふ
汝ちを遣して我に求めしユダの王にかくいへ汝らを救はんとて出きたりしパロの軍勢はおのれの地エジプト
へ歸らん八 カルデヤ人再び來りてこの邑を攻て戰ひこれを取り火をもて焚べしエホバかくいふ汝らカル
デヤ人は必ず我らをはなれて去んといひて自ら欺く勿れ彼らは去ざるべし 九 設令汝らおのれを攻て戰
ふ人こころのカルデヤ人の軍勢を悉く擊ちやぶりてその中に負傷人のみを遺すとも彼らはおの〳〵其幕屋に
起ちあがり火をもて此邑を焚かん〇十 茲にカルデヤ人の軍勢パロの軍勢を懼れてエルサレムを退きけれ
ば 十一 エレミヤベニヤミンの地にて民の中に其分を分ち取んとてエルサレムをいで 十二 彼地にゆきしが 十三 ベ
ニヤミンの門にいりし時そこにてハナニヤの子シレミヤの子なるイリヤと名くる門守をり預言者エレミヤを
執へて汝はカルデヤ人に降るなりといふ 十四 エレミヤいひけるは詐なり我はカルデヤ人に降るにあらずさ
然どイリヤこれを聽ずエレミヤを執へて侯伯等の許に引ゆけり 十五 侯伯すなはち怒りてエレミヤを擊これ
を書記ヨナタンの室の獄にいれたり蓋この室を獄となしたればなり 十六 エレミヤ獄にいり土牢に入てそこ
に多の日を送りしのち 十七 ゼデキヤ王人を遣して彼をひきいだしむ而して王室にて窃にかれにいひける
はエホバより臨める言あるやとエレミヤ答へていひけるは有り汝はバビロン王の手に付されん 十八 エレミヤ
またゼデキヤ王にいひけるは我汝あるひは汝の臣僕或はこの民に何なる罪を犯したればか汝ら我を獄にい
れしや 十九 汝らに預言してバビロンの王は汝らにも此地にも攻來らじといひし汝らの預言者はいま何處にあ
るや 二十 されば王わが君よ願くばいま我に聽たまへ請ふわが願望を受納れたまへ我を書記ヨナタンの家に歸
らしめたまふなかれ恐くは我彼處に死なんと 二一 是において ゼデキヤ王命じてエレミヤを獄の庭にいれしめ
且邑のパンの悉く盡るまでパンを製る者の街より日々に一片のパンを彼に與へしむ即ちエレミヤは獄の庭
にをる

第三十八章 一 マツタンの子シパテヤ、パシユルの子ゲダリア、シレミヤの子ユカル、マルキヤの子パシユルエ
二 レミヤがすべての民に告たるその言を聞り 二 云くエホバかくいひたまふこの邑に留るものは劍と饑饉と疫病
に死べし然どいで〳〵カルデヤ人に降る者は生んすなはちその生命をおのれの掠取物となして生べし 三 エホ
バかくいひたまふこの邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん彼之を取べしと 四 是をもてかの牧伯等王に
いひけるは請ふこの人を殺したまへ彼はかくの如き言をのべて此邑に遺れる兵卒の手と民の手を弱くす夫人
は民の安を求めずしてその害を求るなりと 五 ゼデキヤ王いひけるは視よ彼は汝らの手にあり王は汝らに逆
ふこと能はざるなりと 六 彼らすなはちエレミヤを取て獄の庭にあるハンメレクの子マルキヤの阱に投いる即
ち索をもてエレミヤを繩下せしがその阱は水なくして汚泥のみなりければエレミヤは汚泥のなかに沈めり 七
王の室の寺人エテオピヤ人エベデメレク彼らがエレミヤを阱になげいれしを聞り時に王ベニヤミンの門に坐

八 しぬたれば八エベデメレク王の室よりいでゆきて王にいひけるは九王わが君よ此の人々が預言者エレミヤにおこなひし事は皆好らず彼らこれを陂になげ入たり邑の中に食物なければ彼はその居るところに餓死せん十王エ
十 テオピヤ人エベデメレクに命じていひけるは此より先に陂より曳あげよと十一エベデメレクすなはちその人々を携へて王の室の庫の下にいり其處より破れたる舊き衣の布片をとり索をもてこれを陂になる
十一 クエレミヤに告て汝この破れたる舊き衣の布片を汝の腋の下にはさみて索に當よと云ければエレミヤは然なせ
十二 り十三彼らすなはち索をもてエレミヤを陂より曳あげたり斯エレミヤは獄の庭にをる〇十四かくてゼデキヤ王
十三 人を遣して預言者エレミヤをエホバの室の第三の門につれきたらしめ王エレミヤにいひけるは我汝に問こ
十四 とあり匿もわれに隠す勿れ十五エレミヤゼデキヤにいひけるは我もし汝に示さば汝かならず我を殺さゝらんや
十五 や假令我汝を勧るとも汝われに聽じ十六ゼデキヤ王密にエレミヤに誓ひていひけるは我らにこの靈魂
十六 を造りあたへしエホバは活く我汝を殺さず汝を
十七 いひけるは萬軍の神イスラエルの神エホバかくいひたまふ汝もしまことにバビロン王の牧伯等に降らば汝の
十八 生命活んまた此邑は火にて焚れず汝と汝の家
十九 降らずば此邑はカルデヤ人の手に付されん彼ら火をもて之を焚ん汝はその手を脱れざるべし十九ゼデキヤ
二十 王エレミヤに云けるは我カルデヤ人に降りしところのユダ人を恐る恐くはカルデヤ人我をかれらの手に付さ
二十一 ん彼ら我を辱めん二十エレミヤいひけるは彼らは汝を付さし願くはわが汝に告しエホバの聲に聽したがひ
二十二 たまへさらば汝祥をえん汝の生命いきん二十一然ど汝もし降ることを否まばエホバこの言を我に示したま
二十三 ふ二十二すなはちユダの王の室に遺れる婦は皆バビロンの牧伯等の所に曳いだされん其婦等いはん汝
二十四 の朋友等は汝を誘ひて汝に勝り汝の足は泥に沈む彼らは退き去ろ二三汝の妻たちと汝の子女等はカルデヤ
二十五 人の所に曳出されん汝は其手を脱れじバビロンの王の手に執へられん汝此邑をして火に焚しめん二四ゼデ
二十六 キヤ エレミヤにいひけるは汝この事を人に知する勿れさらば汝殺されじ二五もし牧伯等わが汝と語りしこ
二十七 とを我儕に告げよ我らに隠す勿れ然ば我ら汝を殺さじ又王の汝に語りしことを告よといはゞ二六汝彼らに
二十八 答へて我王に求めて我をヨナタンの家に歸して彼處に死ざむること勿れといへりといふべし〇二七かくて牧
伯等エレミヤにきたりて問けるに彼王の命ぜし言のごとく彼らに告たればその事露はれざりき是をもて彼ら
彼ともの いふことを罷たり二八エレミヤはエルサレムの取ろゝ日まで獄の庭に居りき是エルサレムの取れし
時にも彼處にをれり

第三十九章

一 ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロンの王ネブカデネザルその全軍をひきゐエルサレムに
二 きたりて之を攻圍みけるが二ゼデキヤの十一年四月九日にいたりて城邑破れたれば三バビロンの王の牧
伯等即ちネルガルシヤレゼルサムガル子ボ寺人の長サルセキム博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバ
ビロンの王のその外の牧伯等皆ともに入て中の門に坐せり〇四ユダの王ゼデキヤおよび兵卒ども之を見て逃
げ夜の中に王の園の途より兩の石垣の間の門より邑をいでゝアラバの途にゆきしが五カルデヤ人の軍勢こ
れを追ひエリコの平地にてゼデキヤにおひつきこれを捕へてハマテの地リブラにをるバビロンの王ネブカデネザル
の許に曳ゆきければ王かしこにて彼の罪をさだめたり六すなはちバビロンの王リブラにてゼデキヤの諸
子をかれの目の前に殺せりバビロンの王またゼデキヤの目を抉さし
め彼をバビロンに曳ゆかんとて銅索に繋げり八またカルデヤ人火をもて王の室と民の家をやき且エルサレム
の石垣を毀てり〇九かくて侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧くして所有なき者等をユダ
遺れる民をバビロンに移せり十されど侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧くして所有なき者等をユダ
の地に遺し葡萄園と田地とをこれにあたへたり〇十一爰にバビロンの王ネブカデネザルエレミヤの事につ
き侍衛の長ネブザラダンに命じていひけるは十二彼を取りて善く侍よ害をくはふる勿れ彼が汝に云ふ
ごとくなすべしと十三是をもて侍衛の長ネブザラダン寺人の長ネブシヤスバン博士の長ルガルシヤ

十四 レセルおよびバビロンの王の牧伯等 十四 人を遣してエレミヤを獄の庭よりたづさへ來らしめシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤに付して之を家につれゆかしむ斯彼民の中に居る
十五 られたる時エホバの言 彼にのぞみていふ 十六 汝ゆきてエテオピヤ人エベデメレクに告よ萬軍のエホバイスラエルの神かくいふわれ我語しところの禍を此邑に降さん福はこれに降さじその日この事なんぢの目前
十七 にならん 十七 エホバいひたまふその日にはわれ汝を救はん汝はその畏るゝところの人衆の手に付されじ 十八
十八 われ必ず汝を救はん汝は劍をもて殺されじ汝の生命は汝の掠取物とならん汝われに倚頼ばなりとエ
ホバいひたまふ

第四十章 一 侍衛の長 子ブザラダンかのバビロンにとらへ移さるゝエルサレムとユダの人々の中にエレミ
ヤを縲につなぎおきてこれを執へゆきけるが遂にこれを放ちてラマを去しめたりその後エホバの 言 エレミ
ヤにのぞめり 二 茲に侍衛の長 エレミヤを召てこれにいひけるは汝の神エホバ此處にこの 災 あらんことを
三 言りし 三 エホバこれを降しそれ云し如く行へり汝らエホバに罪を犯しその聲に聽したがはざりしによりてこ
四 の事 汝らに來りしなり 四 視よ我今日汝の手の縲を解て汝を放つ汝もし我とゝもにバビロンにゆくを惡とせば來れわれ汝を善くあしらはん汝もし我とゝもにバビロンにゆくを惡とせざれば留れ視よこの地は皆汝の前
五 に在り汝の善とする所なんぢの心に合ふところに往べし 五 エレミヤいまだ答へざるに彼またいひけるは汝
バビロンの王がユダの諸邑の上にたてゝ有司となせしシヤパンの子アヒカムの子ケダリヤの許に歸り彼
とゝもに民の中に居れ或は汝の善とおもふところにゆくべしと侍衛の長 彼に食糧と禮物をとらせて去
六 しめたり 六 エレミヤすなはちミヅパに往きてアヒカムの子ケダリヤに詣りその地に遺れる民のうちに彼と偕
七 にをる 七 茲に田舍にある軍勢の長等および彼らに屬する人々バビロンの王がアヒカムの子ゲダリヤを立
てこの地の有司となし男 女 嬰孩および國の中のバビロンに移されざる貧者を彼にあづけたることを
八 きゝしかば 八 即ちネタニヤの子イシマエルとカレヤの子ヨハナンとヨナダンおよびタンホメテの子セラヤと

子トパ人なるエパイの諸子と或マアカ人の子ヤザニヤおよび彼らに屬する人々ミヅパにゆきてゲダリヤの許
九 にいたる 九 シヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに屬する人々に誓ひていひけるは汝らカルデ
十 ヤ人に事ることを怖るゝ勿れこの地に住てバビロンの王に事へなば汝ら幸福ならん 十 我はミヅパに居り我ら
に來らん所のカルデヤ人に事へん汝らは葡萄酒と菓物と油とをあつめて之を器に畜へ汝らが獲る所の諸邑
十一 に住めと 十一 又モアブとアンモン人の中およびエドムと諸〻の邦にをる所のユダヤ人はバビロンの王がユダ
十二 に人を遺したるとシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤの有司となしたることを聞り 十二 是にお
いてそのユダヤ人皆その追やられし諸の處よりかへりてユダの地のミヅパに來りゲダリヤに詣れり而し
十三 て多の葡萄酒と菓物をあつむ〇 十三 又カレヤの子ヨハナンおよび田舍にをりし軍勢の長たちミヅパにきたり
十四 てゲダリヤの許にいたり 十四 彼にいひけるは汝アンモン人の王バアリスが汝を殺さんとて子タニヤの子イ
十五 シマエルを遣せしを知るやと然ごアヒカムの子ゲダリヤこれを信ぜざりしかば 十五 カレヤの子ヨハナンミヅ
パにて密にゲダリヤに語りて言けるは請ふわれゆきて人知ずに子タニヤの子イシマエルを殺さんいかで彼汝
十六 を殺し汝に集れるユダ人を散しユダの遺れる者を滅すべけんやと 十六 然るにアヒカムの子ゲダリヤカレヤ
の子ヨハナンにいひけるは汝この事をなすべからず汝イシマエルにつきて僞をいふなり
第四十一章 一 七月ごろ王の血統なるエリシヤマの子子ネタニヤの子イシマエル、王の十人の牧伯等とともに
にミヅパにゆきてアヒカムの子ゲダリヤにいたりミヅパにて偕に食をなせしが 二 子タニヤの子イシマエルを
よび偕にをりし十人の者起上りバビロンの王がこの地の有司となせしシヤパンの子アヒカムの子なるゲダ
リヤを刀にて殺せり 三 イシマエルまたミヅパにゲダリヤと偕にをりし諸のユダヤ人と彼處にをりしカルデヤ
人の兵卒を殺したり 四 彼がゲダリヤを殺してより二日の後いまだ誰も之を知ざりし時 五 あるひと人八十人その
鬚を雍り衣を裂き身に傷つけ手に素祭の物と香を携へてシケム シロ サマリヤよりきたりてエホバの室にい
たらんとせしかば 六 子タニヤの子イシマエルミヅパよりいでゝ哭きつゝ行て彼らを迎へ彼等に逢てアヒカム

七 の子ゲダリヤの許に來りいへりセ而して彼ら邑の中に入しとき子タニヤの子イシマエル已と偕にある人や
八 さふもに彼らを殺してその屍を阱に投いれたりス但しその中の十人イシマエルにむかひ我らは田地に小麥
九 麩麥油および蜜を藏し有り我らをころすなかれと言たれば彼らをその兄弟と偕に殺さずして已ハ九イシ
十 マエルがゲダリヤの名をもて殺せし人や屍を投入れし阱はアサ王がイスラエルの王バアシヤを怖れて壘
十一 し阱なり子タニヤの子イシマエルその殺せし人や屍を之に充せり〇十イシマエルはミヅパに遺りをる諸の民
十二 即ち王の諸女と侍衛の長子ブザラダンがアヒカムの子ゲダリヤに交付しところのミヅパに遺れる諸の民さ
十三 を擄にせり子タニヤの子イシマエルすなはち彼らを擄にしアンモン人に往んとて去れり〇十一カレヤの子ヨ
十四 ハナンおよび彼と偕に在る軍勢の長たち子タニヤの子イシマエルの爲し諸の惡事を聞ければ十二その衆
十五 卒を率て子タニヤの子イシマエルと戰はんとて出でギベオンの池の旁にて彼に遇ふ十三イシマエルと偕に在
十六 る人々はカレヤの子ヨハナンおよび彼とともに在る軍勢の長たちを見て欣べり十四是をもてイシマエルがミ
十七 ヅパより擄へきたりし所の人々身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンの許にゆけり十五子タニヤの子イシマ
十八 エルは八人の者と偕にヨハナンを避け逃てアンモン人に往り十六カレヤの子ヨハナンおよび彼とともにある
十九 軍勢の長等は子タニヤの子イシマエルがアヒカムの子ゲダリヤを殺してミヅパより擄へゆけるところの彼
二十 遺れる民すなはち兵卒婦人兒女寺人等を其手より取りかへして之をギベオンより携へりしが十七進てエジ
二十一 プトにいたらんとてベテレヘムの近傍にあるキムハムの住處に往て留れり十八こは子タニヤの子イシマエル
二十二 がバビロンの王の此地の有司となしたるアヒカムの子ゲダリヤを殺せしによりカルデヤ人を懼たればな

第四十二章

一 茲に軍勢の長たちおよびカレヤの子ヨハナンとホシヤヽの子エザニヤ竝に民の至微
二 者より至大者にいたるまで二皆預言者エレミヤの許に來りて言けるは汝の前に我らの求の受納られ
三 んことを願ふ請ふ我ら遺れる者の爲に汝の神エホバに祈れ（今汝の目に見がごとく我らは衆多の中の遺れ
四 る者にして寡なり）三さらば汝の神エホバ我らの行むべき途となすべき事を示したまはん〇四預言者エレ
五 ミヤ彼らに云けるは我汝らに聽り汝らの言に循ひて汝らの神エホバに祈らん凡そエホバが汝らに應へた
六 まふことはわれ隱す所なく汝らに告べし五彼らエレミヤにいひけるは願くはエホバ我儕の間にありて眞實な
七 る信ずべき證者となりたまへ我らは汝の神エホバの汝を遣して我らに告しめたまふ諸の事に遵ひて行ふべ
八 し六我等は善にまれ惡にまれ我らが汝を遣すところの我らの神エホバの聲に遵はん斯我らの神エホバの聲
九 に遵ひてわれら福をうけん〇七十日の後エホバの言エレミヤにのぞみしかばヘエレミヤカレヤの子ヨハ
十 ナンおよび彼と偕に在る軍勢の長たち並に民の至微者より至大者までを悉く招きて九これに
十一 いひけるは汝らが我を遣して汝らの祈を獻げしめしところのイスラエルの神エホバかくいひたまふ十汝ら
十二 し信に此地に留らばわれ汝らを建て倒さず汝らを植て拔じそは我汝らに災を降せしを悔ればなり十一エ
十三 ホバいひたまふ汝らが畏るゝところの巴比倫の王を畏るゝ勿れ彼をおそるゝ勿れ我汝らと偕にありて汝ら
十四 を救ひ彼の手より汝らを拯ふべし十二われ汝らを憐みまた彼をして汝らを憐れませ汝らを故土に歸らしめん
十五 然ど汝らもし我らはこの地に留らじ汝らの神エホバの聲に遵はじと言ひ十四また然りわれらはかの戰爭
十六 を見ず飢の聲をきかず食物に乏しからさるエジプトの地にいたりて彼處に住はんといはゞ十五汝らユダの遺
十七 れる者よエホバの言をきけ萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝らもし強てエジプトにゆきて彼處
十八 に住はゝ十六汝らが懼るゝところの劍エジプトの地にて汝らに臨み汝らが恐るゝところの饑饉エジプトに
十九 て汝らにおよばん而して汝らは彼處に死べし十七凡そエジプトにおもむき至りて彼處に住はんとする人々は
二十 劍と饑饉と疫病に死べしその中には我彼らに降さんところの災を脫れて遺る者無るべし十八萬軍のエホ
二十一 バイスラエルの神かくいひたまふ我震怒と憤恨のエルサレムに住る者に注ぎし如くわが憤恨汝らがエ
二十二 ジプトにいらん時に汝らに注がん汝らは呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん汝らは再びこの處
二十三 を見ざるべしと十九ユダの遺れる者よエホバ汝らにつきていひたまへり汝らエジプトにゆく勿れと汝ら今

二十 ふ日わが汝らを警しめしことを確に知れ二十汝ら我を汝らの
に祈り我らの神エホバの汝に示したまふ事をことごとく我らに告よ我ら之を行はんと斯なんぢら自ら欺けり
二一 二一われ今日汝らに告たれど汝らはエホバが我を遣して命じめたまひ
二二 し事には都て遵はざりき二二然ば汝らはその往て住んとされがふ處にて劍と饑饉と疫病に死ることを今確
に知るべし

第四十二章 一エレミヤ諸の民にむかひて其神エホバの言を盡く宣べその神エホバが己を遣して言し
二 めたまへる其諸の言を宣をはりし時ニホシヤヽの子
三 ミヤに語りていひけるは汝は誕をいふ我らの神エホバはエジプトにゆきて彼處に住む勿れと汝をつかはし
四 て云せたまはざるなり三ネリヤの子バルク汝を唆して我らに逆はしむ是我らをカルデヤ人の手に付して
五 殺さしめバビロンに移さしめん爲なり四斯カレヤの子ヨハナンと軍勢の長等および民皆エホバの聲に遵はず
六 すしてユダの地に住ことをせざりき五斯てカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等はユダに遺れる者即ちその
七 逐やられし國々よりユダの地に住んさて旅りし者六男女嬰孩王の女たちおよび凡て侍衛の長ネブザ
八 ラダンがシヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤに付し置し者並に預言者エレミヤと子リヤの子バルクを
九 取て七エジプトの地に至れり彼ら斯エホバの聲に遵はざりき而して遂にタパネスに至れり〇八エホバの言
一〇 タパネスにてエレミヤに臨みていふ九汝大なる石を手に取りユダの人々の目の前にてこれをタパネスに
一一 在るパロの室の入口の旁なる磚窯の泥土の中に藏して十彼らにいへ萬軍のエホバイスラエルの神かくいひ
一二 たまふ視よわれ使者を遣してわが僕なるバビロンの王ネブカデネザルを召きその位をこの藏したる石の上に
一三 置しめん彼錦繖をその上に敷べし十一かれ來りてエジプトの地を撃ち死に定まれる者を死しめ虜に定まれる
一四 者を虜にし劍に定まれる者を劍にかけん十二われエジプトの諸神の室に火を燃さんネブカデネザルこれを焚き
一五 これらを擄にせん而して羊を牧ふ者のその身に衣を纏ふがごとくエジプトの地をその身に纏はん彼安然に
一六 其處をさるべし十三彼はエジプトの地のベテシメシの偶像を毀ち火をもてエジプト人の諸神の室を焚べし

第四十四章 一エジプトの地に住るさこころのユダの人衆すなはちミグドルタパネスノフパテロスの地に住
二 る者の事につきてエレミヤに臨みし言に曰く二萬軍のエホバイスラエルの神かくいふ汝らはエルサレムと
三 ユダの諸邑に降せしさこころの災をみたり視よこれらは今日すでに空曠さなりて住む人なし三こは彼ら惡を
四 なして我を怒らせしによる即ちかれらは己も汝らも汝らの先祖等も識ざるさこころの他の神にゆきて香を焚
五 き且これに奉へたり四われ我僕なる預言者たちを汝ちに遣し頻にこれを遣して請ふ汝らわが嫉ふさこころ
六 の此憎むべき事を行ふ勿れさいはせけるに五彼ら聽かず耳を傾けず他の神に香を焚きてその惡を離さりし大
七 是によりて我震怒とわが憤恨ユダの諸邑とエルサレムの街にそゝぎて之を焚たれば其等は今日のごとく荒
八 れかつ傾圮たり七萬軍の神イスラエルの神エホバいまかくいふ汝ら何なれば大なる惡をなして己の靈魂を害
九 むユダの中より汝らの男と女と孩童と乳哺子を絶て一人も遺らさらしめんとするや八何なれば汝らその手
一〇 の行爲をもて我を怒らせ汝らが往て住ふさこころのエジプトの地に於て他の神に香を焚きて己の身を滅し地の
一一 萬國の中に呪詛さなり凌辱さならんとするや九ユダの地とエルサレムの街にて行ひし汝らの先祖等の惡ユ
一二 ダの王等の惡其妻等の惡おゐび汝らの身の惡汝らの妻等の惡を汝ら忘れしやヤ彼らは今日にいたるまで
一三 悔ずまた畏れず汝らと汝らの先祖等の前に立たる我律法とわが典例に循て行まざるなりヤ一是故に萬軍の
一四 エホバイスラエルの神かくいふ視よわれ面を汝らにむけて災を降しユダの人衆を悉く絶んヤ二又われエ
ジプトの地にすまんとてその面をこれにむけて往しさころの彼ユダの遺れる者を取らん彼らは皆滅されて
エジプトの地に仆れん彼らは劍と饑饉に滅され微者も大者も劍と饑饉によりて死べし而して呪詛
さなり詛異さなり罵詈さなり凌辱さならん一三われエルサレムを罰せし如く劍と饑饉と疫病をもてエジ
プトに住る者を罰すべし一四是をもてエジプトの地に往て彼處に住るさこころのユダの遺れる者の中に一人も
逃れまたは遺りてその心にしたひて歸り住はんされがふさこころのユダの地に歸るもの無るべし逃ろふ者の外

十五 には歸る者無るべし○十五是に於てその妻が香を他の神に焚しことを知れる人々および其處に立る婦人等の
十六 大いなる群衆竝にエヂプトの地のパテロスに住るところの民エレミヤに答へて云けるは十六汝がエホバの
十七 名をもてわれらに述し言は我らは聽じ十七我らは必ず我らの口より出る言を行ひ我らが素なせし如く香を天
后に焚きまた酒をその前に灌ぐべし即ちユダの諸邑とエルサレムの街にて我らと我らの先祖等および我らの
十八 王等と我らの牧伯等の行ひし如くせん當時われらは糧に飽き福をえて災に遇ざりし十八我ら天后に香を
焚くことを止め酒をその前に灌がずなりし時より諸の物に乏しくなり劍と饑饉に滅されたり十九我らが天后
十九 に香を焚き酒をその前に灌ぐに方りて之に象てパンを製り酒を灌しは我らの夫等の許せし事にあらずや
二十 ○二十エレミヤ即ち男女の諸の人衆および此言をもて答へたる諸の民にいひけるはニ一ユダの諸邑
二一 とエルサレムの街にて汝らと汝らの先祖等および汝等の王等と汝らの牧伯等および其地の民の香を焚しこ
二二 とはエホバ之を憶えまた心に思ひたまふにあらずや二二エホバは汝らの惡き爲のため汝らの憎むべき行ひの
ために再び忍ぶことをえざりきこの故に汝らの地は今日のごとく荒地となり詛咒となり住む人
二三 なき地となれり二三汝ら香を焚きエホバに罪を犯しエホバの聲に聽したがはずその律法と憲法と証詞に循ひ
二四 て行まざりしに由て今日のごとく此災汝らにおよべり○二四エレミヤまたすべての民と婦等にいひ
二五 けるはエヂプトの地に居るユダの子孫よエホバの言をきけ二五萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ
汝らと汝らの妻等は口をもていひ手をもて成し我ら香を天后に焚き酒を灌て立しところの誓を必ず成就ん
二六 さいふ汝ら必ず誓をたてかならず其誓を成就んとす二六この故にエヂプトの地に住るユダの人々よエホ
バの言をきけエホバいひたまふわれ我大なる名を指て誓ふエヂプトの全地にユダの人々一人もその口に主
二七 エホバは活くさいひて再び我名を稱ふることなきにいたらん二七視よわれ彼らをうかがはん是禍をあた
ふる爲にあらず禍をくださん爲なりエヂプトの地に居るユダの人々は劍と饑饉に滅びて絶るにいたらん
二八 然ご劍を逃る〳〵僅少の者はエヂプトの地に歸らん又エヂプトの地に寄寓れ
二九 るユダの遺れる者はその立ところの言は我のなるか彼らのなるかを知るにいたるべし二九エホバいひたまふ
わがこの處にて汝らを罰する兆は是なり我かくして我汝らに禍をくださんさいひし言の必ず立ことを
三十 知しめん三十すなはちエホバかくいひたまふ視よわれユダの王ゼデキヤを其生命を索むる敵なるバビロンの
王ヂブカデヅザルの手に付せしが如くエヂプトの王パロホフラを其敵の手その生命を索むる者の手に付さ
ん

第四十五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年子リヤの子バルクが此等の言をエレミヤの口にしたが
ひて書に錄せしとき預言者エレミヤこれに語りていひけるはニバルクよイスラエルの神エホバ汝にかく
いひたまふ三汝曾ていへり嗚呼われは禍なるかなエホバ我憂に悲を加へたまへり我は歎て疲れ安きを
えずと四汝かく彼に語れエホバかくいひたまふ視よわれ我建しところの者を毀ち我植しところの者を拔ん
是この全地なり五汝己れの爲に大なる事を求るかこれを求る勿れ視よわれ凡ての肉體に災をすべての民に臨さん然ご
汝の生命は我汝のゆかん語の處にて汝の掠物とさならしめんとエホバいひたまふ

第四十六章

一 茲にエホバの言預言者エレミヤに臨みて諸國の事を論ふ二先エヂプトの事すなはちユフラ
テ河の邊なるカルケミシの近傍にをるところのエヂプト王パロネコの軍勢の事を論ふ是はユダの王ヨシヤ
の子エホヤキムの四年にバビロンの王子ブカデヅザルが擊やぶりし者なり其言にいはく三汝ら大楯小干を
備へて進み戰へ四馬を車に繋ぎ馬に乘り盔を被りて立て戈を磨き甲を着よ五われ見るに彼らは懼て退きその
勇士は打敗られ狼狽遁て後をかへりみず是何故ぞや畏懼かれらのまはりにありとエホバいひたまふ六快足
なる者も逃えず強者も遁れえず皆北の方にてユフラテ河の旁に躓き仆れんと七かのナイルのごとくに湧あ
がり河のごとくに其水さかまく者は誰ぞや八エヂプトはナイルの如くに湧あがりその水は河のごとくに溢ま
くなり而していふ我上りて地を蔽ひ邑とその中に住る者を滅さん九汝等馬に乘り車を馳驅らせよ勇士よ
盾を執るエテオピヤ人プテ人および弓を張り挽くルデ人よ進みいづべし十此は主なる萬軍のエホバの復仇

の日即ちその敵に仇を復したまふ日なり劍は食ひて飽きその血に醉はん主なる萬軍のエホバ北の地にてユフラテ河の旁に宰ることをなしたまへばなり十一處女よエジプトの女よギレアデに上りて乳香を取れ汝多の藥を用ふるも益なし汝は愈ざるべし十二汝の恥辱は國々にきこへん汝の號泣は地に滿り勇士は勇士にうちふれて偕にも仆る○十三バビロレの王ネブカデ子ザルが來りてエジプトの地を擊んとする事につきてエホバの預言者エレミヤに告たまひし言十四汝らエジプトに宣べミグドルに示し又ノフ、タパチスに示しふべし汝らの力ある者いかにして拂ひ除れしやその立ざるはエホバこれを仆したまふに由るなり十五彼多の者を蹶かせたまふ人其友の上に仆れかさなり而していふ起よ我ら滅ぼすところの劍を避てわが國にかへり故土にいたらんと十六人彼處に叫びてエジプトの王パロは滅されたり彼は機會を失へりといふ十七萬軍のエホバと名りたまふところの王いひ給ふ我は活く彼は山々の中のタボルのごとく海の旁のカルメルのごとくに來らん十八エジプトに住る女よ汝移轉の器皿を備へよそはノフは荒蕪となり燒れて住む人なきにいたるべければなり十九エジプトは至美き牝の犢のごとし北の方より來る蝱きたり北の方より來る二十また其中の傭人は肥たる犢のごとし彼ら轉向てともに逃げ立ことをせず是その滅さるゝ日いたり其罰せらるゝ時來りたればなり二一彼は蛇のごとく聲をいだす彼ら軍勢を率ゐて來り樵夫の如く斧をもて之にのぞめり二二エホバいひたまふ彼らは探りえざるに由りて彼の林を砍仆せり彼等は蝗蟲よりも多して數へがたし二四エジプトの女は辱められ北の民の手に付されん二五萬軍のエホバイスラエルの神いひたまふ視よわれノフのアモンとパロとエジプトとその諸神とその王等すなはちパロとかれを賴むものとを罰せん二六われ彼らを其生命を索る者の手とバビロンの王ネブカデ子ザルの手とその臣僕の手に付すべしその後この地は昔のごとく人の住ところとならんとエホバいひたまふ○二七我僕ヤコブよ怖るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ視よわれ汝を遠方より救ひきたり汝の子孫をその擄移されたる地より救ひさるべしヤコブは歸りて平安と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし二八エホバいひたまふ我僕ヤコブよ汝怖るゝ勿れ我汝と偕にあればなりわれ汝を逐やりし國々を悉く滅ぼすべけれど汝をば滅さじわれ道をもて汝を懲し汝を全くは罰なき者とせざるべし

第四十七章　一パロがガザを擊ざりし先にペリシテ人の事につきて預言者エレミヤに臨みしエホバの言二エホバかくいひたまふ視よ水北より起り溢れなかれて此地と其中の諸の物とその邑と其中に住る者とに溢れかゝるべしその時人衆は叫びこの地に住る者は皆哭くべし三その遲き馬の蹄の蹶たつる音のため其車の響のため其輪の亂のために父は手弱りて己の子女を顧ざるなり四是ペリシテ人を滅しつくしツロとシドンにのこりて助力をなす者を悉く絕す日來ればなりエホバカフトルの地に遺れるペリシテ人を滅したまふべし五ガザには髮を剃るの事はじまるアシケロンと其剩餘の平地は滅ばさる汝いつまで身に傷くるや六エホバの劍よ汝いつまで息ざるや汝の鞘に歸りて息み靜れ七エホバこれに命じたるなればいかで息むことをえんやアシケロンと海邊を攻ることを定めたまへり

第四十八章　一萬軍のエホバイスラエルの神モアブの事につきてかくいひたまふ嗚呼エホバ禍なるかな是滅されたりキリアタイムは辱められて取れミスガブは辱められて毀たるニモアブの榮譽は失さりぬヘシボンにて人衆モアブの害を謀り去來之を絕て國をなさざらしめんといふマデメンよ汝は滅されん劍汝を追はん三ホロナイムより號咷の聲きこゆ毀敗と大なる滅亡あり四モアブ滅されてその嬰孩等の號咷聞ゆ五彼らは哭き哭きてルヒテの坂を登る、敵はホロナイムの下り路にて滅亡の號咷をきけり六逃て汝らの生命を救へ曠野に棄られたる者の如くなれ七汝は汝の工作と財寶を賴むによりて汝も執へられん又ケモシは其祭司およびその牧伯等と偕に擄へうつさるべし八殘害者諸邑に來らん一の邑も免れざるべし谷は滅され平地は荒されんエホバのいひたまひしが如し九翼をモアブに予へて飛さらしむ其諸邑は荒て住者なからん十エホバの事を行ふて怠る者は詛はれ又その劍をおさへて血を流さゞる者は詛はる○十一モアブはその幼時より安然にして酒の其滓のうへにさよまりて此器より彼器へうつされざるが如くなりき彼擄

十二 つされざりしに由て其　味　尚存ちその香氣變らざるなり 十二 エホバいひたまふ此故にわがこれを傾くる
者を遣す日來らん彼らすなはち之を傾け其器をあけ其罎を砕くべし 十三 モアブはケモシのために羞をさ
らん是イスラエルの家がその恃めるところのベテルのために羞をこりしが如くなるべし〇 十四 汝ら何ぞ我ら
は勇士なり強き軍人なりといふや 十五 モアブはほろぼされその諸邑は騰りその選擢の壯者は下て殺さる萬
軍のエホバと名る王これをいひたまふ 十六 モアブの滅亡近けりその禍遠に來る 十七 凡そ其四周にあ
る者よ彼のために歎けその名を知る者よ強き竿美き杖いかにして折しやといへ〇 十八 デボンに住る女よ榮
をはなれて下り燥ける地に坐せよモアブを敗る者汝にきたりて汝の城を滅さん 十九 アロエルに住る婦よ道
の側にたちて闕ひ逃げたる者と脫れいたる者に事いかんと問へ 二十 モアブは敗れて羞をさる汝ら呼はり哭
びモアブは滅されたりとアルノンに告よ 二一 鞫災平地に臨みホロンヤハズメパアテ 二二 デボン子ボベテデ
ブラタイム 二三 キリヤタイムベテガムルベテメオン 二四 クリオテボツラモアブの地の諸邑の遠き者にも
近き者にも臨めり 二五 モアブの角は砕け其臂は折たりとエホバいひたまふ〇 二六 汝らモアブを醉はしめよ彼
エホバにむかひて驕傲ればなりモアブは其吐たる物に轉びて笑柄さならん 二七 イスラエルは汝の笑柄
にあらざりしや彼盜人の中にありしや汝彼の事を語るごとに首を掉たり 二八 モアブに住る者よ汝ら邑を
離れて磐の間にすめ穴の口の側に巢を作る班鳩のごとくせよ 二九 われらモアブの驕傲をきけり其驕傲は
甚し即ち其驕慢矜高驕傲およびその心の自ら高くするを聞り 三十 エホバいひたまふ我モアブの驕傲さ
その言の虛きさを知る彼らは偽を行ふなり〇 三一 この故にわれモアブの爲に哭びモアブの全地の爲に呼
はるキルハレスの人々の爲に嘆歎あり 三二 シブマの葡萄の樹よわれヤゼルの哭泣にこえて汝の爲になげくべ
し汝の蔓は海を踰え延てヤゼルの海にまでいたる掠奪者來りて汝の果と葡萄をとらん 三三 欣喜と歡樂園
さモアブの地をはなれ去るわれ酒醡に酒無ら令ん呼はりて葡萄を踐もの無るべし其喚呼は葡萄をふむ喚呼
にあらざらん 三四 ヘシボンよりエレアレとヤハツにいたりゾアルよりホロナイムとエグラテシリシャにいた
るまで人聲を揚ぐそはニムリムの水までも絶たればなり 三五 エホバいひたまふ我祭物を崇邱に献げ香
をその神に焚くところの者をモアブの中に滅さんと 三六 この故に我心はモアブの爲に簫のごとく歎き我
心はキルハレスの人衆のために簫のごとく歎く是其獲たるところの財うせたればなり 三七 人みなその髮を剃
り皆その鬚をそり皆その手に傷け腰に麻布をまさはん 三八 モアブにては家蓋の上と街のうちに遍く悲哀あり
そはわれ心に適ざる器のごとくにモアブを砕きたればなりとエホバいひたまふ〇 三九 嗚呼モアブはほろび
たり彼らは哭ぶ嗚呼モアブは羞て面を背けたりモアブはその四周の者の笑柄さなり恐懼さなれり 四十 エホ
バかくいひたまふ視よ敵鷲のごとくに飛來りて翼をモアブの上にひろげん 四一 ケリオテは取られ城はみな麾
るその日にはモアブの勇士の心子を產む婦のごとくになるべし 四二 モアブはエホバにむかひて傲りしゆゑに
滅ぼされて再び國を成ざるべし 四三 エホバいひたまふモアブの住る者よ恐怖と陷阱と罟なんぢに臨めり
四四 恐怖をさけて逃るものは陷阱におちいり陷阱より出るものは罟にとらへられん其はわれモアブにその間
をうくべき年をのぞましむればなりエホバこれをいふ 四五 遁逃者ば力なくしてヘシボンの蔭に立つ是は火ヘ
シボンより出て火焰シホンのうちより出てモアブの地および喧鬧をなす者の首の頂を燒ばなり 四六 嗚呼
なるかなモアブよケモシの民は亡びたり即ち汝の諸子は擄へうつされ汝の女等は執へゆかれたり 四七 然ど
末の日に我モアブの擄移されたる者を返さんとエホバいふ此まではモアブの鞫なりへる言なり

第四十九章

一 アンモン人の事につきてエホバかくいひたまふイスラエルに子なからんや嗣子なからんや何
なれば彼らの王ガドを受嗣ぎ彼の民その邑々に住やニ エホバいひたまふ是故に視よわが戰鬪の號呼をアン
ン人のラバに聞えしむる日いたらんラバは荒塚となりその女等は火に焚れんその時イスラエルはおのれの
嗣者となりし者等の嗣者となるべしエホバこれをいひたまふ 三 ヘシボンよ哭べアイは滅びたりラバの女たち
よ呼はれ麻布を身にまとひ嗟て籬のうちに走れマルカムとその祭司およびその牧伯等は偕に擄へ移されたり
四 汝何なれば谷の事を誇るや背けろ女よ汝の谷は流るるようなり汝財貨に倚賴ていふ誰か我に來らんや

五 主なる萬軍のエホバいひたまふ視よ我畏懼を汝の四周の者より汝に來らしめん汝らおの〳〵逐れて直に
六 すゝまん逃る者を集る人無るべし六然ど後にいたりてわれアンモン人の擄移されたる者を返さんとエホバ
七 いひたまふ○七エドムの事につきて萬軍のエホバかくいひたまふテマンの中には智慧あることなきにいたりしや明哲者には謀略あらずなりしやその智慧は蠹はてしや
八 サウの滅亡をかれの上にのぞませ彼を罰する時をきたらしむべし八デダンに住る者よ逃よ遁れよ深く竄れよ我エ
九 なも餘さざらんもし夜間盜人きたらばその飽まで滅さん十九われエサウを禿にし又その隱處を露にせん
十 彼は身を匿すことをえざるべしその裔も兄弟も隣舍も滅されん而して彼は在すなるべし十一汝の孤子を還
十一 せわれ之を生存へしめん汝の寡婦は我に倚賴むべし十二エホバかくいひたまふ視よ杯を飮べきにあらざる
十二 者もこれを飮ざるをえざるなれば汝まつたく罰を免るゝことをえんや汝は罰を免れじ汝これを飮ざるべからず十三エホバいひたまふ我おのれを指して誓ふボズラ打詛異となり羞辱となり荒地とならんとも
十三 の諸邑は永く荒地となるべし○十四われエホバより音信をきけり使者つかはされて萬國にいたり汝ら集りて彼に攻めきたり起て戰へよといへり十五視よわれ汝を萬國の中に小者となし人々の中に藐めらるゝ者となせり十六磐の隙場にすみ山の高處を占る者よ汝の恐ろしき事と汝の心の驕傲汝を欺けり汝鷲のごとくに巢を高き處に作りたれどもわれ其處より汝を取り下さんとエホバいひたまふ十七エドムは詫異さならん
十四 凡そ其處を過る者は驚きその災害のために笑ふべし十八エホバいひたまふソドムとゴモラとその隣の邑々の
十五 滅しがごとく其處に住む人なく其處に宿る人の子なかるべし○十九視よ敵獅子のヨルダンの叢より上るがごとく堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼を其處より逐奔らせわが選みたる者をその上に立ん誰か我のごとき
十六 者あらん誰か我爲に時期を定めんや孰の牧者か我前にたつことをえんや二十されはエドムにつきてエホバの謀
十七 りたまひし御謀とテマンに住る者につきて思ひたまひし思をきけ群の弱者はかならず曳ゆかれん彼かならに
十八 に仆れ兵卒は悉く滅されんと萬軍のエホバいひたまふ二七われ火をダマスコの石垣の上に燃しベヘダデ
十九 の殿舍をことゞく焚くべし○二八バビロンの王ブカデザルが攻め擊たるケダルとハゾルの諸國の事につきてエホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ二九その幕屋とその羊の群は彼等これを取りその幕とその諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひさらん人これに向ひ惶懼四方にありと呼るべし三十
二十 エホバいひたまふハゾルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居れバビロンの王ブカデザル汝らをせむる謀略を運らし汝らをせむる術計を設けたればなり三一エホバいひたまふ汝ら起て穩なる安かに住
二一 る民の所に攻め上れ彼らは門もなく關もなくして獨り居ふなり三二その駱駝は擄掠させられその多の畜は
二二 窮ばれん我かの毛の角を剪る者を四方に散しその滅亡を八方より來らせんとエホバいひたまふ三三ハゾルは
二三 山犬の窟となり何までも荒蕪とならん彼處に住む人なくまた人の子なかるべし○三四ユダの王ゼ
二四 デキヤが位に卽し初のころエホバの言預言者エレミヤに臨てエラムの事をいふ三五萬軍のエホバかくいひ
二五 たまふ視よわれエラムが權能にして賴むところの弓を折らん三六われ天の四方より四方の風をエラムに來ら
二六 せ彼らを四方の風に散らさんエラムより追出さるゝ者のいたらざる國はなかるべし三七エホバいひたまふわれエラムをしてその敵の前とその生命を索むるものゝ前に慴れしめんわれ災をくだし我烈しき怒をその上
二七 にいたらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし三八われ我位をエラムに居ゑ王と牧伯
二八 等を其處より滅したゝんとエホバいひたまふ三九然ど末の日にいたりてわれエラムの擄移されたる者を返
二九 すべしとエホバいひたまふ

二三 ごとくに上り飛びその翼をボズラの上に舒べんその日エドムの勇士の心は子を產む婦の心の如くならん○
二四 二三ダマスコの事、ハマテとアルパデは羞づそは凶き音信をきけばなり彼らは心を喪へり海の上に恐懼あ
二五 り安き者なし二四ダマスコは弱り身をめぐらして逃んとす恐懼これに及び憂愁と痛劬子を產む婦にあるごと
二六 くこれにおよぶ二五頌美ある邑我欣ぶところの邑を何なれば棄さらざるや二六されはその日に壯者は街
二七 に仆れ兵卒は悉く滅されんと萬軍のエホバいひたまふ二七われ火をダマスコの石垣の上に燃しベヘダデ
二八 の殿舍をことゞく焚くべし○二八バビロンの王ブカデザルが攻め擊たるケダルとハゾルの諸國の事につきてエホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ二九その幕屋とその羊の群は彼等これを取りその幕とその諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひさらん人これに向ひ惶懼四方にありと呼るべし三十
二九 エホバいひたまふハゾルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居れバビロンの王ブカデザル汝らをせむる謀略を運らし汝らをせむる術計を設けたればなり三一エホバいひたまふ汝ら起て穩なる安かに住
三十 る民の所に攻め上れ彼らは門もなく關もなくして獨り居ふなり三二その駱駝は擄掠させられその多の畜は
三一 窮ばれん我かの毛の角を剪る者を四方に散しその滅亡を八方より來らせんとエホバいひたまふ三三ハゾルは
三二 山犬の窟となり何までも荒蕪とならん彼處に住む人なくまた人の子なかるべし○三四ユダの王ゼ
三三 デキヤが位に卽し初のころエホバの言預言者エレミヤに臨てエラムの事をいふ三五萬軍のエホバかくいひ
三四 たまふ視よわれエラムが權能にして賴むところの弓を折らん三六われ天の四方より四方の風をエラムに來ら
三五 せ彼らを四方の風に散らさんエラムより追出さるゝ者のいたらざる國はなかるべし三七エホバいひたまふわれエラムをしてその敵の前とその生命を索むるものゝ前に慴れしめんわれ災をくだし我烈しき怒をその上
三六 にいたらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし三八われ我位をエラムに居ゑ王と牧伯
三七 等を其處より滅したゝんとエホバいひたまふ三九然ど末の日にいたりてわれエラムの擄移されたる者を返
三八 すべしとエホバいひたまふ

第五十章　一エホバ預言者エレミヤによりてバビロンとカルデヤ人の地のことを語りたまひし言二汝ら國人の中に告げまた宣示せ隱すことなく宣示して言へバビロンは取れベルは辱められメロダクは碎かれその像は辱められその木像は碎かるゝ三そは北の方より一の國人きたりて之を攻めその地を荒して其處に住む者無らしむればなり人も畜も皆逃去れり四エホバいひたまふその日その時イスラエルの子孫かへり來らん彼らと偕にユダの子孫かへり來るべし彼らは哭きつゝ行てその神エホバに請求むべし五彼ら面をシオンに向てその路を問ひ來れ我らは永遠わすれざる堅き契約をもてエホバにつらならんといふべし六我民は迷へる羊の群なりその牧者之をいざなひて山にふみ迷はせ山より崗さゆきめぐりて其休息所を忘れたりセ之に遇ふもの皆之を食ふその敵いへり我らは罰なし彼らエホバすなはち義きの在所その先祖の望しところなるエホバに罪を犯したるなり八汝らバビロンのうちより逃よカルデヤ人の地より出よ群の前にゆくところの牡山羊のごとくせよ九視よわれ大なる國々より人を起しあつめて北の地よりバビロンに攻めきたらしめん彼ら之にむかひて備をたてん是すなはち取るべし彼らの矢は空く返らざる狹き勇士の矢のごとくなるべし十カルデヤは人に掠められん之を掠むる者は皆飽ことをえんとエホバ曰たまふ十一我產業を掠る者よ汝らは喜び樂み穀物を礪す犢のごとくに躍り牡馬のごとく嘶けども十二汝らの母は痛く辱められん汝らを生しものは恥べし視よ國々の中の終末の者荒野さなり燥ける地さなり沙漠さならん十三エホバの怒りのために之に住む者なくして悉く荒地さなるべしバビロンを過る者は皆その禍に驚き且嘯はん〇十四凡そ弓を張る者よバビロンの四周に備をなして攻めよ矢を惜すして之を射よそは彼エホバに罪を犯したればなり十五その四周に喊き叫びて攻めかゝれ是手を伸ぶなり汝らこれに仇を復せ是の行ひしごとく是に行へ十六播種者および禾收時に鎌を執る者をバビロンに絕せその滅すところの劍を怖て人おの〳〵其民に歸り各その故土に逃べし〇十七イスラエルは散されたる羊にして獅子之が追ふ初にアッスリヤの王之を食ひ後にこのバビロンの王ネブカデネザルその骨を碎けり十八この故に萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれアッスリヤの王を罰せしごとくバビロンとその地を罰せん十九われイスラエルを再びその牧場に歸さん彼カルメルとバシヤンの上に草をくらはんまたエフライムとギレアデの山にてその心を飽すべし二十エホバいひたまふ其日その時にはイスラエルの愆を尋るも有らず又ユダの罪を尋るも遇じそはわれ我存せしところの者を赦すべければなり〇二一エホバいひたまふ汝ら上りてメラタイムの地を攻めその後より之を荒し全くこれを滅せ我汝らに命ぜしごとく行ふべし二二その地に戰鬪の吶喊と大なる敗壞あり二三嗚呼全地を搥きし鎚折れ碎くるかな嗚呼バビロン國々の中に荒地さなるかな〇二四バビロンよわれ汝をところために罟を置けり汝は覺へらるれども知ず汝エホバに敵せしにより尋られて獲へらるゝなり二五エホバ庫を啓きてその怒りの武器をいだしたまふ是主なる萬軍のエホバカルデヤ人の地に事をなさんとしたまへばなり二六汝ら終の者にいたるまで來りてこれを攻めその庫を啓き之を積て塵堆のごとくせよ盡くこれを滅して其處に遺る者なからしめよ二七その牡牛をことごとく殺せこれを屠場にくだらしめよ其等は禍なるかな其日その罰を受べき時來れり二八バビロンの地より逃げて遁れ來し者の聲ありて我らの神エホバの仇復その殿の仇復をシオンに宣ぶ〇二九射者をバビロンに召集めよ凡そ弓を張る者よその四周に陣ごりて之を攻め伺人をも逸す勿れその作爲に循て之に報いそのすべて行ひしごとくこれに行へそは彼イスラエルの聖者なるエホバにむかひて驕りたればなり三十是故にその日壯者は衢に踣れその兵卒は悉く絕されんとエホバいひたまふ三一主なる萬軍のエホバかくいひたまふイスラエルの民とユダの民は偕に虐げらる彼らを擄にせし者は皆固くこれを守て釋たざるなり三二彼らを贖ふ者は強しその名は萬軍のエホバなり彼必ずその訴を理してこの地に安を與へバビロンに住る者を戰慄しめたまはん三三エホバいひたまふカルデヤ人の上バビロンに住る者の上およびその牧伯等とその智者等の上に

剣あり 三六 剣 偶 る者の上にあり彼ら愚なる者となら
ん剣その勇士の上にあり彼ら懼れん 三七 剣その馬の
上にあり其車の上にあり又その中にあり彼ら婦女のごとくにならん剣その寶の上
にあり是掠められるべし 三八 旱その水の上にあり是涸かん斯は偶像の地にして人々偶像に迷へばなり 三九 是
故に野の獣彼處に山犬と偕に居り鴕鳥も彼處に棲べし何時までも其地に住む人なかる
べし 四十 エホバいひたまふ神のソドムゴモラとその近隣の邑々を滅せしごとく彼處に住む人なく彼處に
宿る人の子なかるべし○ 四一 視よ北の方より民きたるあらん大なる國の人とおほくの王たち地の極より起ら
ん 四二 彼らは弓と槍をとる、情なく恤矜なしその聲は海のごとくに鳴る、バビロンの女よ彼らは馬に乗り戦
士のごとくに備へて汝を攻ん 四三 バビロンの王その風聲をきゝしかば其手弱り苦痛と子を産む婦の如き劬労
彼に迫る 四四 視よ敵獅子のヨルダンの叢より上るが如く堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼等を其處より逐
弁らせわが選たる者をその上に立ん誰かわれのごとき者あらんや誰かわが爲に時刻を定めんや何の牧者か我前
に立ことをえん 四五 されバビロンにつきてエホバの謀りたまひし御謀とカルデヤ人の地につきて悪ひたま
ひし思想をきけ群の弱者必ず曳ゆかれん彼必ずかれらの住居を滅すべし 四六 バビロンは取れたりとの
聲によりて地震へその號呼國々の中に聞ゆ

エホバかくいひたまふ視よわれ滅すところの風を起してバビロンを攻め我に悖る者の中に住
む者を攻べし 二 われ簸者をバビロンに遣さん彼らこれを簸てその地を空くせん彼らすなはちその禍の日に
これを四方より攻むべし 三 弓を張る者に向ひまた鎧を被て立あがる者に向ひて射者の者其弓を張ん汝らそ
の壮者を憫まず其軍勢を悉く滅すべし 四 然ば殺さるゝ者カルデヤ人の地に踣れ刺るゝ者その街に踣れ
ん 五 イスラエルとユダはその神萬軍のエホバに棄られず彼らの地にはイスラエルの至聖者にむかひて犯
せるところの罪充つ六 汝らバビロンのうちより逃げいでよおの〳〵其生命をすくへ其の罪のために滅さるゝ
勿れ今はエホバの仇をかへしたまふ時なればなり 七 バビロンは金の杯にしてエホバの手にあり諸の地を醉せたり國々その酒を飲めり是をもて國々狂へり 八 バビロンは忽ち踣れて壊る之がために哭けその傷のために乳香をとれ是或は愈んわれらバビロンを醫さんとすれども愈ず我らこれを棄
てゝ各 その國に歸るべしそはその罰天におよび雲にいたればなり 九 エホバわれらの義をあらはしたまふ
來れシオンに於て我らの神エホバの作爲をのべん○ 十 矢を磨き楯を取れエホバメデア人の王等の心を激
發したまふエホババビロンをせめんと謀り之を滅さんとしたまふ是エホバの復仇その殿の復仇たるなり
十一 バビロンの石垣に向ひて纛を樹て圍を堅くし番兵を設け伏兵をそなへよ蓋エホババビロンに住る者をせ
めんとて謀りその言しごとく行ひたまへばなり 十二 おほくの水の傍に住み多の財寶をもてる者よ汝の終
の貪婪の限來れり 十三 萬軍のエホバおのれを指して誓ひいひたまふ我まことに人を蝗のごとくに汝の中に
充ん彼ら汝に向ひて鯨波の聲を揚ぐべし 十四 萬軍のエホバその能力をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその
明哲をもて天を舒たまへり 十五 彼聲を發したまふ時は天に衆の水いづかれ雲を地の極より起らしめ電光と
雨をおこし風をその庫よりいだしたまふ 十六 すべての人は獣のごとくにして智慧なし諸の鐵物師はその作り
し像のために辱を取る其鑄るところの像は僞の者にしてその中に靈なし 十七 其等は空しき者にして迷妄
の工作なりわが臨むとき其等は滅べし 十八 ヤコブの分は此の如くならず彼は萬物およびその産業の
造化主なりその名は萬軍のエホバといふ 十九 汝はわが鎚にして戦の器具なりわれ汝をもて諸の邦を砕き汝
をもて萬國を滅さん 二十 われ汝をもて馬とその騎る者を摧き汝をもて車とその御する者を砕かん 二一 われ
汝をもて男と女をくだき汝をもて老たる者と幼き者をくだき汝をもて壮者と童女をくだくべし 二二 わ
れ汝をもて牧者とその群をくだき汝をもて農夫とその軛を負ふ牛をくだき汝をもて方伯等と督宰等をくだ
かん 二四 汝らの目の前にて我バビロンとカルデヤに住るすべての者がシオンになせし諸の悪きことに報い
んとエホバいひたまふ 二五 エホバ言たまはく全地を滅したる滅す山よ視よわれ汝の敵となるわれ手を汝の上
に伸て汝を巌より轉ばし汝を焚山となすべし 二六 エホバいひたまふ人汝より石を取て隅石となすことあら

二七 じ亦汝より石を取りて基礎となすことあらじ汝はいつまでも荒地となりならん〇 二七 纛を地に樹て猛たる國
二八 國の中に吹き國々の民をあつめて之を攻めアララテ ミンニ アシケナズの諸國をまねきて之を攻め軍長を
二九 たて〻之を攻め恐ろしき蝗のごとくに馬をすゝめよ 二八 國々の民をあつめて之を攻めメデア人の王等とその
三〇 方伯等とその督宰等およびそのすべての領地の人をあつめて之を攻めよ 二九 地は震へ揺かんそはエホバその
三一 意旨をバビロンになしバビロンの地をして住む人なき荒地とならしめたまふべければなり 三〇 バビロンの勇
三二 者は戰をやめて其城にこもりその力失て婦のごとくになん其宅は焼けその門閂は折れん 三一 駅は趨
三三 て駅にあひ使者に趨て使者にあひバビロンの王につげて邑は盡く取られ 三二 渡口は取られ沼は焚れ兵卒は
三四 怖るといはん 三三 萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふバビロンの王子ブカデ子ザル我を食ひ我を滅し我を空き器
三五 たれり皆くありてその荒るゝ時いたらん〇 三四 バビロンの王
三六 のごとくなし龍のごとくに我を呑みわが 珍 餅をもて其腹を充し我を遂出せり 三五 シオンに住る者いはんわ
三七 がうけし虐逆と我肉はバビロンにかゝるべしエルサレムいはん我血はカルデヤに住る者にかゝるべしと 三六
三八 さればエホバかくいひたまふ視よわれ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん我その海を涸かし其泉を乾すべ
三九 し 三七 バビロンは頽垣となり山犬の巣窟となり詫異となり嗤笑となり人なき所とならん 三八 彼らは獅子の
四〇 ごとく共に吼え小獅のごとくに吼ゆ 三九 彼らの欲の燃る時にわれ 筵 を設でかれらを酔せ彼らをして喜ば
四一 しめながき眠にいりて目を醒すことなからしめんとエホバいひたまふ 四〇 われ屠る羔羊のごとく又牡羊と
四二 牡山羊のごとくにかれらをくだらしめん〇 四一 セシヤクいかにへられしや國々の中にパビロンいかにして詫異となりしや 四二 海パビロンに溢れかゝりその多の波濤これを
四三 覆ふ 四三 その諸邑は荒て燥ける地となり沙漠となり住む人なき地とならん人の子そこを過ることあらじ 四四
四四 われベルをパビロンに罰しその呑たる者を口より取出さん國々はまた川の如くに彼に來らじ パビロンの石垣
四五 陪れん 四五 我民よ汝らその中よりいで各エホバの烈しき怒をまぬかれてその命を救へ 四六 汝ら心を弱く
四六 する勿れ此地にてきく所の浮言によりて畏るゝ勿れ浮言は此年も來り次の年も亦きたらん此地に強暴あり宰
四七 者と宰者さあひ攻るとあらん 四七 故に視よわれパビロンの偶像を罰する日來らん其全地は辱められ其殺
四八 さるゝ者は悉くその中に陪れん 四八 然して天と地とその中にあるところのすべての者はバビロンの爲に
四九 に歓び歌はんそは敗壊者北の方より此處に來ればなりエホバこれをいふ 四九 バビロンがイスラエルの殺さるゝ者を陪せし如く全地の殺さるゝ者バビロンに陪るべし 五〇 剣を逃るゝ者よ往け止る勿れ遠方より
五〇 エホバを憶えエルサレムを汝らの心に置くべし 五一 罵詈をきくによりて我らの面には羞恥盈つ 五二 この故に
五一 處にいるによりて我らの面には羞恥盈つ 五二 この故にエホバいひたまふ 五三 たとひバビロン天に昇るとも北城を高くして堅固るとも敗
五二 らん傷けられたる者はその全國に呻吟べし〇 五三 たとひバビロン
五三 瓊者我よりいでゝ彼らにいたらんとエホバいひたまふ 五四 バビロンに號咷の聲ありカルデヤ人の地に大な
五四 る敗壊あり 五五 エホババビロンをほろぼし其中に大なる聲を絶したまふ其波濤は巨水のごとくに鳴りその
五五 聲は響わたる 五六 破滅者これに臨みバビロンにいたる其勇士は執へられ其弓は折らるエホバは施報をなす
五六 神なればかならず報いたまふなり 五七 われその牧伯等と博士等と督宰等と勇士とを醉せん彼らは永き寝にい
五七 りて目を醒すことあらじ萬軍のエホバと名くる王これをいふ
五八 ンの闊き石垣は悉く毀たれその高き門は火に焚れん斯民の勞苦は徒となるべし民は火のために燼れん〇
五九 これマアセヤの子なる子リヤの子セラヤがユダの王ゼデキヤと共にバビロンに往くときにあたりて預言者エレミヤがこれに命ぜし言なりこのセ
六〇 ラヤは侍従の長なり 六〇 エレミヤバビロンにのぞむ災ひを書に志るせり是即ちバビロンの事につきて錄せる此すべての言なり 六一 エレミヤ
六一 まんとする諸の言を讀め 六二 而して汝いふべしエホバよ汝はこの處を滅し人と畜をいはず凡て此處に住む者なからしめて窮なくこれを荒地となさんと此處にむかひて
六二 セラヤにいひけるは汝バビロンに往しとき愼てこの諸
六三 いひたまへり 六三 汝この書を讀畢りしとき之に石をむすびつけてユフラテの中に投いれよ 六四 而していふべ

四 しバビロンは我これに災禍をくだすによりて是まづみて復おこらざるべし彼らは絶はてんと此まではエレミ
五 ヤの言なり

第五十二章

一 ゼデキヤは位に即しとき二十一歳なりしがエルサレムに於て十一年世をさめたりその母
二 の名はハムタルといひてリブナのエレミヤの女なりニ ゼデキヤはエホヤキムが凡てなしたる如くエホバの目
三 の前に惡をなせり三すなはちエホバエルサレムとユダとを怒りて之をその前より棄てはなちたまふ是に於て
四 ゼデキヤバビロンの王に叛けり四 ゼデキヤの世の九年十月十日にバビロンの王ブカデヤザルその軍勢を
五 ひきゐてエルサレムに攻めきたり之に向ひて陣をはり四周に戍樓を建て之を攻めたり五 かくこの邑攻圍ま
六 れてゼデキヤ王の十一年にまでおよびしが六 その四月九日にいたりて城邑のうち饑ること甚だしくなり
七 その地の民食物をえざりき七 是をもて城邑つひに打破られたれば兵卒は皆逃て夜のうちに王の園の邊なる二箇
八 の石垣の間の門より城邑をぬけいで平地の途に循ひておちゆけり時にカルデヤ人は城邑を圍みをる八 茲に
九 カルデヤ人の軍勢王を追ひゆきエリコの平地にてゼデキヤに追付けるにその軍勢みな彼を離れて散りしが
十 ば九 カルデヤ人王を執へて之をハマテの地のリブラにをるバビロンの王の所に曳きゆきければ王彼の罪をさ
十一 だめたり十 バビロンの王すなはちゼデキヤの子等をその目の前に殺さしめユダの牧伯等を悉くリブラに殺
十二 さしめ十一 またゼデキヤの目を抉さしめたり斯てバビロンの王かれを銅索に繋ぎてバビロンに携へゆきその
十三 死る日まで獄に置り十二 バビロンの王子ブカデ子ザルの世の十九年の五月十日バビロンの王の前につかふ
十四 る侍衛の長子ブザラダンエルサレムにきたり十三 エホバの室と王の室を燒り火をもてエルサレムのすべて
十五 の室と大なる諸の室を燒り十四 また侍衛の長と偕にありしカルデヤ人の軍勢エルサレムの四周の石垣を
十六 悉く毀てり十五 侍衛の長子ブザラダンすなはち民のうちの貧乏者城邑の中に餘れる者およびバビロン
十七 の王に降りし人と民の餘れる者を擄移せり十六 但し侍衛の長子ブザラダンその地のある貧者を遺し
十八 て葡萄を耕る者となし農夫となせり十七 カルデヤ人またエホバの室の銅の柱と洗盤の臺と銅の海を砕
十九 きてその銅をバビロンに運び十八 また鍋と火鏟と燭剪と鉢と匙およびすべて用ふるところの銅器
二十 を取り十九 侍衛の長もまた洗盤と火盤と鉢と鍋と燭臺と匙と雪なご凡て金銀にて作れる者を取り二十
二十一 またソロモン王のエホバの室に造りし所の二の銅の柱と一の海と臺の下なる十二の銅の牛を取れりこのも
二十二 ろ〳〵の銅の重は稱る可らず二十一 この柱は高さ十八キユビトあり圍四本の厚にして空なり二十二 その上に
二十三 銅の頂ありその頂の高さは五キユビトなり又網をもてその周圍を測るに十二キユ
二十四 ビトあり指四本の厚にして空なり二十三 その四方に九十六の石榴あり網子の上なるすべて
二十五 の石榴の數は百なり二十四 侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼパニヤと三人の門守を執へ二十五 また兵卒
二十六 を執へてリブラに居るバビロンの王の許にいたれり二十六 バビロンの王ハマテの地のリブラにこれを擊ち殺せ
二十七 りかくユダはおのれの地よりさらへ移されたり二十七 子ブカデ子ザルがさらへ移せし民は左のごとし第七年
二十八 にユダ人三千二十三人二十八 また子ブカデ子ザルその十八年にエルサレムより八百三十二人をさらへ移せり
二十九 三十 子ブカデ子ザルの二十三年に侍衛の長子ブザラダンユダ人七百四十五人をさらへ移したり其總ての數
三十一 は四千六百人なりき三十一 ユダの王エホヤキムがさらへ移されたる後三十七年の十二月二十五日バビロンの王
三十二 エビルメルダクその治世の一年にユダの王エホヤキムを獄よりいだしてその首をあげしめ三十二 善言をもて
三十三 彼を慰めその位をバビロンに偕に居るところの王等の位よりもたかくし三十三 其獄の衣服を易へしむエホヤ
三十四 キムは一生の間つねに王の前に食せり三十四 かれ其死る日まで一生の間たえず日々の分をバビロンの王よ
りたまはりて其食物となせり

エレミヤ哀歌　終

耶利米亞哀歌　第一章

一 あゝ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑いまは寂しき樣にて坐し、寡婦のごとくになれり、嗟もろ〳〵の民の中にて大いなりし者もろ〳〵の州の中に女王たりし者いまはかへつて貢をいるゝ者となりぬ二彼よもすがら痛く泣きかなしみて淚面になみだかはにながる、その戀人の中にはこれを慰むる者ひとりだに無く、その朋はこれに背きてその仇となれり三ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて擄れゆき、もろ〳〵の國に住ひて安息を得ず、これを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ四シオンの道路は節會に上り來る者なきがために哀しみ、その門はことごとく荒れ、その祭司は歎き、その處女は憂へ、シオンもまた自から苦しむ五その仇は首となり、その敵は亨ゆ、その愆の多きによりてエホバこれをなやませたまへるなり、そのわかき子等は擄れて仇の前にゆけり六シオンの女よりはその榮華ことごとく離れされり、またその牧伯等は草を得ざる鹿のごとくに成り、おのれを追ふものゝ前に力つかれて歩みゆけりセエルサレムはその艱難と窘迫の時むかしの代にありしもろ〳〵の樂しき物を思ひ出づ、その民仇の手におちいり、誰もこれを助くるものなき時仇人これを見てその荒はてたるを笑ふ八エルサレムいはなはだしく罪ありたれば汚穢たる者のごとくなれり、前にこれを尊びたる者もその裸體を見しによりて皆これをいやしむ、是もまたみづから嗟き、身をそむけて退ぞけり九その汚穢これが裾にあり、彼その終局をおもはざりき、此故に驚ろくまでに零落たり、一入の慰さむる者だに無し、エホバよわが艱難をかへりみたまへ、敵は勝ほこれり十敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひたり、汝さきに異邦人等はなんぢの公會にいるべからずと命じおきたまひしに彼らが聖所に侵しいるをシオンは見たり十一その民はみな哀きて食物をもとめ、その生命を支へんがために財寶を出して食にかへたり、エホバよ見そなはし我のいやしめらるゝを顧みたまへ十二すべて行路人よ、なんぢら何ともおもはざるか、エホバその烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや考がへ見よ十三エホバ上より火をくだし、わ

はね
が骨にいれて之を克服せしめ、網を張りわが足をさらへて
我を後にむかしめ、我をして終日心さびしく、
十四 かつ疾わづらはしめたまふ 十四 わが愆尤の軛は主の御手にて結ばれ、諸
これ ちから のぞ
是はわが力をしておさろへしむ、主われを敵たりがたき者の手にわたしたまへり 十五 主われの中なる勇士を
ことごとく除き、節會をもよほして我を攻め、わが少き人を打ほろぼしたまへり、主酒槽をふむがごとく
十六 にユダの處女をふみたまへり 十六 これがために我なげく、わが目やわが目には水ながる、わがたましひを活
すべき慰さむるものわれに遠ければなり、わが子等は敵の勝るによりて滅びうせにき 十七 シオンは手をのぶ
れども誰もこれを慰さむる者なし、ヤコブにつきてはエホバ命をくだしてその周圍の民をこれが敵となら
めたまふ、エルサレムは彼らの中にありて汚れたる者のごとくなりぬ 十八 エホバは正し、我その命にそむ
きたるなり、一切の民よ我に聽け、わが憂苦をみよ、わが處女もわかき男も俘囚て往り 十九 われわ
が戀人を呼たれども彼らはわれを欺むけり、わが祭司およびわが長老は生命を繋がんとて食物を求むる間に
二十 都邑の中にて氣息たえたり 二十 エホバよかへりみたまへ、我はなやみてたり、わが腸わきかへり、わが心
わが衷に顛倒す、わが甚はだしく悖りたればなり、外には劍ありてわが子を殺し、内には死のごとき者あり
二一 かれらはわが嘆歎をきけり、我をなぐさむるもの一人だにあらず、わが敵みなわが艱難をきゝおよびて、汝
のこれを爲たまひしを喜こべり、汝はさきに告示せしその日を來らせたまはん、而して彼らもつひに我ご
二二 さくに成るべし 二一 われがはくは彼等が興へし艱難をことごとくなんぢの御前にあらはし、前にわがもろ〳〵
の罰愆のために我におこなひし如く彼らにも行なひたまへ、わが嘆嘆は多く、わが心はうれひかなしむなり

新聖書

一 あゝエホバ震怒をおこし、黒雲をもてシオンの女を蔽ひたまひ、イスラエルの榮光を天より地に
おとし、其震怒の日におのれの足凳を心にとめたまはざりき 二 主ヤコブのすべての住居を呑つくして憐れま
ず、震怒によりてユダの女の保砦を毀ち、これを地にたふし、その國とその牧伯等を辱かしめ 三 烈しき震怒
をもてイスラエルのすべての角を絶ち、敵の前にて己の右の手をひきちゞめ、四面を焚きつくす燃る火のご

とくヤコブを焚き 四 敵のごとく弓を張り、仇のごとく右の手を挺て立ち、凡て目に喜こばしきものを滅ぼし、
シオンの女の蓆屋に火のごとくその怒をそゝぎたまへり 五 主敵のごとくに成たまひてイスラエルを呑ほろぼ
し、その諸の殿を呑ほろぼし、そのもろ〳〵の保砦をこぼち、ユダの女の上に憂愁と悲哀を增くはへたり 六 園
のごとく己の幕屋を荒し、その集會の所をほろぼしたまへり、エホバ節會と安息日とをシオンに忘れしめ、
烈しき怒によりて王と祭司とをいやしめ棄たまへり 七 主その祭壇を忌棄て、その聖所を嫌ひ憎みて、その諸
の殿の石垣を敵の手にわたしたまへり、彼らは節會の日のごとくエホバの室にて聲をたつ 八 エホバシオンの
女の石垣を毀たんと思ひさだめ、繩を張りて、こぼち進みてその手をひかず、壘と石垣とをして哀しましめた
まふ、是らは共に憂ふ 九 その門は地に埋もれ、エホバその閂木をこぼちくだき、その王ともろ〳〵の牧伯は
律法なき國人の中にあり、その預言者はエホバより異象を蒙らず 十 シオンの女の長老等は地に坐りて
默し、首に灰をかむり、身に麻をまとふ、エルサレムの處女は首を地に低る 十一 わが目は涙のために潰れん
し、わが腸は沸かへり、わが肝は地に塗る、わが民の女ほろぼされ、幼少ものや哺乳子は疲れはてゝ邑
の街衢に氣息たへなんとすればなり 十二 かれらは母にむかひて言ふ、穀物と酒とはいづくにあるやと 十三 エルサレムの女
の國にその纔魂をそゝがんとし、母にむかひて言ふ、我なにをもて汝にあかしゝ、何をもて汝にならべんや、
よ、我なにをもて汝をなぐさめんや、汝のやぶれは海のごとく大なり、嗟たれか能くなんぢを醫さんや 十四 なんぢの預言者は
虛しき事と愚なることゝなんぢに預言し、かつて汝の不義をあらはしてその俘囚をまぬかれしめんとはせざ
りき、その預言するところは僞むなしき重荷および追放たるゝ根本となるべき事のみ 十五 すべて往來の人な
んぢにむかひて手を拍ち、エルサレムの女にむかひて、嘲りわらひ、かつ頭をふりて言ふ、美麗の極、全
地の欣喜ところなへたりし邑は是なるかと 十六 なんぢのもろ〳〵の敵はなんぢに對ひて口を開け、あざけり笑
ひて切齒をなす、斯て言ふわれら之を呑つくしたり、是われらが望みたりし日なり、われら已に之にあへり、

我らすでに之を見たりと 十七 エホバはその定めたまへることを成し、いにしへより其命じたまひし言を果したまへり、エホバはほろぼして憐れまず、敵をして汝にかちほこらしめ汝の仇の角をかたくしたまへり 十八 かれらの心は主にむかひて呼はれり、シオンの女の墻垣よ、なんぢ夜も昼も河のごとく涙をながせ、みづから安んずることをせず、汝の瞳子を休むることなかれ 十九 なんぢ夜の初更に起いでゝ呼さけべ、主の御前に汝の心を水のごとく灌げ、街衢のほとりに饑たふるゝなんぢの幼兒の生命のために主にむかひて兩手をわげよ 二十 エホバよ視たまへ、汝これを誰におこなひしか願はくは願みたまへ、婦人おのが實なるその慳き育てし孩兒を食ふべけんや、祭司、預言者等主の聖所において殺さるべけんや 二一 をさなきも老たるも街衢に地に臥し、わが處女も若き男も刃にかゝりて斃れたり、なんぢはその震怒の日にこれを殺し、これを屠りて恤れみたまはざりき 二二 なんぢ節會の日のごとくわが懼るゝところの者を四方より呼あつめたまへり、エホバの震怒の日には遁れたる者なく又のこりたる者なかりき、わが慳き育てし者はみなわが敵のためにほろぼされたり

第三章

一 我はかれの震怒の笞によりて艱難に遭たる人なり 二 かれは我をひきて黑暗をあゆませ、光明にゆかしめたまはず 三 まことに惡々その手をむけて終日われを攻なやまし 四 わが肉と肌膚をおとろへしめ、わが骨を摧き 五 われにむかひて患苦と艱難を築きこれをもてわれを圍みゝわれをして長久に死し者のごとく暗き處に住しめ 六 我をかこみて出ること能はざらしめ、わが鏈索を重くしたまへり 七 我さけびて助をもとめしとき彼わが祈禱をふせぎ 八 斫たる石をもてわが道を塞ぎ、わが途をまげたまへり 九 その我に對するここは伏てゐる熊のごとく、潜みかくろふ獅子のごとし 十一 われに路を離れしめ、我をひきさきて獨くるしましめ十二 弓を張てわれを矢先の的となし 十三 矢筒の矢をもてわが腰を射ぬきたまへり 十四 われはわがすべての民のあざけりとなり、終日うたひそしらろ 十五 かれ我をしてわが齒を摧き、灰をもて我を蒙ひたまへり 十六 小石をもてわが靈魂をして平和を遠くはなれしめたまへば我は福祉をわすれたり 十八 是において我みづから言り、わが氣力うせゆきぬ、エホバより何をも望むべきところ無しと 十九 我がはくは我が艱難と苦楚、茵蔯と膽汁とを心に記たまへ 二十 わがたましひは今なほ是らの事を想ひてわが衷に鬱ぐ 二一 われこの事を心におもひ起せり、この故に望をいだくなり 二二 これは朝ごとに新なり、なんぢの誠實はおほいなるかなエホバの仁愛によりその憐憫の盡ざるに因る 二三 わが靈魂は言ふ、エホバはわが分なり、このゆゑに我彼を待ち望まん 二四 エホバの救拔をのぞみて靜にこれを待は善し 二五 エホバはおのれを待ち望む者とおのれを尋れもとむる人に恩惠をほどこしたまふ 二六 エホバの救拔をのぞみて靜に待つ者に煩なむけ、充足るまでに恥辱をうけよ 二七 人若壯のとき軛を負ば善し 二八 エホバこれを負せたまふなれば獨坐して默すべし 二九 口を塵につけよ、あるひはわかき時に軛を負ば善し 三十 おのれを擊つ者に頰をむけ、充足るまでに恥辱をうけよ 三一 そは主は永久に棄ることを爲たまはざるべければなり 三二 かれは患難を與へたまふといへどもその慈悲おほいなればまた憐憫を加へたまふなり 三三 心より世の人をなやまし、かつ苦しめたまふにはあらざるなり 三四 世のもろ〳〵の俘囚人を脚の下にふみにじり 三五 至高者の面の前にて人の理を枉げ 三六 人の詞訟を屈むることは主のよろこびたまはざるところなり 三七 主の命じたまふにあらずば誰か事を逸んにその事すなはち成んや 三八 禍も福もともに至高者の口より出るにあらずや 三九 活る人なんぞ怨言べけんや、人おのれの罪の罰せらるゝをつぶやくべけんや 四十 我等みづからの行をしらべ、かつ省みてエホバに歸るべし 四一 われらは罪ををかし、我らは叛きたり、なんぢこれを赦したまはざりき 四二 なんぢ震怒をもてみづから蔽ひ、我らを追攻め、殺してあはれまず 四三 雲をもてみづから蔽ひ、祈禱をして通ぜざらしめ 四四 もろ〳〵の民の中にわれらを塵埃となしたまへり 四五 恐懼と陷阱また暴行と滅亡我らに來れり 四六 敵は皆われらにむかひて口を張り 四七 わが民の女の滅亡によりてわが眼には涙の河ながる 四八 わが目は斷ず涙をそゝぎて止ず 四九 天よりエホバの臨み見て願みたまふ時にまで 五十 天よりエホバの臨み見て願みたまふ時にまで 五一 わが邑の一切の女等の故によりてわが眼はわが心をいたましむ 五二 故なくして我に敵する者ごも鳥を追ごとくにいたく我

五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六十 六一 六二 六三 六四 六五 六六 第四章 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

たゐひ 五三わが生命を坑の中にほろぼし、わが上に石を投かけ 五四また水わが頭の上に溢る我、みづから言り滅びうせぬと 五五エホバよ、われ深き坑の底より汝の名を呼り 五六なんぢ我が聲を聽たまへり、わが哀歎と祈求に耳をおほひたまふなかれ 五七わが汝を顧たりし時なんぢは近よりたまひて、恐るゝなかれと宣へり 五八主よ、なんぢはわが靈魂の訴を助け伸べ、わが生命を贖ひたまへ 六十なんぢは彼らが我を怨み、われを害むりたる不義を見たまへり、願はくは我に正しき審判を與へたまへ 六一エホバよ、なんぢは彼らが我を詈しり、我を害せんとはかるを凡て見たまへり 六二エホバよなんぢは彼らが我を攻んとて運らす謀計もまた汝これを聞ずまへり 六三かの立て我に遊らふ者等の言語およびその終日われを攻んとて運らす謀計もまた汝これを聞ずまへり 六四エホバよ、なんぢは彼らが手に爲すところに循がひて報をなし 六五かれらをして心くらからしめたまはん、なんぢの呪詛かれらに歸せよ 六六なんぢは震怒をもてかれらを追ひ、エホバの天の下よりかれらを滅ぼし絶たまはん

第四章 一あゝ貴金は光をうしなひ、純金は色を變じ、聖所の石はもろ〳〵の街衢の口に投すてられたり 二あゝ錦金にも比ぶべきシオンの愛子等は陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る 三山犬さへも乳房をだしてその子に乳を哺ず、然るにわが民の女は殘忍荒野の鴕鳥のごとくなれり 四乳哺兒の舌は渇きて上腭にひたゞ貼き、幼兒はパンをもとむるも擘てあたふる者なし 五肥甘物をくらひ居し者はおちぶれて街衢にあり、紅の衣服にて育てられし者も今は塵堆を抱くゝいまわが民の女のうくる愆の罰はソドムの罪の罰よりも大なり 六ソドムは古昔人に手を加へらるゝことなくして瞬く間にほろぼされしなりゝわが民の中なる貴きほいなり、ゾドムは雪よりも皎潔に、乳よりも白く、珊瑚よりも鮮紅色にしてその形貌のうるはしきこと藍玉のごとくなりしが、いまはその面くろきが上に黒く、街衢にあるとも人にみられず、その皮は骨にひたゞ貼きて乾きて枯木のごとくなれり 九剣にて死る者は饑て死る者よりもさいはひなり、そは斯る者は田圃の產物の缺るにより漸々におとろへゆき、刺れし者のごとくに成ばなり 十わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき婦女等をへしも手づから己の子等を煮て食となせり 十一エホバその憤恨をことゞく洩し、烈しき怒をそゝぎたまひ、シオンに火をもやしてその基礎までも燒しめたまへり 十二地の諸王も世のもろ〳〵の民もすべてエルサレムの門に仇や敵の打いらんさは信ぜざりき 十三斯なりしはその預言者の罪により、その祭司の愆によれり、彼らは即ち正しき者の血をその邑の中にながしたりき 十四今かれらは盲人のごとく街衢にさまよひ、身は血にて汚れをれば人その衣服にふるゝあたはず 十五人かれらにむかひて呼はり言ふ、去よ穢らはし、去れ、去れ、觸るなかれと、彼らはしり去て流離ば異邦人の中間にても人々また言ふ、彼らは此に寓るべからずと 十六エホバ怒れる面をもてこれを散したまへり、再びこれを顧りみたまはじ、人々祭司の面をも尊ばず長老をもあはれまざりき 十七われらは頼まれぬ救援を望みて目つかれおとろふ、我らは俟ゐたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待たりぬ 十八敵われらの脚をうかがへば我らはおのれの街衢をも歩くことあたはず、我らの終ちかづけり、我らの日つきたり、即ち我らの終きたりぬ 十九われらを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し、山にて我らを追ひ、野に伏てわれらを伺がふ 二十かの我らが鼻の氣息たる者エホバに膏そゝがれたるものは、是はわれらが異邦にありてもこの陰に住んとおもひたりし者なり 二一ウズの地に住むエドムの女よ、悦び樂しめ、汝にもまたつひに杯めぐりゆかん、なんぢも酔て裸になるべし 二二シオンの女よ、なんぢが愆の罰はをはれり、重ねてなんぢを擄へゆきたまはじ、エドムの女よ、なんぢの愆を罰しまはん、汝の罪を露はしたまはん

第五章 一エホバよ、我らにありし所の事をおもひたまへ、我らの恥辱をかへりみ覩たまへ 二われらの產業は外國人に歸し、われらの家屋は他國人の有となれり 三われらは孤子なりて父あらずわれらの母は寡婦にひとし 四われらは金を出して自己の水を飲み、おのれの薪を得るにも價をはらふ 五われらを追ふ者われらの頸に迫る、我らは疲れて休むことを得ず 六食物を得て饑を凌がんとてエジプト人およびアッスリヤ人に手を與へたり 七われらの父は罪をなして已に世にあらず、我らその罪を負ふなり 八奴僕等われらを制す

九 荒野の刀兵の故によりて我ら死ぬる冒して食物を得ること
十 饑の烈しき熱氣によりてわれらの皮膚は爐のごとく熱し
十一 シオンにて婦女等をかされ、ユダの邑々にて處
十二 女等けがされ、侯伯たる者も敵の手にて吊され、老たる者の面も尊ばれず
十三 少き者は石磨を擔はせられ、童子は薪を負てよろめき
十四 長老は門にあつまることを止め、少き者はその音樂を廢せり
十五 われらが心の快樂はすでに罷み、われらの跳舞は悲哀となり
十六 冠冕は首より落たり、われらの罪をかしたればなり
十七 これがために我らの心うれへ、これらのために我らが目くらくなれり
十八 シオンの山は荒はてて山犬その上を歩くなり
十九 エホバよ、なんぢは永遠に在す、なんぢの御位は世
二十 世かぎりなし、二十何ぞ我らを永く忘れ、われらを斯ひさしく棄おきたまふや
二一 エホバよ、われがはくは我らをして汝に歸らしめたまへ、われら歸るべし、我らの日を新にして昔日の日のごとくならしめたまへ、二二
二二 さりとも汝まつたく我らを棄たまひしや痛くわれらを怒りねたまふや

耶利米哀歌　終

以西結書

第一章

一 第三十年四月の五日に我ケバル河の邊にて神の異象を見たりニ 是エホヤキン王の擄ゆかれしより第五年のその月の五日なりき三 時にカルデヤ人の地に於てケバル河の邊にてエホバの言 祭司ブジの子エゼキエルに臨めりエホバの手かしこにて彼の上にあり四 我見しに視よ烈き風大なる雲および燃る火の團塊北より出きたる又雲の周圍に輝光ありその中よりして火の中より燒たる金族のごときものの出づ五 其火の中に四箇の生物にて成る一箇の形あり其狀は是のごとし即ち人の象あり六 各四の面あり各四の翼ありセ その足は直なる足その足の跖は犢牛の足の跖のごとくにして磨ける銅のごとくに光れり八 その生物の四方に翼の下に人の手ありこの四箇の物皆面と翼ありカ その翼はたがひに相つらなれりその往くときに回轉すして各その面の向ふところに行く十 その面の形は人の面のごとし四箇の者右には獅子の面あり四箇の者左には牛の面あり又四箇の者鷲の面あり十一 その面とその翼は上にて分るその各箇の翼二箇は彼と此と相つらなり二箇はその身を蔽ふ十二 各箇その面の向ふところへ行き靈のゆかんとする方に行く又行にまはることなし十三 その生物の形は燃る炭の火のごとく松明のごとし火生物の中に此彼に行き火輝きてその火の中より電光いづ十四 その生物奔りて電光の如くに往來す十五 我生物を觀しに生物の近邊にあたりてその四箇の面の前に地の上に輪あり十六 其輪の形と作は黄金色の玉のごとしその四箇の形は皆同じその形と作は輪の中に輪のあるがごとくなり十七 その行く時は四方に行く行にまはることなし十八 その輪輞は高くして畏懼かりその輪輞は四箇ともに皆遍く目あり十九 生物の行く時は輪その傍に行き生物地をはなれて上る時は輪もまた上る二十 凡て靈のゆかんとする方に往く輪またその傍に上る是生物の靈のゆかんとする方に往く輪またその傍に上る是生物の靈輪の中にあればなり二一 此の行く時は彼もゆき此の止る時は彼も止り此地をはなれて上る時は輪も共にあがる是生物の靈輪の中にあればなり二二 生物の首の上に畏しき氷晶のごとき穹蒼ありてその首の上に展開ろ二三 穹蒼の下に其翼直く開きて此と彼とあひ連る

二四 又各〻二箇の翼ありその各〻の二箇の翼此方彼方にあり
二五 水の聲のごとく全能者の聲のごとし其聲音の響は軍勢の聲
二六 の上なる穹蒼の上より聲ありその立ゞまる時は翼を垂る 二六
二七 ありその寶位の狀式の上に人のごとき者在す 二七 又われその中と周圍に磨きたる銅のごとく火のごとくな
二八 る者を見る其人の腰より上も腰より下も火のごとくに見ゆ其周圍に輝光あり 二八 その周圍の輝光は雨の日に
雲にあらはるゝ虹のごとし エホバの榮光かくのごとく見ゆ我これを見て俯伏したるに語る者の聲あるを聞く

第二章

一 彼われに言たまひけるは人の子よ起あがれ我なんぢに
二 にきたりて我を立あがらしむ爰に我その我に語りたまふ 二 時靈われ
をイスラエルの子孫に遣すゝなはち我に叛ける叛逆の民につかばさん彼等とその先祖我に悖て今日にいた
三 る四 その子女等は厚顏にして心の剛愎なる者なり 我汝を 三 われらに遣はす汝かれらに主エホバかくいふと告
四 べし五 彼等は悖逆る族なり彼等は之を聽も之を拒むも 預言者の己等の中にありしを知ん 六 汝人の子よたと
五 ひ荊と 棘 汝の周圍にあるとも亦汝蠍の中に住とも これを懼るゝなかれその言をおそるゝなかれ夫か
六 れらは悖逆る族なり汝その言をおそるゝなかれ七 彼等は悖逆る族なり彼らこれを聽もこれ
七 を拒むも汝 吾 言をかれらに告よ 八 人の子よわ が汝に言ところを聽 汝わが口を開きてわが汝にあたふる者をくらふべし 九 時に我見に吾方に伸たる手ありて其中に卷物ありき 十 彼これ
八 れをわが前に開けり卷物は裏と表に文字ありて上に嗟嘆と悲哀と憂患とを錄す

第三章

一 彼また我に言たまひけるは人の子よ汝獲るところの者を食へ此 卷 物を食ひ往てイスラエルの家
二 に告よ 二 是に於て我口をひらけばその卷物を我に食しめて 三 我にいひたまひけるは人の子よわが汝にあたふ
三 る此 卷 物をもて腹をやしなへ腸にみたせよ 我すなはち之をくらふに其わが口に甘きこと蜜のごとくな
四 りき 四 彼また我にいひたまひけるは人の子よイスラエルの家にゆきて吾言を之につげよ 五 我なんぢを 唇
六 の深き舌の重き民につかはすにあらずイスラエルの家につかはすなり 六 汝がその言語を悉らざる 唇 の深き
七 舌の重き民の國人に汝をつかはすにあらず我若なんぢを彼らに遣はさば彼等なんぢに聽ん 七 イスラエル
の家は我に聽ことを好まざれば汝に聽ことをせざるべしイスラエルの家は全家は厚顏にして心の剛愎なる者
八 なればなり 八 視よ我かれらの面のごとく汝の面をかたくし かれらの額のごとく汝の額を堅くせり 九 我なん
九 ぢの額を金剛石のごとくし磐よりも堅くせり彼らは背逆る族なり汝かれらを懼るゝなかれ彼らの面に戰慄
十 くなかれ 十 又われに言たまひけるは人の子よわが汝にいふところの凡の言をなんぢの心になをめ汝の耳に
十一 きけよ 十一 往てかの擄へ移されたる汝の民の子孫にいたりこれに語りて主エホバかく言たまふと言へ彼ら聽
十二 も拒むも汝 然すべし 十二 時に靈われを上にあげて携へゆけば我
十三 より出る者は讃べきかな云ふを聞り 十三 また生物の互にあひ連なる翼の聲とその傍にある輪の聲および
十四 大なる響の音を聞く 十四 靈われを上にあげて携へゆけば我
十五 わが上にあり 十五 爰に我ケバル河の邊にてテラアビブに居る者に至り驚きおきれてその坐
十六 する所に七日倶に坐せり 十六 七日すぎし後エホバの言われに臨みて 十七 人の子よ我なんぢを立てイス
十七 ラエルの家のために守望者となす汝わが口より言を聽き我
十八 らず死べしと言んに汝かれを警めず彼をいましめ語りその惡き道を離れしめて之が生命を救はずば彼悪人
十九 はおのが惡のために死んされど其血をば我なんぢの手に要むべし 十九 然ど汝惡人を警めんに彼その惡き
二十 その惡き道を離すば彼はその惡の爲に死ん汝はおのれの靈魂を救ふなり 二十 又 義 人その義 事をすてふ
二一 惡を行はんに我躓 礙をその前におかば彼は死べし汝かれを警めざれば彼はその罪のために死でそのおこ
なひし義き事を記ゆる者なきにいたらん然ば我その血を汝の手に要むべし 二一 然ど汝もし義き人をいましめ
二二 たんじびと 義き人に罪戻をかさしめずして彼罪を犯すことをせずば彼は警戒をうけたるがためにかならずその生命をた
もたん汝はおのれの靈魂を救ふなり 二二 茲にエホバの手かしこにてわが上にあり彼われに言たまひけるは起

二三 て平原にいでよ我そこにて汝にかたらん 二三 我すなはち起て平原に往にエホバの榮光わがケバル河の邊にて
二四 見し榮光のごとく其處に立ければ俯伏たり 二四 時に靈われの中にいりて我を立あがらせ我にかたりていふ
二五 往て汝の家にこもれ 二五 人の子よ彼等汝に繩をうちかけ其をもて汝を縛らん汝はいれらの中に出ゆくことを
二六 た得ざるべし 二六 我なんぢの舌を上顎に堅く着しめて汝を唖となし彼等を譴めざらしむべし彼等は悖逆る
二七 族なればなり 二七 然ど我汝に語る時は汝の口をひらかん汝彼らにいふべし主エホバかく言たまふ聽者は
二八 聽べし拒む者は拒むべし彼等は悖逆る族なり

第四章

一 一 人の子よ汝磚瓦をとりて汝の前に置きその上にエルサレムの邑を畫け 二 而して之を取圍み之に
二 むかひて雲梯を建て壘を築き陣營を張り邑の周圍に破城槌を備へて之を攻よ 三 汝また鐵の鍋を取り汝と邑の
三 間に置て鉄の石垣となし汝の面を之に向よ斯この邑圍まれん汝之を圍むべし是なんぢに對ふ徴なり 四 又汝左側を下にして臥しイスラエルの家の罪を其上に置よ汝が臥ところの日の數は是なんぢがその罪を負ふ者なり 五 我かれらが罪を犯せる年を算へて汝のために日の數となす即ち三百九十日の間汝イスラエルの家の罪を負ふべし 六 汝これを終なば復右側を下にして臥し四十日の間ユダの家の罪を負ふべし我汝のために一日を一年と算ふ 七 汝エルサレムの圍に面を向け腕を袒して其事を預言すべし 八 視よ我索を汝にかけて汝の圍まれなんぢ轉ことを得ざらしめん 九 汝小麥大麥豆扁豆粟および裸麥を取て之を一箇の器にいれ汝が橫はる日の數にしたがひてこれを食ふべし即ち三百九十日の間これを食べし 十 汝食ふところの食は二十シケルを食へ時々これを食ふべし 十一 又汝水を量りて一 十一 ロンの六分一を飲め時々これを飲べし 十二 汝大麥の餅のごとくイスラエルの民はわが追やらんところの國々において 十三 の糞をもて之を烘べし 十三 エホバいひたまふ是のごとくイスラエルの子孫はわが追やらんところの國々において 十四 でその汚穢たるパンを食ふべし 十四 是において我いふ嗚呼主エホバよわが魂は絕て汚れし事なし我は幼少時より今にいたるまで自ら死し者や裂殺れし者を食ひし事なし又絕て汚れたる肉わが口にいりしことなし

十五 十五 エホバ我にいひたまふ我牛の糞なもて人の糞にかふるをゆるす其をもて汝のパンを調ふべし 十六
十六 又我に言たまふ人の子よ視よ我エルサレムにおいて人の杖とするパンを打碎かん彼等は食をはかりて憂みて食
ひ水をはかりて驚きて飲ん 十七 斯食と水と乏しくなりて彼ら互に面を見あはせて驚きその罪に亡びん

第五章

一 一 人の子よ汝利き刀を執り之を剃刀となして汝の頭と頷をそりまた權衡をとりてその毛を分てよ 二 而して圍城の日の終る時邑の中にて火をもて其三分の一を取り刀をもて邑の周圍を擊ちその污穢たるパンを食ふべし 十四 是において我いふ嗚呼主エホバよわが魂は絕て汚れし事なし我は幼少
二 三分の一を風に散すべし我刀をぬきて其後を追ん三 汝その毛を少く取りて裾に包み 四 又その中を取りてこ
三 れを火の中になげいれ火をもて之をやくべし火その中より出てイスラエルの全家におよばん 五 主エホバかく
四 いひたまふ我これエルサレムを萬國の中におき列邦をその四圍に置り 六 エルサレムは異邦よりも惡くわが法
五 律に悖り其四周の國々よりもわが法憲に悖る即ち彼等はわが法律を讐如にしわが法憲に歩行まざるなり 七
六 故に主エホバかくいひたまふ汝等はその周圍の異邦人よりも甚しく噪きたち吾憲にあゆまず吾法をおこなはず又我に言たまふ人の子よ視よ我エルサレムに於て人の糞にかふるをゆるす其をもて汝のパンを調ふべし 十六
七 こなはず又汝らの周圍なる異邦人の法のごとくにも行ふことすらもせざるなり 八 是故に主エホバかくいひ
八 たまふ視よ我、我は汝を攻め異邦人の目の前にて汝の中に鞫をおこなはんル なんぢの爲せし諸の惡むべき事のために我わが未だ爲ざりしところの事此後ふたゝび其ごとく爲ざるべきところの事を汝になさん 十
九 是がために汝の中にて父たる者はその子を食ひ子たる者はその父を食はん我汝の中に鞫をおこなひ汝の中の餘れる者を盡く四方の風に散さん 十一 是故に主エホバいひたまふ我かならず汝を滅さん我目汝を惜み見ず我汝を憐まざるべし 十二 汝の三分の一は汝の中において疫病にて死に饑饉にて滅びん又三分の一は汝の四周にて刀に仆れん又三分の一をば我四方の風に散し刀をぬきて其後をおはん 十三 斯我怒を洩し憤しわが憤をかれらの上にうむらせて心を安んぜん我わが憤をかれらの上に洩し憤す時は彼ら我エホバの熱心ともてかたりたる事をしるに至らん 十四 我汝を荒地となし汝の周圍の國々の中に汝を笑柄となし凡て往來の人の目

に斯あらしむべし 十五 我怒と憤とを重き責をもて鞘を
り嘲となり譬戒となり驚懼とならん我エホバこれを言ふ
すための者なり我汝らを滅さんために之を放つべし我な
ろのパンを打砕かん 十七 我饑饉と悪き獣を汝等におくらん是
なんぢの間に行わたらん我刀を汝にのそましむべし我エホバ
こと

第六章 一 エホバの言われに臨みて言ふ二 人の子よ汝の面を
イスラエルの山よ主エホバの言を聽け主エホバ山と岡と谷と平原にむかひて斯いひたまふ視よ我 剣を汝等
に遣り汝らの崇邱を滅す四 汝等の壇は荒され日の像は毀たれん我 汝らの中の殺さるゝ者をして汝らの
偶像の前に仆れしむべし五 我イスラエルの子孫の尸骸をその偶像の前に置き汝らの骨をその壇の周圍に散さ
ん六 凡て汝らの住ところにて邑々は滅され崇邱は荒されん斯して汝らの壇は壊て荒れ汝らの偶像は毀た
れて滅び汝等の日の像は斫たふされ汝等の作りし者は絶されん七 又殺さるゝ者なんぢらの中に仆れん汝等こ
れに由て吾エホバなるを知るにいたらん八 我或者を汝らにのこす即ち剣をのがれて異邦の中になる者國
國の中にちらさるゝ者是なり九 汝等の中の逃れたる者はその擄ゆかれし國々において我を記念ふに至らん是
は我かれらの我をはなれたるその姦淫をなす心を挫き且かれらの敖淫を好みてその偶像を慕ふところの目
を挫くに由てなり而して彼等はその諸の憎むべき者をもて爲たるところの悪のために自ら恨むべし十 斯彼
等はわがエホバなるを知るにいたらん之吾がこの災害をかれらになさんと語しことは徒然にならざるなり十一
主エホバかく言たまふ汝手をもて撃ち足を踏ならして言へ嗚呼凡てイスラエルの家の悪き憎むべき者は鋼
なるかな皆刀と饑饉と疫病にて仆るべし十二 遠方にある者は疫病にて死に近方にある者は刀に仆れん又
生存りて身を全うする者は饑饉に死べし斯我わが憤怒を彼等に洩しつくすべし十三 彼等の殺さるゝ者その
偶像の中にありその壇の周圍にあり諸の高岡にあり諸の山の頂にあり諸の青樹の下にあり諸の茂れる橡樹

の下にあり彼等が馨き香をその諸の偶像にさゝげたる處にあらん十四 我手をかれらの上に伸べ凡てかれらの住居ところにて其地を荒してテナラの野にもまさる荒地とす
べし是になりてかれらはわがエホバなるを知るにいたらん

第七章 一 エホバの言また我にのぞみて言ふ二 人の子よ主エホバかくイスラエルの地の末期いたるこ
此國の四方の境の末期來れり三 今汝の末期いたる我わが怒を汝に洩し汝の行にしたがひて汝を鞫き汝
生存りて身を全うする者は饑饉に死べし斯我わが憤怒を彼等に洩しつくすべし十三 彼等の殺さるゝ者その
の諸の憎むべき物のために汝を罰せん四 わが目は汝を憐まず汝の行のために汝を罰
せん汝のなせし憎むべき事の報汝の中にあるべし是にて我エホバなるを知らん五 主エホバ
かく言たまふ災禍あり非常災禍きたる六 末期きたる其末期きたり是起りて汝に臨む視よ來る七 此地
の人よ汝の命數いたる、時いたり日ちかし山々には擾亂のみありて喜樂の聲なし入今我すみやかに汝に
汝らせわが怒氣を汝に洩しつくし汝の行爲にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべきところの事の
ために汝を罰せん九 わが目は汝を惜み見ず我 汝をあはれまず汝の行のために汝を罰せん汝の爲し憎むべ
き事の果報汝の中にあるべし是によりて汝等は我エホバの撃なるを知ん十 視よ日きたる視よ來れり命
數いたりのぞむ杖花咲き驕傲茁す十一 暴逆おこりて悪の杖と成る彼等もその群衆もその驕者も皆失んが
れらの中には何も殘る者なきにいたるべし十二 時きたる日ちかづけり買者は喜ぶなかれ賣者は思ひわづらふ
なかれ怒その群衆におよぶべければなり十三 賣者は假令その生命ながらふるともその賣たる者に歸るもあた
はし此地の全の群衆をさすところの預言は廢らざるべければなり其惡の中にありて生命を全うする者なかる
べし十四 人衆ラッパを吹て凡て預備をなせども 戰にいづる者なし其はわが怒その全の群衆におよべばなり
十五 外には劍あり内には疫病と饑饉あり田野にをる者は劍に死なん邑の中になる者は饑饉と疫病これを
ほろぼすべし十六 その中の逃るゝ者は逃れて谷の鴿のごとくに山の上にをりて皆その罪のために悲しまん
十七 手みな弱くなり膝みな水となるべし十八 彼等は麻の衣を身にまとはん恐懼かれらを蔽まん諸の面には羞

十九 あらはれ諸の首は髪をそりおとされん 十九 彼等その銀を街にすてん其金はかれらに厭ひのごくなるべし
エホバの怒の日にはその金銀もかれらを救ふことあたはざるなり是等はその心魂を滿足せしめず其腹を充さ
二十 す唯彼等をつまづかせて惡におこしいる〳〵者なり 二十 彼の美しき飾物を彼等驕傲のために用ひ又これをも
二一 てその憎べき偶像その憎むべき物をつくれり是をもて我これを彼らに芥somならしむ 二一 我これを外國人に
二二 わたして奪はしめ地の惡人にわたして掠めしめん彼等平安を求れども得ざるなり 二二 災害に災害くはゝり注
二三 べければ彼等わが密たる所を汚さん強暴人其處にいりてこれを汚すべし 二三 汝鏈索を作れよ死にあたる即
二四 國に滿ち暴逆邑に充たり 二四 我國々の中の惡き者等を招きて彼らの家を奪しめん我強者の驕傲を止め
二五 んその聖所は汚さるべし 二五 滅亡きたれり彼等平安を求れども得ざるなり 二六 災害に災害くはゝり注
二六 進に注進くはゝる彼等預言者に默示を求ん法律は祭司の中に絶え謀略は長老の中に絶べし 二七 王は哀き牧
二七 伯は驚惶を身に纏ひ國の民の手は慄へん我その行爲に循ひて彼らを處置ひその審判に循ひて彼らを罰せん
彼等は我エホバなるを知にいたるべし

第八章

一 爰に六年の六月五日に我わが家に坐したりユダの長老等わがまへに坐りゐし時主エホバの手
二 われの上に降れり 二 我すなはち視しに火のごとくに見ゆる形象あり腰より下は火のごとく見ゆ腰より上は光
三 輝て見え燒たる金屬の色のごとし 三 彼手のごとき者を伸て吾が頭髮を執りしかば靈われを地と天の間に曳あ
げ神の異象の中に我をエルサレムに携へゆき北にむかへる內の門の口にいたらしむ其處に嫉妬をおこすこゝ
四 ろの嫉妬の像たてり 四 彼處にイスラエルの神の榮光あらはれゐて吾が平原にて見たる異象のごとし 五 彼われに
五 言たまふ人の子よ目をあげて北の方を望むに視よ壇の門の北にあたりてその入口に此嫉妬の像ありき 六 彼また我にいひたまふ人の子よ汝
六 此にてなすところの大なる憎むべき事を見るや我これがために吾が聖所をはなれて遠くさるべし汝身を
七 轉らせ復大いなる憎むべき事等を見んと 七 斯て彼われを領て庭の門にいたりたまふ我見しに其壁に一の穴あ
八 り 八 彼われに言たまふ人の子よ壁を穿てよと我すなはち壁を穿つに一箇の戸あるを視る 九 茲に彼われにいひ
九 たまひけるは入て彼等が此になすところの惡き憎むべき厭惡の形おほよびイスラエルの家の諸の偶像その
十 周圍の壁に畫きてあり 十一 イスラエルの家の長老七十人その前に立てりシヤパンの子ヤザニヤもかれらの
十一 中に立てあり各手に香爐を執るその香の煙雲のごとくにのぼりぬ 十二 彼われに言たまひけるは人の子よ汝
十二 ちかれらが各人その偶像の間におこなふ事を見るやかれら曰ふエホバは我等を見ずエホバはこの地を棄たりと
十三 また我に言たまはく汝身を轉らせ復かれらが爲すところの大いなる憎むべき事等を見んと 十四 斯て彼我を
十四 擧てエホバの家の北の門の入口にいたるに其處に婦女等坐してタンムズのために哭る 十五 彼また我に言たま
十五 ふ人の子よ汝これを見るや又身を轉らせよ汝これよりも大いなる憎むべき事等を見んと 十六 彼また我を擧てエ
十六 ホバの家の內庭にいたるにエホバの宮の入口にて廊と壇の間に二十五人ばかりの人その後をエホバの宮にむ
十七 け面を東にむけ東にむかひて日の前に身を鞠めをるを 十七 彼われに言たまふ人の子よ汝これを見るやユダの家
はその此におこなふところの憎むべき事等をもて瑣細き事となすにや亦暴逆を國に充して大いに我を怒らす彼等は枝をその鼻につくるなり 十八 然ば我また怒
十八 をもて事をなさん吾目はかれらを惜み見ず我かれらを憫まじ彼等大聲にわが耳に呼はるとも我かれらに聽じ

第九章

一 斯て彼大聲に吾耳に呼はりて言たまふ邑を主ごろす等者各剪滅の器具を手にとりて前み
二 來れと 二 即ち北にむかへる上の門の路より六人の者おの〳〵打壞る器具を手にとりて來る其中に一人布の衣
三 を着筆記人の墨盒を腰におぶる者あり彼等來りて銅の壇の傍に立り 三 爰にイスラエルの神の榮光そ
の居るところのケルビムの上より起あがりて家の閾にいたり彼の布の衣を着て腰に筆記人の墨盒をおぶる
四 者を呼ぶ 四 時にエホバかれに言たまひけるは邑の中エルサレムの中を巡れ而して邑の中に行はるゝところの
諸の憎むべき事のために歎き哀しむ人々の額に記號をつけよと 五 我聞に彼またその他の者等にいひたまふ

六 彼にしたがひて邑を巡りて撃てよ汝等の目人を惜み見ろべからず又老人も少者も童女も孩子
も婦人も悉く殺すべし然ど身に記號ある者には觸べからず先わが聖所より始めよと彼等すなはち家の前
七 にをりし老人より始む七彼またかれらに言たまふ家を汚し死人をもて庭に充せよ汝等往よと彼等すなはち出
ゆきて邑の中に人を撃つ八彼等人を撃ちける時我遺されたれば俯伏て叫び言ふ嗚呼主エホバよ汝　怒をエ
九 ルサレムにもらしてイスラエルの殘餘者を悉くほろぼしたまふや九彼われに言たまひけるはイスラエル
ヱユダの家の罪甚だ大いなり國には血盈ち邑には邪曲充つ即ち彼等いふエホバは此地を棄てたりエホバは
十 見ざるなりと十然ば亦わが目かれらを惜み見ず我かれらを憐まじ彼らの行なふところを彼等の首に報いん
十一 時に」かの布の衣を着て腰に筆記者の墨盂をおぶる人復命まをして言ふ汝が我に命じたまひしごとく
爲たりと

第十章 一茲に我見しにケルビムの首の上なる穹蒼に青玉のごとき者ありて寶位の形に見ゆ彼そのケルビム
二 の上にあらはれたまひてニかの布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルビムの下なる輪の間に入りて汝
三 の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散べしとすなはち吾目の前にて其處に入しが三其人の入る時ケル
四 ビムは家の右に立り雲その内庭に盈り四茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の閾にいたる又家
五 には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈り五時にケルビムの羽音外庭に聞ゆ全能の神の言語たまふ
六 聲のごとし六彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入て輪の
七 傍に立ちけるに七一のケルビムその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をかの布の衣を
着たる人の手に置れたれば彼これを取りて出づ八ケルビムに人の手の形の者ありて其翼の下に見ゆ九我見
九 しにケルビムの側に四箇の輪あり此ケルビムにも一箇の輪あり彼ケルビムにも一箇の輪あり輪の式は黄金
十 色の玉のごとくに見ゆ十その式は四箇みな同じ形にして輪の中に輪のあるがごとし十一その行くときは四方に
十一 行く行にまはることなし首の向ふところに從がひ行く行にまはることなし十二その全身その脊その手その翼
および輪には四周に徧く目ありその四箇みな輪あり十三我聞に轉回れと輪にむかひてよばゝるあり十四其は
十三 各〻四の面あり第一の面はケルビムの面第二の面は人の面第三のは獅子の面第四のは鷲の面なり十五ケ
十四 ルビムすなはち昇れり是わがケバル河の邊にて見たるところの生物なり十六ケルビムの行く時は輪もその傍
十五 に行きケルビム翼をあげて地より飛上る時は輪またその傍を離れず十七その立つときは立ちその上る時は
十六 倶に上れりその生物の靈は其等の中にあり十八時にエホバの榮光家の閾より出ゆきてケルビムの上に立ち
十七 ければ十九ケルビムすなはちその翼をあげ出ゆきてわが目の前にて地より飛のぼれり輪はその傍にあり而
十八 して遥にエホバの家の東の門の入口にいたりて止まるイスラエルの神の榮光その上にあり二十是すなはち
十九 吾がケバル河の邊にて見たるところの生物なり吾そのケルビムなるを知れり二一是等
二十 には各〻四宛の面あり各箇四の翼あり又人の手のごとき物その翼の下にあり二二その面の形は吾がケバ
二一 ル河の邊にて見たるところの面なりその姿も身も然り各箇その面にしたがひて行り
二二

第十一章 一茲に靈我を擧げてエホバの室の東の門に至らしめたまふ門の入口に二
十五人の人あり我其中にアズルの子ヤザニアおよびベナヤの子ペラテア即ち民の牧伯等を見る二彼われ
二 に言たまひけるは人の子よ此邑において惡き事を考へ惡き計謀をめぐらす者は此人々なり三彼等いふ家
三 を建ることは近からず此邑は鍋にして我等は肉なりと四是故にかれらに預言せよ人の子よ預言すべし五時に
四 エホバの靈わが上に臨りて我にいひたまひけるはエホバかく言ふと言べしイスラエルの家よ汝等は斯いへり
五 汝等の心におこる所の事は我これを知るなり六汝等は此邑に殺さるゝ者を增し死人をもて街衢に充せりと七是
六 故に主エホバ斯いふ汝等が邑の中に置くところのその殺されし者はすなはち肉にして邑は鍋なり然ど人邑の
七 中より汝等を曳いだすべし八汝等は刀劍を懼る我劍を汝等にのぞましめんと主エホバいひたまふ九我なん
八 ぢらを其中よりひき出し外國人の手に付して汝等に罰をかうむらすべし十汝等は劍に踣れん我イスラエ
九 ルの境にて汝等を罰すべし汝等は是によりてわがエホバなるを知るにいたらん十一是は汝らの鍋とならず汝

十二 らばその中の肉たるここを得ざるなりイスラエルの境にて我汝ら即ちわ
が エホバなるを知にいたらん汝らはわが誡法に遵はずわが法律を行はずしてその周圍の外國人の慣例のご
十三 とくに事をなせり 十三 斯てわが預言しを時にペナヤの子ペラテア死たれば我俯向に伏て大聲に叫び嗚呼
十四 主エホバよイスラエルの遺餘者を盡く滅ぼさんとしたまふやさいふに 十四 エホバの言われに臨みていふ
十五 人の子よ汝の兄弟汝の兄弟たる者は汝の親族の人やにして即ちイスラエルの全家全躰なりエルサ
レムに居る人々は是にむかひて汝等は遠くエホバをはなれて居れ此地はわれらの所有としてあたへらること言
十六 ふ 十六 是故に汝言ふべし主エホバかく言ひたまふ我かれらを遠く逐やりて國々に散したればその往る國々に於
十七 て暫時の間かれらの聖所となること 十七 是故に言ふべし主エホバかく言ひたまふ我なんぢらを諸の民の中よ
十八 り集へ汝等をその散されたる國々より娶めてイスラエルの地を汝らに與へん 十八 彼等は彼處に到りその諸
十九 の汚たる者とその諸の憎むべき者を彼處より取除かん 十九 我かれらに唯一の心を與へ新しき靈を汝らの裏
二十 に賦けん我かれらの身の中より石の心を取さりて肉の心をかれらに與へ 二十 然ごその汚れたる者とその憎むべ
二一 き者の心をもておのれの心となす者等は我これが行ふところをその首に報ゆべし主エホバこれを言ふ 二一 茲
二二 にケルビムその翼をあぐ輪その傍にありイスラエルの神の榮光その上に在す 二二 エホバの榮光つひに
二三 邑の中より昇りて邑の東の山に立り 二三 時に靈われを擧げ神の靈に由りて異象の中に我をカルデヤに攜さへ
二四 ゆきて俘囚者の所にいたらしむ吾見たる異象すなはちわれを離れて昇れり 二五 かくて我エホバの我にしめ
二五 したまひし言を盡く俘囚者に告たり

第十二章概意 一エホバの言また我にのぞみて云ふ 二人の子よ汝は背戻る家の中に居る彼等は見る目あれごも見
二 す聞く耳あれごも聞ず背戻る家なり 三然ば人の子よ移住の器具を備へかれらの目の前にて晝の中に移れ彼
三 らの目の前にて汝の處より他の處に移るべし彼等は背戻る家なれごも或は見て考ふることあらん 四汝移

住の器具のごとき器具を彼等の目の前にて晝の中に持いだせ而して移住者の出ゆくがごとく彼等の目の前
四 にて宵の中に出ゆくべし 五即ちかれらの目の前にて壁をやぶりて之を其處より持いだせ 六彼らの目の前にて
五 これを肩に負ひ黑暗の中にこれを持いだすべし汝の面を掩へ地を見るなかれ我汝をイスラエル
六 の家に示すなり 七我すなはち命ぜられしごとく爲し移住の器具のごとき器具を晝の中に持いだし又宵に
七 手をもて壁をやぶり黑暗の中にこれを持いだし彼らの目の前にこれを肩に負り 八明旦におよびてエホバの
八 言われに臨みて言ふ 九人の子よ背戻る家なるイスラエルの家汝にむかひて汝なにを爲やと言しにあらずや
九 十汝かれらに言ふべし主エホバかく言たまふこの負荷はエルサレムの君主およびイスラエルの
十 全家に當るなり 十一汝また言ふべし我は汝等の預兆なり彼等は據へうつされ
十一 ん 十二彼らの中の君主たる者黑暗のうちに物を肩に載て出ゆかん彼等壁をやぶりて其處より物を持いだすべ
十二 し彼はその面を覆ひて土地を目に見ざらん 十三我わが網を彼の上に打かけん彼はわが羅にかゝるべし我かれ
十三 をカルデヤ人の地に曳ゆきてバビロンにいたらしめん然ごも彼は之を見ずして其處に死べし 十四凡てかれの
十四 四周にありて彼を助くる者およびその軍兵は皆我これを四方に散し刀刃をぬきて其後をおふべし 十五吾がか
十五 れらを諸の民の中に散し國々に撒布さん時にいたりて彼らは我のエホバなるをしるべし 十六但し我かれら
十六 の中に僅少の人を遺して劍と饑饉と疫病を免かれしめ彼らをしてそのおこなひし諸の憎むべき事をその
十七 到るところの民の中に述しめん彼等はわがエホバなるを知にいたらん 十七エホバの言また我にのぞみて言ふ
十八 人の子よ 汝發震て食物を食ひ戰慄と恐慌をもて水を飲め 十九而してこの地の民に言べし主エホバエル
十九 サレムの民のイスラエルにをる者に斯いひたまふ彼等は憚れて食物を食ひ驚きて水を飲にいたるべし是はそ
二十 の地凡てその中に住る者の暴逆のために富饒をうしなひて荒地となるが故なり 二十人の住る邑々は荒はて
二一 國は滅亡ぶべし汝等すなはち我がエホバなるを知ん 二一エホバの言われに臨みて言ふ 二二人の子よイスラエ
二二 ルの國の中に汝等いふ日は延び默示はみな空くなれりと是何の言ぞや 二三是故に汝彼等に言べし主エホバ

かくいひたまふ我この言を止め彼等をして再びこれをイスラエルの中に言ヘ其日とその諸の默示の言は近つけりと 二四 イスラエルの家には此後重て空浮き默示と虛僞の占卜あらざるべし 二五 夫我はエホバなり我わが言をいださん吾いふところは必ず成んかされて延ることあらじ背戻る家よ汝等が世にある日に我言を發して之を成すべし主エホバこれを言ふ 二六 エホバの言また我にのぞみて言ふ 二七 人の子よ視よイスラエルの家言ふ彼が見たる默示は許多の日の後の事にして彼は遙後の事を預言するのみと 二八 是故にかれらに言ふべし主エホバかくいひたまふ吾言はみな重て延ず吾がいへる言は成べしと主エホバこれを言ふなり

第十三章

一 エホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ預言を事とするイスラエルの預言者にむかひて預言せよ彼おのれの心のまゝに預言する者等に言ふべし汝らエホバの言を聽け 三 主エホバかくいひたまふ彼の何をも見ずして己の心のまゝに行なふところの愚なる預言者は禍なるかな 四 イスラエルよ汝の預言者は荒廢にをる狐のごとくなり 五 汝等は破壞口を守らずまたイスラエルの家の四周に石垣を築きてエホバの日に防き戰はんともせざるなり 六 彼らは虛浮物および虛僞の占卜を見る彼等はエホバいひたまふと言ふといへども實はエホバこれを遣はさゞるなり然るに彼らその言の成ことを望む 七 汝らは空しき異象を見虛妄の占卜を宣べ吾が言ふともあらざるにエホバいひたまふと言ふにあらずや 八 是故にまエホバかくいひたまふ汝等空虛きことを言ひ虛僞の物を見るによりて我なんぢらを剋せん主エホバこれをいふ 九 我手はかの虛浮き事を見虛僞の事を卜ひいふところの預言者等に加はるべし彼等はわが民の會にをらずなりイスラエルの家の籍にしるされずイスラエルの地にいることをえざるべし汝等すなはち吾のエホバなるを知にいたらん 十 かれらは吾民を惑はし平安あらざるに平安といふ又わが民の屏を築くにあたりて彼等灰砂をもて之を塗る 十一 是故に其灰砂を塗る者に是は圮べしと言へ大雨くだらん雹よ降れ大風よ吹べし 十二 視よ屏は圮る然ば人々汝等が用ひて塗たる灰砂は何處にあるやと汝等に言ざらんや 十三 即ち主エホバかく言たまふ我憤恨をもて大雨を注がせ憤恨をもて雹を降せてこれを毀つべし 十四 我なんぢらが灰砂をもて塗たる屏を毀ちてこれを地に倒しその基礎を露にすべし是すなはち圮れん汝等はその中にほろびて吾のエホバなるを知にいたらん 十五 斯われその屏とこれを塗る者とに憤恨を洩しつくして汝等にいふべし屏はあらずなり又灰砂にてこれを塗る者もあらずなれりと 十六 是すなはちイスラエルの預言者等なり彼等はエルサレムにむかひて預言をなし其處に平安のあらざるに平安の默示を見たりといへり主エホバこれをいふ 十七 人の子よ汝の民の女等の其心のまゝに預言する者に汝の面をむけ之にむかひて預言し 十八 言べし主エホバかくいひたまふ吾手の節々の上に小枕を縫つけ諸の大さの頭に帽子を造り翼せて靈魂を獵んとす汝等はわが民の靈魂を獵て己の靈魂を生しめんとするなり 十九 汝等小許の麥のため小許のパンのために吾民の前にて我を汚しかの僞言を聽いろ〳〵吾民に僞言を陳て死べからざる者を死しめ生べからざる者を生しむ 二十 是故に主エホバかくいひたまふ我汝等が用ひて靈魂を獵ところの小枕を奪ひ靈魂を飛さらしめん我なんぢらの臂より小枕を裂さりて汝らが獵ところの靈魂を釋ち 二一 我なんぢらの帽子を裂て吾民を汝らの手より救ひいださん彼等はふたゝび汝等の手に陷りて獵れさるべし汝らは吾エホバなるを知にいたらん 二二 汝等虛僞をもて義者の心を愛へしむ我はこれを憂へしめざるなり又汝等惡者の手を強くし之をしてその惡き道を離れかへりて生命を保つをなさしめず 二三 是故に汝等は重れて虛浮き物を見ることを得ず占卜をなすことを得ざるに至るべし我わが民を汝らの手より救ひいださん汝等すなはちわがエホバなるを知にいたるべし

第十四章

一 爰にイスラエルの長老の中の人々我にきたりて吾前に坐しけるに 二 エホバの言われに臨みて言ふ 三 人の子よこの人々はその偶像を心の中に立しめ罪に陷いるところの障礙をその面の前に置なり我あに是等の者の求を容べけんや 四 然ば汝かれらに告て言べし主エホバかくいひたまふ凡そイスラエルの家の人のその心の中に偶像を立しめその面のまへに罪に陷いるところの障礙を置きて預言者に來る者には我エホ

五 パその偶像の多衆に主たがひて應をなすべし五 斯して我イスラエルの家の人の心を執へん是かれら皆その偶
六 像のために我を離れたればなり六 是故にイスラエルの家に言ふべし主エホバかくいひたまふ汝等悔い汝らの
七 偶像を棄てはなるべし汝等面を回らしてその諸の憎むべき物を離れよ七 凡てイスラエルの家およびイス
八 ラエルに寓るさころの外國人若われを離れてその偶像を心の中に立しめ其面の前に罪に陷いるところの
九 障礙をおきて預言者に來りその心のまゝに我に求むる時は我エホバわが心のまゝにこれに應ふべし八 即ち我
十 面をその人にむけこれを滅して兆象となし諺語となしわが民の中より絶さるべし汝等これによりて我が
十一 エホバなるを知るにいたらん九 若預言者欺むかれて言を出すことあらば我エホバその預言者を欺むけるな
十二 り我彼の上にわが手を伸べ吾民イスラエルの中より彼を絶さらん十 彼等その罪を負ふべしその預言者の罪は
十三 かの問求むる者の罪のごさくなるべし十一 是イスラエルの民をして重れて我を離れて迷はざらしめ重れてそ
十四 の諸の愆に汚れざらしめんため又かれらの吾民さなり我の彼らの神さならんためなり主エホバこれをいふ
十五 十二 エホバの言また我にのぞみて言ふ十三 人の子よ國もし悖れる事をおこなひて我に罪を犯すことあり我手
十六 をその上に伸て其杖さたのむところのパンを打碎き饑饉を之におくりて人と畜とをその中より絶ことある時
十七 には十四 其處にかのノア ダニエル ヨブの三人あるも只其義によりて己の生命を救ふことをうるのみな
十八 り主エホバこれたいふ十五 我もし惡き獸を國に行めぐらしめて之を子なき處さなし荒野さなして其獸のた
十九 めに其處を通る者なきに至らん時には十六 主エホバ言ふ我は活く此三人そこにあるもその子女を救ふ
二十 ことをえず只その身を救ふことを得るのみ國は荒野さなるべし十七 又は我劍を國に臨ませて劍よ國を行めぐ
二十一 れべしと言ひ人と畜とをそこより絶さらん時には十八 主エホバいふ我は活く此三人そこにあるもその子女
二十二 をすくふことをえず只その身をすくふことを得るのみ十九 又はわれ疫病を國におくり血をもてわが怒をそ
の上にそゝぎ人と畜とをそこより絶さらん時には二十 主エホバいふ我は活くノア ダニエル ヨブそこにあるも
その子女を救ふことをえず只その義によりて己の生命を救ふことを得るのみ二一 主エホバかくいひた
まふ然ばわが四箇の嚴き罰すなはち劍と饑饉と惡き獸と疫病をエルサレムにおくりて人と畜をそこより絶
さらんとする時は如何にぞや二二 其中に逃れて遺るところの男子女子あり彼等携さへ去るべし彼ら出ゆきて
汝等の所にいたらん汝らかれらの行爲と擧動を見ば吾がエルサレムに災をくだせし事につきて心をやすむ
るにいたるべし二三 汝ら彼らの行爲と擧動を見ばこれがためにその心をやすむるにいたりわがこれに爲たる
事は皆故なくして爲たるにあらざるなるをしるにいたらん主エホバこれを言ふ

第十五章

一 エホバの言われに臨みて言ふ二 人の子よ葡萄の樹森の中にあるところの葡萄の枝なんぞ他の樹
に勝るところあらんや三 其木物をつくるに用ふべけんや又人これを用て器をかくる木釘を造らんや四 視よ是
は火に投いれられて燃ゆ火もしその兩の端を燒くあり又その中間焦たれば事か物をつくるに勝べけん五 是は
その全かゐる時すら物を造るに用ふべからざれば況て火のこれを焚焦したる時には事で物をつくるに用ふべ
けんや六 是故に主エホバかく言たまふ我森の樹の中なる葡萄の樹を火になげいれて焚くごさくにエルサレム
の民をも然するなり七 我面をかれらに向て攻む彼らは火の中より出たれごも火なほこれを燒つくすべし我面
をかれらにむけて攻る時に汝らは我のエホバなるをしるにいたらん八 彼等悖逆る事をおこなひしに由て我かの地を荒
地さなすべし主エホバこれを言ふ

第十六章

一 エホバの言また我にのぞみて言ふ二 人の子よエルサレムに其憎むべき事等を示して三 言ふべし
主エホバエルサレムに斯いひたまふ汝の起本汝の誕生はカナンの地なり汝の父はアモリ人汝の母はヘテ
人なり四 汝の誕生を言んに汝の生れし日に汝の臍帶を斷ことなく又水にて汝を洗ひ潔むることなく鹽をもて
汝を擦ることなく又布に裹むことなかりき五 一人も汝を憐み見憫をもて是等の事の一をも汝になせし者な
し汝の生れたる日に人汝の生命を忌て汝を野原に棄たり六 我汝のかたはらを通りし時汝が血の中にな
りて賤るゝを見汝が血の中にある時汝に生よと言り即ち我なんぢが血の中にをる時に汝に生よといへりセ
我野の百卉のごさくになんぢを增して千萬さなせり汝は生長て大きくなり美しき姿さなるにいたり乳は堅く

八 なり髪は長たりしが衣なくして裸なりき茲に我汝の傍を通りて汝を見るに今は汝の時愛せらるべき時なりければ我衣服の裾をもて汝を覆ひ汝の恥ぢを蔽し而して汝に誓ひ汝に契約をたてたり汝すなはち吾所属となれり主エホバこれを言ふ九 斯て我水をもて汝の血を洗ひ汝の血を滌ぎおとして膏を汝に
九 ぬり十 文繍あるものを着せ皮の鞋を穿たしめ細布を蒙らせ絹をもて汝の身を纏へり十一 而して飾物をよ
十 汝をかざり腕環をなんぢの手にはめ金索を汝の項にかけしめ十二 鼻には鼻環耳には耳環首には華美なる冠冕
十一 をほどこせり十三 汝すなはち金銀をもて身を飾り細布と絹および文繍をその衣服となし麥粉と蜜と油さ
十二 を食へり汝は甚だ美しくして遂に榮えて王の權勢に進みいたれり十四 汝の美貌のために汝の名は國々にひ
十三 ろまれり是わが汝にほどこせしわれの飾物によりて汝の美麗極りたればなり主エホバこれを言ふ十五 然
十四 るに汝その美麗を恃み汝の名によりて姦淫をおこなひ凡て其傍を過る者と綣恋に姦淫をなしたり是
十五 その人の所属となる十六 汝おのれの衣服をとりて崇邱を彩り作りその上に姦淫をおこなへり是爲べからず有べからざる事なり十七 汝はわが汝にあたへし金銀の飾の品を取り男の像を造りて之と姦淫をおこなひ
十六 十八 汝の繍衣を取りて之に纏ひ吾の膏と香をその前に陳へ十九 亦わが汝にあたへし我の食物我が用ひて
十七 汝をやしなふところの麥粉油および蜜を其前に陳へて馨き香氣となせり是事ありしこと主エホバいひたま
十八 ふ二十 汝またおのれの我に生たる男子女子をとりてこれをその像にそなへて食はしむ汝が姦淫なほ小き事な
十九 るや二一 汝わが子等を殺し亦火の中を通らしめてこれに献ぐ二二 汝その諸の憎むべき事とその姦淫さをお
二十 こなふに當りて汝が若かりし日に衣なくして裸なりしことおよび汝が血のうちにをりて蹈れしことを想はざ
二一 るなり二三 主エホバまた言たまふ汝は禍なるかな禍なるかな二四 汝その諸の惡をおこなひし後街衢街
二二 衢に樓をしつらひ臺を造り二五 また路の辻々に臺をつくりて汝の美麗を汚辱むることを爲し凡て傍を
二三 過るところの者に足をひらきて大いに姦淫をおこなふ二六 汝かの肉の大なる汝の隣人エジプトの人々さ
二四 姦淫をおこなひ大いに姦淫をなして我を怒らせたれば二七 我手を汝の上にのべて汝のたまはる分を減し彼の

二五 汝を惡み汝の淫なる行爲を羞ろこころのペリシテ人の女等の心に汝をまかせたり二八 然るに汝は厭ことなければ亦アッスリヤの人々と姦淫をおこなひしが之と姦淫をおこなひたるも尚厭ことさなかりき二九 汝また
二六 大に姦淫をおこなひてカナンの國カルデヤに迄およびしが是にても尚厭ことなし三十 主エホバいひたまふ汝
二七 の心如何に戀煩ふにや汝この諸の事を爲り是氣隨なる遊女の行爲なり三一 汝道の辻々に樓をしつ
二八 らひ衢々に臺を造りしが金錢を輕んじたれば娼妓のごとくならざりき三二 夫淫婦はその夫のほかに他人
二九 と通ずるなり三三 人は凡て娼妓に物を贈るなるに汝はその諸の戀人に物をおくり且汝こころさ姦淫せんさて四
三十 方より汝に來る者に報金を與ふ三四 汝は姦淫をおこなふに當りて他の婦と反す即ち人汝を戀求むるにあら
三一 ざるなり 汝金錢を人にあたへて人金錢を汝にあたへざるは是その相反する所なり三五 然ば娼妓よエホバの
三二 言を聽け三六 主エホバかく言たまふ汝金銀を撒散し且汝の恥處を露はしたるに
三三 由り又汝の憎むべき諸の偶像と汝が之にさうげたる汝の子等の血の故により三七 視よ我汝が交れる
三四 諸の戀人および凡て汝が戀たる者並に凡て汝が惡みたる者を集め四方より攻れらを汝の所に集め汝の
三五 恥處を彼らに現さん彼ら汝の恥處を悉く見るべし三八 我姦淫を爲る婦および血をながせる婦を
三六 鞫くがごとくに汝を鞫き汝をして怒怒と嫉妬の血さならしむべし三九 我汝を彼等の手に付せば彼等汝の
三七 樓を毀ち汝の臺を倒しなんぢの衣服を褫取り汝の美しき飾を奪ひて汝をして衣服なからしめ裸にならし
三八 むべし四十 彼等群衆をひきぬて汝の所にのぼり石をもて汝を撃ち劍をもて汝を切さき四一 火をもて汝の家
三九 を焚き多くの婦女の目の前にて汝を鞫かん斯われ汝をして姦淫を止しむべし汝は亦ふたゝび命錢をあたふる
四十 ことなからん四二 我ここに於て汝に對するわが怒を息め汝にかゝるはるわが嫉妬を去り心をやすんじて復怒ら
四一 ざらん四三 主エホバいひたまふ汝その若かりし日の事を記憶えずしてこの諸の事をもて我を怒らせたれば
四二 視よ我も汝の行ふところを汝の首に報ゆべし汝その諸の憎むべき事の上に此惡事をなしたるにあらざ
四三 るなり四四 視よ諺語をもちふる者皆汝を指てこの諺を用ひ言ん母のごとくに女も然りさ四五 汝の母はそ

の夫と子女を棄たり汝はその女なり汝の姉妹なり汝の母はヘテ人汝
四六 の父はアモリ人なり 四六汝の姉はサマリアなり彼その女子等と偕に汝の左に住む汝の妹はソドムなり
四七 彼その女子等と偕に汝の右に住む 四七汝は只少しく彼らの道に歩み彼らの憎むべきことの事等を行ひし
四八 のみにあらず汝の爲る事は皆かれらのよりも悪かりき 四八主エホバ言たまふ我は活く汝の妹ソドムと其女
四九 子らが爲しごとくはあらざりき 四九汝の妹ソドムの罪は是なり彼は
五〇 傲り食物に飽きその女子らと偕に安泰にをり而して誕めう者と貧き者を助けざりき 五〇かれらは傲りわ
五一 が前に憎むべき事をなしたれば我見てかれらを掃ひ除けり 五一サマリアは汝の罪の半分ほども罪を犯さざり
き汝は憎むべき事等が彼らよりも多く行ひ増し汝の爲たる諸の憎むべき事のために汝の姉妹等をして義き
五二 が如くならしめたり 五二然ば汝が曾てその姉妹等の爲ろべき者と定めたるところの恥辱を汝もまた蒙むれよ
汝が彼等よりも多くの憎むべき事をなしたるその罪のために彼等は汝よりも義くなれり然ば汝も辱を受
五三 け恥を蒙むれ 五三是はソドムとその女等の俘囚をかへしサマリアと
五四 そのの女等の俘囚をかへさん時に其と同じく携はれたる汝の俘囚人を歸し 五四汝をして恥を蒙むらしめ汝
が凡て爲たるところの事を羞しむべし汝かく彼らの慰さめとならん 五五汝の姉妹ソドムとその女子等は舊の樣
五五 に歸りサマリアとその女子等は舊の樣に歸らん又汝と汝の女子等も舊の樣にかへるべし 五六汝はその驕
五六 傲れる日には汝の姉妹ソドムの事を口に遁ざりき 五七汝の惡の露はれし時まで汝は是のごとくなりき 五八エホバいひた
五七 の周圍の者ベリシテ人の女等が四方より汝を罵りて辱しめし時まで汝は是のごとくなりき 五八エホバいひた
五八 まふ汝の淫なる行爲と汝のもろ〳〵の憎むべき事とは汝みづからこれを身に負ふなり 五九主エホバかく
五九 言たまふ誓言を輕んじて契約をやぶりたるところの汝には我汝の爲ろ所にしたがひて爲べし 六十我汝の
六〇 若かりし日に汝になせし契約を記憶え汝と限りなき契約をたてん 六一汝その姉妹の汝より大なる者と小き者
六一 とを得る時にはおのれの行爲をおぼえて羞ん彼等は汝の契約に屬する者にあらざれども我かれらを汝にあた

へて女となさしむべし 六二我汝と契約をたてん汝
六二 凡て行ひし所の事を赦す時には汝憶えて羞ぢその恥辱のために再び口を開くことなかるべし主エホバこれ
を言ふ

一夫にエホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よ汝イスラエルの家に謎をかけ譬言を語りて三
言べし主エホバかく言たまふ大いなる翼長き羽あり
とり 悕を採り四其芽の嶺を摘みカナンの地にこれを持きたりて商人の邑に置きけるが五又その地の種をとりて
これ 之を種田に播りすなはち之を水の多き處にもちゆきて柳のごとくにこれを樹し六成長ちて丈卑き垂さが
りたる葡萄樹となり其枝は鷲にむかひその根は鷲の下にあり遂に葡萄樹となりて芽をふき葉を出すを此に又
大いなる翼多くの羽ある一箇の大鷲ありしがその葡萄樹根をこれにむかひて張り枝をこれにむかひて伸べ
これ 之をしてその植りたる地の外より水を灌がしめんとす 八抑是を善き圃に多の水の旁に植たるは根を
張り實をむすびて盛なる葡萄樹とならしめんためなりき 九汝主エホバかく言ふさいふべし是旺盛になるや
驚その根を抜きその果を絶ちて之を枯しめざらんや其芽の若葉は皆枯ん之を根より擧るには強き腕と多の人
を用ふるにおよばざるなり 十是は樹られたれども旺盛にならんや東風これに當らば枯果ざらんや是その生
たるところの地に枯べし 十一エホバの言また我にのぞみて言ふ 十二背ける家に言ふべし汝等此の何たるを知
ざるかと又言へ視よバビロンの王エルサレムに來りその王とその牧伯等を執へてこれをバビロンに曳ゆけり
十三 彼また王の族の一人を取てこれと契約を立て誓言をなさしめ又國の強き者等を執へゆけり 十四是この國
を卑くして自ら立つことを得ざらしめその人をして契約を守りてこれを堅うせしめんがためなりき 十五然ろ
に彼これに背きて使者をエジプトに遣し馬と多くの人を己におくらしめんとせり彼旺盛にならんや是を爲る
者逃るふことをえんや彼その契約をやぶりたり爭で逃るることを得んや 十六主エホバいひたまふ我は活く必
ず彼は己を王となしたる彼王の處に僭にをりてバビロンに死べし彼その王の誓言を輕んじ其契約を破り

十七 たるなり 十七 夫蝨を築き雲梯を建て衆多の人を殺さんとする時にはバロ大なる軍勢と衆多の人をもて彼の
十八 ために戰爭をなさじ 十八 彼は誓言を輕んじて契約を破る彼手を與へて却て此等の事をなしたれば逃るゝことを
十九 を得ざるべし 十九 故に主エホバかく言たまふ我は活く彼が我の誓言を輕んじ我の契約をやぶりたる事を必ず
二十 かれの首にむくいん 二十 我わが網をかれの上にうちかけ彼をわが羅にさらへてバビロンに曳ゆき彼が我にむ
二一 かひて爲しところの叛逆につきて彼を糺くべし 二一 彼の諸の軍隊の逃脫者は皆刀に仆れ生殘れる者は八
二二 方に散さるべし汝等は我エホバがこれを言しなるを知にいたらん 二二 主エホバかく言たまふ我高き香柏の梢
二三 の一を取てこれを植ん是は枝を生じ果をむすびて榮華なる香柏となり諸の類の鳥皆その下に棲ひその枝の蔭
二四 に住はん 二四 是に於て野の樹皆我エホバが高き樹を卑くし卑き樹を高し綠なる樹を枯しめ枯木を綠ならし
めしことを知ん我エホバこれを言ひ之を爲なり

第十九章

一 エホバの言また我にのぞみて言ふ 二 汝等なんぞイスラエルの地に於て此諺語を用ひ父等酸き
二 葡萄を食ひたれば子等の齒齲くと言ふや 三 主エホバいふ我は生く汝等ふたゝびイスラエルに於てこの諺語を
三 もちふることなからるべし 四 夫凡の靈魂は我に屬す父の靈魂も子の靈魂も我に屬するなり罪を犯せる靈魂は
四 死べし 五 若人正義して公道と公義を行ひ 六 山の上に食をなさず目をあげてイスラエルの家の偶像を仰が
五 六 ず人の妻を犯さず穢れたる婦女に近づかず 七 何人をも虐げず貸物を還し物を奪はずその食物を飢る者に與
七 へ裸なる者に衣を着せ 八 利を取て貸ず息を取ず手をひきて惡を行はず眞實の判斷を人と人の間になし 九 わが
八 九 法憲にあゆみ又吾が律例を守りて眞實をおこなはゝ是義者なり彼は生べし主エホバこれを言ふ 十 然ど彼
十 子を生んにその子暴き者にして人の血をながし是の如き事の一箇を行ひ 十一 是をば凡て行はずして山の上に
十一 食をなし人の妻を犯し 十二 惱める者と貧き者を虐げ物を奪ひ質物を還さず目をあげて偶像を仰ぎ憎むべき事
十二 をおこなひ 十三 利をとりて貸し息を取ば彼は生べきや彼は生べからず彼この諸の憎むべき事をなしたれば

十四 必ず死べしその血はかれに歸せん 十四 又子生れんに其子父のなせる諸の罪を視しかども視て斯有ことを行
十五 はず 十五 山の上に食をなさず目をあげてイスラエルの家の偶像を仰がず人の妻を犯さず 十六 何人をも虐げず
十六 質物を存留ず物を奪ず飢る者にその食物を與へ裸なる者に衣を着せ 十七 その手をひきて惱める者を苦めず
十七 利と息を取ずわが法律を行ひわが法度に歩まば彼はその父の惡のために死ことあらじ必ず生べし 十八 その父
十八 は甚だしく人を掠めその兄弟を痛く虐げその民の中に善らぬ事をなしたるに由てその惡のために死べし
十九 十九 しかるに汝等は子なんぞ父の惡を負ざるやと言ふ夫子は律法と公義を行ひわが凡ての法度を守てこれ
二十 を行ひたれば必ず生べし 二十 卵を犯せる靈魂は死べし子は父の惡を負ず父は子の惡を負ざるなり義人の義は
二一 その人に歸し惡人の惡はその人に歸すべし 二一 然ど惡人もしその凡て行ひしところの惡を離れわが諸の法度
二二 を守り律法と公義を行ひなばかならず生ん死ざるべし 二二 その爲しところの咎は皆記念られざるべしその
二三 爲し義き事のために彼は生べし 二三 主エホバ言たまふ我爭で惡人の死を好まんや寧彼がその道を離れ一生
二四 んことを好まざらんや 二四 若義人その義をはなれて惡を行ひ惡人の爲る諸の憎むべき事をなして生べきや
二五 其なせし義き事は皆記念られざるべし彼はその爲る咎とその犯せる罪さのために死べし 二五 然るに汝等主
二六 の道は正からずと言ふ然ばイスラエルの家よ聽け吾道正からざるやその正からざる者は汝らの道にあらず
二七 や 二六 若義人その義をはなれて惡を爲し其がために死ることきは是その爲る惡のために死るなり 二七 若惡
二八 人その爲る惡をはなれて法律と公義を行はゞその 二八 彼もし視てその行ひし
二九 諸の咎を離れなば必ず生ん死ざるべし 二九 然ろにイスラエルの家は主の道は正からずと言ふイスラエルの
三十 家よわが道正からざるやその正からざる者は汝らの道にあらずや 三十 主エホバいひたまふ是故に我汝ら
三一 をば各その道にしたがひて審くべし汝らその諸の惡を悔改めよ然ば惡汝らを躓かせて滅ぼすことな
三二 かるべし 三一 汝等その行ひし諸の罪を棄去り新しき心と新しき靈魂を起すべしイスラエルの家よ汝ら
三三 なんぞ死べけんや 三二 我は死者の死を好ざるなり然ば汝ら悔て生よ主エホバこれを言ふ

第十九章

二 一汝イスラエルの君等のために哀の詞をのべて二言べし汝の母なる牝獅は何故に牝獅の中に
三 伏し小獅の中にその子を養ふや三彼その一の子を育てたれば小獅となりて食を攫ことを學び遂に人を食へり
四 四國々の人これの事を聞きこれを陷阱にて執へ鼻環をほどこしてこれをエジプトの地にひきいたれり五牝
五 獅妃く待しがその望を失ひしを見たれば又一個の子を取てこれを小獅とならしむ六是すなはち牝獅の中
六 に歩みて小獅となり食を攫ことを學ひしが亦人を食ひ七其寡婦をしりその邑々を滅ぼせりその咆哮聲により
七 てその地とその中に盈る者荒たり八是をもて四方の國人その國々より攻來り網をこれにうちかけ陷阱にて
八 これを執へ九鼻環をほどこして籠にいれ之をバビロンの王の許に曳いたりて城の中に携へ入れ其聲を再び
九 イスラエルの山々に聞えざらしむ十汝の母は汝の血にして水の側に植たる葡萄樹のごとし水の多きがため
十 に結實多く蔓はびこれり十一是に強き枝ありて君王等の杖となすべし是の長は雲に至りその衆多い枝のため
十一 に高く聳えて見へたり十二然るに是怒をもて拔れて地に擲たる東風その實を吹乾しその強き枝は折れ
十二 て枯れ火に焚る十三今これは荒野にて乾ける水なき地に植てあり十四その枝の芽より火いでてその果を燒
十三 けば復強き枝の君王等の杖となるべき者其にはなし是哀
十四 の詞なり哀の詞となるべし

第二十章

一 七年の五月十日にイスラエルの長老の中の人々エホバに問んとて來りてわが前に坐しけるに
二 二エホバの言我にのぞみて云ふ三人の子よイスラエルの長老等に告て之にいふべし主エホバかく言ふ汝
三 等我に問んとて來れるや主エホバいふ我は活く我汝らの問を容むこと四汝かれらを鞫かんとするや人の子よ
四 汝かれらを鞫かんとするや彼等の先祖等のなしたる憎むべき事等をかれらに知しめて五言べし主エホバかく
五 いふ我イスラエルを選みヤコブの家の裔にむかひてわが手をあげエジプトの地にて我をかれらに知せかれら
六 にむかひて吾手をあげて我は汝らの神エホバなりと言し日六その日に我かれらにむかひて吾手をあげエジプ
七 トの地よりかれらをいだし吾がかれらのために求め得たるその乳と蜜の流るゝ地に導かんとせり是諸の地
八 の中の美しき者なりセ而して我かれらに言けらく各人その目にあるところの憎むべき事等を棄よエジプトの
九 偶像をもてその身を汚すなかれ我は汝らの神エホバなりと八然るに彼らは我に背きて我に聽したがふことを
十 好まざりき彼等一人もその目にあるところの憎むべき者を棄すエジプトの偶像を棄ざりしかば我エジプトの
十一 地の中において吾憤恨をかれらに注ぎわが怒をかれらに逞しなんとせり十一是かれらに我わが法度をしめし
十二 我わが律法をかれらに知せり是人これによりて生べきなり十二又わが安息日を與へて我と彼らの間の徴とな
十三 させり十三然るにイスラエルの家は曠野にて我に背き人の行ひて之により生べき者なるわが法度にあゆま
十四 ず吾が法律を輕んじ大に吾が安息日を汚したればわれ曠野にてわが憤恨をかれらに注ぎてこれを滅ぼさんと
十五 言ひたりしが十四我わが名のために事をなせり是わが彼らを導きいだして見せしところの異邦人等の目のま
十六 へにわが名を汚されざらしめんためなりき十五但し我曠野にて彼らにむかひて吾手をあげ彼らをわが與へ
十七 なして彼らをエジプトの地より導きいだせり是吾名の異邦人等の前に汚されざらんためなりその異邦人
十八 等の中に彼等居り又その前にて我おのれを彼等に知せたりき十六すなはち我エジプトの地より彼等を導き出して
十九 曠野に攜ゆき十七わが法憲をこれに授けわが法律をこれに示せり是は人の行ひて之に由て生べき者なり十二
二十 我また彼らに安息日を與へて我と彼らの間の徴となしかれらをして吾エホバが彼らを聖別しを知しめん
二一 とせり十三然るにイスラエルの家は曠野にて我に背き人の行ひて之により生べき者なるわが法度にあゆま
二二 ず吾が法律を輕んじ大に吾が安息日を汚したればわれ曠野にてわが憤恨をかれらに注ぎてこれを滅ぼさんと
二三 言ひたりしが十四我わが名のために事をなせり是わが彼らを導きいだして見せしところの異邦人等の目のま
二四 へにわが名を汚されざらしめんためなりき十五但し我曠野にて彼らにむかひて吾手をあげ彼らをわが與へ
二五 しその乳と蜜の流るゝ地に導かじと誓へり是は諸の地の中の美しき者なり十六是かれら心にその偶像を慕ひ
二六 てわが法律を輕んじ棄てわが蠹法にあゆまずわが安息日を汚したればなり十七然りさいへども吾かれらを
二七 惜み見てかれらを滅さず曠野にてかれらの子等に言り汝らの父の法度にあゆむなかれ汝らの法律を守るなかれ汝らの偶像をもて汝
二八 らをして我が汝らの神エホバなるを知しめんと二然ろにその子等我にそむき人の行ひてこれによりて活べ
二九 き者なるわが法度にあゆまず吾法をまもりて之をおこなはずわが安息日を汚したればわれいきほひを彼
三十 らにそゝぎ曠野にてわが怒をかれらに洩さんと言たりしが三一吾手を翻してわが名のために事をなせり是
三一 わが彼らを導き出して見せしところの異邦人等の目のまへにわが名を汚されざらしめんためなりき三二但し

我汝らを國々に散し處々に撒んと曠野にてかれらにむかひて我手を擧たり 二四 是かれらわが法律を行はずわが法度を輕じわが安息日をけがしその父の偶像な目に慕ひたればなり 二五 我かれらに善らぬ法度を與へかれらが由て活べからざる律法を與へ 二六 彼らをしてその禮物によりて己の身を汚さしむ即ちかれらその長子をして火の中を通過さめたり是は我彼らを滅ぼし彼らをして我のエホバなるを知しめんためなり 二七 然ば人の子よイスラエルの家につげて之にいふべし主エホバかくいひたまふ彼らの父等は更にまた不忠の罪我をかしし我を瀆せり 二八 我わが彼らに與へんと手をあげし此地にかれらを導きいれしに彼ら諸の高丘と諸の茂樹を覩れ得てその犧牲を其處に供へその憤らしき禮物をそこに獻げその馨き佳氣をそこに奉つりその神酒をそこに灌げり 二九 我かれらに言り汝らが往ところの崇き處は何なるやと其名は今日にいたるまでパヤと言ふなり 三十 この故にイスラエルの家に言ふべし主エホバかくいひたまふ汝らの先祖の途をもて汝らはその身を汚し彼等の憎むべき物をしたひてこれと姦淫を行ふにあらずや 三一 汝等はその禮物を献げその子女に火の中を通らしめて今日にいたるまで汝らの諸の偶像をもてその身を汚すなり然ばイスラエルの家よ我なんぢらの問を容べけんや主エホバいふ我は活く我は汝らの問を容ざるなり 三二 汝ら我等は木と石に事へて異邦人の如くなり國々の宗族のごとくならんと言ば汝らの心に起るところの事は必ず成ざるべし 三三 主エホバいふ我は生く我かならず強き手と伸たる腕をもて怒を注ぎて汝らを國々より曳いだし汝らが散されたる處々より汝らを集め 三四 國々の曠野に汝らを導き其處にて面をあはせて汝らを鞫かん 三五 主エホバいふ我エジプトの曠野にて汝らの先祖等を鞫きしごとく汝らを鞫くべし 三六 我なんぢらをして杖の下を通らしめ契約の索に汝らを入しめ 三七 汝らの中より背けるものおよび我に悖れる者を別たんその寓れる地より我かれらをいだすべし彼らはイスラエルの地に來らざるべし汝らすなはち我のエホバなるを知ん 三八 主エホバいふ我エジプトの曠野にて汝らの先祖等を鞫きしごとくイスラエルの家よ主エホバかくいふ汝等おの〳〵往てその偶像に事へよ然ど後には汝らかならず我に聽て重てその禮物と偶像をもてわが名を汚さざるべし 四十 主エホバいふ我が聖山の上イスラエルの高山の上にてイスラエルの全家その地の者皆我に事ん其處にて我かれらを悦びて受納ん其處にて我なんぢらの獻物および初成の禮物凡て汝らが聖別たる者を求むべし 四一 汝我らた國々より導き出し汝らが散されたる處々より汝らを集むる時馨き香氣のごとくに汝らを悦びて受納れ汝らによりて異邦人等の目のまへに我の聖ことをあらはすべし 四二 我が汝らをイスラエルの地すなはちわが汝らの先祖等にあたへんと手をあげしところの地にいたらしめん時に汝等は我のエホバなるを知るにいたらん 四三 汝らは其身を汚したるところの汝らの途と汝らのもろ〳〵の行爲を彼處にて憶え其なしたる諸の惡き作爲のために自ら恨み視ん 四四 イスラエルの家よ我汝らの惡き途によらず汝らの邪なる作爲によらずして吾名のために汝等を待はん時に汝らは我のエホバなるを知るにいたらん主エホバこれを言ふなり 四五 エホバの言また我にのぞみて言ふ 四六 人の子よ汝の面を南方に向け南にむかひて言を垂れ南の野の森の事を預言せよ 四七 すなはち南の森に言ふべし汝らは我のエホバの言を聽け主エホバかく言ふ視よ我なんぢの中に火を燃さん是なんぢの中の諸の青樹と諸の枯木を焚べしその烈しき火焔消ることなし南より北まで諸の面これがために焼ん 四八 肉ある者みな我エホバのこれを焼しなるを見ん是は消ざるべし 四九 我是において言り嗚呼主エホバよ人われを指て言ふ彼は譬言をもて語るにあらずや

第二十一章

一 エホバの言われにのぞみて言ふ 二 人の子よ汝の面をエルサレムに向け聖き處々にむかひて言を垂れイスラエルの地にむかひて預言し 三 イスラエルの地に言ふべしエホバかく言ふ視よ我汝を責め吾刀を鞘より抜はなし義者と惡者とを汝の中より絶んとすればわが刀鞘より脫出て南より北までの凡て肉ある者みな我エホバのその刀を鞘より抜はなちしを知らん 四 是は歸りをさまらざるべし 五 人の子よ腰の碎くるまでに歎き彼らの目のまへにて痛く歎け 六 人汝に何て歎くやと言ば汝言べし來ところの風聞のためなり心みな鎔け手みな癈へ魂みな弱り膝みな水とならん視よ事いたれりかならず成ん主エホバこれを言ふ 八 エホバの言我にのぞみて言ふ 九 人の子

預言して言ふべしエホバかく言ふ劍あり研ぎ且磨きたる劍あり
十 り光り閃かんがために磨きてあり我子の杖は萬の樹を藐視すと
十一 に與へて磨かしむ是劍は殺す者の手に付さんために之を研かつ磨
十二 是わが民の上に臨みイスラエルの諸の牧伯等の上に臨めばなり彼らはわが民ころもに劍に仆る故に汝腿を
十三 擊べし十三その試すでに成る若かの藐視るところの杖きたらずば如何ぞや主エホバこれを言ふ
十四 よ汝預言し手を拍べし劍人を刺透すところの劍三倍に働かん是は人を刺透し大なる者を殺すところ
十五 ろの劍にして彼らを責る者なり十五彼らの心を鑢し躓く物を增んがために我拔身の劍をその諸の門に立つ
十六 嗚呼是は光ひらめき脫いでふ人を殺さんとす十六汝合して右に向へ汝の刃の向ふ處に隨が
十七 へ十七我また吾手を拍ちわが怒を解めん我エホバこれを言ふなり
十八 人の子よバビロンの王の劍に由て來るべき二の途を設けよ其一の途を一の國より出しめて道標の記號を
十九 畫き邑の途の首處にこれを畫くべし二十汝またアンモンの子孫のラバとユダの堅き城の邑エルサレムとに劍
二十 のきたるべき途を設けよ二一バビロンの王その道の首處その二の途の岐處に止りて占卜をなし箭を搖りテラピム
二一 に問ひ肝を察べをるなり二二彼の右にエルサレムといふ占卜いづ云く破城槌を備へ口をひらきて喊き殺し聲
二二 をあげて吶喊を作り門にむかひて破城槌を備へ壘をきづき雲梯を建べしと二三是はかれらの目には虛僞の占
二三 考と見ゆ聖き誓言かれらに在ばなり然れども彼罪を憶ひおこさしむ即ちかれら捕ふらるべし二四是故に主エホ
二四 バかく言ふ汝ら既にその罪を憶おこさしめて汝らの愆著明になりたれば汝らの罪その諸の行爲に顯はる汝ら
二五 既に憶いだされれば必ず手に執らるべし二五汝刺透さるゝ者凶人イスラエルの君主よ汝の凶その終を來
二六 らしめて汝の罰せらるゝ日至る二六主エホバかく言ふ冕旒を去り冠冕を除り離せ是は是ならざるべし卑き
二七 者は高せられ高き者は卑せられん二七我顚覆をなし顚覆をなし頭預言をなす人の子よ汝預言して言べし主エホバアンモンの子孫とその
二八 來る時まで是は有ことなし彼に我之を與ふ二八人の子よ汝

嘲笑につきて斯言ふ即ち汝言べし劍あり劍あり是殺すり
二九 て光ひらめくなり二九人なんぢに虛浮を預言し汝に假僞の占考を示して汝をその殺さるゝ惡人の頸の上に
三十 置んとす彼らの罪その終を來らしめて彼らの間せらるゝ日いたる三十これをその鞘にかへし納めよ汝の造ら
三一 れし處汝の生れし地にて我汝を鞫き三一わが怒を汝に斟き吾憤恨の火を汝にむかひて燃し狂暴人
三二 滅ぼすことに巧なる者の手に汝を付すべし三二汝は火の薪となり汝の血は國の中にあらん汝は重れて憶えら
三三 るゝことなかるべし我エホバこれを言ばなり

第廿二章

一 エホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ汝鞫かんとするや汝これにその諸の憎むべき事を示して三言へ主
二 エホバかく言ふ己の中に血を流してその罰せらる
三 る時を來らせ己の中に偶像を作りてその身を汚すところの
四 邑よ四汝はその流せる血によりて罪を得その作れ
五 る偶像をもて身を汚し汝の日を近づかせすでに汝の年にいたれり是故に我汝を國々の嘲
六 笑となし萬國
七 の笑とならしむべし五汝に近き者も遠き者も汝が名の汚れたるさ混亂の多きさを笑はん六視よイスラエルの
八 君等各その力にしたがひて血を流さんと汝の中にをる七彼ら汝の中にて父母を賤め汝の中にて他國の
九 人を虐げ汝の中にて孤兒と寡婦を惱ますなり八汝わが聖き物を賤めわが安息日を汚すなり人を譖づる者血
十 を流さんと汝の中にあり人汝の中にて山の上に食をなし汝の中にて邪淫をおこなひ十汝の中にてその父の
十一 妻に交はり汝の中にて月經のさはりに穢れたる婦女を犯すものありその
十二 なふものあり邪淫をおこなひてその嫁を犯すものありその父の女なる己の姉妹を犯すものあり十二人汝
十三 の中にて賄賂をうけて血を流すことをなすなり汝は利と息を取り汝の隣の物を掠め取り又我を忘る主エホ
十四 バこれを言ふ十三見よ我汝が掠めとる事をなし且血を汝の中に流すによりて我手を拍つ十四我が汝を攻る
十五 日には汝の心堅く立ち汝の手強くあることを得んや我エホバこれを言ひこれをなすなり十五我汝を異邦
十六 の中に散し國々の中に播き全く汝の汚穢を取のぞくべし十六汝は己の故によりて異邦人の目に汚れた

十七 る者と見えん而して汝我のエホバなるを知べし 十七 エホバの言また我にのぞみて言ふ 十八 人の子よイスラ
エルの家は我に渣滓のごとくなれり彼等は凡て鑪の中の銅 錫 鉄 鉛 のごとし彼らは銀の渣滓のごと
十九 く成り 十九 此故に主エホバかく言ふ汝らは皆渣滓となりおれば視よ我なんぢらをエルサレムの中に集む 二十
二十 人の銀 銅 鉄 鉛 錫を鑪の中に集め火を吹かけて鎔がごとく我怒と憤 をもて汝らを集め入て
二一 鎔すべし 二一 即ち我汝らを集め吾怒の火を汝らに吹かけん 二二 銀の鑪の中に鎔る
二二 がごとくに汝らはその中に鎔け我エホバが怒を汝らに臨ませし事を知にいたらん 二三 エホバの言われに臨みて
二三 言ふ 二四 人の子よ是に言ふべし汝は怒の日に日も照ず雨もふらざる地なり 二五 預言者等の徒黨その中にあ
二四 りその食を攫くごとくころの吼る獅子のごとくに彼らは靈魂を呑み財寶と貴き物を取り寡婦をその中に多くす
二五 その祭司等はわが法を犯しわが聖き物を汚し聖きと聖からざるとの區別をなさず潔きと穢たるとの差
二六 別を歎へずその目を掩ひてわが安息日を顧みず我はかれらの中にある公伯等は食を攫
二七 くごころの豺狼のごとくにして血をながし靈魂を滅ぼし物を掠めとらんとす 二八 その預言者等は灰砂をもて
二八 是等を塗り虚浮物を見爲の占卜を人になしエホバの告あらざるに主エホバかく言たまふと言ふなり 二九
二九 國の民は暴虐をおこなひ奪ふ事をなし離る者と貧き者を掠め道に反きて他國の人を虐ぐ 三十 我一箇の人の國
三十 のために石垣を築き我前にあたりてその破壞處に立ち我をして之を滅さしめざるべき者を彼等の中に尋ぬ
三一 も得ざるなり 三一 主エホバいふ是故に我わが怒を彼らに斟ぎわが憤の火をもて彼らを滅ぼし彼らの行爲
三二 をその首に報ゆ

第廿三章 一 エホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ爰に二人の婦女あり一人の母の女子なり 三 彼等エジ
プトにおいて淫を行ひその少き時に淫を行へり即ち彼處においてその處女
四 の乳房に觸る 四 その名は姊はアホラ妹はアホリバと云ふ彼ら我に歸して男子女子を生り彼らの本名はア
五 ホラはサマリアと言ひアホリバはエルサレムと云ふなり 五 アホラは我有たる間に淫を行ひてその戀人等に傚

六 れたり是すなはちその 隣 なるアッスリヤ人にして 六 紫の衣を着る者牧伯たる者督宰たる者なり是等は皆
七 美麗き 秀 たる人馬に乘る者なりセ 彼凡てアッスリヤの
八 その諸の偶像をもてその身を汚せり八 彼またエジプトよりの淫行を捨ざりき即ち彼の少き時に彼と寢
九 れその處女の乳房にさはりその淫慾を彼の身の上に洩せり九 是故に我彼をその戀人の手に付しその傚れたる
十 アッスリヤの子孫の手に付せり十 是に於て彼等かれの陰 所を露しその子 女 か奪ひ劍をもて彼を殺し
十一 て婦人の中にその名を聞えしめその身の上に鞫を 行 へり十一 彼の 妹 アホリバこれを見彼よりも甚だしく
十二 それ慾を縱恣にしその姊の淫行よりもましたるアッスリヤの人々に戀傚れたり
十三 彼らはすなはち牧伯たる者督宰たる者華美に粧ひたる者馬に騎る者にして皆美しき 秀 たる者なり 十三 我
十四 かれがその身を汚せしを見たり彼らは共に一の途をあゆめり 十四 彼その淫行を增り彼壁に彫つけたる人々を
十五 見たり是すなはち朱をもて壁に彫つけたるカルデヤ人の像にして 十五 腰には帶を結び首には垂されるハ
十六 巾を戴けり是等は皆君王たる者の形ありてその生れたる國なるカルデヤのバビロン人に似たり 十六 彼その
十七 目に是等を見てこれに戀傚れ使者をカルデヤにおくりてこれに就たりしに 十七 是に於てバビロンの人々彼の
十八 許にきたりて戀の床に就きその淫行をもて彼を汚したりしが彼らにその身を汚さるるにおよびて彼その心に
十九 かれらを疎んず 十八 彼その淫行を露しその 陰 所を顯したればわが心彼を疎んずる如くわが心かれの妹を疎ん
二十 じたるがごとし 十九 彼その淫行を增しその少き日にエジプト人が汝の 乳 房のために汝の乳にさはりたる時の淫行を願みるなり
二一 に傚るその人の肉は驢馬の肉のごとく其精は馬の精のごとし 二十 この故に主エホバかく言ふアホリバよ我汝
二二 が心に疎んずるに至りしところの戀人等を激して汝を攻めしめ彼らをして四方より汝に攻きたらしむべし 二三
二三 即ちバビロンの人々およびカルデヤの諸の人々ペコデ ショワ コア 並にアッスリヤの諸の人々美しき
二四 秀たる人々牧伯等および 督宰 等 大君および名高き人凡て馬に騎る者二四 鋒車 および輪を持ち衆多の民を

ひきゐて汝を攻め來り大楯小楯および兜をそなへて四方より汝に攻かゝらん我裁判をかれらに委ぬべし彼ら
二五 すなはちその法律によりて汝を鞫かん二五我汝にむかひてわが嫉妬を發すれば彼ら怒をもて汝を待ひ汝
の鼻と耳を切さるべし汝のうちの存れる者は劍に仆れん彼ら汝の子女を奪ふべし汝の中の殘れる者は火
二六 に燒ん二六彼ら汝の衣を剝脫り汝の美しき粧飾を取べし二七我汝の淫行を除き汝がエジプトの地より
二七 行ひ來れるところの邪淫を除き汝を舉て重て彼らに目をつけざらしめ再びエジプトの事を憶はさらむ
二八 主エホバかく言ふ視よ我汝が惡む者の手汝が心に疎ずる者の手に汝を付せば二九彼ら怨憎をもて汝
を待ひ汝の淫行さ邪淫もたかり三十汝異邦人を慕ひて淫をおこなひ彼らの偶像をもて身を汚したるに由て
三一 らん汝その姉の途に歩みたれば我かれの杯を汝の手に奥す三二主エホバかく
三二 言ふ汝その姉の深き大なる杯を飮べし是は笑さ嘲を充す者なり三三醉さ憂汝に滿ん汝の姉サマリアの
三三 の杯は駭異と滅亡の杯なり三四汝これを飮み乾しこれを吸つくしその碎片を咬み汝の乳房を摘去ん我こ
三四 れを言ふと主エホバ言ふ三五然ば主エホバかく言ふ汝我にいひたまふ人の子よ汝アホラとアホリバを鞫かんとするや然らば彼らにそ
三五 罪を貫べし三六斯てエホバ我にいひたまふ人の子よ汝アホラとアホリバを鞫かんとするや然らば彼らにそ
三六 の憎むべき事等を示せ三七夫彼らは姦淫をおこなへり又血その手にあり彼らその偶像と姦淫をおこなひ又そ
三七 の我に生たる男子等に火の中をとほらしめてこれを燒り三八加之また是をなせり即ち彼ら同日にわが
三八 聖處を汚しわが安息日を犯せり三九彼らその偶像のために男子等を宰りしその日にわが聖處に來
三九 りてこれを汚し斯わが家の中に事をなせり四十且又彼らは使者をやりて遠方より人を招きて至らむ其人
四十 人のために汝身を洗ひ目を畫き妝飾を着け四一華美なる床に坐し案盤をその前に備へその上にわが香とわが
四一 膏を置り四二斯て群衆の喧噪その中に靜りしがその多衆の人々の上にまた曠野よりサバ人を招き寄たり彼ら
四二 は手に腕環をはめ首に美しき冠を戴けり四三我彼姦淫のために衰弱たる女の事を云り今は早彼の姦淫
四三 その姦淫をなしたればらんかと四四彼らは遊女の所にいるごとくに彼の所に入たり斯かれらすなはち淫婦アホ
四四 ラとアホリバの所に入ぬ四五義人等姦婦の法律により又流血の法律に照し故殺の法律に照して彼らを鞫かん彼らは姦婦にし
四五 てきたその手に血あればなり四六主エホバかく言ふ我群衆を彼等に攻きたらしめ彼らを是に付して虐さ
四六 掠にあはしめん四七群衆かれらを石にて擊ち劍をもて斬りその子女を殺し火をもてその家を燒べし四八
四七 斯我この地に邪淫を絕さん婦女みな自ら警めて汝らのごとくに邪淫をおこなはざるべし四九彼ら汝らの邪
四八 淫の罪を汝らに報いん汝らはその偶像の罪を負ひ而して我の主エホバなるを知にいたるべし

第廿四章

一 九年の十月十日にエホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よ汝此日すなはち今日の名を書
二 せバビロンの王今日エルサレムを攻るなり三汝背ける家に譬喩をかたりて之に言へ主エホバかく言た
三 まふ釜を居ゑ居てこれに水を斟いれ四其肉の凡て佳き所を集めて股と肩さを之に入れ佳き骨をこれに充し五
四 羊の選擇者を取れ亦薪一束を取り下に入れて骨を煮よ六是故に主エホバかく言ふ禍なるかな血の流るゝ邑銹のつきたる釜その銹
五 これがために巍べからず七彼の血はその中にあり彼乾ける磐の上にこれを置りこれを土にそゝぎて塵に覆
六 ふために巍をその血の上に置ざらしめたり九是
七 はれしめずん我怒を來らせ仇を復さんがためにこれを乾ける磐の上に置て塵に覆はれざらしめたり九是
八 故に主エホバかく言ふ禍なるかな血の流るゝ邑我またその薪の束を大いにすべし十薪を積かさね火を燃し
九 肉を善く煮てこれを煮つくしその骨をも燒燋むべし十一而して釜を空にして炭火の上に置きその銅をして
十 熱くなりて燒しめ其汚穢をしてその中に鎔しめその銹
十一 らざればその銹を火に投棄べし十三汝の汚穢の中に淫行あり我汝を淨めんとしたれども汝淨まらざりし
十二 に因てわが怒を汝に洩しつくすまでは汝その汚穢をはなれて淨まることあらじ十四我エホバこれを言り是
十三 至る我これを爲べし止す措ます悔ざるなり汝の道にしたがひ汝の行爲にしたがひて彼ら汝を鞫かん主エホバ
十四 これを言ふ十五エホバの言われに臨みて言ふ十六人の子よ我頓死をもて汝の目の喜ぶ者を取去ん汝哀かず

十七 泣す涙をながすべからず 十七 聲をたてずして哀け死人のために哀哭をなすなかれ冠物を戴き足に鞋を穿べ
十八 し鬚を掩ふなかれ人のおくれる食物を食ふべからず 十八 朝に我人々に語りしが夕にわが妻死り明朝に
十九 およびて我命ぜられしごとくなせり 十九 茲に人々我に言けるは此汝がなすところの事は何の意なるや我
二十 らに告さるや 二十 我かれらに言けるはエホバの言 我にのぞみて言ふ 二一 イスラエルの家にいふべし主エホ
二一 バかく言ふ視よ我汝らの勢力の榮 汝らの目の喜愛 汝らの 心の望なるわが 聖所 を汚さん 汝らが
二二 遺すところの子女等は劍に仆れん 二二 汝らもわが爲るごとくなし鬚を覆はず人のおくれる食物を食は
二三 ず 二三 首に冠物を戴き足に履を穿き哀かず泣ずその罪の中に痩衰へて互に呻かん 二四 斯エゼキエル 汝
二五 らに兆とならん彼がなしたるごとく汝らも爲ん是事の至らん時に汝ら我の主エホバなるを知べし 二五 人の子よ
二六 わが彼らの力かれらの樂むところの榮その目の喜愛その心の望その子女を取去る日 二六 その日に逃亡
二七 者汝の許に來り汝の耳に告るにあらん 二七 その日に汝口を啓き語りて再び默せざら
二八 ん斯汝かれらに兆となるべし彼らは遂に我のエホバなるを知ん

第廿四章 一 エホバの言我に臨みて言ふ 二 人の子よ汝の面をアンモンの人々に向けこれに向ひて預言し
二 三 アンモンの人々に言べし 汝ら主エホバの言を聽け主エ
三 ホバかく言ひたまふ汝わが聖處の汚さるゝ事
につきイスラエルの地の荒さるゝ事につきて又ユダの家の擄へ移さるゝことにつきて嗚呼心地善しと言り四 是
四 故に視よ我汝を東方の人々に付して所有となさしめアンモン 彼等 汝の中に蕃園を設け汝の中にその住宅を建
五 て汝の作物を食ひ汝の乳を飲ん五 ラバをば我駱駝を豢ふ地となしアンモンの人々の地をば羊の臥す所となな
六 すべし汝らわれのエホバなるを知にいたらん 六 主エホバかく言たまふ汝イスラエルの地の事を見て手を拍ち
七 足を踏み傲慢を極めて心に喜べりセ 是故に視よ我わが手を汝に伸べ汝を國々に付して掠奪に遭しめ汝を國
八 民の中より絶ち諸國に斷し滅すべし汝我のエホバなるを知ろにいたらん 八 主エホバかく言たまふモアブと
九 セイル言ふユダの家は他の諸の國と同じさん 九 是故に我モアブの肩を開くべし即ちその邑々その最遠の邑にし

十 て國の莊嚴なるベテエシモテバアルメオンおよびキリアタ
十一 イムに至り 十一 之をアンモンの人々に遺て
東方の人々に與べその所有となさしめアンモンの人々をし
十二 て國々の中に記憶らるゝことなからしめん 十二 我モア
ブに對を行ふべし彼ら我のエホバなるを知にいたらん 十三 主エホバかく言たまふエドムは怨恨をふくんで
十三 ユダの家に事をなし且これに怨を復して大に罪を得たり 十三 是故に主エホバかく言たまふ我エドムの上にわ
十四 が手を伸して其中より人と畜を絶去りテマンより荒地となすべしデダンの者は劍に仆れん 十四 我わが民
イスラエルの手をもてエドムにわが仇を報いん彼らわが怒にしたがひわが憤にしたがひてエドムに行ふ
十五 べしエドム人すなはち我が仇を復すなるを知ん主エホバかく言たまふペリシテ人は
十六 怨を含みて事をなし心に傲りて仇を復し蓄き恨を懷きて滅ぼすことをなせり 十六 是故に主エホバかく言たまふペリシテ人は
十七 ふ視よ我ペリシテ人の上に手を伸ケレテ人を絶ち海邊に遺れる者を滅ぼすべし 十七 我怒の罰をもて大な
る復仇を彼らに爲ん我仇を彼らに復す時に彼らは我のエホバなるを知べし

第廿五章 一 十一 年の月の首の日にエホバの言我にのぞみて言ふ 二 人の子よツロはエルサレムの事につ
二 きて言り嗚呼心地よし 諸の國民の門破る是我に移るならん我は豐滿になるべし彼は荒はてたりと 三 是故に
三 主エホバかく言たまふツロよ我汝を攻め海のその波濤を起すが如く多の國人を汝に攻きたらしむべし 四
四 彼らツロの石墻を毀ちその櫓を倒さん我その塵を拂ひ去りて是を乾ける磐と爲べし 五 是は海の中の網を張る
五 處とならん我これを言ばなりと主エホバいひたまふ是は 諸の國人に掠められべし 六 その野になる女子等は
六 劍に殺されん彼らすなはち我のエホバなるを知べしセ 主エホバかく言たまふ視よ我王の王なるバビロンの王
七 子ブカデ子ザルをして馬、車、騎兵、群衆および多くの民を率て北よりツロに攻きたらしむべし 八 野になる
八 汝の女子等をば彼劍にかけて殺し又汝にむかひて壘を築き汝にむかひて干を備
九 へ 九 破城槌を汝の石垣に向けその斧をもて汝の 櫓 を打碎かん 十 その衆多の馬の塵埃 汝をおほはん彼等歛れ
十 たる城に入るごとくに 汝 の門々に入來らん時その騎兵と輪と車の聲のために 汝 の石垣震動べし 十一 彼そ

十二 の馬の蹄をもて汝の諸の衢を踏あらし剣をもて汝の民を殺さん汝の榮光の柱地に仆ろべし十二 彼ら汝の
十三 財寶を奪ひ汝の商貨を掠め汝の石垣を打崩し汝の美しき舘を毀ち汝の石と木と土を水に沈めん十三 我
十四 汝の歌の聲を止めん汝の琴の音は復聞えざるべし十四 我汝を沈けん磐となさん汝は網を張る處となり再び
十五 建ることなかるべし我エホバこれを言ふと主エホバ言たまふ十五 主エホバツロに向ひ言たまふ島々汝の仆
十六 るゝ聲手負の呻吟および汝の中の殺戮によりて震動ざらんや十六 海の君主等皆その座を下り朝服を脱き繍あ
十七 る衣を去り恐懼を身に纏ひ地に坐し時となく怖れ汝の事を驚かん十七 彼ら汝のために哀の詞を擧て汝に言
ふべし汝海より出たる住處名の高き邑自己もその居民も共に海に於て勢力ある者その凡の居民に己を恐れ
しむる者よ汝如何にして亡びたるや十八 それ島々は汝の仆るゝ日に震ひ海の島々は汝の亡るに驚くなり
十九 主エホバかく言たまふ我汝を荒たる邑となし人の住ざる邑々のごとく爲し洋海を沸あがらしめて大
水に汝を掩沒しめん時二十 汝を墓に往る者等と偕に住しめ古昔よりの
墟址に於て彼の墓に下れる者等と偕に居しめ汝の中に復人の住ことなからしむべし而して我活る人の地に榮
二十一 を創造いださん二一 我汝をもて人の戒懼となすべし汝は復有ことなし人汝を尋るも終に汝を看ざるべし
主エホバこれを言ふなり

第廿七章

一 エホバの言また我に臨みて言ふ二 人の子よ汝ツロのために哀の詞を宣べ三 ツロに言べし
汝海の口に居りて諸の國人の商人となり多衆の島々に通ふ者よ主エホバかく言たまふツロよ汝言ふ我
四 の美は極れりと四 汝の國は海の中にあり汝を建る者汝の美を盡せり五 人セニルの樅をもて船板を作りレバ
ノンより香柏を取て汝のために檣を作りキッテムの島より至れる黄楊
六 木に象牙を嵌て汝の坐板を作れり七 汝の帆はエジプトより至れる文布にして旗に用ふべし汝の天遮はエリシヤ
七 の島より至れる藍と紫の布なり八 汝の水手はシドンとアルワデの人なりツロよ汝の中にある賢き者汝の
八 能師となるゲバルの老人等およびその賢き者汝の中にをりて汝の漏を繕ひ海の諸の船およびその舵
九 子汝の中にありて汝の貨物を交易す九 ペルシヤ人ルデ人フテ人汝の軍にありて汝の戰士となる彼等
十 汝の中に干と兜を懸け汝に光輝を與ふ十一 アルワデの人々およびタルシ、汝の四周の石垣の上にあり勇
十一 士等汝の楯をかけ汝の美を盡せり十二 その諸の仗物に富るがため
にタルシ、汝と商をなし銀、鉄、錫および鉛をもて汝と交易を爲り十三 ヤワントバルおよびメセクは汝
十二 の商賈にして人の身と銅の器をもて汝と貿易を行なふ十四 トガルマの族馬と騎馬およびラバをもて汝
十三 と交易し十五 デダンの人々汝と商をなせり多の島々汝の手にありて交易し象牙と黒檀をもて汝と
十四 貿易せり十六 汝の製造品の多がためにスリア汝と商をなし赤玉、紫貨、繍貨、細布、珊瑚および瑪
十五 瑙をもて汝と交易す十七 ユダとイスラエルの地汝に商をなしミンニデの麥と菓子と蜜と油と乳香をもて
十六 汝と交易す十八 汝の製造物の多がためにダマスコ、ヘルボンの酒と曝毛をもて汝
十七 と交易せり十九 ウザルのベダンとヤワン熟鐵をもて汝と交易し肉桂と菖蒲汝の市にあり二十 デダン
十八 車の毛氈を汝に商へり二一 アラビアとケダルの君等とは汝の手に在て商をなし羔羊と牡羊と牡山羊をも
十九 て汝と交易す二二 シバとラアマの商人汝と商をなしすべて
せり二三 ハランとカンネとエデンとシバの商賈とアッスリヤとキルマデ汝と商をなし二四 華美なる物と
二十 紫色なる繍の衣服と香柏の箱の綾を盛て紐にて結たる者とをもて汝の市にあり二五 タルシ、の船汝のた
二一 めに往来して商賈を爲す汝は海の中にありて豊滿にして榮あり二六 水手汝を漾て大水の中にいたるに海の
二二 中にて東風汝を打破る二七 汝の財寶汝の貨物汝の交易の物汝の舟子汝の舵師汝の漏を繕
ふ者汝の貨物を商ふ者汝の中にあるところの凡の軍人並に汝の中の乗者皆汝の壊るゝ日に海の
二三 中に陷るべし二八 汝の能師等の叫號の聲にその處々震ふ二九 凡て棹を執る者舟子および凡て海の舵師その
二四 船より下りて陸に立ち三十 汝のために聲を擧て痛く哭き塵を首に蒙り灰の中に輾轉び三一 汝のために髪を剃
二五 り厫布を纏ひ汝のために心を痛めて泣き甚く哭くべし三二 彼等悲みて汝のために哀の詞を宣べ汝を吊

三三 ひて言ふ視よツロの如くなる海の中に滅たる者の如くなる
三四 ことを　三三 汝の商貨の海より出し時は汝衆多の
國民を厭しめ汝の衆多の財寶と貨物をもて世の王等を富しめたりしが
三五 は汝の貨物　汝の乘人皆陷らん　三五 島々に住る者皆
三六 汝に駭かんその君等　大に恐てその面を振はす
ことを　ことを　ことを
ベし　三六 國々の商買　汝のために嘶かん汝は人の飛慴さなり限りなく失果ん

第廿八章　一 エホバの言われに臨みて言ふ　二 人の子よツロの君に言ふべし主エホバかく言たまふ　汝心
に高ぶりて言ふ我は神なり神の座に坐りて海の中にあり
と汝は人にして神にあらず而して神の心のごとき心
三 を懷くなり　三 夫　汝はダニエルよりも賢かり隱れたる事
なんぢ　なんぢ　なんぢ
よりて　汝富み　獲金銀を汝の庫に收め　五 汝の大
なる智慧と汝の貿易をもて汝の富有を增しその富有のために心に高ぶれり　六 是故に主エホバかく言ふ　汝神の心の
ごとき心を懷くに因り　七 視よ我異國人を汝に攻きたらしめん是國々の暴き人々なり彼ら劍を拔て汝が智慧をもて得たるところの美しき者に向ひ汝の美を汚
し　八 汝を穴に投いれん汝は海の中にて殺さるゝ者のごとき死を遂べし　九 汝は人にして神にあらず汝を殺す者
の手にあるも尙その己を殺す者の前に我は神なりと言んとするや　十 汝は勘禮をうけざる者の死を異國人の
手に遂べし我これを言ばなりと主エホバ言たまふ　十一 エホバの言　我にのぞみて言ふ　十二 人の子よツロの王
のために哀の詞を述べこれに言べし主エホバかく言たまふ汝は全く整へたる者の印、智慧の充ち美の
倾れる者なり　十三 汝神の園エデンに在き諸の寶石、赤玉、黃玉、金剛石、黃綠玉、慈珩、碧玉、
青玉、紅　玉、瑪瑙および金　汝を覆へり汝の立らるゝ日に手鼓と笛　汝のために備らる　十四 汝は膏
そがれしケルビムにして掩ふことを爲り我汝を斯なせしなり　汝神の聖山に在り又火の石の間に歩め
り　十五 汝はその立られし日より終に汝の中に惡の見ゆるにいたるまでは其　行　全かりき　十六 汝の交易の
多かために汝の中に暴　逆滿ちて　汝罪を犯せり是故に掩ふことを爲に汝を神の山より汝
を汚し出し火の石の間より汝を滅し去べし　十七 汝その美麗のために心に高ぶり其榮輝のために汝の智

慧を汚したれば我汝を地に擲ち汝を王等の前に置て觀物とならしむべし　十八 汝正からざる交易をなして犯したる多の罪を以て汝の聖所を汚したれば我
汝の中より火を出して汝を燒き凡て汝を見る者の
目の前にて汝を地に灰となさん　十九 國々の中にて汝を知る者は皆汝に驚かん汝は人の戒懼となり限なく
失果んエホバの言　我にのぞみて言ふ　二十 人の子よ汝の面をシドンに向けこれに向ひて預言し　二一 言べ
し主エホバかく言たまふシドンよ視よ我汝の敵となる我汝の中において榮耀を得ん我彼らを鞫き我の聖
き事を彼らに顯はす時彼ら我のエホバなるを知ん　二二 我疫病を是におくりその鵐に血あらしめんその四方
より是に來るところの劍に殺るゝ者その中に仆るべし彼らすなはち我のエホバなるを知ん　二三 イスラエル
の家にはその周圍にありて之を賤むる者の所より重て惡き刺棘苦き茨剌來ることなし彼らは我の主エホバ
なるを知にいたらん　二四 主エホバかく言ふ我イスラエルの家をその散されたる國々より集めん時彼らに由り
て我の聖き事を異國人の目の前にあらはさん彼らはわが僕ヤコブに與へたるその地に住ん　二五 彼ら彼處
に安然に住み家を建て葡萄園を作らん彼らの周圍にありて彼らを藐視る者を悉く我が鞫かん時彼らは安
然に住み我エホバの己の神なるを知ん

第廿九章　一 十年の十月の十二日にエホバの言　我にのぞみて言ふ　二 人の子よ汝の面をエジプトの王パロ
にむけ彼とエジプト全國にむかひて預言し　三 語りて言べし主エホバかく言たまふエジプトの王パロよ視よ我
汝の敵となる汝その河に臥すところの鱷よ汝いふ河は我のもの我これを造れりと　四 我鉤を
汝の腮に鉤け汝の河の魚をして汝の鱗に附しめ汝を
五 汝と汝の河の諸の魚を曠野に投すてん汝は野の面に仆れん汝を取あぐる者なく集る者なかるべし我汝
を地の獸と天の鳥の餌に與へん　六 エジプトの人々皆我エホバなるを知ん彼等のイスラエルの家における
は葦の杖のごとくなりき　七 イスラエル　汝の手を執ば　汝折てその肩を盡く裂き又汝に倚ば　汝破てそ
の腰を盡く振へしむ　八 是故に主エホバかく言ふ視よ我劍を汝に持きたり人と畜を汝の中より絕ん

エジプトの地は荒て空曠なるべし彼らすなはち我のエホバなるを知ん彼河は我の有なり我これを作れりと言
ふ十 是故に我汝と汝の河々を罰しエジプトの地をミグドルよりスエネに至りエテオピアの境に至るまで
十一 盡く荒して空曠くせん十一人の足此に渉らず獣の足此を渉らじ四十年の間此に人の住ことなかるべし
十二 我エジプトの地を荒して荒たる國々の中にあらしめんその邑々は荒て四十年の間荒たる邑々の中にあ
るべし我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん十三 但し主エホバかく言たまふ四十年の後我エ
ジプト人をその散されたる諸の民の中より集めん十四 即ちエジプトの俘囚人を歸しその生れし國なるパ
テロスの地にかへらしむべし彼らは其處に卑き國を成ん十五 是は諸の國よりも卑くして再び國々の上にい
づることなかるべし我かれらを小くすれば彼らは重て國々を治むることなかるべし十六 彼らは再びイスラエルの家
の恃とならじイスラエルはこれに心をよせてその罪をおもひ出さしむることなかるべし彼らすなはち我の主
エホバなるを知ん十七 茲に二十七年の一月の一日にエホバの言我にのぞみて言ふ十八 人の子よバビロンの
王ネブカデネザルその軍勢をしてツロにむかひて大に働かしむ皆首禿げ皆肩破る然に彼もその軍勢もその爲
ところの事業のためにツロよりその報を得ず十九 是故に主エホバかくいふ視よ我バビロンの王ネブカデネザルにエジプトの地を與へん彼その衆多の財寶を取り物を掠め物を奪はん是その軍勢の報たらん二十
彼の勞動る値として我エジプトの地をかれに與ふ彼わがために之をなしたればなり主エホバこれを言ふ二十一
當日に我イスラエルの家に一の角を生ぜしめ汝をして彼らの中に口を啓くことを得せしめん彼等すなはち我
がエホバなるを知べし

二十一章一 エホバの言我にのぞみて言ふ二 人の子よ預言して言へ主エホバかく言たまふ汝ら叫べ其日は
禍なるかなと三 その日近し即ち耶和華の日近し昏雲の日是異邦人の時なり四 劍エジプトに臨まん殺るゝ者の
エジプトに仆るゝ時エテオピアに痛苦あるべし敵その財寶を奪はんその基址は毀たるべし五 エテオピア人プ
ト人ルデ人凡て加勢の兵およびクブ人ならびに同盟の國の人々彼らとともに劍にたふれん六 エホバかく言ふエジプトを扶くる者は仆れ其驕るところの勢力は失ん
ミグドルよりスエネにいたるまで人劍により
て己の中に仆るべし主エホバこれを言なり七 其は荒て荒地の中にあり其邑々は荒たる邑の中にあるべし八
我火をエジプトに降さん時又是を助くる者の皆ほろびん時は彼等我のエホバなるを知ん九 その日には使者
船にて我より出てかの心強きエテオピア人を懼れしめんエジプトの日にありしごとく彼等の中に痛苦あるべし視よ是は至る十 主エホバかく言たまふ我バビロンの王ネブカデネザルの手によりてエジプトの喧噪を止むべし
十一 彼およびに彼にしたがふ民即ち國民の中の暴き者を召來りてその國を滅さん彼ら劍をぬきてエジプトを
攻めその殺せる者を國に滿すべし十二 我その河々を涸し國を惡き人の手に賣り外國人の手をもて國とその
中の物を荒すべし我エホバこれを言り十三 主エホバかく言たまふ我偶像を毀ち神々をノフに絶さんエジプ
トの國よりは再び君のいづることなかるべし我エジプトの國に畏怖を蒙らしめん十四 我パテロスを荒しゾア
シンに火を擧げノに鞫を行ひ十五 わが怒をエジプトの要害なるシンに洩しノの群衆を絶べし十六 我火をエジ
プトに降さんシンは苦痛に悶えノは打破られノフは日中敵をうけん十七 アベンとピベセテの少者は劍に仆れ
其中の人々は擄ゆかれん十八 テパネスにかたては吾がエジプトの軛を其處に摧く時に日暗くならんその誇る
ところの勢力は失んこれを覆はんその女子等は擄ゆかれん十九 かくエジプトに鞫をおこなはん彼等すな
はち我のエホバなるを知べし二十 十一年の一月の七日に二十一 我エホバの言われに臨みて言ふ二 人の子よ我エジ
プトの王パロの腕を折りこれを再び束ねて藥を施こし裹布を巻て之を裹み強く爲て劍を執にたへしむること能
はざるなり二二 是故に主エホバかく言たまふ視よ我エジプトの王パロを罰し其強き腕と折たる腕とを俱に折
り劍をその手より落しむべし二三 我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん二四 而してバビロン
の王の腕を強くしてわが劍をこれに授けん然ど我パロの腕を折ば我は刺透されたる者の呻くがごとくにその
前に呻かん二五 我バビロンの王の腕を強くせんパロの腕は弱くならん我わが劍をバビロンの王の手に授けて
彼をしてエジプトにむかひて之を伸しむる時は人衆我のエホバなるを知ん二六 我エジプト人を諸の民の

中に散し諸の國に散さん彼らすなはち我のエホバなるを知るべし

第三十二章

二 一十一年の三月の一日にエホバの言我に臨みて云ふ二人の子よエジプトの王パロとその群衆
三 に言へ汝はその大なること誰に似たるや三アッスリヤはレバノンの香柏のごとし其枝美しくして生茂りそ
四 の丈高くして其頂雲に至る四水これを大ならしめ大水これを高からしむ其川々その植れる處を環りそ
五 の流を野の諸の樹に及ぼせり五是によりてその長野の諸の樹よりも高くなりその生長にあたりて多の水のた
六 めに枝葉茂りその枝長く伸たり六その枝葉に空の諸の獣子を生みその陰に諸の國民住ふ七是はその大なるとその枝の長きとに由て美しかりき其根多の水の傍にありたればなり八神の園の香柏これを蔽ふことあたはず樅もその枝に如ず神の園の樅の中そのの枝葉に及ばず楓もその枝に如ず神の園の樹の中そのの美き事これに如ものあらざりきル我これが枝を多して美しくなせりエデンの樹の神の園にある者皆これを羨めり十是故に主エホバかく言ふ汝その長高くなれり是は其頂雲に至りその心高く驕れば十一これを萬國の君たる者の手に付さん彼これを處置せん其悪のために我これを打棄たり十二他國人國々のあらき者これを截倒して棄つ其枝葉は山々に谷々に墮ち其枝は砕けて地の諸の谷川にあり地の萬民その陰を離れてこれを遺つ十三その倒れたる上に空の諸の鳥止まり其枝の上に野の諸の獣を雲に至らしむるこの高のために誇ることなくその頂雲に至らしむることなからんためなり夫是等は皆死に付されて下の國に入り他の人々の中にあり墓に下る者等と偕なるべし十五主エホバかく言たまふ彼が下の國に下れる日に我哀哭あらしめ之がために大水を蓋ひその川々をせきこめたれば大水止まれり我レバノンをして彼のために喪衰へしむ十六我これを陰府に投くだして墓に下る者と共ならしむる時に國々をしてその墮る響に震動しめたり又エデンの諸の樹レバノンの勝たる最美き者凡て水に潤ふ者皆下の國に於て慰を得たり十七彼等も彼と偕に陰府に下り劍に刺れたる者の處にいたる是すなはちその助者となりてその陰に坐し萬國民の中にありし者なり十八エデンの樹の中にありて汝は其榮とその大なること孰に似たるや汝は斯エデンの樹と共に割禮を受ざる者の中におろされ劍に刺されたる者と偕に下されん是パロとその群衆は是のごとし主エホバこれを言ふ

第三十二章

一 茲にまた十二年の十二月の一日にエホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よエジプトの王パロのために哀の詞を述て彼に言ふべし汝は自ら萬國の中の獅子に擬へたるが汝は海の鰐の如くなり汝河の中に跳起き足をもて水を濁しその河々を蹈みだすと三主エホバかく言たまふ我衆多の國民の中にてわが網を汝に打掛け彼らをしてわが網にて汝を引あげしめん四而して我汝を地上に投すて汝を野の面に擲ち空の諸の鳥をして汝の上に止まらしめ全地の獣をして汝に飽しむべし五我汝の肉を山々に遺て汝の屍を堆くして谷々を埋むべし六我汝の溢るゝ血をもて地を漲し山にまで及ぼさん七我汝を滅する時は空を蔽ひその星を暗くし雲をもて日を掩はん月はその光を發ざるべし八我空の照る光明をことごとく汝の上に暗くし汝の地を黒暗となすべし主エホバこれを言ふ九我なんぢの滅亡を諸の民汝の知ざる國々の中に知しめて夥多の民をして心を傷ましめんとき我衆多の民をして汝に驚かしめんその王等はわが其前にわれの劍を振ふ時に戦慄かん汝の仆るゝ日には彼ら各人その生命のために絶ず發振ん十一即ち主エホバかく言たまふバビロンの王の劍汝に臨まん十二我衆の群衆をして勇士の劍に仆れしめん彼等は皆國の暴き者なり彼らエジプトの驕傲を絶さん其の群衆は皆ほろぼさるべし十三我その家畜を盡く多の水の傍より絶去ん人の足再び之を濁すことなく家畜の蹄これを濁すことなかるべし十四我すなはちその水を清しめ其河々をして油のごとく流れしめん主エホバこれを云ふ十五我エジプトの國を荒地となしてその國荒てこれが富を失ふ時また我その中に住る者を盡く撃つ時人々我のエホバなるを知ん十六是哀の詞なり人悲みてこれを唱へん國々の女等悲みて之を唱ふべし即ち彼等エジプトとその諸の群衆のために悲みて之を唱へん主エホバこれを言ふ十七十二年の月の十五日にエホバの言また我に臨みて言ふ十八人の子

エジプトの群衆のために哀き是ご大なる國々の女等さを下の國に投くだし墓にくだる者と共ならしめよ
十九 汝美しき事誰に勝るや下りて割禮なき者さゝもに臥せよ
二十 彼らは劍に殺さるゝ者の中に仆るべし つるぎですでに付してあり是その諸の群衆を曳下すべし
二一 勇士の強き者陰府の中より彼にその助者と共に言ふ 割禮を受ざる者劍に殺されたる者彼等下りて臥す
二二 彼處にアッスリヤとその凡の群衆ありその周圍にふ 之が墓あり彼らは皆殺され劍に仆れたる者なり
二三 かれの墓は穴の奥に設けてありその群衆墓の四周にあり是皆殺されて劍に仆れたる者生者の地に畏怖をおこせし者
二四 彼處にエラムありその凡の群衆そ の墓の周圍にあり是皆ころされて劍に仆れ割禮を受ずして下の國に下りし者生者の地に畏怖をおこせし者
二五 にて夫穴に下れる者等さゝもに恥辱を蒙るなり 二五 殺されたる者の中にその床を置きてその凡の群衆と共に
すその墓周圍にあり彼等は皆割禮を受ざる者にして劍に殺さる 彼ら生者の地に畏怖をおこしたれば穴に
二六 下れる者さゝもに恥辱を蒙るなり彼は殺されし者の中に置る 二六 彼處にメセクとトバルおよびその凡の群衆
ありその墓周圍にあり彼らは皆割禮を受ざる者にして劍に 生者の地に畏怖をおこしたればな
二七 彼らは割禮を受ずして仆れたる勇士さゝもに臥さず是等はその武器を持て陰府に下りその劍を枕にす
り二七 その罪は骨にあり是生者の地に於て勇士を畏れしめたればなり 二八 汝は割禮を受ざる者の中に打碎けて劍に
二八 に殺されたる者さゝもに臥ん 二九 彼處にエドムとその王等さその諸の君等ありて彼らは勇力をもちながら劍に
二九 殺さるゝ者の中に入り割禮なき者および穴に下れる者さゝもに臥すべし 三十 彼處に北の君等皆ありまた
三十 ン人皆あり彼らは殺されし者等さゝもに下り人を怖れしむる勇力をもちて羞辱を受く彼處に彼らは割禮を
三一 受ずして劍に殺されたる者さゝもに臥し穴に下れる者さゝもに恥辱を蒙る 三一 パロかれらを見その諸の群衆
三二 の事につきて心を安めんパロとその軍勢皆劍に殺さる主エホバこれを言ふ 三二 我かれをして生者の地
に畏怖をおこさしめたりパロとその諸の群衆は割禮をうけざる者の中にありて劍に殺されし者さゝもに臥す
主エホバこれを言ふ

第三十二章

一 爰にエホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ汝の民の人々に告て之に言へ我劍を一の國に
臨ましめん時その國の民おのれの國人の中より一人を撰みて之を守望人となさんに 三 彼國に劍の臨むを見ラ
ッパを吹てその民を警むることあらん 四 然るに人ラッパの音を聞て自ら警めず劍つひに臨みて其人を失ふ
にいたらばその血はその人の首に皈すべし 五 彼ラッパの音を聞て自ら警むることを爲ざればその血は己に
歸すべし然ども自ら警むることを爲ばその生命を保つことを得ん 六 然ども守望者劍の臨むを見てラッ
パを吹ず民警戒をうけざるあらんに劍のぞみて其中の一人を失はゞ其人は己の罪に死るなれど我その血を
守望者の手に討問ん 七 然ば人の子よ我汝を立てイスラエルの家の守望者となす汝わが口より言を聞き我に
かはりて彼等を警むべし 八 我悪人に向ひて悪人よ汝死ざるべからずさ言んに汝その悪人を警めてその
途を離るゝやうに語ずば悪人はその罪に死んなれどその血を 九 汝もし悪人をその途を離れよさ警めて
警めて翻へりてその途を離れしめんとしたるに彼その途を 十 離れずば彼はその罪に死ん而して汝はおのれの生
命を保つことを得ん 十一 然ば人の子よイスラエルの家に言へ汝らは斯語りて言ふ我らの愆と罪は我らの身の上
にありて我等はその中にありて消失ん爭か生ることを得んさ 十二 汝かれらに言べし主エホバ言たまふ我は活く
我悪人の死るを悦ばず悪人のその途を離れて生るを悦ぶなり汝ら翻へり翻りてその悪き道を離れよイ
スラエルの家よ汝等なんぞ死べけんや 十三 人の子よ汝の民の人々に言べし義人の義はその人の罪を犯せる日
にはその人を救ふことあたはず悪人はその悪を離れたる日 十四 我悪人に汝かならず死べしと言ふに彼その悪を
罪をおかさばその義は悉く忘らるべし其をかせる罪のために彼は死べし 十五 即ち悪人質物を歸しその奪ひし者を還し悪をな
我義人に汝かならず生べしと言んに彼その義を恃みて 十六 その犯したる各種の罪は記憶らるゝことなかる
罪を犯せる日にはその義のために生ることを得じ 十四 さすして生命の憲法にあゆみなば必らず生ん死ざるべし 十七 汝の民の人々は主の道正しからずと言ふ然ど實は彼

等の道の正からざるなり 十八 義人もしその義を離れて罪をふかさば是がために死べし 十九 惡人もしその惡を
二十 離れて公道と公義をおこなひなば是がために生べし 二十一 然ろに汝らは主の道正しからずと言ふイスラエルの
二一 家よ我各人の行爲にしたがひて汝等を鞫くべし 二二 我らが擄へうつされし後すなはち十二年の十月の五日
二三 にエルサレムより脫逃者きたりて邑は擊敗られたりと言ふ 二三 その逃亡者の來る前の夜エホバの手我に臨み
二三 彼が朝におよびて我に來るまでに我口を開けり斯わが口開けたれば我また默せざりき 二三 即ちエホバの言わ
二四 れに臨みて言ふ 二四 人の子よイスラエルの地の彼の墟址に住る者語りて云ふアブラハムは一人にして此地を
二五 有てり我等は衆多し此地はわれらの所有に授かるなりと 二五 是故に汝かれらに言ふべし主エホバかく言ふ汝ら
二六 は血のまゝに食ひ汝らの偶像を仰ぎ且血を流すなれば尙此地を有つべけんや 二七 汝かれらに斯言べし主エホバかく言ふ我は活くかく
二七 を行ひ各人の妻を汚すなれば此地を有つべけんや 二七 汝かれらに斯言べし主エホバかく言ふ我は活くかく
二八 の荒場に居る者は劍に仆れん野の表にをる者をば我獸にあたへて噬はしめん要害と洞穴とにをる者は疫病
二九 に死ん 二八 我この國を全く荒さん其誇るところの權勢は終に至らんイスラエルの山々は荒て通る者なかるべ
三十 し 二九 彼らが行ひたる諸の憎むべき事のために我その國を全く荒さん時に彼ら我のエホバなるを知ん 三十
三一 人の子よ汝の民の人々垣の下家の門にて汝の事を論じ互に語りあひ各々その兄弟に言ふ去來われら如何
三二 なる言のエホバより出るかを聽んと 三一 彼ら民の集會のごとくに汝の前に坐して汝
三三 の言を聞ん然ども之を行はじ彼らは口に悅ばしきこころの事をなし其心は利にしたがふなり 三二 彼等には
三四 汝悅ばしき歌美しき聲美く奏る者のごとし彼ら汝の言を聞ん然ども之をおこなはじ 三三 視よその事至
三五 る其事のいたる時には彼らおのれの中に預言者ありを知べし

第二十四章

一 エホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ汝イスラエルの牧者に言ふべし主エホバかく言ふ己を牧ふところのイスラエルの牧者は禍なるかな牧者は群を牧ふべき
二 者ならずや 三 汝らは脂を食ひ毛を纏ひ肥たる物を屠りその群を牧はざるなり 四 汝ら其弱き者を強くせず其
三 の病る者を醫さずその傷ける者を裹まず散されたる者を尋ねず手荒に嚴刻く之を治
四 むる 五 是は牧者なきに因て散り失せ野の諸の獸の餌となりて散失るなり 六 我羊は諸の山々に諸の
五 高丘に迷ふ我羊全地の表に散りをれど之を索ず尋ぬる者なし 七 是故に牧者よ汝らエホバの言を
六 聞け 八 主エホバ言たまふ我は活く我羊掠められわが羊野の諸の獸の餌となる又牧者あらず我牧者
七 わが羊を尋ねず牧者己を牧ふてわが羊を牧はずゆゑに 九 是故に牧者よ汝等エホバの言を聞け 十 主エホバ斯
八 言たまふ視よ我牧者等を罰し吾羊を彼らの手に討問めまた彼等をして羊を牧ふことなからしめ又わが羊をかれらの口より救とりてかれらの食ざらしむべし 十一 主エホバかく言
九 たまふ我みづからわが羊を索して之を守らん 十二 牧者がその羣の中にある日にその群を守るごとく我
十 わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる諸の處より之を救ひ出し諸の國より集めてその國に携へいりイスラエルの山の上と谷の中および國の凡の住居處にて
十一 彼らを養はん 十四 善き牧場にて我かれらを牧なはんその休息處はイスラエルの高山にあるべし彼處にて
十二 らは善き休息所に臥しイスラエルの山々の上にて肥たる牧場に草を食はん 十五 主エホバいひたまふ我みづ
十三 から我群を牧ひ之を偃しむべし 十六 亡たる者は我これを尋れ逐はなたれたる者はこれを引返り傷けられた
十四 る者はこれを裹み病る者はこれを強くせん然ど肥たる者と強き者は我これを滅さん我公道をもて之を牧ふ
十五 べし 十七 主エホバかく言たまふ汝等わが羊よ我羊と羊の間および牡羊と牡山羊の間の審判をなさん 十八
十六 汝等は善き牧場に草食ひ足をもてその殘る草を蹈あらし又清たる水を飲み足をもてその殘餘を濁す是汝等
十七 にとりて小き事ならんや 十九 わが群汝等が足にて蹈あらしたる者を食ひ汝等が足にて濁したる者を飲べけ
十八 んや 二十 是をもて主エホバ斯かれらに言たまふ視よ我肥たる羊と瘠たる羊の間を審判くべし 二一 汝等は脇と
十九 肩をもて擠し角をもて弱き者を盡く衝て遂に之を外に逐散せり 二二 是によりて我わが群を助けて再び掠めら
二十 れざらしめ又羊と羊の間をさばくべし 二三 我かれらの上に一人の牧者をたてん其人かれらを牧なふべ

し是わが僕ダビデなり彼はかれらを牧ひ彼らの牧者さなるべし二四我エホバかれらの神さならん吾僕ダ
ビデかれらの中に君たるべし我エホバこれを言ふ二五我かれらと平和の契約を結び國の中より惡き獸を滅ぼ
し絕つべし彼らすなはち安かに野に住み森に眠らん二六我彼らおよび吾山の周圍の處々に福祉を下し時に
應ひて雨を降しめん是すなはち福祉の雨なるべし二七野の樹はその實を結び地はその產物を出さん彼等は安
然にその國にあるべし我がかれらの軛を碎き彼らをその僕さなせる人の手より救ひいだす時に彼等は我のエ
ホバなるを知べし二八彼等は重て國々の民に掠められ事なく野の獸かれらを食ふことなかるべし彼等は安
然に住はん彼等を懼れしむる者なかるべし二九我かれらのために一の栽植處を起してその名を聞えしめん
彼等は重て國の饑饉に滅ぶることなく再び外邦人の凌辱を蒙むることなかるべし三十彼らはその神な
る我エホバが己と共にあるを知り自己イスラエルの家はわが民なることを知るべし主エホバこれを言ふ三一
汝等はわが羊わが牧場の群なり汝等は人なり我は汝らの神なりと主エホバ言たまふ

第三十五章

一爰にエホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ汝の面をセイル山にむけ之にむかひて預言し三
之にいふべし主エホバかく言ふセイル山よ視よ我汝を罰し汝にむかひてわが手を伸べ汝を全く荒し四汝
の邑々を滅ぼすべし汝は荒てん而して我のエホバなるを知にいたらん五汝果しなき恨を懷きてイスラエ
ルの人々をその艱難の時その終の罰の時に劍の手に付せり六是故に主エホバ言ふ我は活く我汝を血になさ
ん血汝を追べし汝血を嫌はざれば血汝を追ん七我セイル山を全く荒し其處に往來する者を絕ち八殺されし者
をその山々に滿すべし劍に殺されし者汝の岡々谷々およびすべての川に仆れん九我汝を長に荒地さ
なさん汝の邑々には人の住むことあらじ汝等すなはち我のエホバなるを知にいたらん十汝言ふこの二箇の民
二箇の國は我が所有なり我等これを獲んさエホバいふ我は活く汝が恨
をもて彼らに示したる怒怒と嫉惡に循ひて我汝に事をなさん我汝を鞫くことを以て我を彼等に示すべし
十一汝は我エホバの汝がイスラエルの山々にむかひて是は荒ばて我等の食に授かるさいひて吐たるさこころの
諸の誇謗を聞たることを知にいたらん十三汝等口をもて我にむかひて誇り我にむかひて汝等の言を多
せり我これを聞く十四主エホバ斯いひたまふ全地の歡ぶ時に我汝を荒地さなさん十五汝イスラエルの家
の產業の荒るを喜びたれば我汝をも然なすべしセイル山よ汝荒地さならんエドムも都て然るべし人衆す
なはち我のエホバなるを知にいたらん

第三十六章

一人の子よ汝イスラエルの山々に預言して言へ山々よエホバの言を聽け二主
エホバかく言たまふ敵汝等の事につきて言ふ嗚呼是等の舊き高處我等の所有さなるさ三是故に汝預言し
て言へ主エホバかく言ふ彼等汝らを荒し四方より汝らを呑り是をもて汝等は國民の中の殘餘者の所有さ
なり亦人の口舌にかゝりて噂せらる四然ばイスラエルの山々よ主エホバの言を聞け主エホバ山さ岡さ谿さ、
谷さ滅びたる荒跡さ人の棄たる邑々即ち其周圍に殘れる國民に掠められ嘲けらるゝ者に斯言たまふ五即
ち主エホバかく言たまふ我まことに妒が嫉妬の火熖をもやして國民の殘餘者さエドム全國の事を言り是
等は心に歡樂を極め心に誇りて吾地をおのれの所有さなし之を奪ひ掠め者なり六然ばイスラエルの國の事
を預言し山さ岡さ谿地さ谷さに言ふべし主エホバかく言たまふ汝等諸の國民の羞辱を蒙りしに因て我
わが嫉妬さ忿怒を發して語れり七是をもて主エホバかく言たまふ我わが手を擧ぐ汝の周圍の諸の國民は必
ず自身羞辱を蒙むるべし八然ど イスラエルの山々よ汝等は枝を生じわが民イスラエルのために實を結ば
ん此事遠らず成ん九視よ我汝らに臨み汝らを眷みん汝らは耕されて種をまかるべし十我汝等の上に人
を殖さん是皆悉くイスラエルの家の者なるべし邑々には人住み墟址は建直さるべし十一我なんぢらの上
に人さ牲畜を殖さん是等は殖て多く子を生ん我汝らの上に昔時のごさくに人を住しめ汝らの初の時よりも
まされる恩惠を汝等に施すべし汝等は我がエホバなるを知にいたらん十二我わが民イスラエルの人を汝らの
上に歩ましめん彼等汝を有づべし汝はかれらの產業さなり重て彼等に子なからしむることあらじ十三主エ
ホバかく言ひたまふ彼等汝らに向ひ汝は人を食ひなんぢの民をして子なからしめたりさ言ふ十四是故に主

エホバ言たまふ汝ふたゝび人を食ふべからず再び汝の民を顛かしむべからず 十五 我汝をして重て國々の民の嘲笑を聞しめじ汝は重て國々の民の羞辱を蒙むることあらず汝の民を顛かしむることあらじ主エホバ
これを言ふ 十六 エホバの言また我にのぞみて言ふ 十七 人の子よ昔イスラエルの家その國に住み己の途と行爲とをもて之を汚せりその途は月穢ある婦の穢のごとくに我に見えたり 十八 彼等國に血を流し且その偶像をもて國を汚したるに因て我わが怒を彼等に斟ぎ 十九 彼らを諸の國の民の中に散したれば即ち諸の國に散め我かれらの道と行爲とにしたがひて彼等を鞫けり 二十 彼等その往ところの國々に至りしが遂にわが聖き名を汚せり卽ち人かれらを見て是はエホバの民にしてかれの國より出來れる者なりと言り 二一 是をもて我イスラエルの家がその至れる國々にて瀆せしわが聖き名を惜めり 二二 此故に汝イスラエルの家に言べし主エホバかく言たまふイスラエルの家よ我汝らのために之をなすにあらず汝らがその至れる國々にて汚せしわが聖き名のためになすなり 二三 我國々の民の中に汚されたるわが大なる名卽ち汝らがかれらの中にありて汚したるところの者を聖くせん國々の民はわが汝らに由て我の聖き事をその目の前にあらはさん時我がエホバなるを知ん 二四 我汝等を諸の民の中より導き出し諸の國より集めて汝らの國に攝いたり 二五 清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝らを清むべし 二六 我新しき心を汝等に賜ひ新しき靈魂を汝らの衷に賦け汝等は肉より石の心を除きて肉の心を 汝らに與へ 二七 吾靈を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾律を守りて之を行はしむべし 二八 汝等はわが汝らの先祖等に與へし地に住て吾民さならん我は汝らの神さなるべし 二九 我汝らを救ひてその 諸の汚穢を離れしめ穀物を召て之を增し饑饉を汝らに臨ませず 三十 樹の果と田野の作物を多くせん是をもて汝らは重て饑饉の羞を國々の民の中に蒙ることあらじ 三一 汝らはその惡き途とその善らぬ行爲を憶えてその罪とその憎むべき事のために自ら恨みん 三二 主エホバ言たまふ我が之を爲は汝らのためにあらず汝らこれを知れよイスラエルの家よ汝らの途を愧て悔べし 三三 主エホバかく言たまふ我汝らの諸の罪を清むる日に邑々に人を住

ましめ墟址を再興しめん 三四 荒たる地は前に往來の人々の目に荒地さ見たるに引かへて耕さるゝに至るべし 三五 人すなはち言ん此荒たりし地はエデンの園のごくに成り荒滅び圮れたり主邑々は堅固なりて人の住に至れりさ 三六 汝らの周圍に殘れる國々の民はすなはち我エホバが圮れし者を再興し荒たるところに栽植するここを知にいたらん我エホバこれを言ふ之を爲ん 三七 主エホバまた我に求むべきなり我群のごとくに人の群滿ん人々すなはち我がエホバなるを知べしためにか爲んこさをまた我に求めしめて彼らを人の群のごとくに增さん 三八 荒たる邑々には聖き群のごとくエルサレムの節日の群のごとくに人の群滿ん人々すなはち我がエホバなるを知べし

第三十七章

一 茲にエホバの手我に臨みエホバ我をして靈にて出行しめ谷の中に我を放賜ふ其處には骨充りて二 彼その周圍に我をひきめぐりたまふに谷の表には骨はなはだ多くあり皆はなはだ枯たり三 彼われに言たまひけるは人の子よ是等の骨は生るや我言ふ主エホバよ汝知たまふ四 彼我に言たまふ是等の骨に預言し之に言べし枯たる骨よエホバの言を聞け五 主エホバ是らの骨に斯言たまふ視よ我汝らの中に氣息を入しめて汝等を生しめん六 我筋を汝らの上に作り肉を汝らの上に生ぜしめ皮をもて汝らを蔽ひ氣息を汝らの中に與へて汝らを生しめん汝ら我がエホバなるを知ん七 我命ぜられしごとく預言せよが我が預言する時に音あり骨うごきて骨と骨あひ聯る八 我見しに筋その上に出きたり肉生じ皮上よりこれを蔽ひしが氣息その中にあらず 彼また我に言たまひけるは人の子よ氣息に預言せよ氣息よ汝四方の風より來り此殺されし者等の上に呼吸きて是を生しめよ九 我命ぜられしごとく預言せしかば氣息これに入て皆生きその足に立ち甚だ多の群衆となれり十 斯て彼われに言たまふ人の子よ是等の骨はイスラエルの全家なり彼ら言ふ我らの骨は枯れ我らの望は竭く我等絕つるなりさ十一 是故に預言して彼らに言へ主エホバかく言たまふ吾民よ我汝等の墓を啓き汝らをその墓より出きたらしめてイスラエルの地に至らしむべし十二 わが民よ我汝らの中におきて汝らを生しめ汝らをその地に安んぜしめん汝等すなはち我エホバなるを知ん 十四 我わが靈を汝らの中におきて汝らを生

がこれを言ひこれを爲たるごとを知にいたるべし 十五 エホバの言 我にのぞみて言ふ 十六 人の子よ 汝一
片の木を取てその上にユダおよびその侶なるイスラエルの全家と書べし是はエフライム
おびその侶なるイスラエルの全家と書べし是はエフライムの木なり 十七 而して汝これを倶にあはせて一の
木となせ是汝の手の中にて相聯らん 十八 汝の民の人々汝に是は何の意なるか我等に示さざるやと言ふ
時は 十九 これに言ふべし主エホバかく言たまふ我エフライムの手にあるヨセフとその侶なるイスラエルの支
派の木を取りこれをユダの木に合せて一の木となしわが手にて一とならしめん 二十 汝が書つけたるところの木
を彼らの目のまへにて汝の手にあらしめ 二一 かれらに言べし主エホバかく言たまふ我イスラエルの子孫をそ
の往るところの國々より出し四方よりかれを集めてその地に導き 二二 その地に於て汝らを一の民となしてイ
スラエルの山々にをらしめん一人の王彼等全体の王たるべし彼等は重て二の民となることあらず再び二
の國に分れざるべし 二三 彼等またその偶像とその憎むべき事等およびその諸の愆をもて身を汚すことあら
じ我かれらをその罪を犯せし諸の住處より救ひ出してこれを清むべし而して彼らはわが民となり我は彼
らの神とならん 二四 わが僕ダビデかれらの王とならん彼ら全体の者は一人なるべし彼らはわが法律
にあゆみ吾が法度をまもりてこれを行はん 二五 彼らは我僕ヤコブに我が賜し地に住ん是其先祖等が住ひ
し所なり彼處に彼らとその子およびその子の子長へに住ん吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし
二六 我かれらと和平の契約を立ん是は彼らに永遠の契約さなるべし我かれらを堅うし彼らを殖しわが聖所
を長久にかれらの中におかん 二七 我が住所は彼らの上にあるべし我かれらの神さなり彼らわが民さならん
二八 わが聖所長久にかれらの中にあるにいたらば國々の民は我のエホバにしてイスラエルを潰むる者
なるを知ん

第三十八章 一 エホバの言 我にのぞみて言ふ 二 人の子よロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の
王ゴグに汝の面をむけ之にむかひて預言し 三 言べし主エホバかく言たまふロシ、メセク、トバルの君ゴグよ
視よ我なんぢを罰せん 四 我汝をひきもどし汝の顎に鉤をほどこして汝および汝の諸の軍勢ご馬さその
騎者を曳いだすべし是みな其服粧に美を極め大楯小楯をもち凡て劍を執る者にして大軍なり 五 ペルシヤ
エテオピアおよびフテこれごとくもにあり皆楯と盔をもつ 六 ゴメルさその諸の軍隊なご衆多の民汝ごとくもにあり
をせよ而して汝かれらの保護さなれ 八 衆多の日の後汝準備をなせ汝罰せられん末の年に汝かの劍をのがれてかへり衆多
の民の中より集りきたれる者の地にいたり久しく荒ゐたるイスラエルの山々にいたらん是は國々より導きい
だされて皆安然に住ふなり 九 汝その諸の軍隊および衆多の民をひきゐて上り暴風のごとく至り雲のごとく
地を覆はん 十 主エホバかくいひたまふ其日に汝の心に思想おこり惡き謀計をくはだてよ 十一 言ん我平原
の邑々にのぼり穩にして安然に住る者等にいたらん是みな石垣なくして居り閂も門もあらざる者なりさ
十二 斯して汝物を奪ひ物を掠め汝の手をかへして彼の人の住むにいたれる墟址を攻め又かの國々より集り
きたりて地の臍區にすみて群さ財寶をもつところの民をせめんとす 十三 シバ、デダン、タルシシの商賈および
その諸の小獅子汝に言ん汝物を掠めんために軍隊をあつめしや金銀をもち
ちさり群さ財寶を取り多くの物を奪はんさするやさ 十四 是故に人の子よ汝預言してゴグに言へ主エホバか
くいひたまふ其日に汝わが民イスラエルの安然に住むを知ざらんや 十五 汝すなはち北の極なる汝の處より
來らん衆多の民汝さごもにあり皆馬に乘る其軍隊は大にして強勢は夥多し 十六 而して汝わが民イス
ラエルに攻きたり雲のごとくに地を覆はんゴグよ末の日にこの事あらんすなはち我汝をわが地に攻きたら
しめ汝をもて我の聖き事を國々の民の目のまへにあらはさしむべし 十七 主エホバかく言たまふ我の昔日わが僕なるイスラエルの預言者等をもて語りし者は汝ならずや即ち彼ら其頃年ひさしく預言
して我汝を彼らに攻きたらしめんさ言り 十八 主エホバいひたまふ其日すなはちゴグがイスラエルの地に攻
來らん日にわが怒面にあらはるべし 十九 我嫉妬さ燃たつ怒をもて言ふ其日には必すイスラエルの地に大な

二〇 震動あらん 二〇海の魚空の鳥野の獣凡て地に匍ふところの昆虫凡て地にある人わが前に震へん又山々
二一 崩れ嶮峻たふれ石垣みな地に仆れん 二一主エホバいひたまふ我剣をわが諸の山に召きたりて彼をせめしめ
二二 ん人々の剣その兄弟を撃べし 二二我疫病と血をもて彼を罰し暴雨と雹と火と硫磺を彼
二三 とその軍勢および彼とともなる多の民の上に降すべし 二三而して我わが大なることを顕し聖きことを明かにし衆
多の國民の目のまへに我を示さん彼らはすなはち我のエホバなることをしるべし

第三十九篇 一人の子よゴグにむかひ預言して言へ主エホバかく言たまふロシメセクトバルの君ゴグよ視
二 よ我汝を罰せん 二我汝をひきもどし汝をみちびき汝を北の極より上りてイスラエルの山々にいたら
三 しめ 三汝の左の手より弓をうち落し右の手より矢を落しむべし 四汝とその諸の軍勢および汝とともなる
四 民はイスラエルの山々に仆れん我汝を諸の類の鷲島と野の獣にあたへて食しむべし 五汝は野の表面
五 に仆れん我これを言ばなりと主エホバ言たまふ 六我マゴグと島々に安然に住る者とに火をおくり彼らをして
六 我のエホバなるを知しめん 七我わが聖き名をわが民イスラエルの中に知しめ重てわが聖き名を汚さしめじ國
七 の民すなはち我がエホバにしてイスラエルにありて聖者なることを知ろにいたらん 八主エホバいひたま
八 ふ視よ是は來れり成り是わが言る日なりと茲にイスラエルの邑々に住る者出きたり甲冑大楯小楯弓矢手鎗
九 手矛および槍を燃し焚き之をもて七年のあひだ火を燃さん 十彼ら野より木をさりきたることなく林より木を
きりさらずして甲冑をもて火を燃しまた己を掠めし者をがすめ己の物を奪ひし者の物を奪はん主エホバこれ
一〇 を言ふ 十一其日に我イスラエルにおいて墓地をゴグに與へん是往來の人の谷にして海の東にあり是往來の人
一一 を礙げん其處に人ゴグとその群衆を埋めこれをゴグの谷と名づけん 十二イスラエルの家之を埋めて地
一二 を清むるに七月を費さん 十三國の民みなこれを埋めて己を顕す日なり 十四
一三 彼等定れる人を選む其人國の中をゆきめぐりて往來の人とともにかの地の面に遺れる者を埋めてこれを
一四 清む七月の終る後かれら尋めぐることをなさん 十五國を行巡る者往來し人の骨あるを見ときはその傍に標

一六 をたつれば死人を埋むる者これをゴグの群衆の谷に埋む 十六邑の名もまた群衆とゝなへられん斯かれらの國
一七 を清めん 十七人の子よ主エホバかく言ふ汝諸の鳥と野の獣に言べし汝等集ひ來り我が汝
一八 らのために殺せるところの犠牲に四方より聚れ即ちイスラエルの山々の上なる大なる犠牲に臨み肉を食ひ
一九 血を飲め 十八汝ら勇士の肉を食ひ地の君等の血を飲め牡羊羔羊牡山羊牡牛など凡てバシヤンの肥たる畜を
二〇 食へ 十九汝らわが汝らのために殺せるところの犠牲につきて飽まで脂を食ひ醉まで血を飲べし 二十汝らわが
二一 席につきて馬と騎者と勇士と諸の軍人に饗べしと主エホバいひたまふ 二一我わが榮光を國々の民にしめ
二二 さん國々の民みな我がおこなふ審判を見我がかれらの上に加ふる手を見るべし 二二是日より後イスラエルの
二三 家我エホバの己の神なることを知ん 二三又國々の民イスラエルの家の擄へうつされしは其悪によりしなり
二四 ろを知べし彼等われに背きたるに因て我わが面を彼らに隠し彼らをその敵の手に付したれば皆剣に仆れた
二五 り 二四我かれらの汚穢と愆悪さにまたがひて彼らを待ひわが面を彼等に隠せり 二五然れば主エホバかく言たま
二六 ふ我今ヤコブの俘擄人を歸しイスラエルの全家を憐み吾聖き名のために熱中せん 二六彼らその地に安然に
住ひて誰も之を怖れしむる者なきに至る時はその我にむかひて爲たるところの諸の愆れる行爲のために慨
二七 べし 二七我かれらを國々より導きかへりその敵の國々より集め彼らをもて我の聖き事を衆多の國民にしめす
二八 時二八彼等すなはち我エホバの己の神なるを知人是は我かれらを國々に移し又その地にひき歸りて一人をも
二九 其處にのこさずればなり 二九我わが靈をイスラエルの家にそゝぎたれば重て吾面を彼らに隠さじ主エホバこ
れを言ふ

第四十篇 一我らの擄へ移れてより二十五年邑の撃破られて後十四年その年の初の月の十日其日にエホバの
二 手われに臨み我を我處に携へ往く 二即ち神異象の中に我をイスラエルの地にたづさへゆきて甚だ高き山の
三 上におろしたまふ其處に南の方にあたりて邑のごとき者建り 三彼我をひきて彼處にいたりたまふに一箇の人
あるを見るその面容は銅のごとくにして手に麻の繩と間竿を執り門に立り 四其人われに言けるは人の

子よ汝目をもて視耳をもて聞き我が汝にしめす諸の事に心をとめよ汝を此にたづさへしはこれを汝にしめさんためなり汝が見る所の事を盡くイスラエルの家に告よ五斯ありて視るに家の外の四周に墻垣ありその人の手に六キユビトの間竿ありそのキユビトは各一キユビトと一手潤なり彼その牆の厚を量るに一竿わりその高もまた一竿ありし彼東向の門にいたりその階をのぼりて門の閾を量るに其濶一竿ありまた第一の閾の濶一竿なり七守房は長一竿廣一竿守房と守房の間は五キユビトあり門の門の廊の傍なる門の閾も一竿ありし八門の門の廊を量るに八キユビトあり九又門の廊を量るに一竿ありその柱は二キユビトなりその門の廊は内にあり十東向の門の守房は此旁に三箇彼處に三箇あり此三みな其寸尺おなじ柱もまた此處彼處ともにその寸尺おなじ十一門の入口の廣をはかるに十キユビトなり守房の前に一キユビトの界あり彼旁の界も一キユビトなり守房は此旁彼旁ともに六キユビトなり十二守房の屋背より屋背まで門をはかるに二十五キユビトありその門の入口より入口まで二十五キユビトなり十三彼また此守房の屋背より彼屋背まで門をはかるに庭ありて柱にまでおよぶ十五入口の門の前より内の門の十四柱は六十キユビトに作れる者なり門のまはりに廊の前にいたるまで五十キユビトあり十六守房と門の内面の周圍の柱さに閉窓あり牆垣の差出たる處にもしかり内面の周圍には窓あり柱には棕櫚あり十七彼また我を外庭に揚ゆくに庭の周圍に設たる室さ鋪石あり鋪石の上に三十の室あり十八鋪石は門の側にありて門の長におなじ是下鋪石なり十九彼下の門の前より内庭の外の前までの廣を量るに東さ北さに百キユビトあり二十又外庭なる北向ける門の長さ寛をはかれり二一守房その此旁に三箇彼等に三箇あり柱及び差出たる處もあり是は前ける門の寸尺の如く長五十キユビト濶二十五キユビトなり二二その窓と差出たる處と棕櫚は東向の門にある者の寸尺さおなじ七段の階級を經て上るに差出たる處それ前にあり二三内庭の門は北さ東の門に向ふ彼門より門までを量るに百キユビトあり二四彼また我を南に攜ゆくに南向の門ありその柱さ差出たる處もまた前の寸尺の如し二五是さその差出たる處の周圍に窓あり彼窓のごとしその門は長五十キユビト濶二十五キユビトなり二六七段の階級をへて登門より門まで南の方をはかるに百キユビトあり二七内庭に南向の門ありろにその寸尺前のごとし二九その守房と柱さ差出たる處は前の寸尺のごとしその門さ差出たる處の周圍さに窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビト三一其差出たる處は外庭に出づその柱さ差出たる處は外庭にありその柱の上に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし三二彼また内庭の東の方に我をたづさへゆきて門をはかるに前のごとしその門さ差出たる處の周圍さに窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビト三四その處は寸尺前のごとしその門さ差出たる處の周圍さ差出たる處は外庭にいづ柱の上には此旁彼旁に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし三五彼われを北の門にたづさへゆきてこれを量るに寸尺おなじ三六その守房と柱さ差出たる處ありその周圍に窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビト三七その柱は外庭に出づ柱の上に此旁彼旁に棕櫚あり八段の階をへて升るべし三八門の柱の傍に戸のある室あり其處は燔祭の牲を洗ふところなり三九門の廊に此旁に二の墾彼旁に二の墾あり其上に燔祭罪祭愆祭の牲畜を屠るべし四十北の門の入口に升るに外面に於て門の廊の傍に二の墾あり亦他の旁にも二の墾あり四一門の側に此旁に四の墾彼旁に四の墾ありて八なり其上に屠ることを爲す四二升口に琢石の四の墾あり長一キユビト半廣一キユビト半高一キユビトなり燔祭および犧牲を宰るところの器具をその上に置く四三内の周圍に一手寛の曲釘釘てあり犧牲の肉は墾の上におかるる四四内の門の外において内庭に謳歌人の室あり一は北の門の側にありて南にむかひ一は南の門の側にありて北にむかふ四五彼われに言ふ此南にむかへる室は殿をまもる祭司のための者なり彼等はレビの子孫の中なるザドクの後裔にしてエホバに近よりて之に事ふるをまもる祭司のための者なり彼等はレビの子孫の中なるザドクの後裔にしてエホバに近よりて之に事ふるな四六而して彼庭をはかるに長百キユビト寛百キユビトにして四角なり殿の前に壇あり四七彼殿の廊に我をひきゆきて廊の柱を量るに此旁も五キユビト彼旁も五キユビトあり門の濶は此旁三キユビト彼旁三キユビト

四九 なり 四九 廊の長は二十キユビト寛は十一キユビト階級によりて升るべし柱にそふて柱あり此旁に一箇彼旁に
一箇

二 第四十一章 一 彼殿に我をひきゆきて柱を量るに此旁の寛六キユビト彼旁の寛六キユビト幕屋の寛なり二 戸
の寛は十キユビト戸の側柱は此旁も五キユビト彼旁も五キユビト彼量るにその長四十キユビト廣二十キユ
三 ビトあり三 内にいりて戸の柱をはかるに二キユビトあり戸は六キユビト戸の濶は七キユビト四 彼量るにその
四 長二十キユビト廣二十キユビトにして殿に向ふ彼われにいひけるは是至 聖 所なり五 彼室の壁を量るに六
五 キユビトあり室の周圍の連接屋の寛は四キユビトなり六 連接屋は三階にして各 三十の間あり室の壁周圍の
六 キユビトあり室の周圍の連接屋は上にあらず七 連接屋の側にありて連接屋は之に連りて堅く立つ然れども室の壁に挿入て堅く立るにあらず七 連接屋
七 連接屋の側にありて連接屋は之に連りて堅く立つ然れども室の壁に挿入て堅く立るにあらず七 連接屋
いたるに随ひて廣くなり行く即ち家の圍繞家の四周に高くのぼれば家は上廣くして下のより上のにのぼる様
は中のふ割合にしたがふなり八 我室に高き處あるを見る連接屋の基は一竿に足てその接連る處まで六キユビ
八 トなり九 接連屋にある外の壁の厚は五キユビト室の連接屋の傍の隙もまた然り十 室の間にあたりて家の四
九 周に廣二十キユビトの處あり十一 接連屋の戸は皆かの隙にむかふ一の戸は北にむかひ一の戸は南にむかふ其
十 隙たる處は四周にありて廣五キユビトなり十二 四の方にあたる 離 處の前の建物は廣七十キユビトその建
十一 物の周圍の壁は厚五キユビト長九十キユビト十三 彼殿をはかるにその長百キユビトあり 離 處 その建物
十二 そのの壁は長百キユビト十四 殿の面および離 處の東 面は廣百キユビトなり十五 彼後なる離 處
十三 その前の建物の長を量れり其此旁彼旁の廊下は百キユビトありまた内 殿 と庭の廊を量り十六 彼の三にある
十四 所の閾と閉窓と周圍の廊下を量れり閾の對面に當りて周圍に嵌板あり窓まで地を量りしが窓は皆蔽ふてあ
十五 十六 戸の上なる處 内 室と外の處および内外の周圍の諸の壁まで量ることをなせり十八 ケルビムと棕櫚
十七 と造りてあり二のケルビムには二の面あり十九 此旁には人の面ありて棕
十八 櫚にむかひ彼旁には獅子の面ありて棕櫚にむかふ、家の周圍に凡て是のごとく造りてあり二十 地より戸の上
十九 二十

二一 までケルビムと棕櫚の設あり殿の壁も然り二一 殿には四角の戸柱あり聖 所の前にも同 形の者あり
二二 二三 壇は木にして高三キユビト長二キユビトなり是に隅木ありその盤と其周圍も木なり彼われに言けるは是
二四 はエホバの前の壇なり二三 殿と 聖 所 とには二の戸ありまた是
二五 二箇彼戸に二箇の扉あり二四 殿の戸にケルビムと棕櫚つくりてあり殿の前に檐あり二五 廊の横壁と家の連接屋と殿には此旁彼旁に閉窓と棕櫚あり
二六 あり二六 廊の横壁と家の連接屋と殿には此旁彼旁に閉窓と棕櫚あり

第四十二章 一 彼われを擯へ出して北におもむく路よりして外庭にいたり我を室に導く是は北の方にありて
二 離 處に對て建物に對ひたる二 その百キユビトの長あり戸は北の方にあり寛は五十キユビ
三 ト三 内庭の二十キユビトなる處に對ひ外庭の鋪石に對ふ、廊下の上に廊下ありて三なり四 室の前に寛十キユ
四 ビトの路あり室の戸は北にむかふ五 その建物の上の室は下の
五 と中のとに比れば狭し是は廊下のためにその塲を削らるればなり六 是等は三階にして庭の柱の如くは柱あら
六 ず是をもて上のは下れと中のよりもそ七 壁の前にあたりて外に垣あり室にそひて外庭にいたる其長
七 五十キユビト八 外庭の室は長は五十キユビトにして殿に
八 いづ外庭よりこれに往ときは其 入口東にあり十 南の
九 十 て室あり十一 北の方なる室のごとく其前に路ありその
十一 口のごとく南の方なる室の入口も然り路の頭に入口あり
十二 彼われに言けるは 離 處の前なる北の室と南の室は聖
十三 き室にして エホバに近くところの祭司の至聖き物を
食ふべき所なり其處にかれら最聖き物 素祭 罪祭 愆祭
時は 聖 所 より外庭に出べからず彼等職掌を行ふところ
衣を着て民に屬するの處に近くべし十五 彼 内 室を量
方を量れり十六 彼間竿をもて東 面を量るにその周圍

園間竿五百竿あり十八また南面をはかるに間竿五百竿あり十九また西面にまはりて量るに間竿五百竿あり二十斯四方を量れり周圍に牆ありその長五百竿寛五百竿聖所と俗所とを區別つなり

第四十二章

一彼われを擯へて門にいたる其門は東に向ふ二時にイスラエルの神の榮光東よりきたりしがその聲大水の音のごとくにして地その榮光に照さる三其狀を見るに我がこの邑を滅しに來りし時に見たるところの狀の如くに見ゆ又ケバル河の邊にて我が見しところの形の者あり我すなはち俯伏す四エホバの榮光東向の門よりきたりて室に入る五靈われを引あげて內庭にたづさへいるにエホバの榮光室に充るを六我聽に室より我に語ふ者あり又人ありてわが傍に立つ七彼われに言たまひけるは人の子ら吾位の所我脚の跖のふむ所此にて我長久にイスラエルの子孫の中に居んイスラエルの家とその王等再びその姦淫とその王等に屍骸およびその崇邱をもてわが聖き名を汚すことなかるべし八彼らその閾をわが閾の側に設け其門柱をわが門柱の傍に設たれば我とわれとの間に只壁一重ありしのみ而して彼ら憎むべき事等をおこなひて吾が聖名を汚したるが故に我怒にてかれらを滅したり九彼ら今はその姦淫とその王等の屍骸をわが前より除き去ん我また彼らの中に長く居べし十人の子よ汝この室をイスラエルの家に示せ彼らその惡を愧ちまたこの式樣を量らん十一彼らその爲たる諸の事を愧なば彼らに此室の製法とその式樣その出口入口その一切の製法その一切の製法をしらしめよ是をかれらの目の前に書て彼らにその諸の製法とその一切の則を守りてこれを爲しむべし十二室の法は是なり山の頂の上なるその地は四方みな最聖し是室の法なり

十三壇の寸尺はキユビトと手寬あり壇の底は一キユビト寬一キユビト寬一キユビトその周圍の邊は半キユビト是壇の基なり十四土トは一キユビトと手寬あり壇の底より下の層まで二キユビト寬一キユビト又小き層より大なる層まで四キユビト寬一キユビトに坐れる底座より下の層まで二キユビト寬一キユビト又小き層より大なる層まで四キユビト寬一キユビトなり十五正壇は四キユビト壇の上の面に四の角あり十六壇の上の面は長十二キユビト寬十二キユビトに正しくその四面角なり十七その層は四方さも長十四キユビト寬十四キユビトその四周の緣は半キユビトその底は四方一キユビトその階は東に向ふ十八彼われに言けるは人の子よ主エホバかく言たまふ壇を建て其上に燔祭を獻げ血を灑ぐ日には是をその則とすべし十九主エホバかく言ふ汝レビの支派ザドクの裔にして我に近づき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二十又その血を取てこれをその四の角と層の四隅と四周の邊に抹り斯して之を清め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて清めしごとくこれをもて壇を清むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

第四十四章

一斯て彼我を引て聖所の東向なる外の門にかへるに門は閉てありニエホバすなはち我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

一斯て彼我を引て聖所の東向なる外の門にかへるに門は閉てありニエホバすなはち我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

二汝これを言たまふ我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

二汝これを言たまふ我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

二汝これを言たまふ我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

二汝これを言たまふ我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主エホバかく言ふ

二汝これを言たまふ我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より入ちかづき事ふる所の祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし二汝レビの支派ザドクの裔にして我に四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし二一汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし二二第二日に汝全き牡山羊を罪祭に獻ぐべし即ち牡牛をもて淸めしごとくこれをもて壇を淸むべし二三汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全たき者および羣の全き牡羊を獻ぐべし二四汝これをエホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてエホバに獻ぐべし二五七日の間汝日ごとに牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と羣の牡羊との全たき者を供ふべし二六七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし二七是等は日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬

九 て汝らにかはりて我の職守を守らしめたり九 主エホバかく言たまふイスラエルの子孫の中に居るところの
十 諸〳〵の異邦人の中凡て心に割禮をうけざる異邦人はわが聖所に入るべからず十
亦レビ人も迷へるイスラエルがその憎むべき偶像をしたひて我を棄て迷ひし時に我を棄ゆきたる者はその罰
十一 を蒙るべし十一即ち彼らは吾が聖所にありて下僕となり家の門を守る者となり家にて下僕の業をなさん
十二 又彼ら民のために燔祭および犠牲の牲畜を殺し民のまへに立てこれに事へん十二彼等その偶像の前にて民に
事へイスラエルの家を礙かせて罪におちいらしめたるが故に主エホバ言ふ我手をあげて彼らを罰し彼らをし
十三 てその罪を蒙むらしめたり十三彼らは我に近づきて祭司の職をなすべからず至聖所にきたりわが諸の
十四 聖き物に近よるべからずその恥とその行ひし諸の憎むべき事等の報を蒙るべし十四我かれらをして宮守
十五 の職務をおこなはしめ宮の諸の業および其中に行なふべき諸の事を爲しむべし十五然ごザドクの裔なる
レビの祭司等すなはちイスラエルの子孫が我を棄て迷謬し時にわが聖所の職守を守りたる者等は我に近
十六 づきて事へ我まへに立ち脂と血をわれに献げん主エホバこれを言ふなり十六即ち彼等わが聖所にいり吾
十七 が壁にちかづきて我に事へわが職守を守るべし十七彼等内庭の門にいる時は麻の衣を衣べし内庭の門および
十八 家において職をなす時は毛服を身につくべからず十八首には麻の冠をいたゞき腰には麻の袴を穿つべし汗
十九 のいづるごとくに身をよそほふべからず十九彼らが外庭にいづる時すなはち外庭にいでて民に就く時はその職
をなせる所の衣服を脱てこれを聖き室に置き他の衣服をつくべし是その服をもて民を聖くするここ無らんた
二十 めなり二十彼ら頭を剃べからず又髪を長く長すべからず唯イスラエルの家の出なる處女を娶
二一 に酒をのむべからず二一又寡婦および去れたる婦を娶べし又は祭司の妻の寡となりし者を娶るべし二二
二二 彼らわが民を教へ聖き物と俗の物の區別および汚たる物
二三 と潔き物の區別を之に知しむべし二三爭論あるとき彼ら起て判決き者定例にしたがひて斷決をなさん我が
二四 諸の節期において彼らわが法と憲を守るべく又わが安息日を聖くすべし二五死人の許にいたりて身を汚

すべからず只父のため母のため息子のため息女のため兄弟のため夫なき姉妹のためには身を汚すも宜し
二六 斯る人にはその潔齋の後尚七日を數へ加ふべし二六
二七 行なふ日には罪祭を獻ぐべし主エホバこれを言ふ二七彼聖所にいたり内庭にいり聖所にて職を執
エルの中にて彼らに所有を與ふべからず我すなはちこれが所有たるなり二八祭物および罪祭愆祭の物是等
二八 を彼等食ふべし凡てイスラエルの中の奉納物は彼らに歸す三十諸の物の初實の初および凡て汝らが獻ぐる
二九 諸の獻物皆祭司に歸すべし汝らその諸の麥粉の初を祭司に與ふべし是汝の家に幸福あらしめんため
三十 なり三一鳥にもあれ獸にもあれ凡て自ら死たる者又は裂ころされし者をば祭司たる者食ふべからず

第四十五章

一 其長は二萬五千寛は一萬なるべし是は其四方周圍凡て聖し二此中聖所に屬する者は長五百寛五百にし
二 て周圍四角なり又五十キユビトの隙地その周圍にあり三汝この計たる處より長二萬五千寛一萬の塲を度り
三 取るべし此うちに聖所至聖所を設くべし四是は地の聖塲なり祭司等に屬すべし是かれらの家を建てまた聖
四 なる祭司等に屬すべし是かれらの家を建てまた聖所を設くべし五又長二萬五千寛一萬の處家
五 に事ふるレビ人に屬し其所有に二十の室あるべし六その獻たる聖地に並びて汝ら寛五千長二萬五千の處を
六 分ち邑の所有となすべし是はイスラエルの全家に屬す七又君たる者の分はかの獻げたる聖地と邑の所有の此
七 處彼處にあり獻たる聖地に沿ひ邑の所有に沿ひ西にわたり東は東に渉るべし西の極より東の極までの
その長は支派の分の一と等しイスラエルの中に彼が有ところの者は地にあり吾君等は重てわが民を虐ぐ
八 ることなくイスラエルの家にその支派にしたがひて地を與へおかん九主エホバかく言たまふイスラエルの君
九 等よ汝ら足ことを知れ虐ぐることを掠むる事を止め公道と公義を行へ我民を逐放すことを止よ主エホバこ
十 れを言ふ十一汝ら公平き檢衡公平きエパ公平きバテを用ふべし十一エパとバテとはその量を同うすべし則ち
十一 バテもホメルの十分一を容れエパもホメルの十分一を容るべしホメルに準じてその度量を定むべし十二シケ

十三 ルは二十ゲラに當る二十シケル二十五シケル十五シケルを汝等マヲこなすべし十三 汝らが献ぐべき献物は
左のごとし一ホメルの小麥の中よりエパの六分一を献げ一ホメルの大麥の中よりエパの六分一を献ぐべし
十四 油の例油のバテは是のごとし一コルの中よりバテの十分一を献ぐべしコルは十バテを容る者にて即ち
十五 ホメルなり十バテ一ホメルとなればなり十五 又イスラエルの肥なる地より群二百ごとに一箇の羊を出して素
祭および燔祭酬恩祭の物に供へ民の罪を贖ふことに用ひしむべし主エホバこれを言ふ十六 國の民みなこの
十六 獻物をイスラエルの君にもちきたるべし十七 又君たる者は祭日朔日安息日およびイスラエルの家の諸
十七 の節期に燔祭素祭灌祭を奉ぐべし即ち彼イスラエルの家の贖罪をなすために罪祭素祭燔祭酬恩祭
十八 を執行なふべし十八 主エホバかく言たまふ正月の元日に汝犢なる全き牡牛を取り聖所を清むべし
十九 又祭司は罪祭の物の血を取りて殿の門柱にぬり壇の層の四隅と内庭の門の柱に塗べし二十月の七日に
二十 汝等また迷ふ人および拙き者のために斯なして殿のために贖をなすべし二十一正月の十四日に汝ら逾越
二一 節を守り七日の間祝をなし無酵パンを食ふべし二二その日に君は己のため又國の諸の民のために牡牛
二二 を備へて罪祭となし二三七日の節筵の間七箇の牡羊と全き者を日々に七日の間備へてエ
二三 ホバに燔祭となし又牡山羊を日々に備へて罪祭となすべし二四 彼また素祭として一エパを牡牛のために一エ
二四 パを牡山羊のために備へ油一ヒンをエパに加ふべし二五 七月の十五日の節筵に彼また罪祭燔祭素祭およ
二五 び油をこのごとく七日の間備ふべし

第四章 主エホバかく言たまふ内庭の東向の門は事務をなすところの六日の間は閉ち置き安息日

一 にこれを開き又月朔にこれを開くべし君たる者は外より門の廊の路をとほりて入り門の柱の傍に立つ
二 べし祭司等その時かれの爲に燔祭と酬恩祭を備ふべし彼は門の閾において禮拜をなして出べし但し門は暮
三 まで閉べからず三 國の民は安息日と月朔とにその門の入口において エホバの前に禮拜をなすべし四 君が安
四 息日にエホバに獻ぐる燔祭には六の全き羔羊と一の全き牡羊を用ふべし五 又素祭は牡羊のために一エパを
五 用ふべし羔羊のために用ふる素祭はその手の出しうる程を以し一エパに油一ヒンを加ふべし六 月朔には犢
六 なる一頭の全き牡牛および六の羔羊と一の牡羊の全き者を用ふべし七 素祭は牛のために一エパ牡羊のため
七 に一エパ羔羊のために其手のおよぶ程を備へ一エパに油一ヒンを加ふべし八 君は來る時に門の廊の路より
八 入りまたその路より出べし九 國の民祭日にエホバの前に來る時は北の門より入りて禮拜をなせる者は南の
九 門より出で南の門より入る者は北の門より出べし其入たる門より歸るべからず眞直に進みて出べし十 君彼ら
十 の中にありてその入る時に入りその出る時に出べし十一 祭日と祝日には素祭として牛のために一エパ牡羊の
十一 ために一エパ羔羊のためにその手の出し得る程を備へ一エパに油一ヒンを加ふべし十二 君もし自ら好んで
十二 エホバに燔祭を備へんとせば又は自ら好んで酬恩祭を備ふべし又彼が出たる時はその出たる後に門を閉べし十三
十三 息日に爲ごとくその燔祭と酬恩祭を備ふべし即ち朝ごとに羔羊一歲の全き者を用ふべし十四 素祭は牛のために一エパ
十四 祭をこれに加ふべし即ち一エパの六分一と麥粉を濕す油一ヒンの三分一とを素祭としてエホバに獻ぐべし
十五 是は長久に續くところの例典なり十五 即ち朝ごとに羔羊と素祭と油とを燔祭にそなへて止ことなかるべ
十六 し十六 主エホバかく言たまふ君もし其子の一人に讓物をなす時は是その人の產業となりその子孫に傳はり
十七 て之が所有となるべし十七 然ど若その產業の中をその僕の一人に與ふる時は是は解放の年までその人に屬
十八 し居て遂に君にかへるべし彼の產業は只その子孫にのみ傳はるべきなり十八 君たる者は民の產業を取て民を
その所有より逐放すべからず只己の所有の中をその子等に傳ふべし是わが民のその所有をはなれて散ことの
十九 なからんためなり十九 斯て彼門の傍の入口より我をたづさへいりて北向なる祭司の聖き室にいたるに西の奥
二十 に一箇の處あり二十 彼われに言けるは是は祭司が愆祭をよび罪祭の物を烹素祭の物を烤ところなり斯するは
二一 これを外庭に搬へいでゝ民を聖くすることなからんためなり二一 彼また我を外庭に擄へいだして庭の四隅
二二 をさほらしむるに庭の隅々にまた庭あり二二 即ち庭の四隅に庭の設ありてその長二十キユビト廣三十キユビ

トなり四隅の處そのすべ尺みな同じ 二三 凡てその四の周圍なるその建物の下に燔餼の處造りてあり 二四 彼われに云ける是等は家の役者等が民の犧牲の品を煮る厨房なり

第四十七章 一 斯て彼我を室の門に攜へかへりしが室の閾の下より水の東の方に流れ出るあり室の面は東にむかひをりその水下より出で室の右の方よりして壇の南より流れ下る 二 彼北の門の路より我を攜へいだし て外面をまはらしめ東にむかふ外の門にいたらしむるに水門の右の方より流れ出づ 三 その人東に進み手に度繩を持て一千キユビトを度り我に水をわたらしむ 四 彼また一千を度り我を渉らしむるに水膝にまでおよぶ 五 彼また一千を度るに らしむるに水腰にまで及ぶ 六 彼われに 早わが渉るあたはざる河となり水高くして泅ぐほどの水となり徒渉すべからざる河とはなりぬ 七 言けるは人の子よ汝これを見きめたるやと乃ち河の岸に沿て我を將かへれり 八 我歸るに河の岸の此方彼方に甚だ衆多の樹や生ひ立るあり 九 彼われに言ふこの水東の境に流れゆきアラバにおち下りて海に入る是海に入ばその水すなはち醫りて凡そ此河の往ところには 諸の動くところの生物みな生んで又甚だ衆多の魚あるべし此水到るところにて醫すことをなせばなり 十 漁者その傍に立んエンゲデよりエヂグライムまでは網を張る處となるべし其魚はその類にしたがひて大海の魚のごとく甚だ多からん 十一 但しその澤地と濕地とは愈ることあらずして鹽地となりをるべし 十二 河の傍そのきし岸の此旁彼旁に食るべき果を結ぶ諸〻の樹生そだたんその葉は枯ずその果は絶ず月月新しき果をむすぶべしこれその水かの聖所より流れいづればなりその果は食となりその葉は藥とならん 十三 主エホバかく言たまふ汝らイスラエルの十二の支派の中に地を分ちてその業となさしむるにはその界を斯さだむべしヨセフは二分を得べきなり 十四 汝ら各々均しく之を彼て產業さすべし是は我が手をあげて汝らの先祖等に與へし者なり斯この地汝らに歸して產業さならん 十五 地の界は左のごとし北は大海よりヘテロンの路をへてゼダデの方にいたり 十六 ハマテ、ベロクにいたりダマスコの界とハマテの界との間なるシビライムにいたりハウランの界なるハザルハテコンにいたる 十七 海よりの界はダマスコの界のハザルエノンにいたる北の方においてはハマテその界たり北の方は是のごとし 十八 東の方はハウランダマスコギレアデとイスラエルの地との間にヨルダンあり汝らかの界より東の海までを量るべし東の方は是のごとし 十九 南の方はタマルよりメリボテカデシにおよび河に沿て大海にいたる南の方は是のごとし 二十 四の方は大海にしてこの界よりハマテにおよぶ是南の方なり 二一 汝らイスラエルの支派にまたがひて此地を汝らの中にわかつべし 二二 汝らこれを籤をもて之を汝らの中に分ち又汝らの中に寄留して子等を擧けたる異他人の中に分ちて產業さなすべし 二三 イスラエルの支派の中に產業を得べし 二三 異邦人にはその住ところの支派の中にて汝ら之に產業を與ふべし主エホバこれを言たまふ

第四十八章 一 支派の名は是のごとしダンの一分は北の極よりヘテロンの路の傍にいたりハマテにいたりハマテその界たり北の方は是のごとし 二十八 東の方はハウランダマスコギレアデとイスラエルの地との間にヨルダンあり汝らかの界より東の海までを量るべし東の方は是のごとし 二十 四の方は大海にしてこの界よりハマテにおよぶ是南の方なり 二一 ナフタリの一分はアセルの界にそひて東の方より西の方にわたる 二 ナフタリの一分はダンの界にそひて東の方より西の方にわたる 三 マナセの一分はナフタリの界にそひて東の方より西の方にわたる 四 マナセの一分はエフライムの界にそひて東の方より西の方にわたる 五 エフライムの一分はルベンの一分はエフライムの界にそひて東の方より西の方にわたる 六 ルベンの一分はユダの界にそひて東の方より西の方にわたる 七 ユダの界にそひて東の方より西の方にわたるところの献納地は長二萬五千廣一萬なるべし 八 この聖き献納地は祭司に屬す北は二萬五千西は廣一萬東は廣一萬南は長二萬五千エホバの聖所その中にあるべし 十一 ザドクの子孫たる者すなはち我が職守をまもりイスラエルの子孫が迷謬し時にレビ人の迷ひしごとく迷はざりし者の中聖別られて祭司となれる者に是は屬すべし 十二

13 その獻げたる地の
14 中より一分の王領を
15 ヒテ人の境に沿ふ十三ヘブロンを
16 ならびてその界が東に
17 ハツエナンなり北の界はヘテロンの
18 ハマテの境にハツエナンの
19 ダマスコの境に沿ふ北の界なり
20 東の界は
21 ハツエナンの境にそひて南の方
22 ダマスコの境にそひて東の方
23 ハツエナンの境にそひて東の方
24 ヒテ人の地は祭司の
25 ヒテ人の地にて
26 ヒテ人の地は祭司の
27 ヒテ人の地にて
28 ヒテ人の地は祭司の
29 ヒテ人の地にて
30 ヒテ人の地は祭司の
31 ヒテ人の地にて
32 ヒテ人の地は祭司の
33 ヒテ人の地にて
34 ヒテ人の地は祭司の
35 ヒテ人の地にて
36 ヒテ人の地は祭司の
37 ヒテ人の地にて
38 ヒテ人の地は祭司の
39 ヒテ人の地にて
40 ヒテ人の地は祭司の
41 ヒテ人の地にて
42 ヒテ人の地は祭司の
43 ヒテ人の地にて
44 ヒテ人の地は祭司の
45 ヒテ人の地にて
46 ヒテ人の地は祭司の
47 ヒテ人の地にて
48 ヒテ人の地は祭司の
49 ヒテ人の地にて
50 ヒテ人の地は祭司の
51 ヒテ人の地にて
52 ヒテ人の地は祭司の
53 ヒテ人の地にて
54 ヒテ人の地は祭司の
55 ヒテ人の地にて
56 ヒテ人の地は祭司の
57 ヒテ人の地にて
58 ヒテ人の地は祭司の
59 ヒテ人の地にて
60 ヒテ人の地は祭司の
61 ヒテ人の地にて
62 ヒテ人の地は祭司の
63 ヒテ人の地にて
64 ヒテ人の地は祭司の
65 ヒテ人の地にて
66 ヒテ人の地は祭司の
67 ヒテ人の地にて
68 ヒテ人の地は祭司の
69 ヒテ人の地にて
70 ヒテ人の地は祭司の
71 ヒテ人の地にて
72 ヒテ人の地は祭司の
73 ヒテ人の地にて
74 ヒテ人の地は祭司の
75 ヒテ人の地にて
76 ヒテ人の地は祭司の
77 ヒテ人の地にて
78 ヒテ人の地は祭司の
79 ヒテ人の地にて
80 ヒテ人の地は祭司の
81 ヒテ人の地にて
82 ヒテ人の地は祭司の
83 ヒテ人の地にて
84 ヒテ人の地は祭司の
85 ヒテ人の地にて
86 ヒテ人の地は祭司の
87 ヒテ人の地にて
88 ヒテ人の地は祭司の
89 ヒテ人の地にて
90 ヒテ人の地は祭司の
91 ヒテ人の地にて
92 ヒテ人の地は祭司の
93 ヒテ人の地にて
94 ヒテ人の地は祭司の
95 ヒテ人の地にて
96 ヒテ人の地は祭司の
97 ヒテ人の地にて
98 ヒテ人の地は祭司の
99 ヒテ人の地にて
100 ヒテ人の地は祭司の
101 ヒテ人の地にて
102 ヒテ人の地は祭司の
103 ヒテ人の地にて
104 ヒテ人の地は祭司の
105 ヒテ人の地にて
106 ヒテ人の地は祭司の
107 ヒテ人の地にて
108 ヒテ人の地は祭司の
109 ヒテ人の地にて
110 ヒテ人の地は祭司の
111 ヒテ人の地にて
112 ヒテ人の地は祭司の
113 ヒテ人の地にて
114 ヒテ人の地は祭司の
115 ヒテ人の地にて
116 ヒテ人の地は祭司の
117 ヒテ人の地にて
118 ヒテ人の地は祭司の
119 ヒテ人の地にて
120 ヒテ人の地は祭司の
121 ヒテ人の地にて
122 ヒテ人の地は祭司の
123 ヒテ人の地にて
124 ヒテ人の地は祭司の
125 ヒテ人の地にて
126 ヒテ人の地は祭司の
127 ヒテ人の地にて
128 ヒテ人の地は祭司の
129 ヒテ人の地にて
130 ヒテ人の地は祭司の
131 ヒテ人の地にて
132 ヒテ人の地は祭司の
133 ヒテ人の地にて
134 ヒテ人の地は祭司の
135 ヒテ人の地にて
136 ヒテ人の地は祭司の
137 ヒテ人の地にて
138 ヒテ人の地は祭司の
139 ヒテ人の地にて
140 ヒテ人の地は祭司の
141 ヒテ人の地にて
142 ヒテ人の地は祭司の
143 ヒテ人の地にて
144 ヒテ人の地は祭司の
145 ヒテ人の地にて
146 ヒテ人の地は祭司の
147 ヒテ人の地にて
148 ヒテ人の地は祭司の
149 ヒテ人の地にて
150 ヒテ人の地は祭司の
151 ヒテ人の地にて
152 ヒテ人の地は祭司の
153 ヒテ人の地にて
154 ヒテ人の地は祭司の
155 ヒテ人の地にて
156 ヒテ人の地は祭司の
157 ヒテ人の地にて
158 ヒテ人の地は祭司の
159 ヒテ人の地にて
160 ヒテ人の地は祭司の
161 ヒテ人の地にて
162 ヒテ人の地は祭司の
163 ヒテ人の地にて
164 ヒテ人の地は祭司の
165 ヒテ人の地にて
166 ヒテ人の地は祭司の
167 ヒテ人の地にて
168 ヒテ人の地は祭司の
169 ヒテ人の地にて
170 ヒテ人の地は祭司の
171 ヒテ人の地にて
172 ヒテ人の地は祭司の
173 ヒテ人の地にて
174 ヒテ人の地は祭司の
175 ヒテ人の地にて
176 ヒテ人の地は祭司の
177 ヒテ人の地にて
178 ヒテ人の地は祭司の
179 ヒテ人の地にて
180 ヒテ人の地は祭司の
181 ヒテ人の地にて
182 ヒテ人の地は祭司の
183 ヒテ人の地にて
184 ヒテ人の地は祭司の
185 ヒテ人の地にて
186 ヒテ人の地は祭司の
187 ヒテ人の地にて
188 ヒテ人の地は祭司の
189 ヒテ人の地にて
190 ヒテ人の地は祭司の
191 ヒテ人の地にて
192 ヒテ人の地は祭司の
193 ヒテ人の地にて
194 ヒテ人の地は祭司の
195 ヒテ人の地にて
196 ヒテ人の地は祭司の
197 ヒテ人の地にて
198 ヒテ人の地は祭司の
199 ヒテ人の地にて
200 ヒテ人の地は祭司の
201 ヒテ人の地にて
202 ヒテ人の地は祭司の
203 ヒテ人の地にて
204 ヒテ人の地は祭司の
205 ヒテ人の地にて
206 ヒテ人の地は祭司の
207 ヒテ人の地にて
208 ヒテ人の地は祭司の
209 ヒテ人の地にて
210 ヒテ人の地は祭司の
211 ヒテ人の地にて
212 ヒテ人の地は祭司の
213 ヒテ人の地にて
214 ヒテ人の地は祭司の
215 ヒテ人の地にて
216 ヒテ人の地は祭司の
217 ヒテ人の地にて
218 ヒテ人の地は祭司の
219 ヒテ人の地にて
220 ヒテ人の地は祭司の
221 ヒテ人の地にて
222 ヒテ人の地は祭司の
223 ヒテ人の地にて
224 ヒテ人の地は祭司の
225 ヒテ人の地にて
226 ヒテ人の地は祭司の
227 ヒテ人の地にて
228 ヒテ人の地は祭司の
229 ヒテ人の地にて
230 ヒテ人の地は祭司の
231 ヒテ人の地にて
232 ヒテ人の地は祭司の
233 ヒテ人の地にて
234 ヒテ人の地は祭司の
235 ヒテ人の地にて
236 ヒテ人の地は祭司の
237 ヒテ人の地にて
238 ヒテ人の地は祭司の
239 ヒテ人の地にて
240 ヒテ人の地は祭司の
241 ヒテ人の地にて
242 ヒテ人の地は祭司の
243 ヒテ人の地にて
244 ヒテ人の地は祭司の
245 ヒテ人の地にて
246 ヒテ人の地は祭司の
247 ヒテ人の地にて
248 ヒテ人の地は祭司の
249 ヒテ人の地にて
250 ヒテ人の地は祭司の
251 ヒテ人の地にて
252 ヒテ人の地は祭司の
253 ヒテ人の地にて
254 ヒテ人の地は祭司の
255 ヒテ人の地にて
256 ヒテ人の地は祭司の
257 ヒテ人の地にて
258 ヒテ人の地は祭司の
259 ヒテ人の地にて
260 ヒテ人の地は祭司の
261 ヒテ人の地にて
262 ヒテ人の地は祭司の
263 ヒテ人の地にて
264 ヒテ人の地は祭司の
265 ヒテ人の地にて
266 ヒテ人の地は祭司の
267 ヒテ人の地にて
268 ヒテ人の地は祭司の
269 ヒテ人の地にて
270 ヒテ人の地は祭司の
271 ヒテ人の地にて
272 ヒテ人の地は祭司の
273 ヒテ人の地にて
274 ヒテ人の地は祭司の
275 ヒテ人の地にて
276 ヒテ人の地は祭司の
277 ヒテ人の地にて
278 ヒテ人の地は祭司の
279 ヒテ人の地にて
280 ヒテ人の地は祭司の
281 ヒテ人の地にて
282 ヒテ人の地は祭司の
283 ヒテ人の地にて
284 ヒテ人の地は祭司の
285 ヒテ人の地にて
286 ヒテ人の地は祭司の
287 ヒテ人の地にて
288 ヒテ人の地は祭司の
289 ヒテ人の地にて
290 ヒテ人の地は祭司の
291 ヒテ人の地にて
292 ヒテ人の地は祭司の
293 ヒテ人の地にて
294 ヒテ人の地は祭司の
295 ヒテ人の地にて
296 ヒテ人の地は祭司の
297 ヒテ人の地にて
298 ヒテ人の地は祭司の
299 ヒテ人の地にて
300 ヒテ人の地は祭司の
301 ヒテ人の地にて
302 ヒテ人の地は祭司の
303 ヒテ人の地にて
304 ヒテ人の地は祭司の
305 ヒテ人の地にて
306 ヒテ人の地は祭司の
307 ヒテ人の地にて
308 ヒテ人の地は祭司の
309 ヒテ人の地にて
310 ヒテ人の地は祭司の
311 ヒテ人の地にて
312 ヒテ人の地は祭司の
313 ヒテ人の地にて
314 ヒテ人の地は祭司の
315 ヒテ人の地にて
316 ヒテ人の地は祭司の
317 ヒテ人の地にて
318 ヒテ人の地は祭司の
319 ヒテ人の地にて
320 ヒテ人の地は祭司の
321 ヒテ人の地にて
322 ヒテ人の地は祭司の
323 ヒテ人の地にて
324 ヒテ人の地は祭司の
325 ヒテ人の地にて
326 ヒテ人の地は祭司の
327 ヒテ人の地にて
328 ヒテ人の地は祭司の
329 ヒテ人の地にて
330 ヒテ人の地は祭司の
331 ヒテ人の地にて
332 ヒテ人の地は祭司の
333 ヒテ人の地にて
334 ヒテ人の地は祭司の
335 ヒテ人の地にて
336 ヒテ人の地は祭司の
337 ヒテ人の地にて
338 ヒテ人の地は祭司の
339 ヒテ人の地にて
340 ヒテ人の地は祭司の
341 ヒテ人の地にて
342 ヒテ人の地は祭司の
343 ヒテ人の地にて
344 ヒテ人の地は祭司の
345 ヒテ人の地にて
346 ヒテ人の地は祭司の
347 ヒテ人の地にて
348 ヒテ人の地は祭司の
349 ヒテ人の地にて
350 ヒテ人の地は祭司の
351 ヒテ人の地にて
352 ヒテ人の地は祭司の
353 ヒテ人の地にて
354 ヒテ人の地は祭司の
355 ヒテ人の地にて
356 ヒテ人の地は祭司の
357 ヒテ人の地にて
358 ヒテ人の地は祭司の
359 ヒテ人の地にて
360 ヒテ人の地は祭司の
361 ヒテ人の地にて
362 ヒテ人の地は祭司の
363 ヒテ人の地にて
364 ヒテ人の地は祭司の
365 ヒテ人の地にて
366 ヒテ人の地は祭司の
367 ヒテ人の地にて
368 ヒテ人の地は祭司の
369 ヒテ人の地にて
370 ヒテ人の地は祭司の
371 ヒテ人の地にて
372 ヒテ人の地は祭司の
373 ヒテ人の地にて
374 ヒテ人の地は祭司の
375 ヒテ人の地にて
376 ヒテ人の地は祭司の
377 ヒテ人の地にて
378 ヒテ人の地は祭司の
379 ヒテ人の地にて
380 ヒテ人の地は祭司の
381 ヒテ人の地にて
382 ヒテ人の地は祭司の
383 ヒテ人の地にて
384 ヒテ人の地は祭司の
385 ヒテ人の地にて
386 ヒテ人の地は祭司の
387 ヒテ人の地にて
388 ヒテ人の地は祭司の
389 ヒテ人の地にて
390 ヒテ人の地は祭司の
391 ヒテ人の地にて
392 ヒテ人の地は祭司の
393 ヒテ人の地にて
394 ヒテ人の地は祭司の
395 ヒテ人の地にて
396 ヒテ人の地は祭司の
397 ヒテ人の地にて
398 ヒテ人の地は祭司の
399 ヒテ人の地にて
400 ヒテ人の地は祭司の
401 ヒテ人の地にて
402 ヒテ人の地は祭司の
403 ヒテ人の地にて
404 ヒテ人の地は祭司の
405 ヒテ人の地にて
406 ヒテ人の地は祭司の
407 ヒテ人の地にて
408 ヒテ人の地は祭司の
409 ヒテ人の地にて
410 ヒテ人の地は祭司の
411 ヒテ人の地にて
412 ヒテ人の地は祭司の
413 ヒテ人の地にて
414 ヒテ人の地は祭司の
415 ヒテ人の地にて
416 ヒテ人の地は祭司の
417 ヒテ人の地にて
418 ヒテ人の地は祭司の
419 ヒテ人の地にて
420 ヒテ人の地は祭司の
421 ヒテ人の地にて
422 ヒテ人の地は祭司の
423 ヒテ人の地にて
424 ヒテ人の地は祭司の
425 ヒテ人の地にて
426 ヒテ人の地は祭司の
427 ヒテ人の地にて
428 ヒテ人の地は祭司の
429 ヒテ人の地にて
430 ヒテ人の地は祭司の
431 ヒテ人の地にて
432 ヒテ人の地は祭司の
433 ヒテ人の地にて
434 ヒテ人の地は祭司の
435 ヒテ人の地にて
436 ヒテ人の地は祭司の
437 ヒテ人の地にて
438 ヒテ人の地は祭司の
439 ヒテ人の地にて
440 ヒテ人の地は祭司の
441 ヒテ人の地にて
442 ヒテ人の地は祭司の
443 ヒテ人の地にて
444 ヒテ人の地は祭司の
445 ヒテ人の地にて
446 ヒテ人の地は祭司の
447 ヒテ人の地にて
448 ヒテ人の地は祭司の
449 ヒテ人の地にて
450 ヒテ人の地は祭司の
451 ヒテ人の地にて
452 ヒテ人の地は祭司の
453 ヒテ人の地にて
454 ヒテ人の地は祭司の
455 ヒテ人の地にて
456 ヒテ人の地は祭司の
457 ヒテ人の地にて
458 ヒテ人の地は祭司の
459 ヒテ人の地にて
460 ヒテ人の地は祭司の
461 ヒテ人の地にて
462 ヒテ人の地は祭司の
463 ヒテ人の地にて
464 ヒテ人の地は祭司の
465 ヒテ人の地にて
466 ヒテ人の地は祭司の
467 ヒテ人の地にて
468 ヒテ人の地は祭司の
469 ヒテ人の地にて
470 ヒテ人の地は祭司の
471 ヒテ人の地にて
472 ヒテ人の地は祭司の
473 ヒテ人の地にて
474 ヒテ人の地は祭司の
475 ヒテ人の地にて
476 ヒテ人の地は祭司の
477 ヒテ人の地にて
478 ヒテ人の地は祭司の
479 ヒテ人の地にて
480 ヒテ人の地は祭司の
481 ヒテ人の地にて
482 ヒテ人の地は祭司の
483 ヒテ人の地にて
484 ヒテ人の地は祭司の
485 ヒテ人の地にて
486 ヒテ人の地は祭司の
487 ヒテ人の地にて
488 ヒテ人の地は祭司の
489 ヒテ人の地にて
490 ヒテ人の地は祭司の
491 ヒテ人の地にて
492 ヒテ人の地は祭司の
493 ヒテ人の地にて
494 ヒテ人の地は祭司の
495 ヒテ人の地にて
496 ヒテ人の地は祭司の
497 ヒテ人の地にて
498 ヒテ人の地は祭司の
499 ヒテ人の地にて
500 ヒテ人の地は祭司の
501 ヒテ人の地にて
502 ヒテ人の地は祭司の
503 ヒテ人の地にて
504 ヒテ人の地は祭司の
505 ヒテ人の地にて
506 ヒテ人の地は祭司の
507 ヒテ人の地にて
508 ヒテ人の地は祭司の
509 ヒテ人の地にて
510 ヒテ人の地は祭司の
511 ヒテ人の地にて
512 ヒテ人の地は祭司の
513 ヒテ人の地にて
514 ヒテ人の地は祭司の
515 ヒテ人の地にて
516 ヒテ人の地は祭司の
517 ヒテ人の地にて
518 ヒテ人の地は祭司の
519 ヒテ人の地にて
520 ヒテ人の地は祭司の
521 ヒテ人の地にて
522 ヒテ人の地は祭司の
523 ヒテ人の地にて
524 ヒテ人の地は祭司の
525 ヒテ人の地にて
526 ヒテ人の地は祭司の
527 ヒテ人の地にて
528 ヒテ人の地は祭司の
529 ヒテ人の地にて
530 ヒテ人の地は祭司の
531 ヒテ人の地にて
532 ヒテ人の地は祭司の
533 ヒテ人の地にて
534 ヒテ人の地は祭司の
535 ヒテ人の地にて
536 ヒテ人の地は祭司の
537 ヒテ人の地にて
538 ヒテ人の地は祭司の
539 ヒテ人の地にて
540 ヒテ人の地は祭司の
541 ヒテ人の地にて
542 ヒテ人の地は祭司の
543 ヒテ人の地にて
544 ヒテ人の地は祭司の
545 ヒテ人の地にて
546 ヒテ人の地は祭司の
547 ヒテ人の地にて
548 ヒテ人の地は祭司の
549 ヒテ人の地にて
550 ヒテ人の地は祭司の
551 ヒテ人の地にて
552 ヒテ人の地は祭司の
553 ヒテ人の地にて
554 ヒテ人の地は祭司の
555 ヒテ人の地にて
556 ヒテ人の地は祭司の
557 ヒテ人の地にて
558 ヒテ人の地は祭司の
559 ヒテ人の地にて
560 ヒテ人の地は祭司の
561 ヒテ人の地にて
562 ヒテ人の地は祭司の
563 ヒテ人の地にて
564 ヒテ人の地は祭司の
565 ヒテ人の地にて
566 ヒテ人の地は祭司の
567 ヒテ人の地にて
568 ヒテ人の地は祭司の
569 ヒテ人の地にて
570 ヒテ人の地は祭司の
571 ヒテ人の地にて
572 ヒテ人の地は祭司の
573 ヒテ人の地にて
574 ヒテ人の地は祭司の
575 ヒテ人の地にて
576 ヒテ人の地は祭司の
577 ヒテ人の地にて
578 ヒテ人の地は祭司の
579 ヒテ人の地にて
580 ヒテ人の地は祭司の
581 ヒテ人の地にて
582 ヒテ人の地は祭司の
583 ヒテ人の地にて
584 ヒテ人の地は祭司の
585 ヒテ人の地にて
586 ヒテ人の地は祭司の
587 ヒテ人の地にて
588 ヒテ人の地は祭司の
589 ヒテ人の地にて
590 ヒテ人の地は祭司の
591 ヒテ人の地にて
592 ヒテ人の地は祭司の
593 ヒテ人の地にて
594 ヒテ人の地は祭司の
595 ヒテ人の地にて
596 ヒテ人の地は祭司の
597 ヒテ人の地にて
598 ヒテ人の地は祭司の
599 ヒテ人の地にて
600 ヒテ人の地は祭司の
601 ヒテ人の地にて
602 ヒテ人の地は祭司の
603 ヒテ人の地にて
604 ヒテ人の地は祭司の
605 ヒテ人の地にて
606 ヒテ人の地は祭司の
607 ヒテ人の地にて
608 ヒテ人の地は祭司の
609 ヒテ人の地にて
610 ヒテ人の地は祭司の
611 ヒテ人の地にて
612 ヒテ人の地は祭司の
613 ヒテ人の地にて
614 ヒテ人の地は祭司の
615 ヒテ人の地にて
616 ヒテ人の地は祭司の
617 ヒテ人の地にて
618 ヒテ人の地は祭司の
619 ヒテ人の地にて
620 ヒテ人の地は祭司の
621 ヒテ人の地にて
622 ヒテ人の地は祭司の
623 ヒテ人の地にて
624 ヒテ人の地は祭司の
625 ヒテ人の地にて
626 ヒテ人の地は祭司の
627 ヒテ人の地にて
628 ヒテ人の地は祭司の
629 ヒテ人の地にて
630 ヒテ人の地は祭司の
631 ヒテ人の地にて
632 ヒテ人の地は祭司の
633 ヒテ人の地にて
634 ヒテ人の地は祭司の
635 ヒテ人の地にて
636 ヒテ人の地は祭司の
637 ヒテ人の地にて
638 ヒテ人の地は祭司の
639 ヒテ人の地にて
640 ヒテ人の地は祭司の
641 ヒテ人の地にて
642 ヒテ人の地は祭司の
643 ヒテ人の地にて
644 ヒテ人の地は祭司の
645 ヒテ人の地にて
646 ヒテ人の地は祭司の
647 ヒテ人の地にて
648 ヒテ人の地は祭司の
649 ヒテ人の地にて
650 ヒテ人の地は祭司の
651 ヒテ人の地にて
652 ヒテ人の地は祭司の
653 ヒテ人の地にて
654 ヒテ人の地は祭司の
655 ヒテ人の地にて
656 ヒテ人の地は祭司の
657 ヒテ人の地にて
658 ヒテ人の地は祭司の
659 ヒテ人の地にて
660 ヒテ人の地は祭司の
661 ヒテ人の地にて
662 ヒテ人の地は祭司の
663 ヒテ人の地にて
664 ヒテ人の地は祭司の
665 ヒテ人の地にて
666 ヒテ人の地は祭司の
667 ヒテ人の地にて
668 ヒテ人の地は祭司の
669 ヒテ人の地にて
670 ヒテ人の地は祭司の
671 ヒテ人の地にて
672 ヒテ人の地は祭司の
673 ヒテ人の地にて
674 ヒテ人の地は祭司の
675 ヒテ人の地にて
676 ヒテ人の地は祭司の
677 ヒテ人の地にて
678 ヒテ人の地は祭司の
679 ヒテ人の地にて
680 ヒテ人の地は祭司の
681 ヒテ人の地にて
682 ヒテ人の地は祭司の
683 ヒテ人の地にて
684 ヒテ人の地は祭司の
685 ヒテ人の地にて
686 ヒテ人の地は祭司の
687 ヒテ人の地にて
688 ヒテ人の地は祭司の
689 ヒテ人の地にて
690 ヒテ人の地は祭司の
691 ヒテ人の地にて
692 ヒテ人の地は祭司の
693 ヒテ人の地にて
694 ヒテ人の地は祭司の
695 ヒテ人の地にて
696 ヒテ人の地は祭司の
697 ヒテ人の地にて
698 ヒテ人の地は祭司の
699 ヒテ人の地にて
700 ヒテ人の地は祭司の
701 ヒテ人の地にて
702 ヒテ人の地は祭司の
703 ヒテ人の地にて
704 ヒテ人の地は祭司の
705 ヒテ人の地にて
706 ヒテ人の地は祭司の
707 ヒテ人の地にて
708 ヒテ人の地は祭司の
709 ヒテ人の地にて
710 ヒテ人の地は祭司の
711 ヒテ人の地にて
712 ヒテ人の地は祭司の
713 ヒテ人の地にて
714 ヒテ人の地は祭司の
715 ヒテ人の地にて
716 ヒテ人の地は祭司の
717 ヒテ人の地にて
718 ヒテ人の地は祭司の
719 ヒテ人の地にて
720 ヒテ人の地は祭司の
721 ヒテ人の地にて
722 ヒテ人の地は祭司の
723 ヒテ人の地にて
724 ヒテ人の地は祭司の
725 ヒテ人の地にて
726 ヒテ人の地は祭司の
727 ヒテ人の地にて
728 ヒテ人の地は祭司の
729 ヒテ人の地にて
730 ヒテ人の地は祭司の
731 ヒテ人の地にて
732 ヒテ人の地は祭司の
733 ヒテ人の地にて
734 ヒテ人の地は祭司の
735 ヒテ人の地にて
736 ヒテ人の地は祭司の
737 ヒテ人の地にて
738 ヒテ人の地は祭司の
739 ヒテ人の地にて
740 ヒテ人の地は祭司の
741 ヒテ人の地にて
742 ヒテ人の地は祭司の
743 ヒテ人の地にて
744 ヒテ人の地は祭司の
745 ヒテ人の地にて
746 ヒテ人の地は祭司の
747 ヒテ人の地にて
748 ヒテ人の地は祭司の
749 ヒテ人の地にて
750 ヒテ人の地は祭司の
751 ヒテ人の地にて
752 ヒテ人の地は祭司の
753 ヒテ人の地にて
754 ヒテ人の地は祭司の
755 ヒテ人の地にて
756 ヒテ人の地は祭司の
757 ヒテ人の地にて
758 ヒテ人の地は祭司の
759 ヒテ人の地にて
760 ヒテ人の地は祭司の
761 ヒテ人の地にて
762 ヒテ人の地は祭司の
763 ヒテ人の地にて
764 ヒテ人の地は祭司の
765 ヒテ人の地にて
766 ヒテ人の地は祭司の
767 ヒテ人の地にて
768 ヒテ人の地は祭司の
769 ヒテ人の地にて
770 ヒテ人の地は祭司の
771 ヒテ人の地にて
772 ヒテ人の地は祭司の
773 ヒテ人の地にて
774 ヒテ人の地は祭司の
775 ヒテ人の地にて
776 ヒテ人の地は祭司の
777 ヒテ人の地にて
778 ヒテ人の地は祭司の
779 ヒテ人の地にて
780 ヒテ人の地は祭司の
781 ヒテ人の地にて
782 ヒテ人の地は祭司の
783 ヒテ人の地にて
784 ヒテ人の地は祭司の
785 ヒテ人の地にて
786 ヒテ人の地は祭司の
787 ヒテ人の地にて
788 ヒテ人の地は祭司の
789 ヒテ人の地にて
790 ヒテ人の地は祭司の
791 ヒテ人の地にて
792 ヒテ人の地は祭司の
793 ヒテ人の地にて
794 ヒテ人の地は祭司の
795 ヒテ人の地にて
796 ヒテ人の地は祭司の
797 ヒテ人の地にて
798 ヒテ人の地は祭司の
799 ヒテ人の地にて
800 ヒテ人の地は祭司の
801 ヒテ人の地にて
802 ヒテ人の地は祭司の
803 ヒテ人の地にて
804 ヒテ人の地は祭司の
805 ヒテ人の地にて
806 ヒテ人の地は祭司の
807 ヒテ人の地にて
808 ヒテ人の地は祭司の
809 ヒテ人の地にて
810 ヒテ人の地は祭司の
811 ヒテ人の地にて
812 ヒテ人の地は祭司の
813 ヒテ人の地にて
814 ヒテ人の地は祭司の
815 ヒテ人の地にて
816 ヒテ人の地は祭司の
817 ヒテ人の地にて
818 ヒテ人の地は祭司の
819 ヒテ人の地にて
820 ヒテ人の地は祭司の
821 ヒテ人の地にて
822 ヒテ人の地は祭司の
823 ヒテ人の地にて
824 ヒテ人の地は祭司の
825 ヒテ人の地にて
826 ヒテ人の地は祭司の
827 ヒテ人の地にて
828 ヒテ人の地は祭司の
829 ヒテ人の地にて
830 ヒテ人の地は祭司の
831 ヒテ人の地にて
832 ヒテ人の地は祭司の
833 ヒテ人の地にて
834 ヒテ人の地は祭司の
835 ヒテ人の地にて
836 ヒテ人の地は祭司の
837 ヒテ人の地にて
838 ヒテ人の地は祭司の
839 ヒテ人の地にて
840 ヒテ人の地は祭司の
841 ヒテ人の地にて
842 ヒテ人の地は祭司の
843 ヒテ人の地にて
844 ヒテ人の地は祭司の
845 ヒテ人の地にて
846 ヒテ人の地は祭司の
847 ヒテ人の地にて
848 ヒテ人の地は祭司の
849 ヒテ人の地にて
850 ヒテ人の地は祭司の
851 ヒテ人の地にて
852 ヒテ人の地は祭司の
853 ヒテ人の地にて
854 ヒテ人の地は祭司の
855 ヒテ人の地にて
856 ヒテ人の地は祭司の
857 ヒテ人の地にて
858 ヒテ人の地は祭司の
859 ヒテ人の地にて
860 ヒテ人の地は祭司の
861 ヒテ人の地にて
862 ヒテ人の地は祭司の
863 ヒテ人の地にて
864 ヒテ人の地は祭司の
865 ヒテ人の地にて
866 ヒテ人の地は祭司の
867 ヒテ人の地にて
868 ヒテ人の地は祭司の
869 ヒテ人の地にて
870 ヒテ人の地は祭司の
871 ヒテ人の地にて
872 ヒテ人の地は祭司の
873 ヒテ人の地にて
874 ヒテ人の地は祭司の
875 ヒテ人の地にて
876 ヒテ人の地は祭司の
877 ヒテ人の地にて
878 ヒテ人の地は祭司の
879 ヒテ人の地にて
880 ヒテ人の地は祭司の
881 ヒテ人の地にて
882 ヒテ人の地は祭司の
883 ヒテ人の地にて
884 ヒテ人の地は祭司の
885 ヒテ人の地にて
886 ヒテ人の地は祭司の
887 ヒテ人の地にて
888 ヒテ人の地は祭司の
889 ヒテ人の地にて
890 ヒテ人の地は祭司の
891 ヒテ人の地にて
892 ヒテ人の地は祭司の
893 ヒテ人の地にて
894 ヒテ人の地は祭司の
895 ヒテ人の地にて
896 ヒテ人の地は祭司の
897 ヒテ人の地にて
898 ヒテ人の地は祭司の
899 ヒテ人の地にて
900 ヒテ人の地は祭司の
901 ヒテ人の地にて
902 ヒテ人の地は祭司の
903 ヒテ人の地にて
904 ヒテ人の地は祭司の
905 ヒテ人の地にて
906 ヒテ人の地は祭司の
907 ヒテ人の地にて
908 ヒテ人の地は祭司の
909 ヒテ人の地にて
910 ヒテ人の地は祭司の
911 ヒテ人の地にて
912 ヒテ人の地は祭司の
913 ヒテ人の地にて
914 ヒテ人の地は祭司の
915 ヒテ人の地にて
916 ヒテ人の地は祭司の
917 ヒテ人の地にて
918 ヒテ人の地は祭司の
919 ヒテ人の地にて
920 ヒテ人の地は祭司の
921 ヒテ人の地にて
922 ヒテ人の地は祭司の
923 ヒテ人の地にて
924 ヒテ人の地は祭司の
925 ヒテ人の地にて
926 ヒテ人の地は祭司の
927 ヒテ人の地にて
928 ヒテ人の地は祭司の
929 ヒテ人の地にて
930 ヒテ人の地は祭司の
931 ヒテ人の地にて
932 ヒテ人の地は祭司の
933 ヒテ人の地にて
934 ヒテ人の地は祭司の
935 ヒテ人の地にて
936 ヒテ人の地は祭司の
937 ヒテ人の地にて
938 ヒテ人の地は祭司の
939 ヒテ人の地にて
940 ヒテ人の地は祭司の
941 ヒテ人の地にて
942 ヒテ人の地は祭司の
943 ヒテ人の地にて
944 ヒテ人の地は祭司の
945 ヒテ人の地にて
946 ヒテ人の地は祭司の
947 ヒテ人の地にて
948 ヒテ人の地は祭司の
949 ヒテ人の地にて
950 ヒテ人の地は祭司の
951 ヒテ人の地にて
952 ヒテ人の地は祭司の
953 ヒテ人の地にて
954 ヒテ人の地は祭司の
955 ヒテ人の地にて
956 ヒテ人の地は祭司の
957 ヒテ人の地にて
958 ヒテ人の地は祭司の
959 ヒテ人の地にて
960 ヒテ人の地は祭司の
961 ヒテ人の地にて
962 ヒテ人の地は祭司の
963 ヒテ人の地にて
964 ヒテ人の地は祭司の
965 ヒテ人の地にて
966 ヒテ人の地は祭司の
967 ヒテ人の地にて
968 ヒテ人の地は祭司の
969 ヒテ人の地にて
970 ヒテ人の地は祭司の
971 ヒテ人の地にて
972 ヒテ人の地は祭司の
973 ヒテ人の地にて
974 ヒテ人の地は祭司の
975 ヒテ人の地にて
976 ヒテ人の地は祭司の
977 ヒテ人の地にて
978 ヒテ人の地は祭司の
979 ヒテ人の地にて
980 ヒテ人の地は祭司の
981 ヒテ人の地にて
982 ヒテ人の地は祭司の
983 ヒテ人の地にて
984 ヒテ人の地は祭司の
985 ヒテ人の地にて
986 ヒテ人の地は祭司の
987 ヒテ人の地にて
988 ヒテ人の地は祭司の
989 ヒテ人の地にて
990 ヒテ人の地は祭司の
991 ヒテ人の地にて
992 ヒテ人の地は祭司の
993 ヒテ人の地にて
994 ヒテ人の地は祭司の
995 ヒテ人の地にて
996 ヒテ人の地は祭司の
997 ヒテ人の地にて
998 ヒテ人の地は祭司の
999 ヒテ人の地にて
1000 ヒテ人の地は祭司の

以西結書 終

一 第一章 一 ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネザルエルサレムにきたりてこれを
二 攻圍みしに二 主ユダの王エホヤキムと神の家の器具幾何とをかれの手にわたしたまひければ即ちこれを
三 シナルの地に携へゆきて己の神の家にいたりその器具を己の神の庫に藏めたり三 茲に王寺人の長アシペ
四 ナズに命じてイスラエルの子孫の中より王の血統の者と貴族たる者幾何を召寄しむ四 即ち身に疵なく
容貌美しくして一切の智慧の道に穎く知識ありて思慮深く王の宮に侍るに足る能幹ある少き者を召寄しめ
五 これにカルデヤ人の文學と言語とを學ばせんとす五 是をもて王は命を下して日々に王の用ゐる饌と王の飲
む酒とを彼らに與へしめ三年の間かく彼らを養ひ肯てしめんとす是その後に彼らをして王の前に立ことを得
七 せしめんとてなり六 是等の中にユダの人ダニエル ハナニヤ ミシヤエル アザリヤありしが七 寺人の長かれら
に名をあたへてダニエルをベルテシヤザルと名けハナニヤをシヤデラクと名けミシヤエルをメシヤクと名け
八 アザリヤをアベデ子ゴと名く八 然るにダニエルは王の用ゐる饌と王の飲む酒とを以て己の身を汚すまじと
九 心に思ひさだめたれば己の身を汚さざらしめんことを寺人の長に求む九 以前よりエホバダニエルをして寺人
一〇 の長の慈悲と寵愛とを蒙らしめたまふ一〇 是において寺人の長ダニエルに言けるは吾主なる王すでに命を
くだして汝らの食物と汝らの飲物とを頒たしめたまへば我かれを畏る恐くは彼なんぢらの面の其同輩の少
一一 者等と異にして憔色あるを見ん然る時は汝らのために我首王の前に危からん一一 寺人の長はメルザル官を
一二 してダニエル ハナニヤ ミシヤエル及アザリヤを監督せ置たればダニエル之に言けるは一二 請ふ十日の
一三 間僕等を驗したまへ即ち我らには菜蔬を與へて食せ水を與へて飲せよ一三 而して我らの面と王の饌を
一四 食ふ少者等の面とを較べ見汝の視るところにしたがひて僕等を待ひたまへと一四 是において彼この事
一五 を聽いれ十日のあひだ彼らを驗しけるが一五 十日の後にいたりて見るに王の饌を食へる諸の少者よりも
一六 彼らの面は美しくまた肥腯きてありければ一六 メルザル官すなち彼らの分なる饌と彼らの飲べき酒

十七 これを撤きさりて菜蔬をこれに與へたり 十七 この四人の少者には神知識を得させ諸の文學と智慧に頴からしめたまへりダニエルはまた能く各種の異象と夢兆を曉る 十八 王かれて命をくだし少者等を召いるゝ迄に經べき日を定めおきしがその日數も過たるに因て寺人の長かれらを引て王ブカデヂザルの前にいたりければ

十九 王かれらと言談り彼ら一切の中にはダニエル ハナニヤ ミシヤエル アザリヤに比ぶ者あらざりければこの四人は王の前に侍れり 二十 王かれらに諸の事を詢たづれ見に彼らは智慧の學においてその全國の博士と

二一 法術士に愈ること十倍なり 二一 ダニエルはクロス王の元年までありき

第二章

一 ブカデヂザルの治世の二年に ブカデヂザル夢を見それがために心に思ひなやみて復睡ることを能はざりき 二 是をもて王は命を下し王のためにその夢を解せんとて博士と法術士と覽術士とカルデヤ人とを召しめたれば彼ら來りて王の前に立つ 三 王すなはち彼らにむかひ我夢を見その夢の義を知んと心に思ひなやむと言ければ 四 カルデヤ人等スリア語をもて王に申しけるは願くは王長壽かれ請ふ僕等にその夢を語りたまへ我らその解明を進めたてまつらんと 五 王こたへてカルデヤ人に言けるは我すでに命を出せり汝ら又等もしその夢ことこれが解明こと我に示さゞるにおいては汝らの身は切裂れ汝らの家は厠にせられん 六 又汝らもしその夢ことこれが解明を示さば贈物と賞賚と大なる尊榮とを我より獲ん然ばその夢ことこれが解明を我に示せ 七 彼らまた對へて言けるは願くは王僕等にその夢を語りたまへ然ば我らその解明を奏すべし 八 王こたへて言けるは我あきらかに知る汝らは吾命の下りしを見るが故に時を延さんことを望むなり 九 汝らもしその夢を我に示さずば汝らを處置するの法は只一のみ汝らは相語らひて虛言と妄誕なる詞を吾前にのべて時の變るを待んとするなり 汝ら今先その夢を我に言よ然すれば汝らがその解明をも我にしめし得ることを我しらんと 十 カルデヤ人等こたへて王の前に申しけるは世の中には王のその事を示し得る人一箇もなし是をもて王たる者主たる者君たる者等の中に斯る事を博士または法術士または カルデヤ人に問たづれし者絶てあらざるなり 十一 王の問たまふその事は甚だ難し肉身なる者と共に居ざる神々を除きては王の前に

十二 これを示すことを得る者無るべしと 十二 斯りしかば王怒と憤りバビロンの智者をことごく殺せと命じたり 十三 即ち此命くだりければ智者等は殺されんとせり又ダニエルとその同僚をも殺さんともとめたり 十四 茲に王の侍衛の長アリオクバビロンの智者等を殺さんとて出きたりければダニエル遠慮と智慧とをもて之に應答せり 十五 すなはち王の高官アリオクに對へて言けるは王なにて斯すみやかにこの命を下したまひしやとアリオクその事をダニエルに告しらせたれば 十六 ダニエルいりて王に乞求めて言ふ暫くの時日を賜へ然ばその解明を王に奏せんと 十七 斯てダニエルその家にかへりその同僚ハナニヤ ミシヤエル およびアザリヤにこの事を告しらせ 十八 共にこの秘密につきて天の神の憐憫を乞ひダニエルとその同僚等をしてその他のバビロンの智者とゝもに滅びざらしめんことを求めたりしが 十九 ダニエルつひに夜の異象の中にこの秘密を示されければダニエル天の神を稱讃ふ 二十 即ち稱讃ふ

二一 でこの神の御名は讃まつるべきなり智慧と權能はこれが有なればなり 二一 彼は時と期とを變じ王を廢し王を立て智者に智慧を與へ賢者に知識を賜ふ 二二 彼は深く秘密の事を顯はし幽暗にあるところの者を知たまふまた光明彼の裏にあり 二三 わが先祖等の神よ汝は我に智慧と權能を賜ひ今われらが汝に乞求めたるところの事を我に示めしたまへば我感謝して汝を稱讃ふ 二四 即ち汝はバビロンの智者等を殺すことを命じおけるアリオクの許にいたり即ちいりてこれに言けるはバビロンの智者等を殺す勿れ我を王の前に引いたれよ我その解明を王に奏上べしと 二五 アリオクすなはちダニエルを引て急ぎ王の前にいたり王にまうしけるは我ユダの俘囚人の中に一箇の人を得たり是者その解明を王にまうしあげん 二六 王こたへてベルテシヤザルと名くるダニエルに言けるは汝は我が見たる夢とその解明を我に知することを得るやと 二七 ダニエル秘密は智者、法術士、博士、卜筮師なども之を王に奏上ることを得ず 二八 然ど天に一の神ありて秘密をあらはしたまふ彼後の日に起らんところの事を如何なるかを王ブカデヂザルに知らせたまふなり汝の夢汝

二九 が脇にありて想見たまひし汝の腦中の異象は是なり 二九 王よ 汝 昧にいりし時將來の事の如何を想ひまはし
三〇 たまひしが秘密を顯す者將來の事の如何を汝に示めしたまへり 三〇 我がこの示現を蒙れるは凡の生る者に
まさりて我に智慧あるに由にあらず唯その解明を王に知しむる事ありて王のつひにその心に思ひたまひし
三一 事を知にいたりたまはんがためなり 三一 王よ汝は一箇の巨なる像の前に立るを見たまへり其像は大くし
三二 三三 てその光輝は常ならずその形は悪ろしくあり 三二 其像は頭は純金、胸と兩腕とは銀、腹と腿とは銅、三三
三四 脛は鐵、脚は一分は鐵一分は泥土なり 三四 汝見て居たまひしに遂に一箇の石人手によらずして離れて出でそ
三五 の像の鐵と泥土との脚を擊てこれを碎けり 三五 斯りしかばその鐵と泥土と銅と銀と金とは皆ともに碎けて
夏の禾場の糠のごとくに成り風に吹はらはれて止まるところ無りき而してその像を擊たる石は大なる山となり
三六 三七 て全地に充り 三六 是その夢なり我らその解明を王の前に陳ん 三七 王よ汝は諸王の王にいませり即ち天の
神汝に國と權威と能力と尊貴とを賜へり 三八 また人の子等野の獸畜および天空の鳥は何處にをる者にもあ
三九 れ皆これを汝の手に與へて汝にこれをことごとく治めしめたまふ汝はすなはち是金の頭なり 三九 汝の後に汝
四〇 に劣る一の國おこらんまた第三に銅の國おこりて全世界を治めん 四〇 第四の國は堅きこと鐵のごとくなら
ん鐵は能く萬の物を毀ち碎くなり鐵の是等をことごとく打碎くがごとく其國は毀ちかつ碎くことをせん 四一
四一 汝その足と足の趾を見たまひしに一分は陶人の泥土一分は鐵なりければその國は分裂たる者ならん又汝
鐵と粘土との混和たるを見たまひたればその國は鐵のごとく強からん 四二 その足の趾の一分は鐵一分は泥土
四二 なりしごとくその國は強きところもあり脆きところも有ん 四三 汝が鐵と粘土との混りたるを見たまひしごと
四三 く其等は人草の種子と混らん然ど鐵と泥土との相合せざるごとく彼と此と相合することあらじ 四四 この王等の
四四 日に天の神一の國を建たまはん是は何時までも滅ぶることなく無らん此國は他の民に歸せず却てこの諸の國
を打破りてこれを滅せん是は立て永遠にいたらん 四五 かの石の人手によらずして山より擊れて出で鐵と銅
と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見たまひしは即ちこの事この大御神この後に起らんところの事を王にむ
らせたまへるなりその夢は眞にしてこの解明は確なり 四六 是において子ブカデ子ザル王は俯伏てダニエル
四六 四七 を拜し禮物と香をこれに獻ることを命じたり 四七 而して王こたへてダニエルに言けるは汝がこの秘密を明
四八 かに示すことを得たるを見れば誠に汝らの神は神等の神王等の主にして能く秘密を示す者なりと 四八 か
くて王はダニエルに高位を授け種々の大なる賜物を與へてこれをバビロン全州の總督となしまたバビ
四九 ロンの智者等を統る者の首長となせり 四九 王またダニエルの願によりてシヤデラクとメシヤクとアベデ子ゴ
を擧てバビロン州の事務をつかさどらしめたり ダニエルは王の宮になを

第三章

一 茲に子ブカデ子ザル王一箇の金の像を造れりその高は六十キユビトその横の廣は六キユビトなり
二 き乃ちこれをバビロン州のドラの平野に立たり 二 而して子ブカデ子ザル王は州牧、將軍、方伯、刑官、庫
官、法官、士師、および州郡の諸有司を召集めその子ブカデ子ザル王の立たる像の告成禮に臨ましめん
三 させり 三 是においてその州牧、將軍、方伯、刑官、庫官、法官、士師および州郡の諸有司等は子ブカデ
四 子ザル王の立たる像の告成禮に臨みその子ブカデ子ザル王の立たる像の前に立り 四 時に傳令 声大聲に
五 呼はりて言ふ諸民諸族諸音よ汝らは斯命ぜらるる五 汝ら喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏簧などの諸の樂器
六 の音を聞く時は俯伏し子ブカデ子ザル王の立たまへる金像を拜すべし 六 凡て俯伏て拜せざる者は即時に火の
七 燃る爐の中に投こまるべしと 七 是をもて諸民等喇叭、簫、琵琶、琴、瑟などの諸の樂器の音を聞や直に諸
八 民諸族諸音みな俯伏し子ブカデ子ザル王の立たる金像を拜したり 八 その時或カルデヤ人等進みきたりて
九 ダヤ人を讒奏せり 九 即ち彼ら子ブカデ子ザル王に奏聞して言ふ願くは王 長壽かれ 十 王よ汝は命を出して宣
十 へり凡て喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏簧などの諸の樂器の音を聞く者はみな俯伏してこの金像を拜すべし
十一 凡て俯伏し拜せざる者はみな火の燃る爐の中に投こまるべしと 十一 此に汝が立てバビロン州の事務を司
十二 ごらせたまへるユダヤ人シヤデラク メシヤクおよびアベデ子ゴあり王よ此人々は汝を尊ばず汝の神をに
も事へず汝の立たまへる金像をも拜せざるなりと 十二 是において子ブカデ子ザル怒りかつ憤りてシヤデラ

十四 クメシヤタおよびアベデ子ゴを召寄よと命じければ即ちこの人々を王の前に引きたりしに十四 子ブカデ子ザ
ルかれらに問て言けるはシヤデラク メシヤク アベデ子ゴよ汝ら我神に事へすまた我が立たる金像を拜せざ
十五 るは是故意にするなるか十五 汝らもし何の時にもあれ喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、笙簧などの諸の樂器の
音を聞く時に俯伏し我が造れる像を拜することを爲ば可し然ど汝らもし拜することをせずば即時に火の燃る
十六 爐の中に投こまるべし何の神か能く汝らをわが手より救ひいだすことをせん十六 シヤデラク メシヤク アベ
十七 デ子ゴ對へて王に言けるは子ブカデ子ザルよこの事において我ら汝に答ふるに及ばず十七 もし善らん
には王よ我らの事ふる我らの神我らを救ふの能あり彼その火の燃る爐の中と汝の手の中より我らを救ひいだ
十八 さん十八 假令しからざるも王よ知たまへ我らは汝の神々に事へすまた汝の立たる金像を拜せじ十八 是において
十九 で子ブカデ子ザル怒氣を充しシヤデラク メシヤク およびアベデ子ゴにむかひてその面の容を變へ即ち爐を常
二十 に熱くするよりも七倍熱くせよと命じ二十 またその軍勢の中の力強き人々を喚てシヤデラク メシヤクお
二一 よびアベデ子ゴを縛りてこれを火の燃る爐の中に投こめと命じたり二一 是をもて此人々はその袴子羽織外
二二 套およびその他の服裝を着たるまゝにて縛られて火の燃る爐の中に投こまれたりしが二二 王の命はなはだ急
二三 にして爐はなはだしく熱しぬたれば彼のシヤデラク メシヤク およびアベ子デゴを引抱へゆける者等はその火焰
に燒ころされたり二三 また此シヤデラク メシヤク アベデ子ゴの三人は縛られたるまゝにて燃る爐の中に落
二四 いりぬ二四 時に子ブカデ子ザル王驚ろきて急忙たちあがり大臣等に言ふ我等は三人を縛りて火の中に
二五 投いれざりしや彼ら王にこたへて言ふ王よ然りと二五 王また曰ふ今我見るに四人の者縛縄解て火の
二六 中に歩みをり凡て何の害をも受ずまたその第四の者の容は神の子のごとしと二六 子ブカデ子ザルすなはちそ
の火の燃る爐の口に進みよりて呼て言ふ至高神の僕シヤデラク メシヤクおよびアベデ子ゴの神出きたれと
二七 是においてシヤデラク メシヤク およびアベデ子ゴその火の中より出きたりしかば二七 州牧、將軍、方伯お
よび王の大臣等集りて此人々を見たり此人々の身は火もこれを害する力なかりきまたその頭の髮は燋

二八 すその衣裳は傷れず火の臭氣もこれに付ざりき二八 子ブカデ子ザル すなはち宣て曰くシヤデラク メシヤク
アベデ子ゴの神は讃べき哉彼その使者を遣りて己を頼む僕を救へりまた彼らは自己の神の外には何の神にも
二九 事へずまた拜せざらんとて王の命をも用ひず自己の身をも捨んとせり二九 然ば我今命を下す諸民諸族諸
三十 音の中凡てシヤデラク メシヤクおよびアベデ子ゴの神を冒る者あらばその身は切裂れその家は厠にせられん
其は是のごとくに救を施す神他にあらざればなりと三十 かくて王またシヤデラク メシヤクおよびアベデ子
ゴの位をすゝめてバビロン州におらしむ

第四章

一 子ブカデ子ザル王全世界に住る諸民諸族諸音に誰す願くは大なる平安汝らにあれ二 至高
二 神我にむかひて徵證と奇蹟を行へり我これを知ふむることを善と思ふ三 嗚呼大なるかなその徵證嗚呼盛
三 なるかなその奇蹟その國は永遠の國その權は世々限なし四 我子ブカデ子ザルわが家に安然に居りわが宮に
四 榮へ居り五 我一の夢を見てこれがために懼れ即ち床にありてその事を想ひめぐらしその我腦中の異象の
五 ために心をなやませりと是において我命を下しバビロンの智者をことごとく我前に召よせしめてその夢の解
六 明を我に示めさせんと爲たればセすなはち博士法術士カルデヤ人ト筮師等きたりまに因て我その夢を彼
七 らに語りけるに彼らはその解明を我に示めすことを得ざりき八 かくて後ダニエルわが前に來れり彼の名は
八 吾神の名に主たがひてベルテシヤザルと稱へられその裏には聖神の靈やどれり我その夢を彼の前に語りて
九 曰けらく九 博士の長ベルテシヤザルよ我汝の裏には聖神の靈やどれば如何なる秘密も汝には難き事
十 なし我が夢に見たるところの事等を聞きその解明を我に告よ十 我が床にありて見たる吾腦中の異象は是
十一 のごとし我觀しに地の當中に一の樹ありてその丈高かりしが十一 その樹長じて強固なり天に達するほどの
十二 高さなりて地の極までも見えわたり十二 その葉は美しくその菓は饒にして一切の者その中より食を得また野
十三 の獸その陰に臥し空の鳥その枝に棲み凡て血氣ある者みなこれより食を得たりしが十三 我床にありて得たる腦中
十四 の異象の中に一箇の警寤者一箇の聖者の天よりくだるを見たりしが十四 彼聲高く呼はりて斯いへり此樹を

伐たふしその枝を斫はなしその葉を掊おとしその果を打散し獣をしてその下より逃はしらせ鳥をしてその枝
十五 を飛さらしめよ 十五 但しその根の上の斬株を地に遺しおき鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらし
十六 めよ是は天よりくだる露に濡れまた地の草の中にて獣とその分を同じうせん 十六 又その心は變りて人間の心
十七 のごとくならず獣の心を與て七の時を經へ 十七 この事は警寤者等の言による 十八 我子ブカデ子ザル王この夢を見たりベルテシヤザルよ
十八 是至高者人間の國を治めて自己の意のまゝにこれを人に與へまた人の中の最も賤き者をその上に立
十九 たまふさいふ事を一切の者に知しめんがためなり 十九 その時ダニエル又の名はベルテシヤザルといふ者暫時の間驚
二十 の衷には聖神の靈やどればなりこ 十九 ベルテシヤザルよ汝この夢とその解明のために慴るゝにおよ
二十一 き居り心に深く慌れたれば王これに告て言りベルテシヤザルすなはち答へて言けらく我主よ願くはこの夢汝を惡む者の上にかゝらん事を願くは
二十二 このときあかしなんぢ敵にのぞまんことを 二十 汝が見たまひし樹すなはちその長じて強くなり天に達するほどの
二十三 此解明汝の敵にのぞまんことを 二十一 その葉は美しくその菓は饒にして一切の者その中より食を得またその
二十四 高さなりて地の極までも見へわたり 二十二 その葉は美しくその菓は饒にして一切の者その中より食を得またその
二十五 の下に野の獣臥しその枝に空の鳥棲たる者 二十三 王よ是はすなはち汝なり汝は長じて強くなり汝の勢は盛
二十六 にして天におよび汝の權は地の極にまでおよべり 二十三 王また一箇の警寤者一箇の聖者の天より下りて斯言ふ
二十七 を見たまへり云くこの樹を伐たふして之をそこなへ但しその根の上の斬株を地に遺しおき鐵と銅の索を
二十八 かけて之を野の草の中にあらしめよ是は天よりくだる露に濡れ野の獣とともに居り牛のごとく草を食ひ天よりくだる露に濡
二十九 王よその解明は是のごとし是すなはち至高者の命にして王我主に臨まんとする者なり 二十五 即ち汝は遂
三十 れて世の人と離れ野の獣とともに居り牛のごとく草を食ひ天よりくだる露に濡んこと七の時
三十一 を經て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて自己の意のまゝに之を人に與へたまふこと 二十六 又彼らその樹
三十二 の根の上に斬株を遺しおけこと言たれば汝の國は汝が天は主たりこと知にいたる時まで汝を離れん 二七 然ば王よ

吾諫を容れ義をおこなひて罪を離れ貧者を憐れみて惡を離れよ然らば汝の平安あるひは長く續かん
二八 これこの事みなネブカデ子ザル王に臨めり 二九 十二箇月を經て後王バビロンの王宮の上に歩みをり 三十 王
すなはち語りて言ふ此大なるバビロンは我が大なる力をもて建て京城となし之をもてわが威光を輝か
三一 す者ならずや 三一 その言なほ王の口にある中に天より聲降りて言ふ子ブカデ子ザル王よ汝に告ぐ汝は國の位
三二 を失はん 三二 汝は逐れて世の人と離れ野の獣とともに居り牛のごとく草を食はん斯のごとくにして七の時を
三三 經て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて己れの意のまゝにこれを人に與へたまふこと 三三 その時直に
この事ネブカデ子ザルに臨み彼は逐れて世の人に離れ牛のごとく草を食ひてその身は天よりくだる露に濡
三四 れ終にその髮毛は鷲の羽のごとくになりその爪は鳥の爪のごとくになりぬ 三四 斯てその日の滿たる後我子ブ
三五 カデ子ザル目をあげて天を望みしにわが分別性我に歸りたれば我至高者に感謝しその永遠に生る者
三六 を讃かつ崇めたり彼の御宇は永遠の御宇彼の國は世々かぎり無し 三五 地上の居民は凡て無き者のごとし天の
三七 衆群にも地の居民にも彼はその意のまゝに事をなしたまふ誰も彼の手をおさへて汝なんぞ然するやと言こと
を得る者なし 三六 この時わが分別性かく我に歸りたりしがわが國の榮光につきてはまた我の尊嚴と光輝
三八 我にかへれり且また大臣牧伯等我に請求めて我ふたゝび國の祚を踐み前よりも著しく威光を增たり 三七
是において我子ブカデ子ザル今は天の王を讃頌へかつ崇む彼の作爲は凡て眞實彼の道は正義自ら高ぶる者
四 は彼能くこれを卑くしたまふ

第五章

一 ベルシヤザル王その大臣一千人のために酒宴を設けその一千人の者の前に酒を飲たりしが二 酒の
進むにいたりてベルシヤザルはその父子ブカデ子ザルがエルサレムの宮より取きたりし金銀の器を攜へい
二 たれと命ぜり是王とその大臣および王の妻妾等みなこれを飲んとてなりき 三 是たもてそのエルサレム
なる神の宮の内院より取たりし金の器を攜へいたりければ王とその大臣および王の妻妾等これをもて飲り
四 すなはち彼らは酒をのみて金銀銅鐵木石などの神を讃たゝへたりしが 五 その時に人の手の指あらはれ

て燭臺と相對する王の宮の粉壁に物書り王その物書る手の末を見たり六是において王の愉快なる顏色は變りその心は思ひなやみて安からず腿の關節はゆるみ膝はおひ撃りセ王すなはち大聲に呼はりて法術士カルデヤ人卜筮師等を召きたらしめ而して王バビロンの智者等に告て言ふこの文字を讀みその解明を我に示す者には紫の衣を衣せ頸に金の鏈をかけさせて之を國の第三の牧伯となさんと八王の智者等は皆きたりしかどもその文字を讀こと能はずまたその解明を王に示すこと能はざりければ九ベルシヤザル王おほいに思ひなやみてその顏色を失へりその大臣等もまた驚き惱れたり十時に大后王と大臣等の言を聞てその酒宴の室にいりきたり大后すなはち陳て言ふ願くは王長壽かれ汝心に思ひなやむ勿れまた顏色を失ふにおよばず十一汝の國に聖神の靈のやどれる一箇の人あり汝の父の代に彼聰明了知および神の智慧のごとき智慧あることを顯はせり汝の父子ブカデ子ザル王すなはち汝の父の王彼を立て博士法術士カルデヤ人卜筮師等の長となせり十二彼はダニエルといへる者なるが王これにベルテシヤザルといふ名を與へたり彼は心の殊勝たる者にて了知あり知識ありて能く夢を解き隱語を解き雜問を解くなり然ばダニエルを召れよ彼その解明をしめさんと十三是においてダニエル召れて王の前に至りければ王ダニエルに語りて言ふ汝は吾父の玉がユダより曳きたりしユダの俘囚人なるそのダニエルなるか十四我聞になんぢの衷には神の靈やどりたりて汝は聰明了知および非凡の智慧ありと云ふ十五我智者法術士等を吾前に召よせてこの文字を讀しめその解明を我にしめすことを爲たれども彼らはこの事の解明を我にしめすことを得ず十六我聞に汝は能く事物の解明をなしかつ難問を解くと云ふ然ば汝もし能くこの文字を讀みその解明を我に示さば汝に紫の衣を衣せ金の索を汝の頸にかけさせて汝をこの國の第三の牧伯となさんと十七ダニエルこたへて王に言けるは汝の賜物は汝みづからこれを取り汝の餽物はこれを他の人に與へたまへ然ながら我は王のためにその文字を讀みその解明をこれに知せたてまつらん十八王よ至高神汝の父子ブカデ子ザルに國と榮光と尊貴を賜へり十九彼に權勢を賜ひしによりて諸民諸族諸音みな彼の前に慄のき畏れたり彼はその欲する者を殺しその欲する者を活しその欲する者を上げその欲する者を下しうなり二十而して彼心に高ぶり氣を剛愎にして驕りしかばその國の位をすべりてその尊貴を失ひ二一逐れて世の人と離れその心は獸のごとくに成りその住所は野馬の中にあり牛のごとくに草を食ひてその身は天よりの露に濕たり是のごとくにして終に彼は至高神の人間の國を治めてその意のまゝに人を立たまふといふことをしるにいたれり二二ベルシヤザルよ汝は彼の子にして此事を盡く知るといへども猶その心を卑くせず二三却て天の主にむかひて自ら高ぶりその家の器皿を汝の前に持きたらしめて汝と汝の大臣と汝の妻妾等それをもて酒を飮みて汝は見ことも聞ことも知ことも能ざる金銀銅鐵木石の神を讃頌ふることを爲し汝の生命をその手に握り汝の一切の道を主ごりたまふ神を崇むることをせず二四是をもて彼の前よりこの手の末いできたりてこの文字を書るなり二五その書る文字は是のごとし メ子、メ子、テケル、ウパルシン二六その言の解明は是のごとし メ子（數へたり）は神汝の治世を數へてこれをその終に至らせしを謂なり二七テケル（秤れり）は汝が權衡にて秤られて汝の重の足ざることを謂なり二八ペレス（分たれたり）は汝の國の分たれてメデアとペルシヤに與へらるゝを謂なり二九是において ベルシヤザル命を降してダニエルに紫の衣を着せしめ金の鏈をこれが頸にかけさせて彼は國の第三の牧伯なりと布告せり三十カルデヤ人の王ベルシヤザルはその夜の中に殺され三一メデア人ダリヨスその國を獲たり此時ダリヨスは六十二歳なりき

第六章

一ダリヨスはその國に百二十人の牧伯を立ることを善とし即ちこれを立て全國を治理しめ二また彼らの上に監督三人を立たりダニエルはその一人なりき是その州牧をして此三人の前にその職を遜しめて王に損失の及ぶこと無らしめんためなりき三ダニエルは心の殊勝たる者にしてその他の監督および州牧等に勝りたれば王かれを立て全國を治めしめんとせり四是において その監督と州牧等國事につきてダニエルを訟ふる隙を得んとしたりしが何の隙をも何の咎をも見いだすことを得ざりき其は彼は忠義なる者にてその身に何

の咎もなく何の過失もなかりければなり五是においてその人々言ひけるはこのダニエルはその神の例典につ
いて之が陥穽を獲にあらざればついにこれを訟ふるに由なしと六すなはちその監督と州牧等王の許に集り來
りて斯王に言りダリヨス王よ願くは長壽かれ七國の監督、將軍、州牧、牧伯、方伯等みな相議りて王に
一の律法を立て一の禁令を定めたまはんことを求めんとす王よその事は是のごとし即ち今より三十日の内は
唯汝にのみ願事をなさしめ若汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡てその者を獅子の穴に投いれんさい
ふ是なり八然ば王よ禁令を立てその禁令を出せり十　茲にダニエルはそ
とくに之をして變らざらしめたまへと九王すなはち詔書をしたゝめてその禁令を出せり十　茲にダニエルはそ
の詔書を認めたることを知て家にかへりけるがその二階の窓のエルサレムにむかひて開ける處にて一日に
三度づゝ膝をかゞめて禱りその神にむかひて感謝せり是その時の前よりして斯なし居たればなり十一斯りし
かばその人々驅よりてダニエルがその神にむかひて禱りかつ求めをるを見あらはせり十二而して彼ら進み
きたり王の禁令の事につきて王に奏上して言けるは王よ汝は禁令をしたゝめ出し今より三十日の内には只な
んぢにのみ願事をなさしめ若し汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡てその者を獅子の穴に投いれ
んと定めたまへるならずやと王こたへて言ふ其事は眞實にしてメデアとペルシヤの律法のごとく變へからざ
る者なりと十三彼らまた對へて王の前に言けるは王よユダの俘據人なるダニエルは汝をも汝の認ため出したる
まひし禁令をも顧みずして一日に三度づゝ祈禱をなすなりと十四王この事を聞てこれがために大に愁へダニ
エルを救はんと心を用ひ卽ちこれを拯けんと力をつくして日の入る頃におよびければ十五その人々また王の
許に集ひきたりて王に言けるは王よ知たまへメデアとペルシヤの律法によれば王の立たる禁令または法度は
變へからざる者なりと十六是において王命を下しければダニエルを曳きたりて獅子の穴に投いれたり王ダニ
エルに語りて言ふ願くは汝が恒に事ふる神汝を救はんことをと十七時に石を持きたりてその穴の口を塞ぎ
ければ王おのれの印と大臣等の印をもてこれに封印をなせり是ダニエルの處置をして變ることなからしめ

んためなりき十八斯て後王はその宮にかへりけるがその夜は食をなさずまた嬪等を召よせずして全く睡ろこ
とをせざりき十九而して王は朝まだきに起いでてその獅子の穴に急ぎいたりしが二十穴にいたりける時哀
げなる聲をあげてダニエルを呼りすなはち王ダニエルに言けるは活神の僕ダニエルよ汝が恒に事ふる神
汝を救ふて獅子の害を免かれしむることを得しやニ一ダニエル王にいひけるは願くは王長壽かれニ二吾神
その使をおくりて獅子の口を閉させたまひたれば獅子は我を害せざりき其は我の辜なき事かれの前に明かな
ればなり王よ我は汝にも惡き事をなさゞりしなりニ三是において王おほいに喜びダニエルを穴の中より出
せと命じければダニエルは穴の中より出されけるがその身に何の害をも受たらざりき是は彼おのれの神を頼
みたるによりてなりニ四かくて王また命を下しかのダニエルを讒奏せし者等を曳きたらせて之をその妻子と
ともに獅子の穴に投いれしめたるにその穴の底につかざる內に獅子はやくも彼らを攫みてその骨までもこと
ごとく咬碎けりニ五是においてダリヨス王全世界に住る諸民諸族諸音に詔書を頒てり云く願くは大な
る平安なんぢらにあれニ六今我詔命を出す我國の各州の人みなダニエルの神を畏れ敬ふべし是は活神
にして永遠に立つ者またその國は亡びずその權は終極まで續くなりニ七是は救ひ施こし拯をなし天におい
ても地においても休徵をほどこし奇蹟をおこなふ者にてすなはちダニエルを救ひて獅子の力を免かれしめた
りニ八このダニエルはダリヨスの世とペルシヤ人クロスの世においてその身榮えたり

第七章

一バビロンの王ベルシヤザルの元年にダニエル逃て臥その牀にありて夢を見腦中に異象を得たりしが
即ちその夢を記してその事の大意を述ぶニダニエル言けるは我夜の異象の中に見てありしに四方の天風大
海より上りきたれりその形はおの〳〵異なり四第一のは獅子の如くにして鷲の翼ありけるが我見てをりしに是
はその翼を拔さられまた地より起され人のごとく足にて立せられ且人の心を賜はれり五第二の獸は熊のごとくなりき是はその體の一方を擧げその口の齒の間に三の
脇骨を啣へ居けるが之にむかひて言る者あり曰く起あがりて許多の肉を食へと六その後に我見しに豹のごと

七 き獣いでたりしがその背には鳥の翼四ありこの獣はまた四の頭ありて統轄權をたまはれりセ我夜の異
八 象の中に見しにその後第四の獣いでたりしが是は畏しく猛く大に強くして大なる鐵の歯あり食ひ咬
九 砕きてその殘餘をば足にて蹈つけたり是はその前に出たる諸の獣とは異なりてまた十の角ありき八我そのの
十 角を考へ觀つゝありけるにその中にまた一箇の小き角出きたりしがこの小き角のために先の角三箇その根よ
十一 り抜おちたりこの小き角には人の目のごとき目ありまた大なる事を言ふ口ありヌ我觀つゝありしに遂に寶座
十二 を置列ぶるありて日の老たる者座を占めたりしがその衣は雪のごとくに白くその髪毛は潔めたる羊の毛
十三 のごとし又その寶座は火の熖にしてその車輪は燃る火なりナ而して彼の前より一道の火の流河いづ彼に仕
十四 ふる者は千千彼の前に侍る者は萬萬審判すなはち始りて書ゐ開けり十一その角の大なる事を言ふ聲によ
十五 りて我觀つゝありけるが我が見る間にその獣は終に殺され體を壞なはれて燃る火に投いれられたり十二また
十六 その餘の獣はその權威を奪はれたりしがその生命は時と期の至るまで延されたり十三我また夜の異象の中に
十七 觀てありけるに人の子のごとき者雲に乘て來り日の老たる者の許に到りたればすなはちその前に導きけるに
十八 之に權と榮と國とを賜ひて諸民諸族諸音をしてこれに事へしむその權は永遠の權にして移りさらず
十九 又その國は亡ぶることなし十五是において我ダニエルその體の内の魂を憂へしめわが腦中の異象のために
二十 思ひなやみたれば十六すなはち其處にたてる者の一箇に就てこの一切の事の眞意を問けるに其者われにこの
二十一 事の解明を告しらせて云く十七この四の大なる獣は地に興らんとする四人の王なりナ八然ど終には至高
二十二 者の聖徒國を受け長久にその國を保ちて世々限りなからんと十九是において我またその第四の獣の眞意を
二十三 知んと欲せり此獣は他の獣と異なりて至畏しくその齒は鉄その爪は銅にして食ひかつ咬砕きてその
二十四 殘餘を足にて蹈つけたり二十此獣の頭には十の角ありしがその他にまた一の角いできたりしかば之がため
二十五 に三の角抜おちたり此角には目ありまた大なる事を言ふ口ありてその状はその同類よりも強く見えたり我よ
二十六 たこの事を知んと欲せり二一我觀つゝありけるに此角聖徒と戰ひてこれに勝たりしが二二終に日の老たる

二三 者來りて至高者の聖徒のために公義をおこなへり而してその時いたりて聖徒國を獲たり二三彼かく言り第
二四 四の獣は地上の第四の國なり是は一切の國と異なり全世界を井呑しこれを蹈つけかつ打破らん二四その十の
二五 角はこの國に興らんところの十人の王なり之が後にまた一人興るべし是は先の者と異なり且その王三人を倒
二六 すべし二五彼至高者に敵して言を出しかつ至高者の聖徒を惱ませんまた時と法とを變んことを望まん聖徒は一時と二時と半時を經まで彼の手に付されてあらん二六斯て後審判はじまり彼はその權を奪はれて
二七 終極まで滅び亡ん二七而して國と權と天下の國々の勢力とはみな至高者の聖徒たる民に歸せん至高者
二八 の國は永遠の國なり諸國の者みな彼に事へかつ順がはんと二八その事此にて終れり我ダニエルこれが思ひま
二九 はして大に憂へ顔色も變りぬ我この事を心に藏む

第八章

一 我ダニエル前に異象を得たりしが後また
二 象を見たり我これを見たる時に吾身はエラム州なるシユシャンの城にあり我が異象を見たるはウライ河の邊
三 においてなりき三我目を擧て觀しに河の上に一匹の牡羊立たり之に二の角ありてその角共に長かりしが一
四 の角はその他の角よりも長かりきその長き者は後に長たるなり四我觀しにその牡羊四北南にむかひて抵
五 觸りけるが之に敵ることを得る獣一匹も無くまたその手より救ひだすことを得る者絶てあらざりき是は
六 その意にまかせて事をなしその勢威はなはだ盛なりき五我これを考へ見つゝありけるに一匹の牡山羊全地の
七 上を飛わたりて西より來りしがその足は土を覆ざりきここの牡山羊は目の間に著明しき一の角ありき六此者さ
八 きに我が河の上に立ろを見たる彼の二の角ある牡羊に向ひ來り熾盛なる力をもて之の所に跑いたりけるが七
九 我觀てあるに牡羊に近づくに至りて之にむかひて怒を發し牡羊を擊てその二の角を碎きたるに牡羊には之に
十 敵ろ力なかりければこれを地に打倒して蹈つけたり然るにその牡羊を救ひ得る者あらざりき八
十一 而してその牡山羊甚だ大きくなりけるがその盛なる時にあたりてかの大なる角打れその代に四の著明しき
十二 角生じて天の四方に對へりル またその角の一より而して一の小き角いできたり南にむかひ東にむかひ美